

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第177集

上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡 発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第177集

上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡 発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

盛岡市八木田地区の新盛岡競馬場建設に関連する上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡は、中津川水系の南側山間部に位置する縄文時代と平安時代の複合遺跡であり、今回の調査によって盛岡盆地周辺の山間部における遺跡の立地を考える上で貴重な資料を提供することとなりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました岩手県競馬組合、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成4年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は、盛岡市新庄字上八木田 48 ほかには所在する上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの 3 遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの 3 遺跡の調査は、新盛岡競馬場建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会文化課の指導と調整のもとに、岩手県競馬組合の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 各遺跡の遺跡台帳番号、調査略号、調査面積及び野外調査期間は次のとおりである。
上八木田Ⅲ遺跡 LE18-1164 KY Ⅲ-90 3,320 m² 平成 2 年 4 月 12 日～5 月 31 日
上八木田Ⅳ遺跡 LE18-1157 KY Ⅳ-90 3,180 m² 平成 2 年 6 月 1 日～7 月 31 日
上八木田Ⅴ遺跡 LE18-1126 KY Ⅴ-90 7,590 m² 平成 2 年 7 月 16 日～11 月 8 日
4. 野外調査は平井進、相原伸裕、斉藤実、千葉孝雄が担当した。
5. 室内整理は 3 遺跡を並行して平成 2 年 11 月 9 日から平成 3 年 3 月 31 日まで行い、平井進と相原伸裕が担当した。
6. 分析・鑑定は次の方々に依頼した。(敬称略)
火山灰産地同定 奈良教育大学教授 三辻利一
須恵器胎土分析 // // //
石材鑑定 佐藤地質工学研究所 佐藤二郎
木材鑑定 岩手県木炭協会 早坂松次郎
鉄器成分分析 岩手県立博物館 赤沼英男
7. 本報告書の執筆は「Ⅰ調査に至る経過」を佐々木嘉直が、他は平井進が担当した。
8. 本報告書の構成は次のとおりである。
Ⅰ調査に至る経過、Ⅱ位置と環境、Ⅲ調査方法と整理方法、Ⅶまとめ、は 3 遺跡共通の事項として一括して取り扱い、発見された遺構と遺物は各遺跡毎に、Ⅳ上八木田Ⅲ遺跡、Ⅴ上八木田Ⅳ遺跡、Ⅵ上八木田Ⅴ遺跡として記載した。写真図版は一括して巻末に掲載した。
9. 遺物は上八木田Ⅰ～Ⅴ遺跡を統一的に理解するために、全遺跡同一の分類項目とした。土器以外は器種毎に分類し、土器は次のように時期区分し、各々を前葉・中葉・後葉の 3 類に区分した。
第Ⅰ群縄文早期 第Ⅱ群縄文前期 第Ⅲ群縄文中期 第Ⅳ群縄文後期
第Ⅴ群縄文晩期 第Ⅵ群弥生 第Ⅶ群古代 第Ⅷ群時期不明
10. 使用した地図は建設省国土地理院発行の 5 万分の 1 及び 2 万 5 千分の 1 の地形図と、岩手

県競馬組合が作成した2千5百分の1の地形図である。

- 11 本報告書では便宜上、上八木田Ⅲ遺跡を3区、上八木田Ⅳ遺跡を4区、上八木田Ⅴ遺跡を5区と呼ぶことにした。
- 12 野外調査に於て、岩手県競馬組合や盛岡市教育委員会等の関係機関の協力を得た。また、遺跡周辺の町内会長や細野資郎氏をはじめとする地元の方々には作業員として協力を得た。
- 13 発掘調査に伴う出土遺物及び諸記録は平成4年3月現在、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序
例言

本 文

I 調査に至る経過	13	蛍光X線分析	81
II 位置と環境	13	上八木田III遺跡出土鉄器の 金属学的解析について	84
1 位置と立地	13	V 上八木田IV遺跡	87
2 地理的環境	13	1 4区の地形概観と遺跡の立地	89
3 地形と地質	15	2 基本層序	89
4 周辺の遺跡	15	3 検出された遺構と遺物	90
III 調査方法と整理方法	23	〔1〕縄文・弥生時代	90
1 調査方法	23	(1) 土坑・墓壇	91
2 整理方法	23	(2) 陥し穴	93
3 掲載図版等について	24	(3) 焼土遺構	96
IV 上八木田III遺跡	29	(4) 遺構外出土遺物	96
1 3区の地形の概観と遺跡の立地	31	〔2〕古代以降	102
2 3区の基本層序	31	(1) 住居跡	102
3 検出された遺構と遺物	32	(2) 遺構外出土遺物	116
〔1〕縄文・弥生時代	32	4 まとめ	119
(1) 住居跡	32	付篇 上八木田IV遺跡出土 蛍光X線分析	123
(2) 土坑	37	上八木田IV遺跡出土鉄器の 金属学的解析について	125
(3) 焼土遺構	43	VI 上八木田V遺跡	131
(4) 土器埋設遺構	45	1 5区の地形概観と遺跡の立地	135
(5) 遺構外出土遺物	46	2 基本層序	135
〔2〕古代以降	64	3 検出された遺構と遺物	136
(1) 住居跡	64	〔1〕縄文・弥生時代	136
(2) 焼土遺構	72	(1) 住居跡	136
(3) 遺構外出土遺物	73		
4 まとめ	74		
付篇 岩手県下の遺跡出土火山灰の			

(2) 土坑	150
(3) 陥し穴	159
(4) 炉跡及び焼土遺構	161
(5) 遺構外出土遺物	167

〔2〕 古代以降	216
(1) 住居跡	216
4 まとめ	221
VII まとめ	235

図

第1図 岩手県全図	12
第2図 遺跡位置図	14
第3図 周辺の遺跡	21
第4図 遺跡周辺の地形とグリッド配置図	27
第5図 3区基本層序	32
第6図 3区遺構配置図	33
第7図 X I N 6f 住居跡	35
第8図 X I N 6f 住居跡遺物	36
第9図 X I N 9j 土坑	37
第10図 X I N 8f 土坑・遺物	38
第11図 X I N 8f 土坑内遺物	39
第12図 X I N 9h 土坑、X I N 0e 土坑、 X I N 0c 土坑、X I N 9b 土坑	41
第13図 X I N 5b 土坑、X I M 4j 土坑	42
第14図 X I N 2a 土坑	43
第15図 X I N 8b 焼土・遺物	43
第16図 X I M 5h 焼土、X I N 7c 焼土	44
第17図 X I N 9b 土器埋設遺構・遺物	45
第18図 第IV群 (第1類) 土器	49
第19図 第IV群 (第1~2類) 土器	50
第20図 第IV群 (第2類) 土器	51
第21図 第IV群 (第2類)、 第V群 (第1~3類) 土器	52
第22図 第VIII群 (第1, 2類) 土器	53
第23図 第VIII群 (第1, 2類) 土器	54
第24図 第VIII群 (第1~2類) 土器	55
第25図 第VIII群 (第1, 2類) 土器	56

版

第26図 第VIII群 (第3類) 土器・土製品	57
第27図 第VI群 (第1, 3類) 土器	58
第28図 第VI群 (第2~3類) 土器	59
第29図 剥片石器	60
第30図 礫石器	61
第31図 礫石器	62
第32図 礫石器・石製品	63
第33図 X I N 7d 住居跡	66
第34図 X I N 7d 住居跡	67
第35図 X I N 7d 住居跡遺物	68
第36図 X I N 7d 住居跡遺物	69
第37図 X I N 7d 住居跡遺物	70
第38図 X I N 7d 住居跡遺物	71
第39図 X I M 1h 焼土遺構 X I M 1h-2 焼土遺構・遺物	72
第40図 遺構外出土遺物	73
第41図 3区土器出土量分布図	75
第42図 4区基本層序	90
第43図 4区遺構配置図	90
第44図 X V K 4g 土坑	91
第45図 X V L 5c 土坑	91
第46図 X V K 7i 土坑	92
第47図 X V K 8e 土坑	92
第48図 X V K 6e 墓壇	93
第49図 X V K 5h 陥し穴	93
第50図 X V K 7e 陥し穴	94
第51図 X V I K 1c 陥し穴	95

第52図	X V K 6d 焼土	96
第53図	第II～V群土器	97
第54図	第VI、VIII群土器	98
第55図	剝片石器、礫石器	100
第56図	礫石器	101
第57図	X VIK 1d 住居跡	104
第58図	X VIK 1d 住居跡	105
第59図	X VIK 1d 住居跡・遺物	106
第60図	X VIK 1d 住居跡・遺物	107
第61図	X VIK 1d 住居跡・遺物	108
第62図	太刀細部計測値	109
第63図	X VIK 2c 住居跡・遺物	111
第64図	X VIK 3e 住居跡・遺物	113
第65図	X V K 5f 住居跡・遺物	115
第66図	第VII群土器	117
第67図	第VII群土器	118
第68図	5区遺構配置図	133
第69図	5区土層柱状図	135
第70図	XIVH5i 住居跡・遺物	137
第71図	XIVH6i 住居跡	139
第72図	XIVH6i 住居跡遺物	140
第73図	X V I 1a 住居跡	142
第74図	X V I 1a 住居跡遺物	143
第75図	XIVH8c 住居跡	145
第76図	XIVH8c 住居跡遺物	146
第77図	X V H 1a 住居跡・遺物	148
第78図	X V H 0b 住居跡	149
第79図	X V I 2c 土坑	150
第80図	XIVH8c 土坑・遺物	151
第81図	XIVH9c 土坑、XIVH9c-2 土坑 ・遺物	152
第82図	XIVH0c 土坑・遺物	153
第83図	XIVH0c 土坑遺物	154

第84図	XIVH0c 土坑遺物	155
第85図	X V H 2a 土坑	156
第86図	X V G 3i 土坑	157
第87図	X V H 6a 土坑	157
第88図	XVIG5h 土坑	158
第89図	XVIG6h 土坑	158
第90図	XVIG3c 陥し穴	159
第91図	XVIG2c 陥し穴	159
第92図	XVIG9d 陥し穴	160
第93図	焼土遺構分布図	163
第94図	XIVH8a 焼土、XIVH6i 焼土 X V H 6b 焼土	164
第95図	XIVH0e 炉、XIVH5i 炉、 X V H 7i 炉、XIVH8j 炉	166
第96図	第I・II群土器	173
第97図	第II群土器	174
第98図	第III群土器	175
第99図	第III群土器	176
第100図	第III群土器	177
第101図	第III群土器	178
第102図	第III群土器	179
第103図	第III群土器	180
第104図	第III群土器	181
第105図	第III群土器	182
第106図	第III群土器	183
第107図	第III群土器	184
第108図	第III群土器	185
第109図	第III群土器	186
第110図	第III群土器	187
第111図	第III・IV群土器	188
第112図	第IV群土器	189
第113図	第IV群土器	190
第114図	第IV群土器	191

第115図	第IV・V群土器	192
第116図	第V群土器	193
第117図	第V群土器	194
第118図	第V・VI群土器	195
第119図	第VI群土器	196
第120図	第VI・VIII群土器	197
第121図	第VIII群土器	198
第122図	第VIII群土器	199
第123図	第VIII群土器	200
第124図	石鏃・石錐・尖頭器・石筥	203
第125図	石筥・石匙	204
第126図	石匙・スクレーパー	205
第127図	スクレーパー等	206
第128図	石斧・石錘	207

第129図	磨石・敲石・凹石	208
第130図	磨石・敲石・凹石	209
第131図	磨石・敲石・凹石	210
第132図	磨石・敲石・凹石	211
第133図	磨石・敲石・凹石	212
第134図	石鍬	213
第135図	石鍬・石皿・砥石	214
第136図	石皿	215
第137図	石製品等	216
第138図	XVIH6c 住居跡	218
第139図	XVIH6c 住居跡	219
第140図	XVIH6c 住居跡・遺物等	220
第141図	網代痕等	222
第142図	5区土器出土量分布図	224

表

第1表	周辺の遺跡	18
第2表	3区土器・土製品観察表	76
第3表	3区石器・石製品一覧表	80
第4表	4区縄文土器・土製品観察表	121
第5表	4区石器・石製品計測一覧表	121

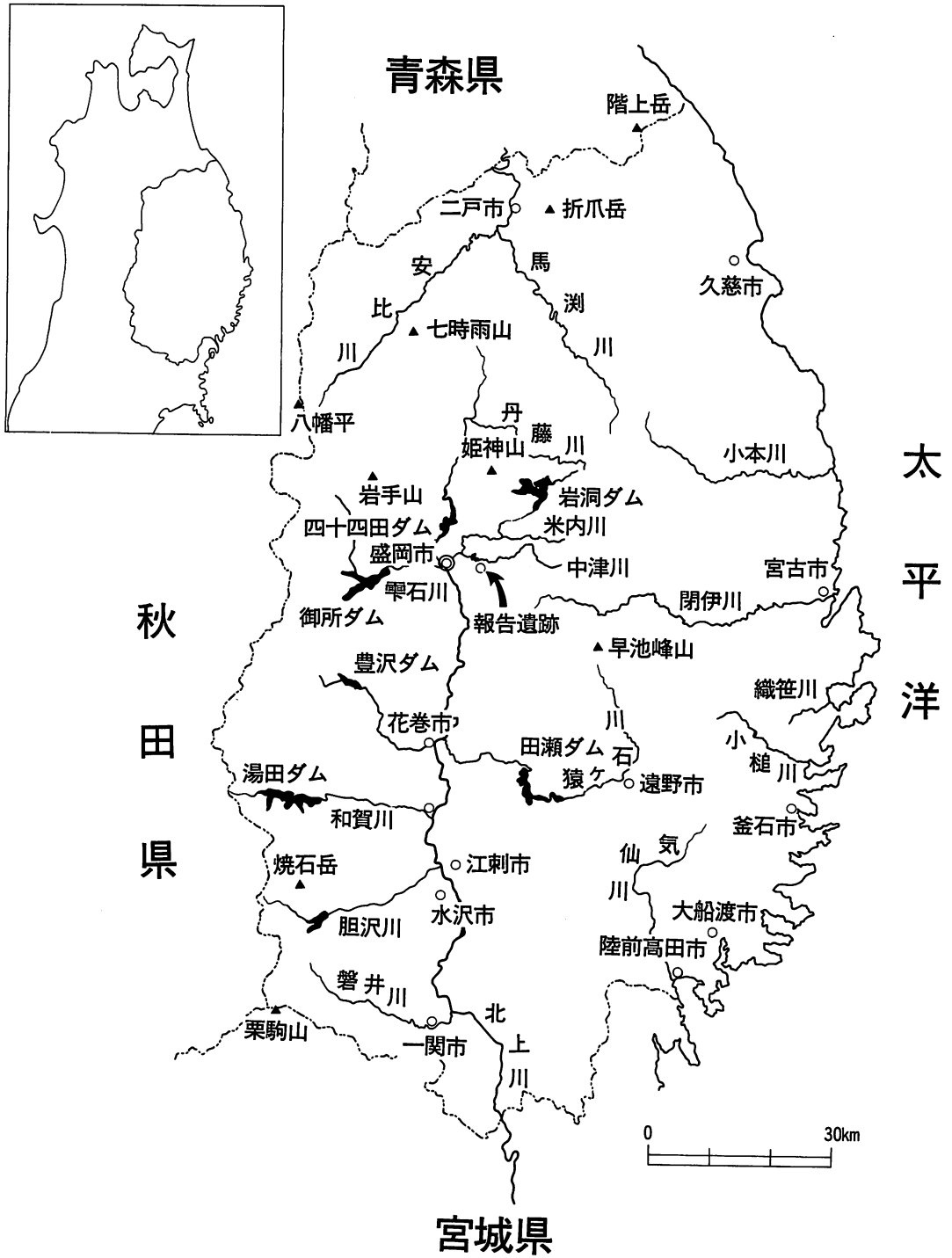
第6表	4区古代土器観察表	122
第7表	焼土遺構一覧表	162
第8表	5区縄文土器・土製品観察表	225
第9表	5区石器・石製品一覧表	233

写真図版

写真図版1	上八木田遺跡群	243
写真図版2	3区現況、遺物出土状況等	244
写真図版3	XIN6f 住居跡	245
写真図版4	XIN8f 土坑、XIN9j 土坑 XIN9h 土坑	246
写真図版5	XIN0c 土坑、XIN9b 土坑 XIM4j 土坑	247
写真図版6	埋設遺構、遺構内出土遺物	248
写真図版7	遺構外出土遺物（縄文）	249

写真図版8	遺構外出土遺物（縄文・弥生）	250
写真図版9	遺構外出土遺物（石器）	251
写真図版10	遺構外出土遺物（石器・羽口）	252
写真図版11	XIN7d 住居跡	253
写真図版12	XIN7d 住居跡（カマド）	254
写真図版13	XIN7d 住居跡出土遺物	255
写真図版14	XVL5c 土坑、XVK7i 土坑	

	X V K 8e 土坑 ……………	256			……………	275
写真図版15	X V K 5h 陥し穴、X V K 7f 陥し穴 X V I K 1c 陥し穴、X V K 6d 焼土 ……………	257	写真図版34	遺構内出土遺物（縄文・石器） ……………		276
写真図版16	遺構外出土遺物 （縄文・弥生等・石器） ……	258	写真図版35	遺構外出土遺物（縄文） ……	277	
写真図版17	X V I K 1d 住居跡 ……………	259	写真図版36	遺構外出土遺物（縄文） ……	278	
写真図版18	X V I K 2c 住居跡 ……………	260	写真図版37	遺構外出土遺物（縄文） ……	279	
写真図版19	X V I K 3e 住居跡・X V K 5f 住居跡 ……………	261	写真図版38	遺構外出土遺物（縄文） ……	280	
写真図版20	遺構内出土遺物 （土師器・須恵器・金属器） ……………	262	写真図版39	遺構外出土遺物（縄文） ……	281	
写真図版21	X I V H 5i 住居跡 ……………	263	写真図版40	遺構外出土遺物（縄文） ……	282	
写真図版22	X I V H 6i 住居跡 ……………	264	写真図版41	遺構外出土遺物（縄文） ……	283	
写真図版23	X V I 1a 住居跡 ……………	265	写真図版42	遺構外出土遺物（縄文） ……	284	
写真図版24	X I V H 8c 住居跡 ……………	266	写真図版43	遺構外出土遺物（縄文・弥生） ……………	285	
写真図版25	X V H 1a 住居跡 ……………	267	写真図版44	遺構外出土遺物（弥生・その他） ……………	286	
写真図版26	X V H 0b 住居跡 ……………	268	写真図版45	遺構外出土遺物（石器） ……	287	
写真図版27	X V I 2c 土坑、X I V H 8c 土坑、 X I V H 9c 土坑、X I V H 9c-2 土坑 ……………	269	写真図版46	遺構外出土遺物（石器） ……	288	
写真図版28	X I V H 0c 土坑、X V H 2a 土坑 X V G 3i 土坑 ……………	270	写真図版47	遺構外出土遺物（石器） ……	289	
写真図版29	X V H 6a 土坑、X V I G 5h 土坑 X V I G 6h 土坑 ……………	271	写真図版48	遺構外出土遺物（石器） ……	290	
写真図版30	X V I G 3c 陥し穴、X V I G 2c 陥し穴 X V I G 9d 陥し穴 ……………	272	写真図版49	遺構外出土遺物（石器・石製品） ……………	291	
写真図版31	X I V H 8a 焼土、X I V H 6i 焼土 X V H 6b 焼土 ……………	273	写真図版50	X V I H 6c 住居跡・遺物等 ……	292	
写真図版32	X I V H 0e 炉、X I V H 5i 炉、 X I V H 8j 炉 ……………	274				
写真図版33	遺構内出土遺物（縄文・石器）					



第1図 岩手県全体図

I 調査に至る経過

新盛岡競馬場の建設構想は、競馬開催時の交通環境の悪化、騒音並びに競馬場施設の老朽化等の問題が表面化してきた昭和50年に提案され、昭和58年3月盛岡市新庄字八木田地区を計画予定地と決定した。計画地の総面積は129ヘクタールであり、建設工事は昭和63年から平成7年度までの8カ年計画である。

事業の着手にあたり、昭和63年に岩手県教育委員会と盛岡市教育委員会が遺跡の分布調査を行った。さらに、平成元年10月2日～19日に盛岡市教育委員会が上八木田Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の試掘調査を行い、縄文時代や古代の遺構と遺物包含層を確認した。これらの結果をもとに、岩手県教育委員会は岩手県競馬組合と協議を行い、上記の4遺跡のうち、上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の発掘調査を岩手県文化振興事業団の平成2年度受託事業として調整実施することとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは平成2年4月1日付け委託契約により上記の3遺跡の調査に着手することとなった。

II 位置と環境

1 位置

本遺跡の所在する盛岡市は、岩手県の中央部に位置し、北は滝沢村、玉山村、東は岩泉町、川井村、南は大迫町と都南村、西は雫石町に接する。同市のやや西側を東日本旅客鉄道東北本線が南北に縦断し、盛岡駅から山田線と田沢湖線が東西に延びる。本遺跡は、同市のほぼ中央に位置するが、市の中心街に所在する市役所から見れば、直線距離で東約4kmに位置する。同地点は北緯39度17分、東経141度2分付近である。

2 地理的環境

盛岡市は岩手県の県庁所在地であり、地理的に県の中央に位置するというだけでなく、文化・経済・行政等の中心地である。面積約398km²、人口約23万人である。市の西側は奥羽山脈の麓に延び、東側は北上山地にかかる。人口が集中する地域は両山地に挟まれた平地であり、盆地特有の気候を有している。すなわち、過去3年間の平均値では市の年平均気温は10.8℃、年間降水量は1,334mmであり、県内では気温、降水量とも中程度である。夏は日中30℃を越える日や熱帯夜となることは殆どない。また、市の東部は北上山地の一部であり特に冬季の寒さは厳しく県内でも有数の冷涼な地域も抱えている。積雪量はそれほど多くない。初雪は12月中旬、終雪は2月下旬で積雪期間は約3カ月である。風向は夏は南風が多く、冬季間は北西の季節風となる。

盛岡市街地が発達する盛岡盆地のほぼ中央を北上川が南流する。同河川は東北地方では最上川と並ぶ最大級の河川であり、多くの支流を有している。盛岡市街地のやや南に寄った所でも、



第2図 遺跡位置図

東から中津川、西からは雫石川を合流させ、約1 km南下した所で梁川も合流させる。この北上川、中津川、雫石川の3河川はそれぞれ市街地よりさほど離れていない郊外に水量調節を主たる目的とした多目的ダムを有している。本遺跡の北西約2.5 kmには中津川をせき止めた綱取ダムがある。本遺跡付近から流れ出す小沢は八木田沢となって同ダムに注ぎ込む。

3 地形と地質

本遺跡が所在する盛岡市は北上盆地の北部に位置する。北上盆地は古生界を主とする北上山地と第三系を主とする奥羽山脈が南北に並走する間にあって、北上川とその支流が開析したものである。北上川に注ぐ支流のうち大きな河川の殆どは奥羽山脈に水源を持つことから(第1図参照)、北上川西岸には河岸段丘や扇状地などがよく発達しているのに対し、東岸には極めて部分的にしか見られない。したがって、北上川の主流は著しく東側によって流れている。北上盆地の主体部は東流する何本かの大きな河川によって作り出されているため、大小の段丘や扇状地、河岸平野及び起伏量の小さい丘陵地が互いに入り組む構造となっている。

この北上盆地の持つ特徴は盛岡市周辺でもそのまま現れる。すなわち、西流する中津川や梁川は開析平野をその流域に殆ど作り出していないが、東流する雫石川は志波城が作られた太田地区に扇状地状の広い平坦地を作り出している。更に、盛岡市街地が広がる一帯は北上山地を供給源とするものや第四紀の火山活動による火山砕屑物が河川の営力によって運ばれ、段丘を形成している。すなわち、盛岡盆地(盛岡低地とも呼ばれる)は堆積盆地の性格を有するとともに、不明瞭ではあるが河岸段丘も見られる。盛岡盆地の海拔は概ね120~140 mであるが、この低地を押し包むように海拔が概ね300~400 mの山地が東西から迫っている。

北上山地は中・古生層及び花崗岩類より成るが、周辺を新第三系に囲まれた所謂「北上帯」を作っている。この「北上帯」はほぼ中央付近を北西から南東にかけて走る「早池峰構造帯」によって南北に二分される。

本遺跡がのる八木田地区付近は北上山地中央部西辺に位置し、この「早池峰構造帯」にのる。

4 周辺の遺跡

盛岡市とその周辺の遺跡数は岩手県の遺跡台帳に登載されているだけでも283(昭和61年度時点)である。したがって、ここではその中から幾つかを取り上げ時代毎に概観するととどめておく。なお、第3図及び第1表には図幅等の関係から162遺跡を掲載した。以下の遺跡数は本表によるものである。

旧石器時代の遺跡には四十四田遺跡と安倍館遺跡がある。前者はその内容が明かではないが、後者は露頭から石器が採集されたものである。

縄文時代草創期の遺跡としては安倍館遺跡や大館遺跡群がある。ともに爪形文土器が出土している。

早期に入ると遺跡数が増える。押型文、沈線文を出土した大館遺跡群、貝殻文を出土した下猿田遺跡や歳の神遺跡、条痕文土器を出した上平遺跡群等 16 遺跡が知られる。また、貝殻文は八木田遺跡（上八木田遺跡か下八木田遺跡かは不明）から出土する事は古くから知られていたが、今次調査によって少なくとも上八木田遺跡群では、該期の土器が出土する事が確認された。大館遺跡群の押型文は日計型から沈線文土器へと移行していく段階であり、八木田遺跡の貝殻文は物見台式のものである。しかし、該期の遺構は大館遺跡群で竪穴住居跡と土坑が、上平遺跡で土坑が検出されたのみである。

前期の遺跡は猪去館遺跡、稲久保遺跡、仏沢Ⅲ遺跡等 17 遺跡が知られる。猪去館遺跡では長方形の竪穴住居跡、稲久保遺跡では円筒下層式と同時に諸磯式を出土している。また、仏沢Ⅲ遺跡では長方形の竪穴住居跡一つに壁際の外部に配石をもつ特殊な遺構も検出されており注目される。

中期になると遺跡数は 59 と飛躍的に増加する。なかでも注目される遺跡は大館遺跡である。住居跡の配置が馬蹄形や環状を呈する。大木 6 式から 8 b 式まで長期間にわたって存在した集落である。また、柿の木平遺跡の大木 8 b 式、堂ヶ沢Ⅰ遺跡の大木 9 式、繫Ⅲ遺跡の大木 10 式とほぼ 1 形式に納まる形の遺跡も存在する。大木式土器文化圏と円筒土器文化圏の問題を考える上で好資料を提供した繫Ⅴ遺跡など質・量とも豊富である。

後期は 33 遺跡で縄文時代の中では中期につぐ量である。その中で、まず取り上げられる遺跡は葦内遺跡である。雫石川中流域の段丘上を占地する同遺跡からは、竪穴住居跡のほか、配石土坑群、漁労施設としての舳、階段状杭列、足跡等が検出されている。遺物は種類・質とも豊富で、なかでも大型土偶の頭部はわが国最大と言われ、国の重要文化財に指定されている。また、漆塗りの櫛、トーテム・ポール様木製品、弓など木器・木製品も多く出土した。けや木の平団地遺跡、大崎Ⅱ遺跡、湯舟沢遺跡等は該期の良好な遺構・遺物を出している。湯舟沢遺跡からは足形付土製品、同遺跡の北に広がる湯舟沢Ⅱ遺跡からは環状列石が発見されている。

晩期の遺跡数は 17 で相対的に少ない。雫石川流域の繫Ⅲ遺跡、猪去館遺跡等で竪穴住居跡が、中津川・米内川の合流点付近の落合遺跡では配石群と土坑群が発見されている。また、第 3 図の図幅には含まれないが、本遺跡の南西約 5 km には国の重要文化財に指定された大型の遮光器土偶を出した手代森遺跡がある。しかし、該期の所謂大規模集落跡は発見されていない。

弥生時代に入ると遺跡数は更に減少し 10 遺跡となる。しかも、竪穴住居跡が発見された遺跡は湯舟沢遺跡の 18 棟がほとんど唯一のものである。しかし、遺物の出土は北上川流域の大館堤、雫石川流域の繫Ⅳ遺跡、太田地区のオミ坂遺跡、中津川流域の銭神沢遺跡等各地域に広まっており今後分布調査や発掘調査の進展に伴って遺跡の発見が増加すると思われる。なお、湯舟沢遺跡の時期は弥生中期の谷起島式から後期の天王山式まで出土しており、該期の研究には欠く

事ができないものである。

弥生時代に後続する古式土師器や後北式土器等をだす所謂古墳時代に入ると更に遺跡数が減少する。下米内の永福寺山遺跡、上田蝦夷森古墳群、太田蝦夷森古墳等が上げられる。永福寺山遺跡は、遺構の中から古式土師器と後北式土器が発見され該期の研究上貴重な遺跡となっている。上田蝦夷森古墳群から出土した庇付き冑は完形品であり、当時の文化研究だけでなく武器の研究史上でも貴重な資料となっている。太田蝦夷森古墳群は川原石積みによる石室を持つタイプの末期古墳であるが、和同開珎や銚帯金具が出土している。なお、後北式土器は近年発見が相次いでおり今後研究が進むと思われるが、現在までのところ住居跡は確認されていない。

平安時代の遺跡は第1表で確認されているだけでも75遺跡にのぼる。志波城は国指定史跡として該期の研究上重要な遺跡である。外郭は一辺800m四方の築地塀に囲まれ、外郭線から約100m内側に竪穴住居跡が密集している。正殿跡や南大門跡の位置は確認されているが、詳細は今後の調査を待つことになる。また、この志波城跡の周辺には該期の遺跡が多く見られる。

安倍氏によって営まれた厨川柵は、これまでその位置を確定するまでには至っていない。擬定地とされている里館、安倍館の両遺跡は堀、溝、掘立柱建物等が検出されているが、いずれも中世以降のものである。現時点では、里館遺跡は15～16世紀に位置づけられ、安倍館遺跡は中世工藤氏の居城である厨川城と考えられている。

中世城館跡は市内では27箇所が知られているが、上記の里館、安倍館のほかは繫III遺跡の一部として湯ノ館が調査されている程度で、ほとんどが未調査である。

近世のものでは、国指定史跡の盛岡城跡がある。近年石垣解体修理に伴う調査によって、櫓跡や堀跡、石組暗渠排水路等が検出されている。これまでの調査により3時期の変遷が判明してきており、今後の調査によって築城の経過や規模等がより明かになるものと思われる。また、材木町の永祥院経塚からは享保から安永年間にわたる一字一石の経石が多数出土している。藩政時代の現存する建物は名須川町の東頭寺をはじめ幾つかの寺で部分的に残っている。しかし、当時の民家はほとんど見られず、柿ノ木平遺跡や下猿田遺跡等から曲家や礎石建物跡が検出されている程度である。

第1表 周辺の遺跡

<盛岡市>

No	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
1	盛岡城跡	城館跡	水濠・石垣	内丸	国指定史跡 昭12.4.17
2	山王山	散布地	縄文土器(中期)	山王町	
3	寺山	〃	縄文土器(前期)	三ツ割字寺山	
4	焰硝蔵	〃	弥生土器	三ツ割愛宕山	
5	檜山田	〃	縄文土器(後期)		
6	浅神沢	〃	縄文土器(後・晩期)・弥生土器・土師器	三ツ割字	
7	日向	〃	縄文土器(早期)・弥生土器	山岸字銭神沢	
8	合間	〃	縄文土器(早・前期)・土師器・須恵器	山岸字合間	
9	蒼前	〃	縄文土器(早期)	山岸字合間	
10	甘石	〃	縄文土器(晩期)	山岸三丁目 下米内	
11	永福寺山	〃	土器後北C・土師器	下米内寺並	
12	屠牛場	〃	縄文土器(早・中期)	下米内二丁目	
13	落合	〃	縄文土器(晩期)・土師器	下米内字落合	
14	沼田	〃	縄文土器(中・後期)・土師器・須恵器	東桜山	
15	大塚	〃	縄文土器(後期)	浅岸字大塚	
16	大久保	〃	縄文土器(中・後期)・土師器	東桜山	
17	稲久保下	〃	縄文土器(中期)・土師器		
18	柿木平	〃	縄文大型甕形土器(中期)・石器	浅岸字柿木平	
19	稲久保	〃	縄文土器(中期)・土師器・石器	つつじヶ丘	
20	関根	〃	縄文土器(前期)	浅岸字向田	
21	カプト畑	〃	土師器	浅岸字カプト畑	
22	寺沢	〃	縄文土器(中・後期)・土師器	浅岸字寺沢	
23	向田	〃	縄文土器(前・中期)	浅岸字向田	
24	薬師社脇	〃	縄文土器(中期)・土師器	浅岸字橋場	
25	アカトリ	〃	縄文土器(中期)・土師器	浅岸字ニッ森	
26	栗木平	〃	縄文土器(中・後期)・石皿	浅岸字堰根	
27	一本松	〃	縄文土器(早・後期)	下米内字一本松	
28	エドコ山	〃	縄文土器(中期)	浅岸字大葛	
29	大葛	〃	縄文土器(中・後期)・石器	浅岸字大葛	
30	上大葛	〃	縄文土器(中期)	浅岸字大葛	
31	笹ノ平	〃	縄文土器(早～中・晩期)	浅岸字大葛	
32	大上	〃	縄文土器(後期)	浅岸字大葛	
33	大馬洞	〃	縄文土器(中・後期)	浅岸字大葛	
34	馬場野	〃	縄文土器(中・後・晩期)・土師器	下米内字馬場野	
35	大豆門	〃	縄文土器(中期)・石器・土偶	下米内字大豆門	
36	下米内	〃	縄文土器(中期)	下米内字伊勢沢	
37	稻荷社前	〃	縄文土器(中・晩期)・弥生土器・土師器	下米内字大豆門	
38	上米内	集落跡・館跡	縄文土器(後・晩期)・土師器	上米内字中居	
39	畑井野	〃	縄文土器(前・中期)・石器	上米内字畑井野	
40	盲目沢	集落跡	住居址・縄文土器(中・後期)	上米内字畑井野	
41	止沢	散布地	縄文土器(中・後期)	上米内字米内沢	
42	畑	縄文土器(中～晩期)	縄文土器(中～晩期)	上米内字畑	
43	大崎新田	包含地	縄文土器(後期)	上米内字畑	
44	一戸農場	散布地	縄文土器(中～晩期)・土師器	上米内字白石	
45	道ノ下	〃	縄文土器(前・中期)	上米内字道ノ下	
46	米内沢A	集落跡	縄文土器(前～晩期)	上米内米内沢	
47	下三沢	散布地	縄文土器(前～晩期)	上米内字米内沢三沢	
48	上三沢	〃	縄文土器(前～晩期)	上米内字米内沢三沢	
49	新山館	(館跡) 散布地	須恵器・刀子	茶畑二丁目高崩	
50	見石	散布地	縄文土器(中・後期)・土師器	東中野字見石	
51	安庭館	〃	縄文土器(中・後期)・石斧・石匙	東安庭館	
52	小山	〃	縄文土器(前・中期)・石器	東中野字小杉沢	
53	立石	〃	土師器	東中野字立石	

No	遺 跡 名	種 別	遺 構 ・ 遺 物	所 在 地	備 考
54	二反田	散布地	縄文土器 (中・後期)	東山二丁目	
55	沢田	〃	縄文土器 (後・晩器)・石器	東中野字沢田	
56	白滝	〃	縄文土器 (中期)	川目第十五地割字滝ノ上	
57	ブナト	〃	縄文土器 (後期)・打製石斧・石棒	川目第八地割字川目	
58	泣坂(A)(B)	〃	縄文土器・打製石斧・石棒	川目第七地割字津野山	
59	川目A	〃	縄文土器 (中・後期)・石器	川目第八地割字川目	
60	戸仲	〃	縄文土器 (中・後期)・石皿	川目第四地割戸仲	
61	小屋野	〃	縄文土器 (後期)	川目第八地割字川目	
62	下八木田	〃	縄文土器 (早~中期)	新庄字下八木田	
63	上八木田	〃	縄文土器 (中期)	新庄字上八木田	
64	高畑A	〃	縄文土器 (中・後期)	川目第三地割字高畑	
65	角下	〃	土師器・須恵器	門字角下	
66	高松神社裏遺跡	包含地	土師器(内黒)	高松三丁目	
67	上田山	散布地	縄文土器(中期?)	上田狐森	
68	上堤頭	〃	縄文土器(早期)・石鏃・石筥	上田堤一丁目、二丁目	壊滅
69	字登坂	〃	縄文土器(中・後期)・土師器	上田字字登坂長根 三ツ割便の沢	
70	洞清水	〃	縄文土器(後期)	三ツ割字洞清水	
71	道下	〃	縄文土器(中期)・土師器	山岸字銭神沢下	
72	道上	〃	土師器・須恵器	山岸字合間	壊滅
73	イタコ塚	〃	弥生土器	山岸字合間	
74	新茶屋	〃	縄文土器(晩期)	山岸六丁目	
75	歳ノ神	〃	縄文土器(早~中期)	山岸六丁目	壊滅
76	四十四田	〃	旧石器・縄文土器	上田松屋敷	
77	宿田南	館跡	陶磁器	北夕顔瀬町	
78	権現坂遺跡	〃	古銭・陶磁器	天昌寺町 前九年一・二丁目	
79	里館遺跡	〃	古銭・陶磁器	天昌寺町 北天昌寺町	
80	前九年I	集落跡	住居跡(縄文)・土師器	前九年二丁目	
81	小屋塚	〃	住居跡(縄・平)・縄文土器(中期)	大新町 南青山町	
82	大館(町)遺跡群	〃	住居跡(縄・奈・平)・縄文土器(早・中期)	大新町 大館町	
83	稻荷町遺跡	集落跡・館跡	古銭・陶磁器(中・近世)	稻荷町 大館町	
84	大館堤	集落跡	縄文土器(早~中期)・土師器・石器	大館町 南青山町	
85	大新町	〃	縄文土器(草創~後期)・住居跡(縄・奈・平)	大新町 南青山町	
86	安倍館	館跡	堀・郭・建物跡	安倍館町	
87	前九年II	集落跡	縄文土器	前九年三丁目	
88	青山	〃	土師器	青山二丁目	
89	長橋町	散布地	縄文	長橋町	
90	幅I	集落跡	縄文・土師器	上厨川字幅	
91	幅II	〃	土師器	土淵字幅	
92	幅III	〃	土師器	上厨川字幅	
93	土淵四ツ屋	〃	土師器	土淵字四ツ屋 橋場	
94	茨島	散布地	縄文土器(早~前期)	厨川五丁目	
95	南仙北	集落跡	土師器	南仙北二丁目	
96	野古A	〃	土師器	本宮北 野古	
97	稻荷	〃	土師器	本宮字稻荷	
98	前田I	散布地	土師器	下鹿妻字前田	
99	前田II	〃	土師器・須恵器	下鹿妻字前田	
100	鬼柳	〃	土器(土師器)	本宮字鬼柳	
101	西田	集落跡	土師器・須恵器	下鹿妻字西田	
102	大宮北	〃	土師器・須恵器	本宮 大宮	
103	大宮	〃	土師器・須恵器	本宮字大宮	
104	大宮II	散布地	土師器	本宮字大宮	
105	水門II	〃	土師器	本宮	
106	小林	〃	土師器	本宮字小林	
107	上越場	集落跡	土師器	下鹿妻上越場	
108	水門I	散布地	土師器	本宮字水門	
109	林崎	散布地・集落跡	住居跡(平安)・土師器	下太田字林崎	
110	志波城跡	城柵跡	土器・土師器	下太田方八丁 新堰端	

No	遺 跡 名	種 別	遺 構 ・ 遺 物	所 在 地	備 考
111	石仏	集落跡	土器・土師器・須恵器・石器	本宮字石仏	
112	竹花前	〃	土器・土師器・須恵器	上鹿妻	
113	辻屋敷	〃	土師器	下鹿妻字辻屋敷	
114	辻屋敷	〃	縄文土器	下鹿妻辻屋敷	
115	屋敷田	散布地	土器・土師器	下太田沢田	
116	八卦	〃	土器・土師器	中太田八卦	
117	蝦夷森古墳	〃	陶器	上太田森合 猪去米倉	
118	上野屋敷	〃	土器・土師器・陶器	上太田上野屋敷	
119	弘法清水II	〃	土器・土師器・須恵器	上太田弘法清水	
120	畑中	〃	土器・土師器	上太田畑中	
121	弘法清水I	〃	土器・土師器	上太田弘法清水	
122	館	集落跡・館跡	土器・土師器・須恵器	上太田字館	
123	松ノ木	散布地	土器・土師器	上太田松ノ木	
124	上川原	集落跡	土器・土師器	上太田中屋敷	
125	細田	散布地	土器・土師器	上太田細田	
126	中屋敷	集落跡	土器・土師器	上太田中屋敷	
127	細工	散布地	土器・土師器	上太田細工	
128	蝦夷森古墳群	古墳群	鉄刀	上太田森合	
129	館	集落跡・館跡	土器・土師器・須恵器	上太田字館	
130	オミ坂	散布地	縄文土器(早・中・晩期)・土師器・石器	上鹿妻蟹沢	
131	ニッ沢	〃	縄文土器(中期)・土師器・須恵器	上鹿妻ニッ沢	
132	小和田館	〃	縄文土器(前・中・晩期)	上鹿妻小和田	
133	猪去館	散布地・館跡	縄文土器(早・中・晩期)・弥生土器 土師器・須恵器・石斧・石鏃	猪去畑中 猪去館	

<滝沢村>

No	遺 跡 名	種 別	遺 構 ・ 遺 物	所 在 地	備 考
134	狐洞山	散布地	縄文土器(中期)	大字鶺鴒字狐洞山	
135	土沢	〃	縄文土器(後期)・石斧	大字滝沢第六地割字土沢	
136	中村	〃	土師器	大字滝沢第七地割字中村	
137	外久保	〃	縄文土器(中期)	大字鶺鴒字外久保	
138	大畑	〃	〃	大字鶺鴒字清水沢	
139	高屋敷II	〃	縄文土器(中期)	大字鶺鴒滝沢第四地割高屋敷	壊滅
140	高屋敷I	〃	縄文土器	大字鶺鴒滝沢第四地割高屋敷	壊滅
141	大久保	ピット群跡	縄文土器	滝沢第四地割大久保	
142	上山	散布地	縄文土器(中期)	大字鶺鴒字上山地内	
143	白石	〃	縄文土器(中期)	大字鶺鴒第三十地割白石	
144	大緩	〃	縄文土器(中・晩期)・土師器・石鏃	大字鶺鴒第二十九地割大緩	
145	別頭森	〃	縄文土器(後期)・石斧・石鏃・曲玉・土面	大字鶺鴒	
146	室小路1	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路9-4	
147	室小路2	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路27-6	
148	室小路5	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路254-1 他	
149	室小路7	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路155-1 他	
150	室小路3	〃	平安	大字滝沢第五地割字室小路77-2 他	
151	室小路4	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路77-1 他	
152	室小路6	〃	縄文	大字滝沢第五地割字室小路91	
153	室小路1	〃	縄文土器	大字滝沢第五地割字室小路112 外	
154	耳取	集落跡	縄文	大字滝沢第五地割字耳取山9	
155	御飯屋山館跡	館跡		大字鶺鴒	
156	八人打	散布地	縄文土器	大字鶺鴒第十八地割字八人打	
157	笹森	〃	縄文土器・土師器	大字鶺鴒第二十四地割字笹森	
158	高柳	〃	縄文土器・土師器	大字鶺鴒第二十六地割字高柳	
159	篠木田村神社古墳	塚		大字篠木	壊滅?
160	大釜館	館跡	なし	大字大釜第二十五地割(字外館)	壊滅?
161	塩ノ森I	散布地	縄文土器	大字大釜第四地割字塩ノ森	
162	塩ノ森II	〃	縄文土器(早・前期)	大字大釜第四地割字塩ノ森	



第3図 周辺の遺跡



III 調査方法と整理方法

1 調査方法

〈グリッドの設定〉

調査区は隣接はしているものの3カ所に分散していることや次年度以降もなお2カ所の調査が予定されていることなどから統一したグリッドを設定する必要があったため、平面直角座標にのせてグリッドを設定した。座標原点は調査区全域を網羅できる位置の北西隅に設定した。座標原点の平面直角座標の値は第X系の $X = -33,900$ m、 $Y = 33,000$ m である。この原点より東と南に向かって50 m 毎に区画し大グリッドを設定した。得られた各大グリッドをそれぞれ10等分し、小グリッドを設定した。グリッド名は東西方向は数字で、南北方向はアルファベットを用い、その組み合わせによった。大グリッド名はローマ数字（I、II…XVII）と大文字のアルファベット（A、B…L）、小グリッド名は大グリッド名を冠した後算用数字（1、2…0）と小文字のアルファベット（a、b…j）を用いて、I A 1 a のごとく表した。

なお、磁北は座北に対して約9度東偏する。

〈粗掘と精査〉

粗掘、精査とも3区、4区、5区の順に進めた。粗掘は遺構や遺物の発見を目的として人手によるトレンチ掘りを行った。その結果、遺物が発見できない区域が相当あったことと斜面や湿地のため人手では作業が困難なところもあり、表土剥ぎと土捨て場の確保のためバックホーを併用した。

精査はグリッド単位で進めた。遺物は小グリッド単位で層位を記入して取り上げた。住居跡は4分割、土坑や陥し穴等は2分割を原則とした。

〈遺構の命名と実測〉

遺構の命名は大グリッド単位で種別に連番を付した。

等高線は平板実測で、遺構は遣り方実測を行った。実測は調査員と現場で養成した作業員とで行った。

〈写真撮影〉

35 mm 版ではモノ・クロとカラー・リバーサル の2種類、6×7 cm 版ではモノ・クロのフィルムを使用し、遺構の平・断面と遺物の出土状況を中心に撮影した。

2 整理方法

〈整理の進め方〉

遺物の洗浄や図面の点検等の一部は野外調査と並行して現場で行ったが、野外調査で得た記録や遺物等の大部分の整理は野外調査終了後に3区、4区、5区を一括して行った。

〈遺構図面〉

現場で作成した図面は点検後、各遺跡ごとに登録番号を付し、台帳に登録した。必要に応じて図面を合成・分解し、第2原図を作成した。なお、トレース、図版作成には当センターの臨時職員が当たった。

〈遺物処理〉

金属器を除く土器・石器等の遺物は通常の処理（洗浄、注記、接合、復元）をした後、報告書掲載用の遺物を選び出し仮番号を付した。登録番号は報告書で使用した番号とし、台帳に記載した。登録しなかった物は同一個体のもの、異個体ではあるが同種のもの、縄文のみの土器片、文様等はあっても小片な縄文土器や小片な土師器片、フレーク・チップ類である。特に礫石器は同器種ものは大幅に図化等を省略した。

金属器は岩手県立博物館に分析鑑定並びに保存処理を委託した。

実測図または拓影図として報告書に掲載した遺物は写真撮影をし、報告書の巻末に一括して掲載した。写真は35mmモノ・クロで、撮影には当センターの写真技師が当たった。

〈写真整理〉

野外調査中に撮影した写真は各遺跡ごとに35mm判と6×7cm判に分けてネガ・アルバムに、スライドはスライド・ファイルに整理した。いずれも撮影順に整理し、台帳に記載した。

遺物写真は各遺跡ごとに種類や器種等の区別無く一括し撮影順に整理した。

3 掲載図版等について

本報告書に掲載した図版は次の要領で作成したものである。

〈遺構図版〉

原則として1/40の縮尺とした。また、遺構配置図等一部のものは任意の縮尺とし、そのつど縮尺を記載した。使用したスクリーンは凡例に示したとおりである。方位記号の北は座北を示す。

〈遺物図版〉

遺物の実測は原寸大で行った。しかし、報告書の掲載に当たっては、土器と礫石器は1/3、剥片石器は1/2を原則とし、縮尺が異なるものに付いてはそのつど縮尺を記載した。実測図の左肩に付した数値は、口縁部径・底部径・高さを示す。単位はセンチメートルである。不明は－、推定は（ ）、残存高は〔 〕で表した。調整痕等は凡例に示すとおりである。遺物番号は各遺跡ごとに土器・土製品、石器・石製品、金属器・金属製品の3群に分けて連番を付した。

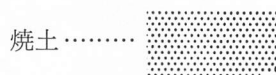
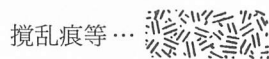
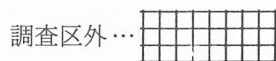
〈写真図版〉

全ての遺構・遺物を掲載しているわけではない。遺物番号は統一の番号である。遺構・遺物とも縮尺は不定である。

【凡例】

使用したスクリーン・トーン、記号及び器面調整痕等は次のとおりである。これにはずれる場合はその都度図版中に例示した。

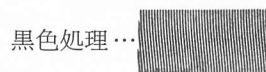
遺構関係



石……………S

柱穴……………P

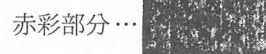
遺物関係



敲打・擦り面

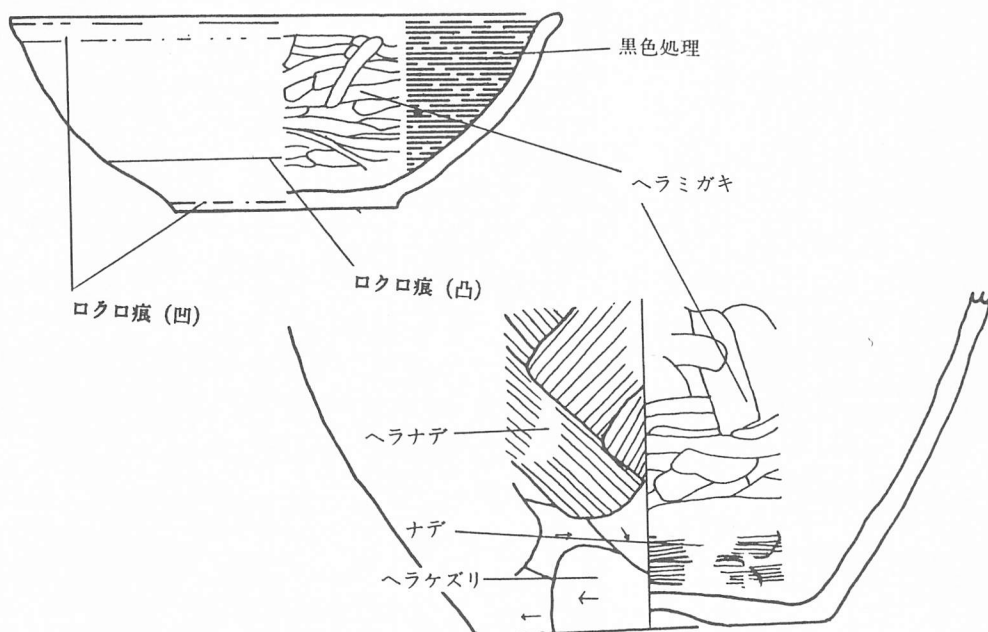


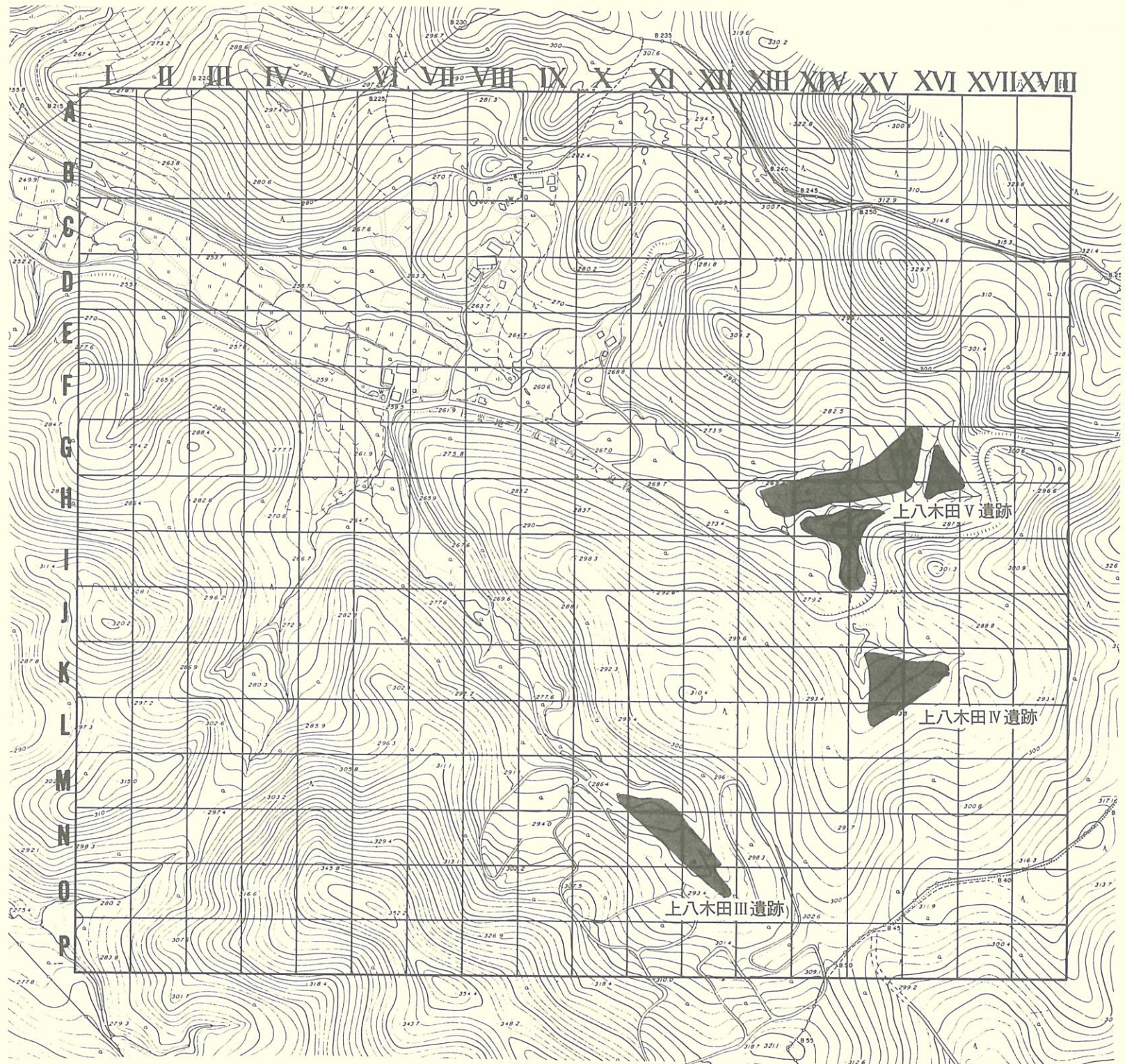
光沢を帯びる磨面



器面調整痕等

※須恵器の断面形は黒色





第4図 遺跡周辺の地形とグリッド配置図

IV 上八木田III遺跡

遺跡台帳番号	LE18-1164
調査略号	KY III-90
調査面積	3,320 m ²
調査期間	平成2年4月12日～5月31日
整理期間	平成2年11月1日～平成3年3月31日
調査担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 専門職員 相原 伸裕
整理担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 専門職員 相原 伸裕

1 3区の地形概観と遺跡の立地

3区は北と南西に小高い山があり、それから延びる尾根によって周囲が取り囲まれている。北側の山は比高約15mであり、その尾根が南東に延びる。南西側は比高約20mの山であり、その頂上から北と南東に尾根が回る。そして、遺跡の南東で北側からの尾根に接続する。それらの裾野によって形成された谷間が北西に延びる。谷間には周囲から湧きでた水によって小沢が形成される。水量は少ない。遺跡はその沢頭付近の北斜面に立地する。

遺跡がのる北斜面の微地形は次のようになっている。頂上から約14度の勾配で降りてきた斜面は沢から15～30m手前で一旦急に勾配を減じ、若干平坦に近い斜面となる。この傾斜変換点を第1次傾斜変換点と呼ぶことにする。第1次傾斜変換点は基盤層である褐色土（基本層序III層、以下同じ）の傾斜角度である。この傾斜変換点は3区の全面で明瞭に見られるわけではないが、少なくとも遺構と遺物が集中したX I N区とX I M区付近では明瞭である。第1次傾斜変換点より上方では黒色土（I層）と暗褐色土（II層）の層は合わせても30cm以下であるが、変換点では1mを越える層厚となる所もでてくる。ここに厚く堆積した黒色土（I層）の生成された時期は、包含されている火山灰・遺物・廃棄された焼土等からその上限は不明であるものの、縄文時代後期には現在の半分以下であり、少なくとも平安時代には現在と殆ど変わらないまでに堆積されたものである。

沢の始まりは周囲と段差は見られず、複数の湧き口からしみだしてきた水が集まって沢を作るが、流れるにしたがってしだいに周囲の地面と落差を生じてくる。この沢に向かって急に落ち込む所を第2次傾斜変換点と呼ぶことにする。調査範囲はこの第2次傾斜変換点までである。

以上のように、3区は山麓と尾根によって周囲を囲まれているが、斜面の方角は若干のうねりがあることから一様ではない。遺構と遺物が集中する範囲は北斜面に限られる。そのうち遺構が集中するのは第1次傾斜変換点より若干斜面の上方であり、遺物は遺構が集中する付近ではむしろ疎らであり、第1次傾斜変換点付近に集中する。

2 基本層序（第5図）

斜面に展開された遺跡であるため、全域が同一の層序・層厚となっているわけではない。しかし、層厚が不定であることと一部の土層が欠落していることを除けば、遺構や遺物が集中する地域の一面であるX I N5bグリッドで見られる層序が、本遺跡に見られる土層を概括的に示しておりかつ整層となって堆積している。同地点に見られる層序は第5図に示すとおりである。

本遺跡で見られる土層のうち、同地点で欠落する土層は暗褐色土（チョコレート色）の一層だけである。この暗褐色土はX I N9aグリッドからX I M8iグリッド付近に見られるもので、同所ではII層とIII層が欠落し、その部分にこの層が載っている。本層はきわめて短時間の間に

堆積した黒色土と褐色土との混土（再堆積層）である。

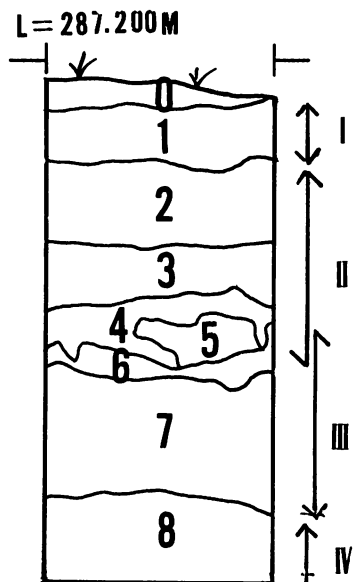
0層は近年の盛土で、層厚は最大120cmである。山地斜面の一部を褐色土まで掘り崩しその土を盛ったものである。遺物が若干含まれている。

I層は黒色のシルトで軟らかい。層厚は20～25cmで、遺跡の全面を覆う。古代の遺構検出面である。縄文から古代までの遺物を包含している。

II層は黒褐色土で締りや含有物によって3層に細分される。層厚は50～65cmである。下位(4)はIII層上位(6)と接するが乱調である。上位が縄文時代の遺構検出面である。

III層は褐色の粘土質シルトで2層に細分される。層厚は50～60cmである。深く掘り込まれた土坑の壁及び底面となる。

IV層は人頭大の礫を含む粘土質層で遺跡の基盤を構成している。層厚は不明である。



第5図 3区基本層序

3 検出された遺構と遺物

(1) 縄文・弥生時代

縄文時代に属する遺構は竪穴住居跡1棟、土坑9基、焼土遺構1基、土器埋設遺構1基である。遺物は土器と石器・石製品が出土した。

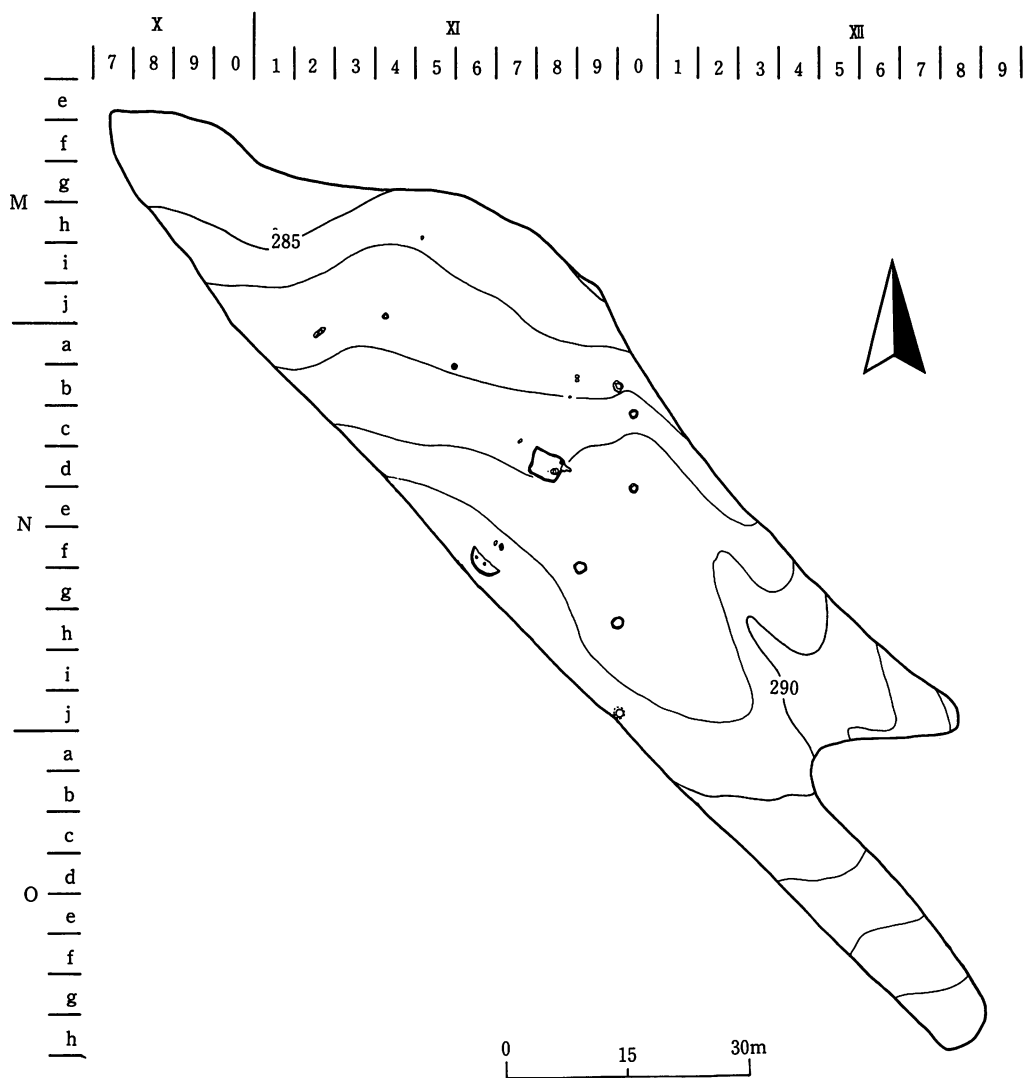
土器は縄文時代後期が中心で、量的には遺物収納用コンテナ6箱である。その大半は小破片となって散布していたもので、一括して出土したものは少ない。土製品は出土していない。

石器は少なく、礫石器が主で剥片石器はフレイクを含めても僅か7点である。石製品は石棒が1点出土している。

弥生時代の遺構は検出されず、若干の遺物が出土した。

(1) 住居跡

検出された住居跡はX I N 6 f 竪穴住居跡1棟である。遺構の上部はモトクロス場の造成等により一部削平され、平面形の中央付近より下位は試掘トレンチ等により消滅していた。したがって遺存していたのは、平面形でいえば約3分の1ほどである。



第 6 图 3 区遺構配置図

X I N 6 f 住居跡

遺構 (第7図、写真図版3)

(位置) 調査区中央部南端に位置する。床面の標高は288.4 m、沢からの比高は3.4 mである。

(埋土) 壁際に若干の褐色土(壁の崩壊土)が混入するが、大半は炭混じりの黒褐色土の単層に近い。軟らかく、締りのないシルトである。

(形状・規模) 遺存していたのが3分の1ほどであり推定であるが、平面形は円形、規模は5 m前後と思われる。

(壁) 上部が削剝されており、遺存していた壁の高さは最大でも20 cmである。しかし、周囲の地形から推定すると、少なくとも斜面上方で30 cm以上はあったと思われる。

(床) III層を床面としている。特に踏み固められた所はない。柱穴以外に掘り込みはなく、水平かつ平坦である。

(柱穴) 4基確認された。2基(p1,p2)は床面が遺存していた所であるが、他の2基(p3,p4)は床面も削剝された所である。p3,p4は配置から出入り口にあたる所と思われる。

(炉) 床面が削剝されていたため細部は不詳であるが、住居の中央に位置する地床炉であろう。遺存していた焼土の規模は、直径50 cm、厚さ5 cmである。赤褐色で硬く、良好な焼土である。

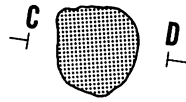
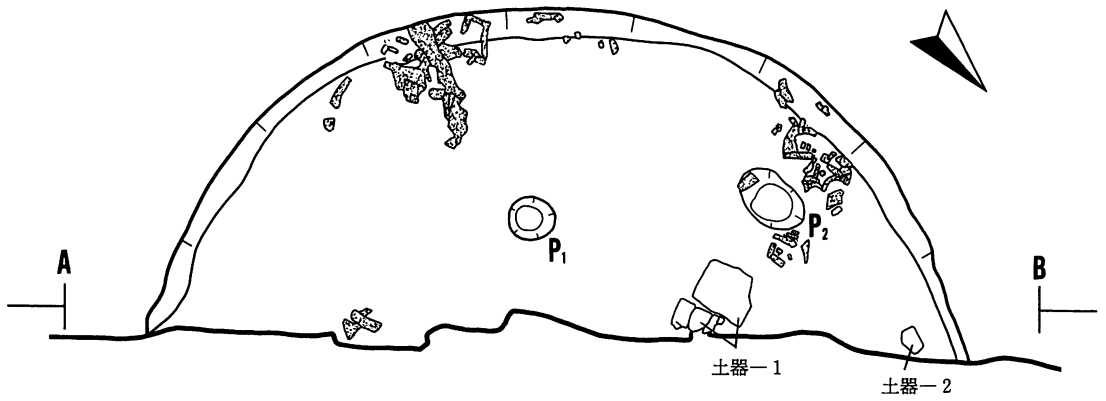
(その他) 焼失住居であり、炭化した丸太材や沢山の粉炭が出土したが焼土粒は少ない。丸太材は直径数センチ程度のもので材質はホウである。

遺物 (第8図1~2、写真図版6)

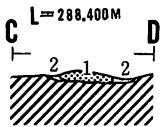
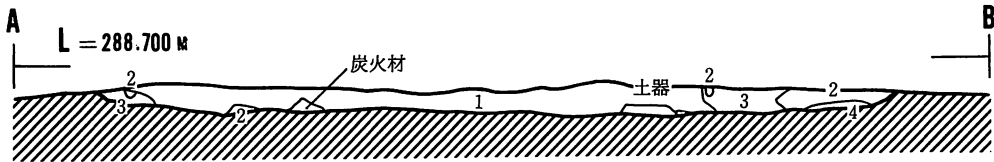
1と2は床面出土の土器である。1は中型、2は小型の深鉢形土器である。1は推定の口径40 cm、器高は残存値で30 cm、器厚7 mmの深鉢である。全面に櫛歯状工具を用いて流水文状に施文する。胎土は粗砂を用い、2 mmほどの小石を含んでいる。焼成は良いが、器面調整は雑である。本遺物は『崎山弁天遺跡』の第IV群第3類土器、『三貫地遺跡』出土の第XXII群土器に酷似する。2は上半部が欠損している。底部径6 cm、の粗製深鉢である。胎土、器面調整、焼成等は良好である。

所属時期

1と2の土器から後期中葉に属すると思われる。



柱穴番号	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
深さ cm	17	13.5	16.5	24.5

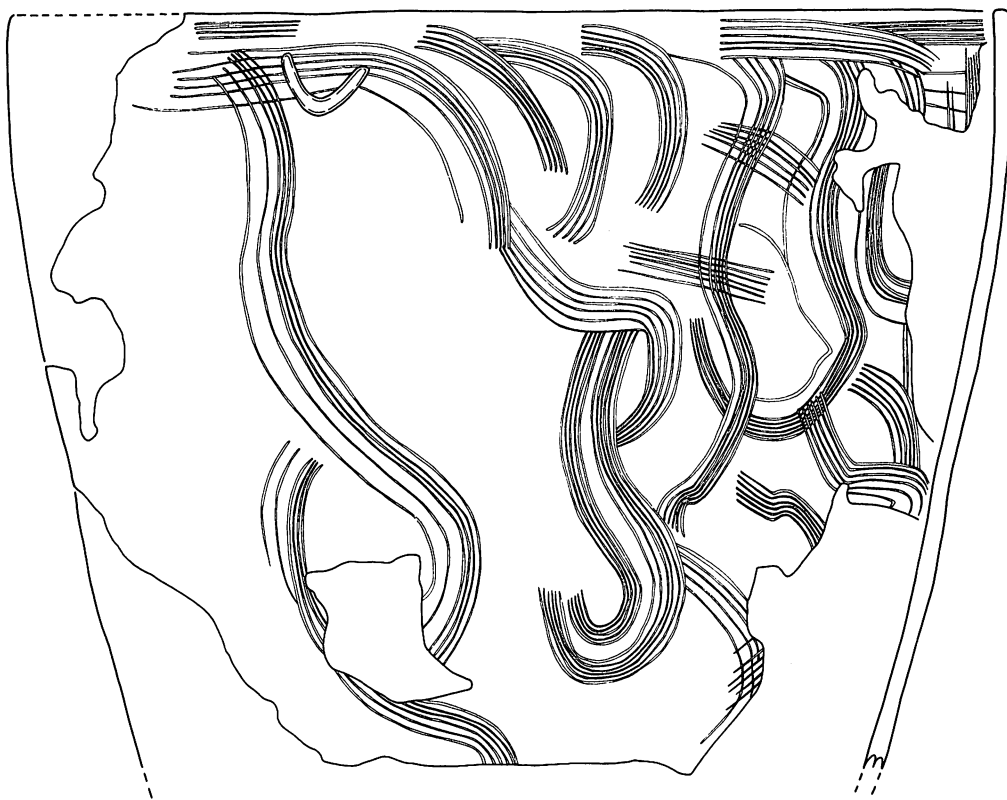


1. 明赤褐色 硬い
2. 赤褐色 もろい

1. 黒褐色土 粉炭焼土粒含む
2. 黒褐色土 褐色土、炭含む
3. 黒色土 炭混入
4. 暗褐色土 褐色土と黒色土の混土

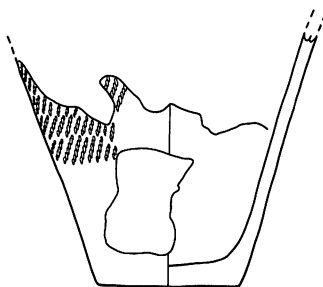
第7図 XI N 6 住居跡

(40.0) · · · (30.0)



1

— · 5.6 · (10.0)



2

第 8 図 XI N 6 f 住居跡遺物

(2) 土坑

土坑はフラスコ状土坑1基、ピーカー状土坑7基、溝状土坑1基の計9基が検出された。これらは時期決定資料を欠くものが大半であるが、検出状況と埋土の様子から縄文時代のものと思われる。なお、現代のゴミ穴等も検出されたが割愛する。

X I N 9 j 土坑

遺構 (第9図、写真図版4)

(位置) 調査区南端に位置する。検出された遺構の中で最南端に位置する。同地点は第1次傾斜変換点にあたる。

(埋土) 中位より上は主として黒褐色土が多く、下位は褐色土と黒褐色土の互層となる。自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はフラスコ状である。開口部径140cm、頸部径95cm、底部径150~170cm、深さ150cmである。

(壁) 角礫を含む硬い褐色土で、大きく崩壊している所はないが、埋土の堆積状況から僅かずつ何度も剝落があったと思われる。

(底部) 中央が若干低くなる。副穴等はない。

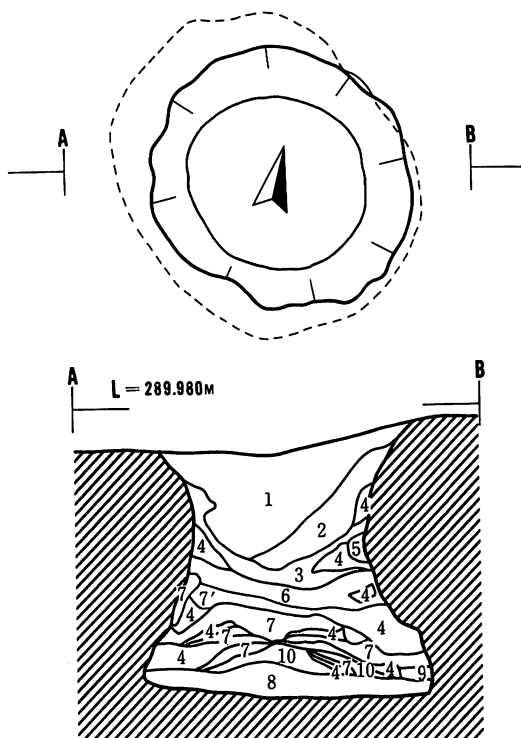
X I N 8 f 土坑

遺構 (第10図、写真図版4)

(位置) X I N 9 j 土坑の北西約21mに位置する。

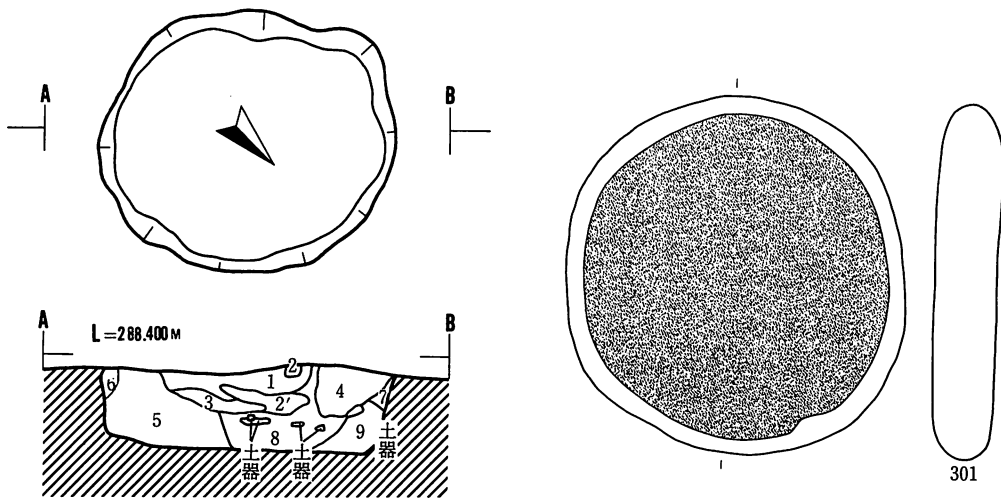
(埋土) 中央の埋土上位に廃棄された焼土塊と多量の土器が見られ、炭や焼土粒は底部直上まで認められる。黒褐色土が大半を占め、軟らかい。二次使用された形跡はない。

(形状・規模) 平面形は楕円形状、断面形は部分的に底部の方が膨らむ所もあるがピーカー状である。開口部径160×140cm、底部径145×120cm、深さ40cmである。



1. 黒色土 明褐色土粒を一部に、1cm大の礫を所々含む
2. 黒褐色土 明褐色土粒、一部に1cm大の礫を含む
3. 黒色土 黄褐色土粒、黒褐色土粒を含む、礫を多く含む
4. 黄褐色土 5mm大の礫、黒色土粒を一部含む(崩落土)
5. 黒褐色土 黄褐色土粒、一部に2mm大礫を含む
6. 黒色土 全体的に黄褐色土粒、一部に1cm大の礫を含む
7. 黒褐色土 全体的に黄褐色土粒、黒色土粒を含む
7. 黒褐色土 7層と同じと考えられるが、少々黄褐色土粒が多い
8. 暗褐色土 黄褐色土粒、2mm~5mmの礫を含む
9. 褐色土
10. 黒褐色土 全体的に黄褐色土粒、2mm~5mmの礫を含む

第9図 X I N 9 j 土坑



- 1. 暗褐色土 1cm大の礫、炭、土器混入
- 2. 橙 礫含む
- 2'. 橙 黒色土含む
- 3. 褐色土 炭、礫含む
- 4. 黒褐色土
- 5. 黒色土 礫少々含む褐色土
- 6. 鈍い黄橙 礫、砂を含む
- 7. 鈍い黄橙 砂少々含む
- 8. 暗褐色土 炭多い 礫、焼土粒含む
- 9. 黒褐色土

(壁) 角礫を含む硬い褐色土で、大きな崩壊は見られない。ほぼ直角に近い立ち上がりである。

(底部) 水平かつ平坦である。特に硬い所や副穴等は見られない。

第10図 X I N 8 f 土坑・遺物

遺物 (第10~11 図 301、3~6 写真図版 6)

3は壺、4は浅鉢形土器の口縁部である。3は体部に矩形的磨消縄文が展開される。胎土、焼成とも良好である。4も磨消縄文であるが、5~6本の平行沈線によって分割され、帯縄文の集合体状の文様を構成する。平行沈線を連結するように蛇行する沈線が垂下する。胎土、焼成は3と同じである。5と6は粗製深鉢形土器である。5は口径が39.5cmの大型である。焼成は良いが、粗砂が多く、器面調整は雑である。6は器面調整は丁寧で、内部は良く研磨されている。

所属時期

3と4の土器から縄文時代後期中葉に属する。

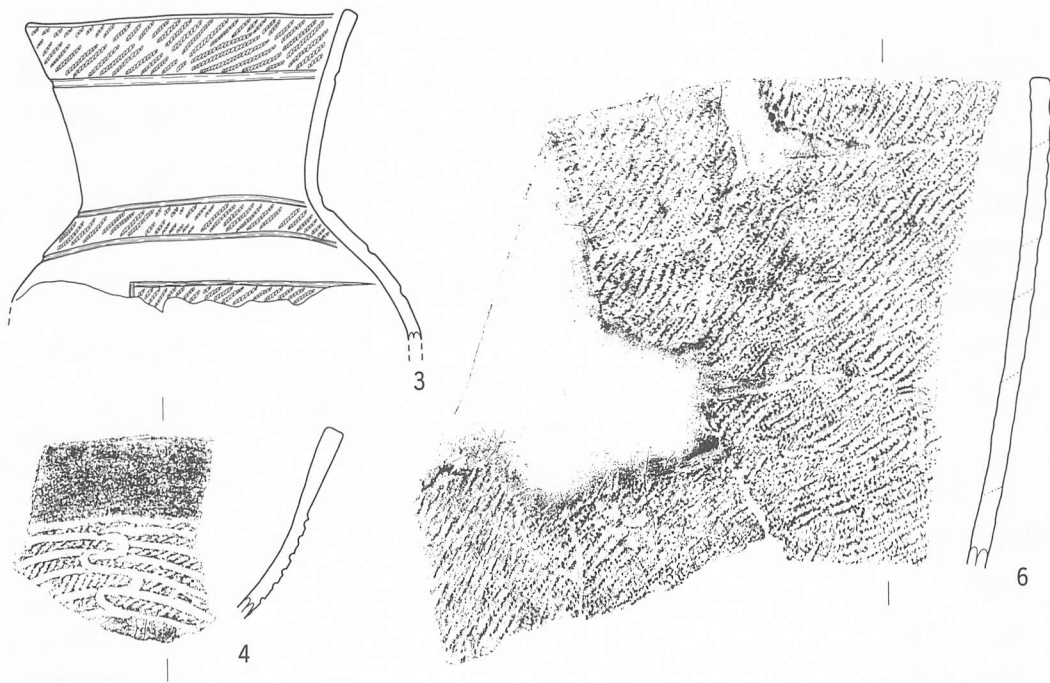
X I N9h 土坑

遺構 (第12 図、写真図版 4)

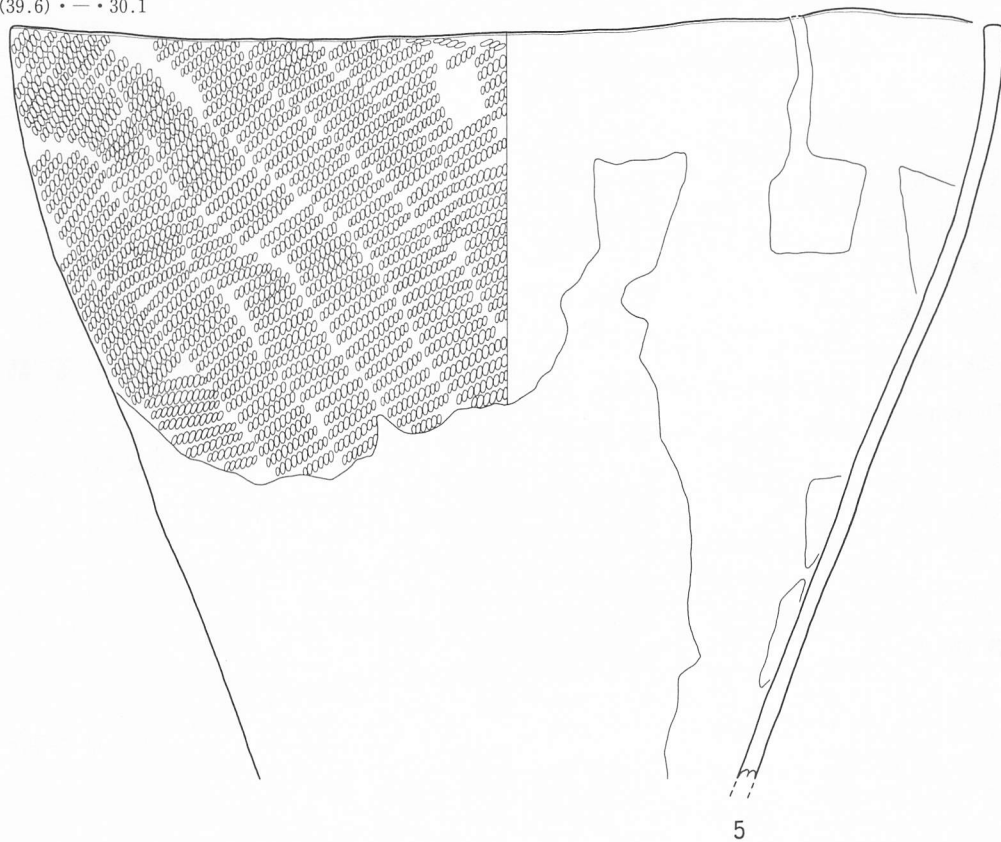
(位置) X I N9j 土坑の北約10mに位置する。

(埋土) 中央に廃棄された焼土が見られるが、埋め戻して二次使用されたような形跡はない。黒褐色土が大半を占める。

13.3 · · · (13.2)



(39.6) · · · 30.1



第11图 X I N 8 f 土坑内遺物

(形状・規模) 平面形は楕円形、断面形はフラスコ状であるが、オーバー・ハングは非常に緩く、頸部としての立ち上がりは見られない。概念的にはビーカー状土坑に分類される。開口部径 158~130 cm、頸部径 140~120 cm、底部径 158~130 cm、深さ 30 cm である。

(壁) 角礫を含む硬い褐色土で、大きく崩壊している所はない。

(底部) 水平かつ平坦である。副穴等はない。

所属時期

占地や形状、規模、埋土等から X I N8f 土坑と同時期と考えられることから縄文時代後期中葉に属すると思われる。

X I N0e 土坑

遺構 (第 12 図)

(位置) X I N8f 土坑の北東 10.6 m に位置する。

(埋土) 黒褐色土がブロック状に部分的に混入するが、大半は軟らかい黒色のシルトである。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はビーカー状である。開口部径 100~110 cm、底部径 80 cm、深さ 40 cm である。

(壁) 硬い褐色土で、大きく崩壊している所はないが、一部に木根痕が見られる。

(底部) 水平かつ平坦である。

X I N0c 土坑

遺構 (第 12 図、写真図版 5)

(位置) X I N0e 土坑の北 8.3 m に位置する。

(埋土) 黒色土、黒褐色土及びそれらの混土の 3 層に大別される。自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形は部分的に膨らむ所もあるがビーカー状である。開口部径 100 cm、底部径 70~80 cm、深さ 30 cm である。

(壁) 褐色土で、底部からやや丸味をもって立ち上がる。大きく崩壊している所はない。

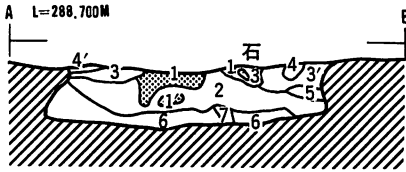
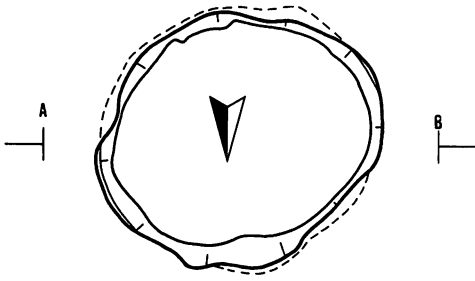
(底部) 水平かつ平坦である。

X I N9b 土坑

遺構 (第 12 図、写真図版 5)

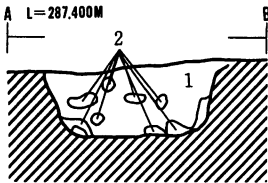
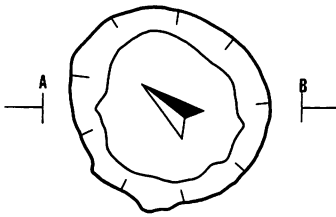
(位置) X I N0c 土坑の北 2.7 m に位置する。

(埋土) 上位は黒褐色土、下位は黒褐色土と褐色土との混土となる。自然堆積かどうかは不詳である。



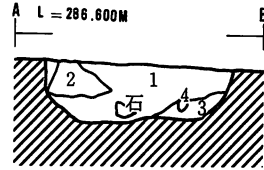
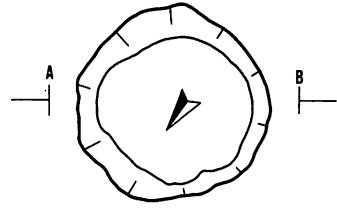
1. 褐色土～明褐色土 黒褐色粒土を多く含む
- 1: 赤褐色土
2. 黒褐色土 明褐色土粒(焼土粒) 全体的に含む、炭混入
3. 黒色土 明褐色土粒を一部含む
- 3: 黒褐色土
4. 黒褐色土 炭化物を含む
5. 暗褐色土 黒褐色土粒が部分的に混じる
6. 黒褐色土 褐色土粒を含む
7. 明褐色土 褐色土粒を全体的に含む

X I N 9 h 土坑



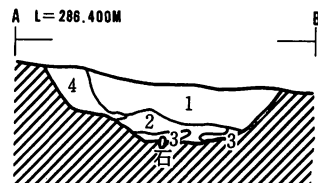
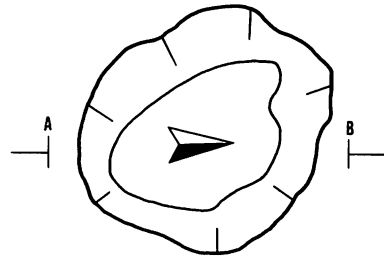
1. 黒色土 植生根、炭含む
2. 黒褐色土

X I N 0 e 土坑



1. 黒色土 褐色土粒隙に混入
2. 黒褐色土 褐色土若干混入
3. 黒褐色土 褐色土混入
4. 黄褐色土

X I N 0 c 土坑



1. 黒褐色土 3mm大炭化物、2mm大隙、褐色土粒を含む
2. 黒褐色土 炭化物、5mm大隙、褐色土粒を含む
3. におい黄褐色土 黒褐色土粒を含む
4. 褐色土

X I N 9 b 土坑

第12図 X I N 9 h 土坑、X I N 0 e 土坑
X I N 0 c 土坑、X I N 9 b 土坑

(形状・規模) 平面形は不整な楕円形、断面形も不整なピーカー状である。開口部径 140×118 cm、底部径 110×68 cm、深さ 40～50 cm である。

(壁) 褐色土で、大きく崩壊している所はないが、開口部が外傾する。

(底部) 平坦ではあるが、南西側が低くなる。

所属時期

共伴する遺物はなく時期を限定するのは困難であるが、検出した層位と埋土から縄文時代のものであり、X I N0c 土坑より古いものと思われる。

X I N5b 土坑

遺構 (第 13 図)

(位置) 緩やかな北東斜面の上位に位置する。周囲には遺構がない。

(埋土) 黒色土であるが 2 層に細分される。いずれも軟らかいシルトで、上位には暗褐色土、下位には褐色土が若干混入する。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状である。柱当りは不明であるが、柱穴状を呈する。開口部径 70～74 cm、底部径 65～70 cm、深さ 20 cm である。

(壁) 黒色土で、底部からほぼ垂直に立ち上がる。大きく崩壊している所はない。

(底部) 水平であるが、南側は若干低くなる。

X I M4j 土坑

遺構 (第 13 図、写真図版 5)

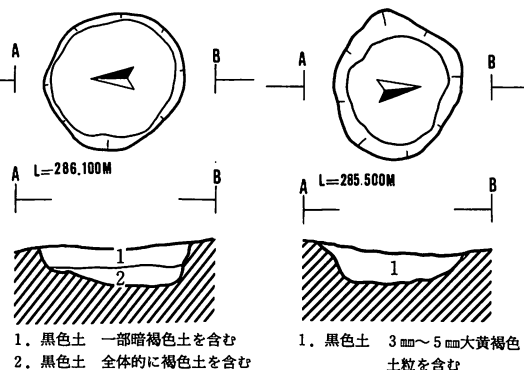
(位置) X I N5b 土坑の北西 11 m に位置する。同遺構とのレベル差はほとんどない。

(埋土) 黒色土の単層である。軟らかいシルトで、粒径 5 mm ほどの褐色パミスが含まれる。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状である。開口部径 70～75 cm、底部径 60～75 cm、深さ 20 cm である。

(壁) 黒色土で、底部からほぼ直線的に立ち上がる。大きく崩壊している所はないが、部分的に傾斜が見られる。

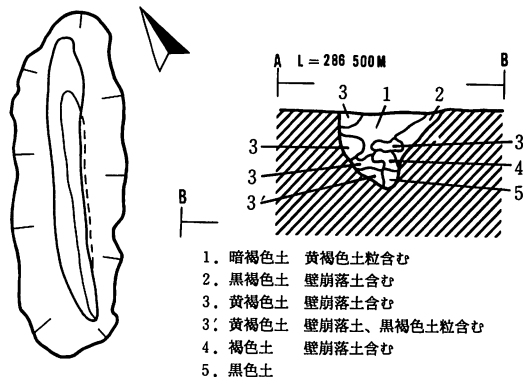
(底部) 水平かつ平坦である。



第13図 X I N 5 b 土坑、X I M 4 j 土坑

X I N2a 土坑

本遺構は人為的改変が大きく加えられた所で検出されたもので、形状・規模とも原形からは大きくかけ離れている。また、底部が斜面なりに傾斜するなど遺構の形態としては若干疑問も残るが、埋土の堆積状況や周囲の状況から人為的な掘り込みと考えられる。



遺構 (第14図)

(位置) X I N6f 住居跡の北西約 33 m に位置する。第14図 X I N 2 a 土坑

(埋土) 中央には黒褐色土、壁際は黒褐色土と褐色土との混土となる。

(形状・規模) 平面形は溝状、断面形は開口部に向かって V 字状に外傾する。開口部径 185×60 cm、底部径 150×15 cm、深さ 30~40 cm である。

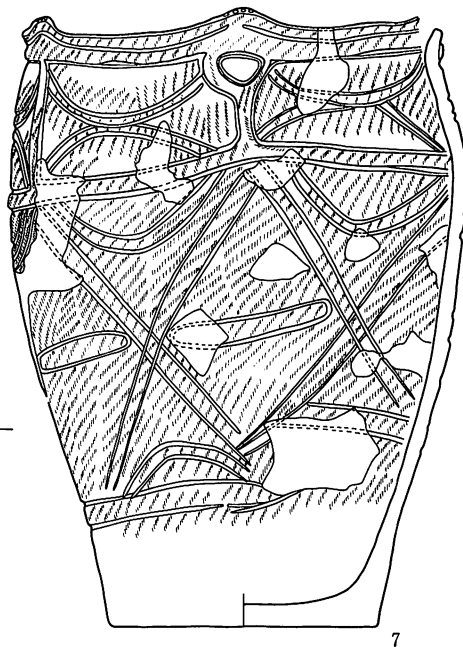
(壁) 硬い褐色土で、大きく崩壊している所はない。底部付近は斜面上位側に若干抉られている。開口部に向かって外傾する。

(底部) 極めて硬い青灰色層上面で止まっているため斜面なりに傾斜する。

16.7・10.6・24.6

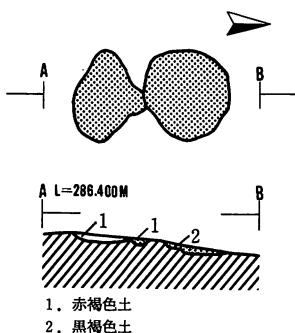
(3) 焼土遺構

現地性の焼土遺構は 3 カ所である。うち、2 カ所は検出面から縄文時代に属するものであるが、もう 1 カ所は縄文時代の遺構検出面まで十分に下がっているとは言えないため、厳密には時期不明のものである。また、現代の淡い焼土は多数検出されたが、割愛する。



X I N8b 焼土
遺構 (第15図)

本遺構は東へ 7~8 m で第 2 次傾斜変換点に達する所に位置し、同地点は極めて緩やかな斜面である。北西 6 m



第15図 X I N 8 b 焼土・遺物

にX I N9b 土坑があり、そのすぐ西側には土器が埋設されその上に多量の焼土が廃棄されている。また、周辺には一括される土器も含めて多くの土器が廃棄されている。焼土は黒褐色土の最下位から褐色土の上位にかけて形成されている。強い加熱を受けた所は2カ所で平面形は瓢箪形となっている。色調は暗い赤褐色で良好な発色とはなっていないが、硬い。規模は直径約50 cm で一部が重なり合う。厚さは3~4 cm である。遺構の周囲に掘り込み等は見られない。

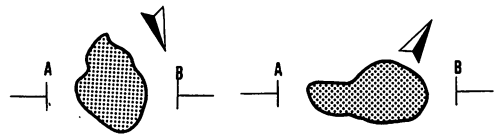
遺物 (第15図7、写真図版6)

7は本遺構及びその周辺から一括して出土したもので、確実に本遺構に共伴するとは言いえないが、本遺構とほとんど時期差は無いものと考えられる。

6波状口縁の深鉢形土器である。口縁部文様帯は隆帯によって長方形に6分割され、矩形の内側は弧線によって上下に分割される。波頭部は口唇部に小さな刺突が3~4個加えられる。また、波頭部から垂下する隆帯は一つおきに円形を描く。体部文様帯は2本の沈線で放射状ないし弧状に描かれる。地文および隆帯上に無節縄文が施文される。十腰内I式に比定される。

所属時期

5の遺物から縄文後期前葉と思われる。



X I M5h 焼土

遺構 (第16図)

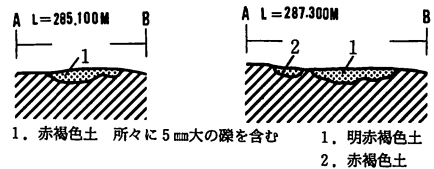
本遺構は北北東へ6~7mで第2次傾斜変換点に達する所に位置し、極めて緩やかな斜面に形成される。

黒色土に形成されたもので、漸移層は不明瞭な第16図 X I M 5 h 焼土、X I N 7 c 焼土

がらも認められる。漸移層まで見れば、ほぼ円形、規模は径約60 cm、厚さ7~8 cm である。本遺構の西側約50 cm の所には廃棄された焼土が見られる。遺物は若干の縄文土器が周辺から出土したが、共伴するとは言い難い。

所属時期

共伴する遺物はないため詳細は不明であるが、層的にみて縄文時代のものである。



X I N7c 焼土

遺構 (第16図)

本遺構はX I N 7 d 住居跡の北西2mに位置する。検出面は同住居跡の検出面(平安時代)より下がるが、縄文時代の検出面まで十分に下がっているとは言い難い。平面形は瓢箪形となることから、2カ所で加熱を受けたものである。色調は赤褐色で良好な発色ではあるが、硬くは

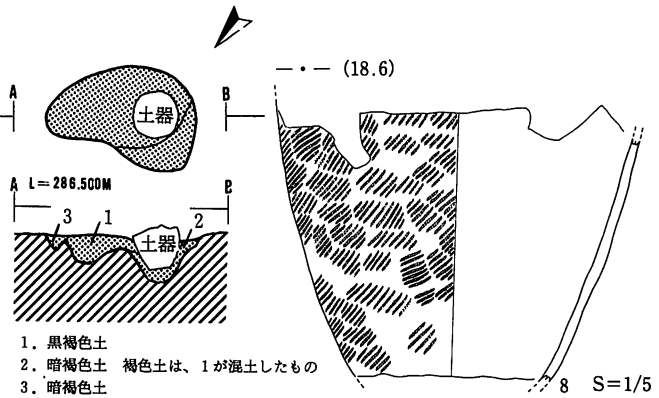
ない。規模は直径約 32×64 cm、厚さ 4～7 cm である。遺構の周囲には掘り込み等は見られない。

所属時期

詳細は不明であるが、層位的にみると縄文時代以後平安時代以前のものである。

(4) 土器埋設遺構

土器埋設遺構は X I N9b 土器埋設遺構 1 基である。



第17図 X I N 9 b 土器埋設遺構・遺物

遺構 (第 17 図、写真図版 6)

本遺構は X I N8c 焼土と X I N9b 土坑の間に位置する。上部には多量の焼土が炭化材と一緒に廃棄されている。埋設のための掘り方は不整な楕円形で、土器の部分だけは若干深く掘り下げ、土器の上辺が少し地上に出る程度に埋置したものである。土器は口縁部と底部が打ち欠かれているが、周囲からこれに直接接合する破片は出土していない。土器及びその周囲には強い加熱を受けた痕跡はみられない。土器の埋土は黒色土の軟らかいシルトで粉炭等の混入物はみられない。

遺物 (第 17 図 8、写真図版 6)

粗製深鉢形土器である。上位はどの部位から打ち欠かれたか不明であるが、下位は底部直上で打ち欠いたものである。地文は LR の単節斜縄文である。器厚は 5 mm、色調は明褐色、胎土・焼成とも良好である。上端から 3 cm までは外面に炭化物が付着していないが、下位には付着している。このことから、本遺物は煮炊き用として使用されたものが、転用されたものである。

所属時期

文様体がないため時期を限定することは難しいが、器厚、地文、胎土等から縄文後～晩期のものである。

(5) 遺構外出土遺物

土器

出土した縄文土器と弥生土器はコンテナ4個分である。住居跡および埋設土器等若干まとめて復元できる状況で出土したものもあるが、大半は小片となって散布していたもので、器形や大きさが推定できるまで復元できたものは少ない。時期的にみれば、若干の晩期の土器や弥生の土器も含まれてはいるが、縄文後期の土器が卓越する。

第IV群土器（縄文後期）

第1類（第18～19 図9～31、写真図版7）

中期末から後期前葉に位置づけられる土器群である。門前式、堀之内Ⅰ、Ⅱ式、十腰内Ⅰ式等に比定されるものである。本類に属する土器は少ない。

a (9～10) 9は単節斜縄文を施文した上からやや太めの棒状工具で横位の楕円形状の入り組み文を施文したものである。10は隆起線文に竹管文を施文する。

b (11～20) 11、12は地文の上に細い棒状工具で弧状や区画文を描く。13は中央をやや窪ませた大型の突起で、地文の上に平行沈線化した楕円形状の沈線文が施文される。14～17は同一個体である。14は口唇部に小さな山形突起を有する。地文の上に平行沈線と半載竹管で斜位に連続刺突を2段に加える。17は口唇部に刻みが増えられる。18～20も同一個体である。口縁端部には竹管刺突文が3段に、その下には数本の平行沈線文によって区画文を描き、内部を磨消している。

c (21～23) 櫛歯状工具を用いて円形を基調とした曲線文を描く。口縁部は平縁で肥厚する。基本的には1も本項に属するものと思われる。

d (24～31) 24～31は磨消縄文によって帯縄文を作り、区画文や平行縄文帯を構成するものである。28、29は充填縄文である。

第2類（第19～21 図32～66、写真図版7）

縄文後期中葉に属する土器群である。十腰内Ⅱ式、宮戸Ⅱ式、加曾利B式等に比定される土器群である。

a 32～40は地文の上に数条の平行沈線文を描く。沈線の間を仕切ることによって、あたかも楕円形の集合体状となる。破片のため体部文様体は不詳であるが、幅広の磨消部を作り出している。

b 43～45は同一個体で壺型土器のミニチュア、46、47も同一個体で注口土器と思われる。いずれも良く研磨された器面に細い沈線で施文されたものである。

c 41,42,48～59 渦巻文や幾何学状の磨消縄文が大胆に展開される。

d 60～66は磨消縄文の区画沈線に沿って連続刺突を加えるものと口縁部に刻みを加えるもので

ある。64は無文に1本の沈線が口縁部に沿って回るが、器形は63と同じで大波状口縁を有する深鉢形土器である。66は口縁部の突起が二股となる。

第V群土器（縄文晩期）

第1類（第21図67～73、写真図版7）

縄文晩期前葉に属する土器群である。大洞BC式に比定される。入り組み文に刻み帯ないし齒列状文帯が回るものが多い。67は大洞B式に比定されるかもしれない。72は丸底の皿ないし壺等の底部で半肉彫り状の雲形文が大きく展開する。73は注口土器の上半部である。色調は灰白色である。

第2類（第21図74～81、写真図版7）

縄文晩期中葉に属する土器群である。大洞C1式に比定される。74は小型の深鉢形土器で口縁部文様体には平行沈線間に刻みが充填される。口縁部文様体の下端（最大径）にA型の二股突起が付けられる。75は壺型土器で地文は施文されず、全面をよく研磨し細い隆帯を平行に貼付する。76～78は小型の深鉢型土器で、76は小波状口縁で、2本の刻み帯が回り、77は入り組み文が沈線化の傾向を強める。78は口唇部に刻み、口縁部には幅の狭い平行沈線が回る。79と80は数条のやや深い沈線が回る。81の口唇部には二股のB状突起がつく。

第VIII群土器（時期不明）

本群は縄文後晩期の粗製土器で、時期区分できないものを一括した。量的には後期に属する土器が多数を占めると思われる。

第1類（第22図82～90、写真図版8）

粗製土器のうち口縁部ないし体上半部のものを一括する。82、83は無文帯、84は頸部がくびれるが全面に縄文が施文される。85、86は頸部のくびれ部が無文となる。87は口縁部は無文帯で体部との境に1本の縄文原体が押圧される。88～90、92は大型の深鉢形土器である。これらの特徴は口縁部にくびれを持ったり、外傾するなど口縁部が体部とは明瞭に区画できる土器が圧倒的に多いことである。

第2類（第22図91～93、写真図版8）

粗製土器の体部である。91は円筒状の深鉢形土器である。93は網目状撚糸文である。図化したものは3点であるが、図化しないものを含めると全般に単節斜縄文が卓越し、若干の網目状撚糸文も散見される。しかし、他の縄文は見られない。形状は口縁部付近が最大径となり、底部の1.5～3.5倍以上となるものが一般的である。円筒状のものは95の1点のみである。

第3類（第22図94～127、写真図版8）

a 94～98は粗製土器の底部である。出土した底部は破損したものが多く、図化を省略したものが多く、異個体のもので規模を推定できたものは58点である。

94 は平底、96～98 は上げ底状のものである。平底のものと同上げ底状を呈する土器との割合はほぼ半々とも言えるが、意図的に上げ底を作り出

付表：底部の規模別個数 (cm)

直径	0～2	2～4	4～6	6～8	8～10	10～12	12～14
個数	2	5	11	9	12	17	2

しているものは95の高台付き状の上げ底と99の底部が完全にくぼむものだけで、概念的にはすべて平底とみなして良いと思われる。

規模別の内訳は右の通りである。最多は10～12 cmであり、8～12 cmで半数を越える。

b 99～125 は底部に見られる文様である。99～122 は網代痕である。経と緯が1本越え、1本潜りとなるもので、織物でいう平織りに当たるものである。材質の鑑定は行わなかったので不明であるが、118と119は他のものとは異なっている。後者は割竹を使用したものかと思われる。121は一部が重複している。1本越え1本潜りということでは前ののものと同じではあるが、編む角度が45度ずらしており、矢羽状になっている。122は3本1束として編まれたものである。以上、網代痕はすべて平織り状のものであるが、104,106,114等のようにヘラミガキによる再調整を施したため消えかかっているものもある。また、109は薄い3枚の粘土板を重ねて底部を作ったものであり、その2枚目に網代痕が見られるものである。すなわち、網代痕を塗りつぶしたものであると思われる。123は木葉痕である。木葉痕はこれ以外には2点出土している。小片のため図化は省略する。使用された葉は広葉樹のかなり大きなもので、1枚のものである。124は笹葉痕である。葉幅は4 cmのものである。125も材質は不明であるが、コンブ状のものをたごめたものである。同様のものは他にはない。図化を省略したものには、無文のものが多い。それらにはほとんどナデ調整が加えられている。

第4類(第22図82～127、写真図版8) 126は円盤状土製品である。細い沈線が見られる。127は注口部である。無文で、ミガキ等は加えられていない。

第VI群土器(弥生土器)

弥生土器はすべて後期に属するもので、常盤式あるいは一本松式に比定されるものである。

第1類(第27図129、写真図版8)

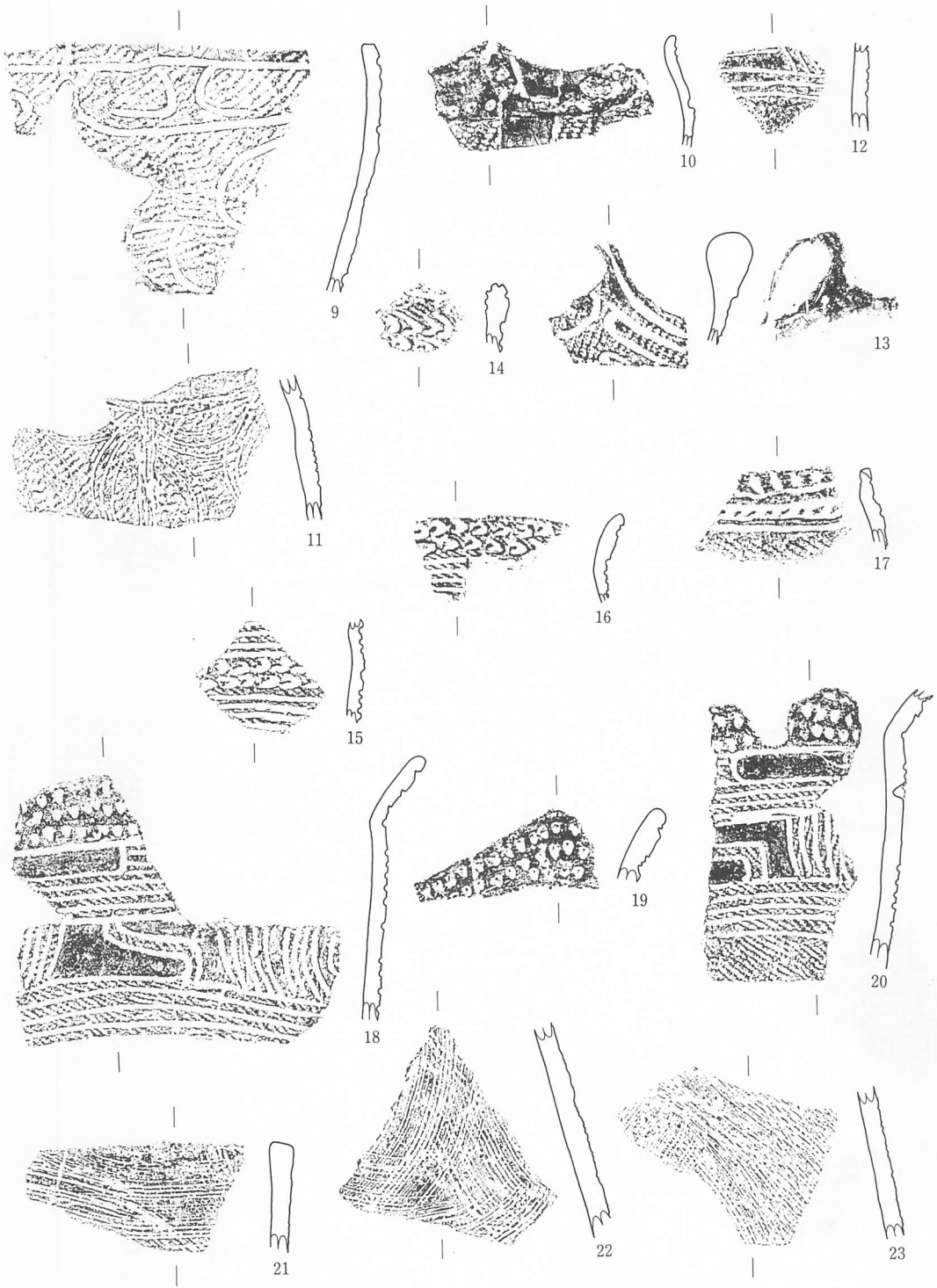
交互刺突文と連弧文を有する甕形土器である。本類に属するものはこの1点だけである。

第2類(第28図132～134、写真図版8)

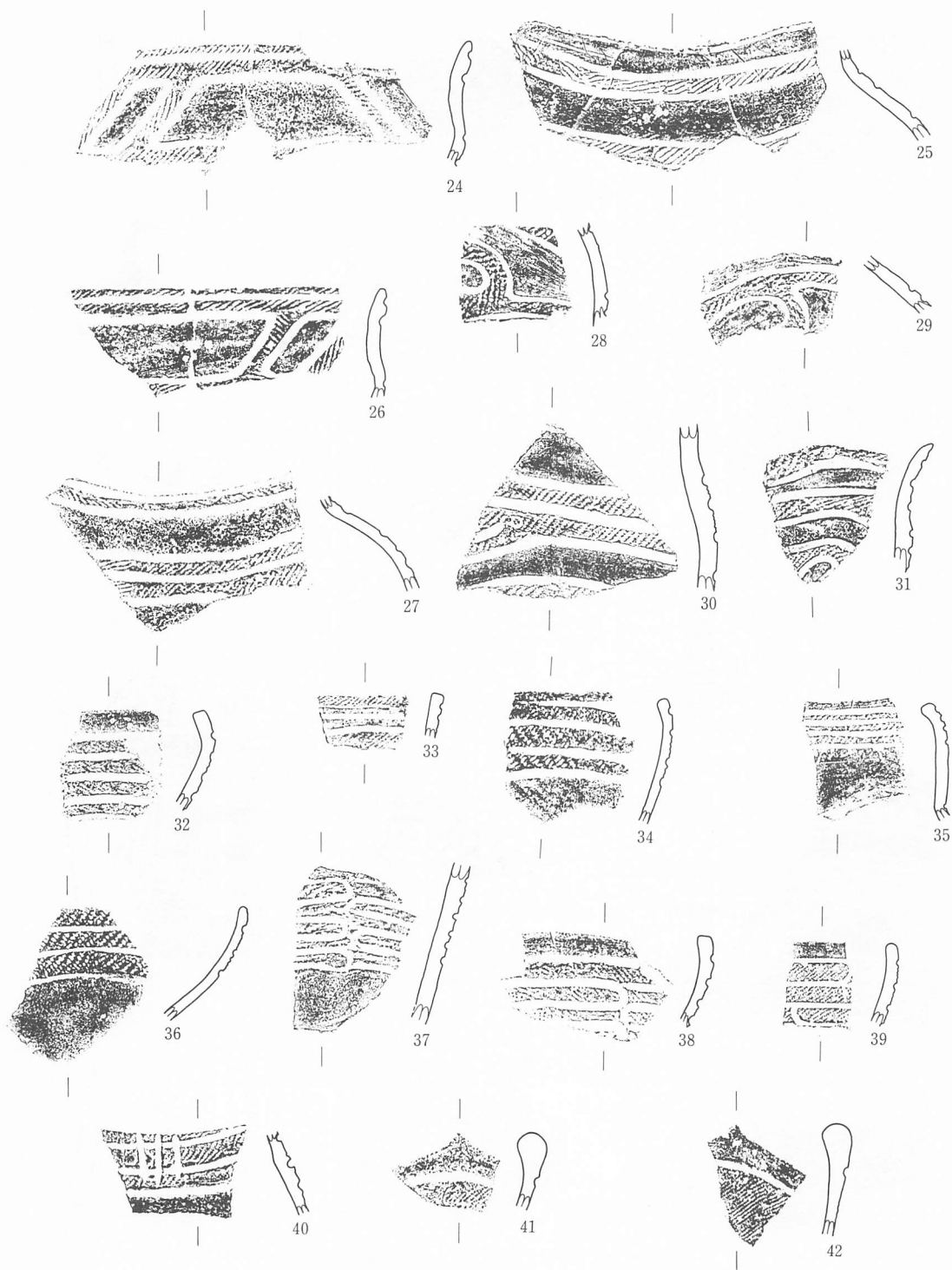
沈線文土器である。132～134の3点で、いずれも山形状であるが、134は退化している。

第3類(第27～28図130～131、135～137、写真図版8)

縦位の撚糸文を施文する土器を一括する。130と131は異個体である。口縁部がともに若干外傾する。136は体部下端に非常に浅い沈線文が回る。底部にも棒状工具による調整痕が見られる。



第18图 第IV群 (第1類) 土器

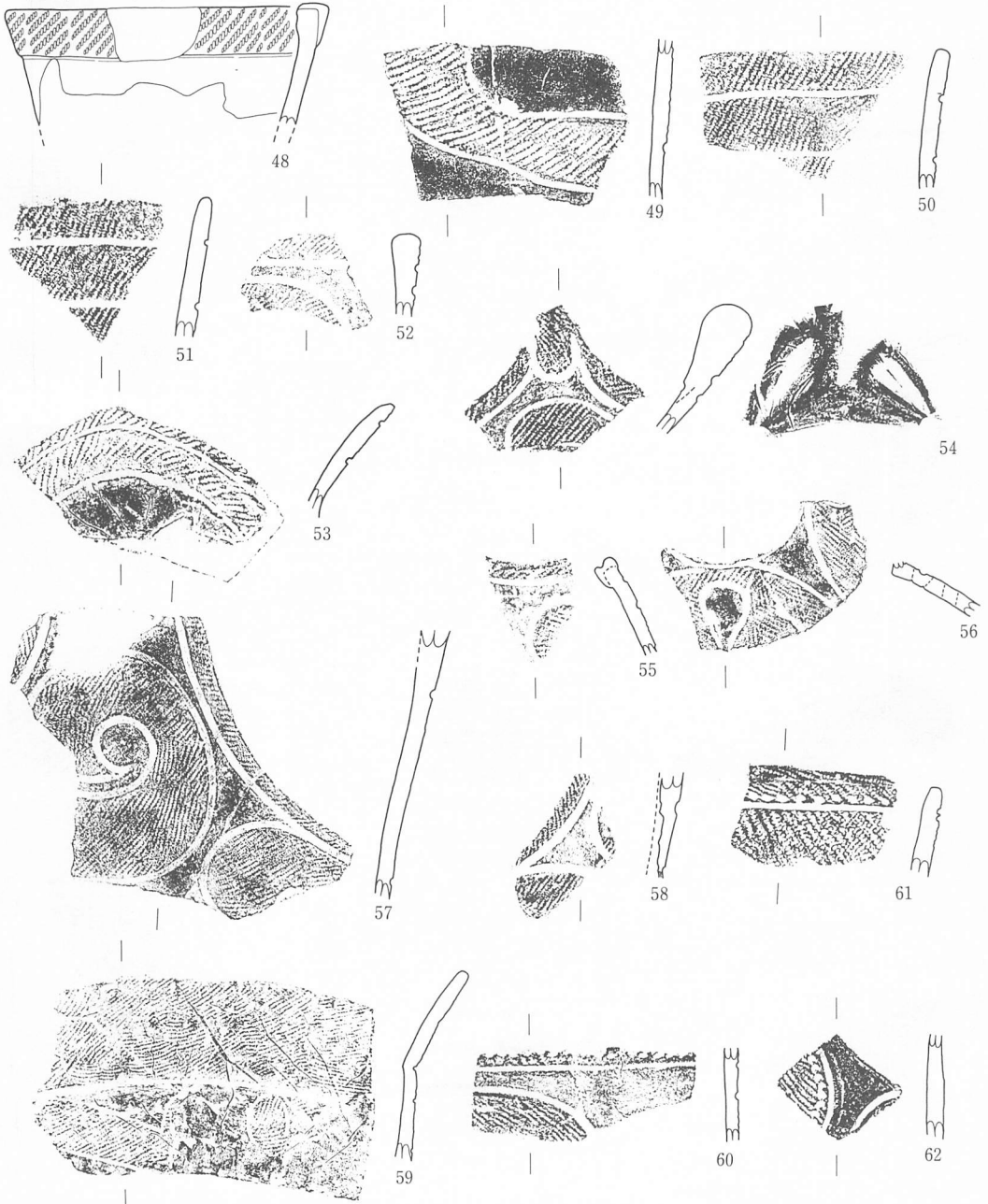


第19图 第IV群(第1~2类)土器

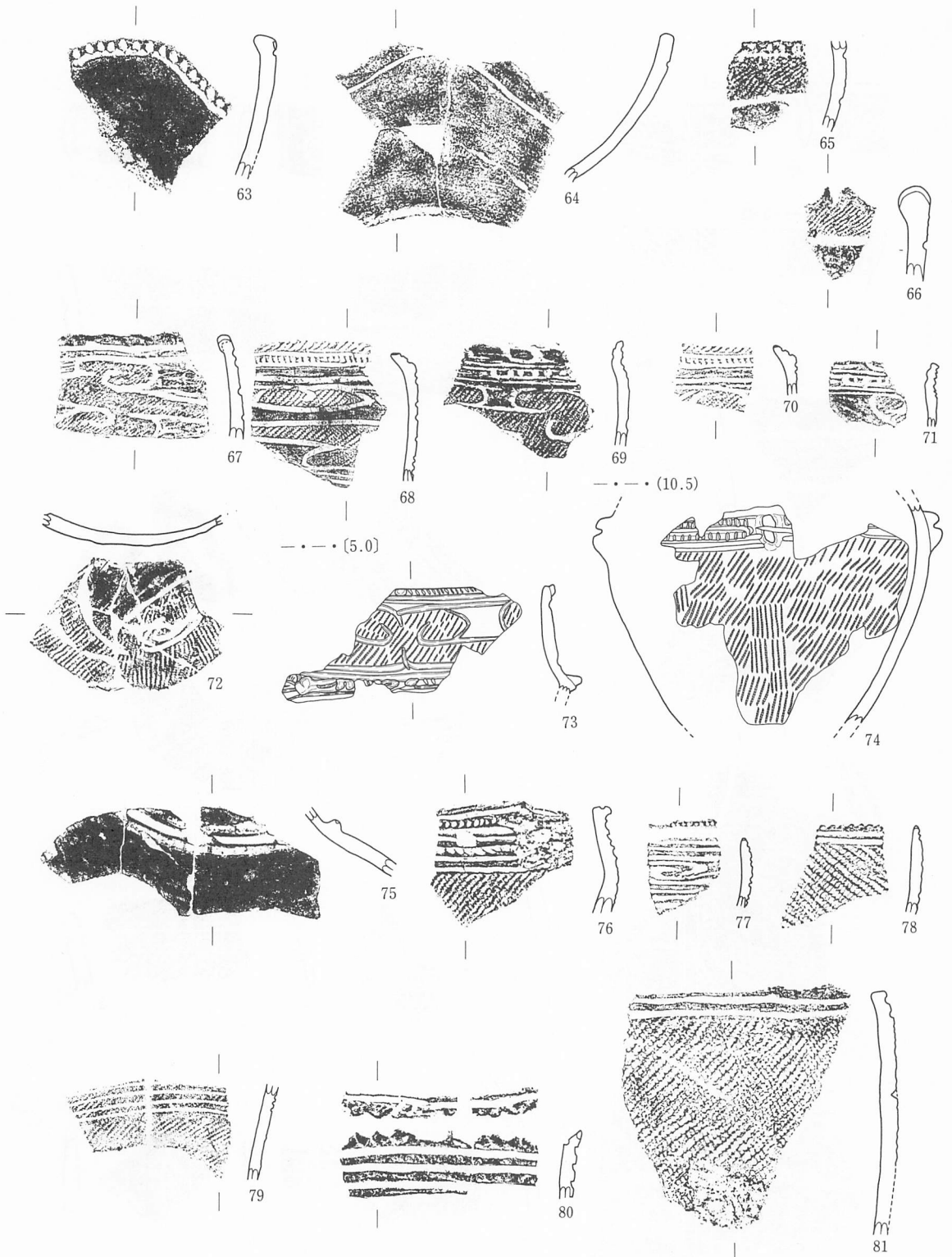
5.0 · — · (3.4)



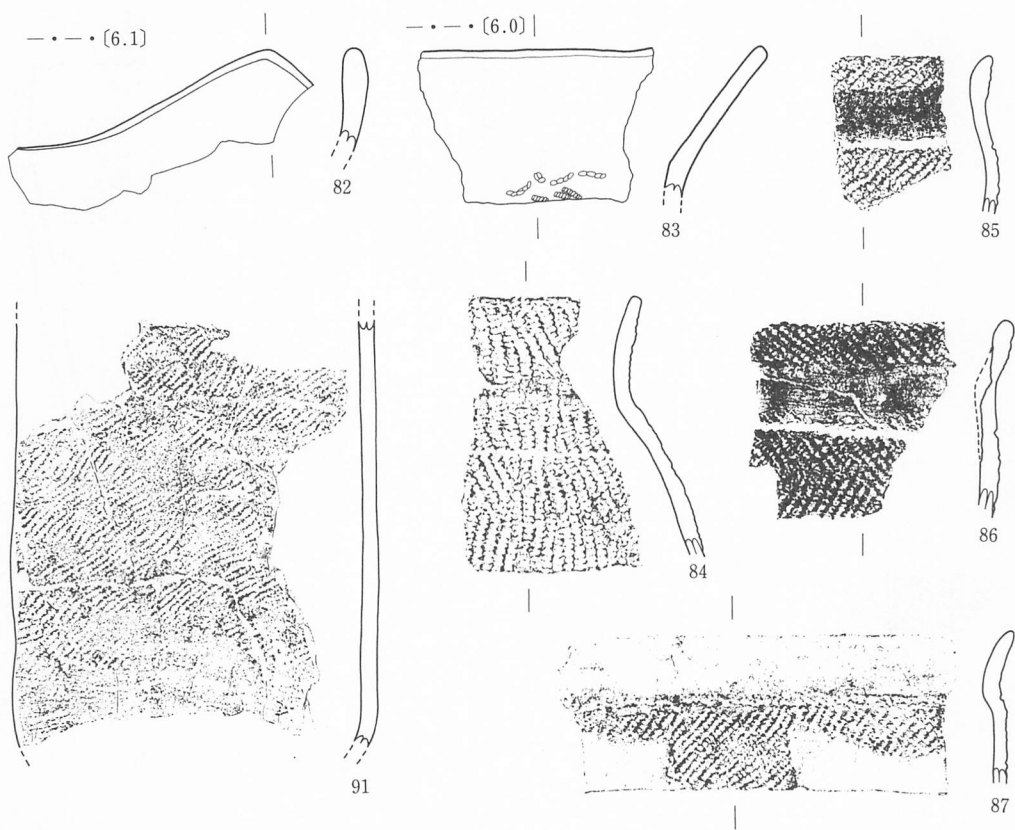
(13.8) · — · (5.0)



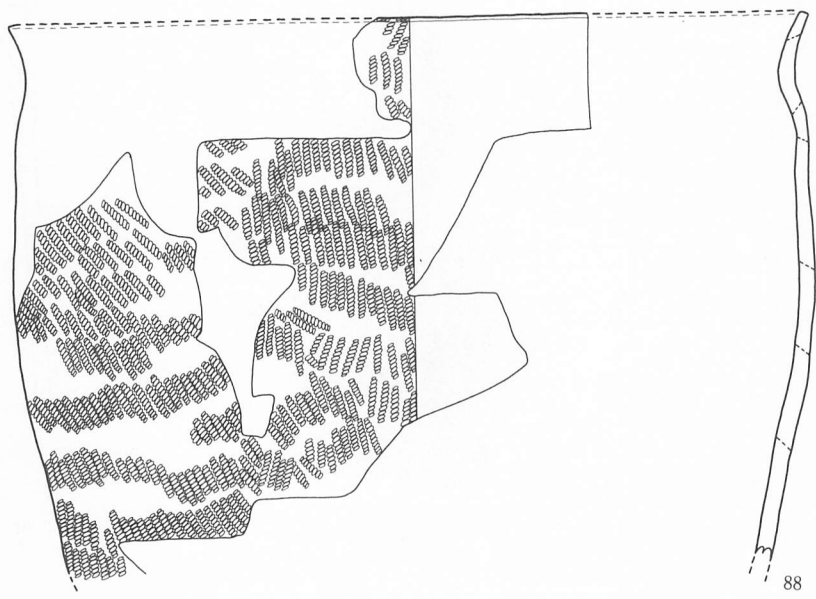
第20图 第IV群(第2类)土器



第21图 第IV群 (第2類)
 第V群 (第1~3類) 土器

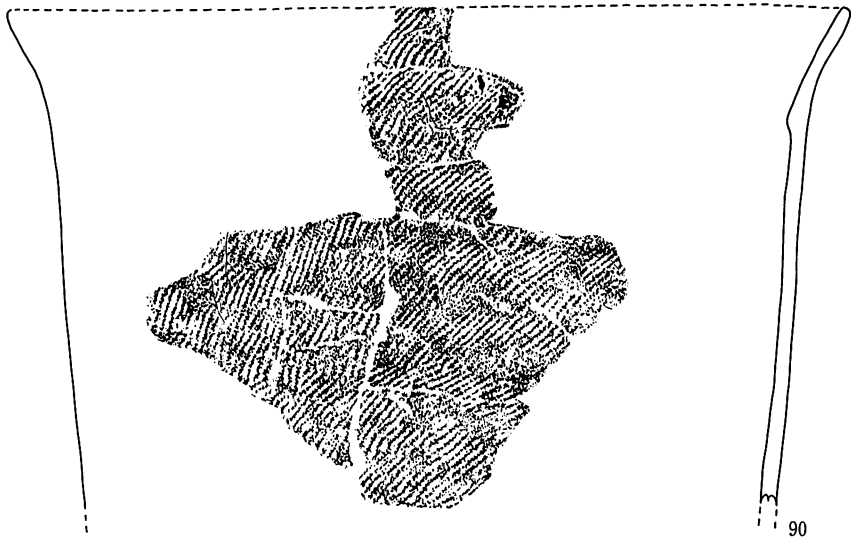
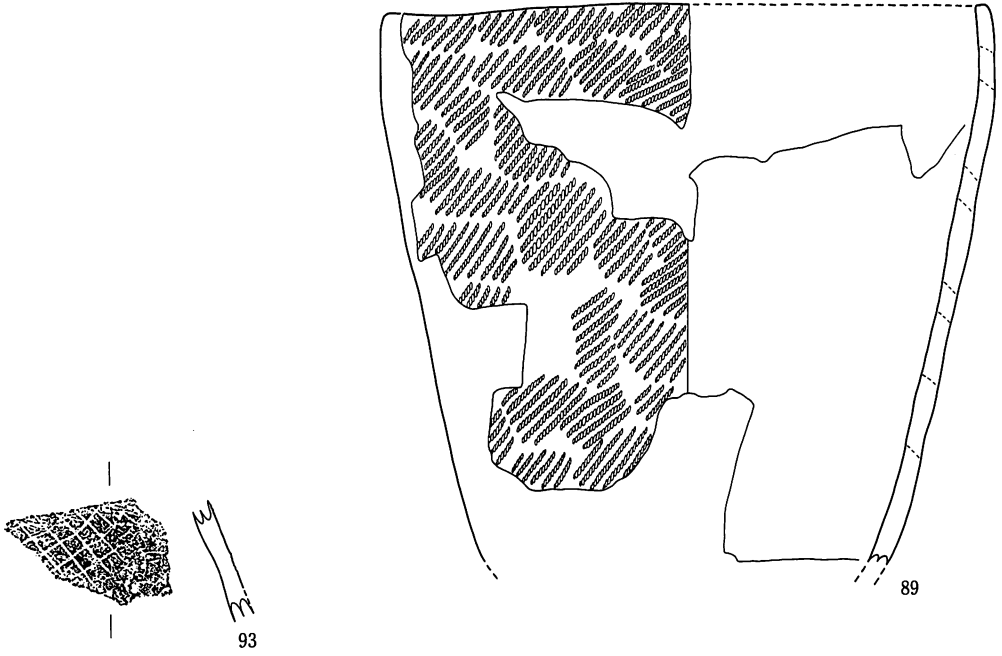


32.0 --- (22.0)



第22图 第八群 (第1、2类) 土器

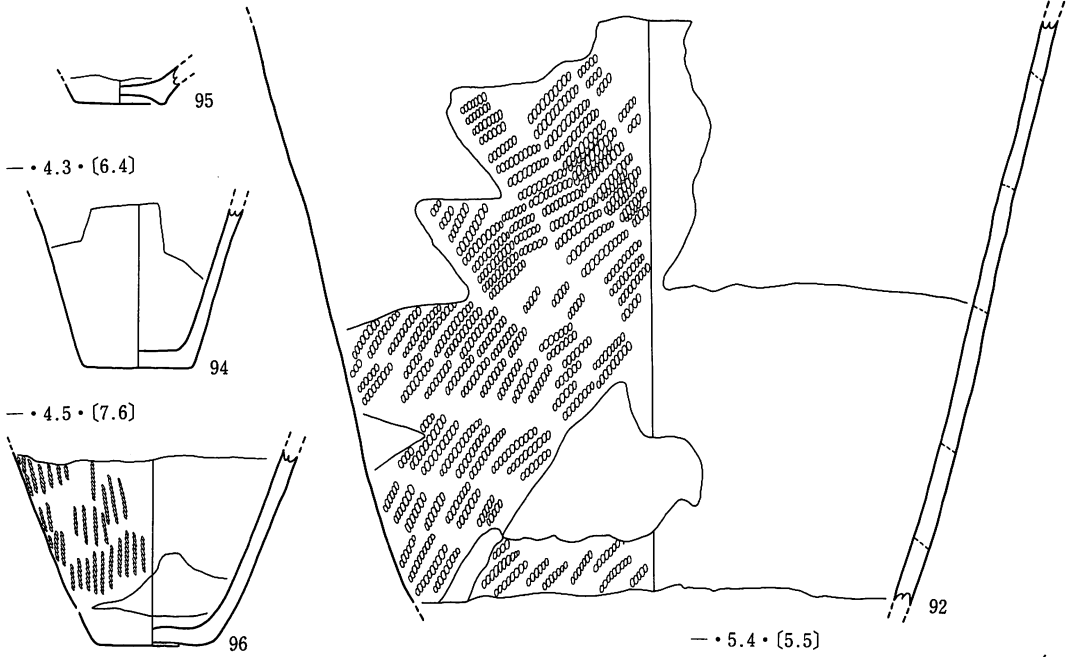
(24.2) · — · [22.2]



第23图 第Ⅷ群（第1、2類）土器

— • 3.6 • (1.6)

— • • • (23)



— • 4.3 • (6.4)

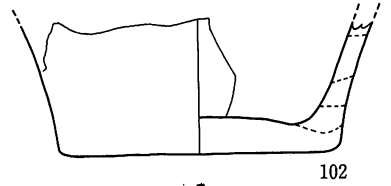
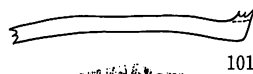
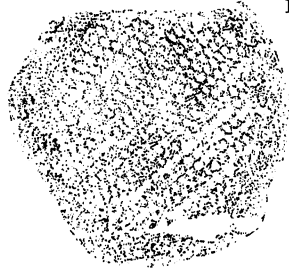
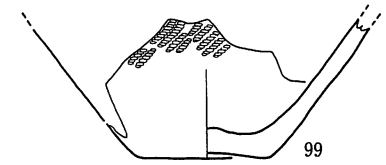
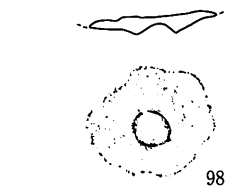
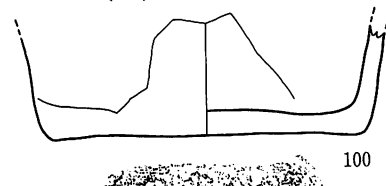
— • 4.5 • (7.6)

— • 7.1 • (5.6)

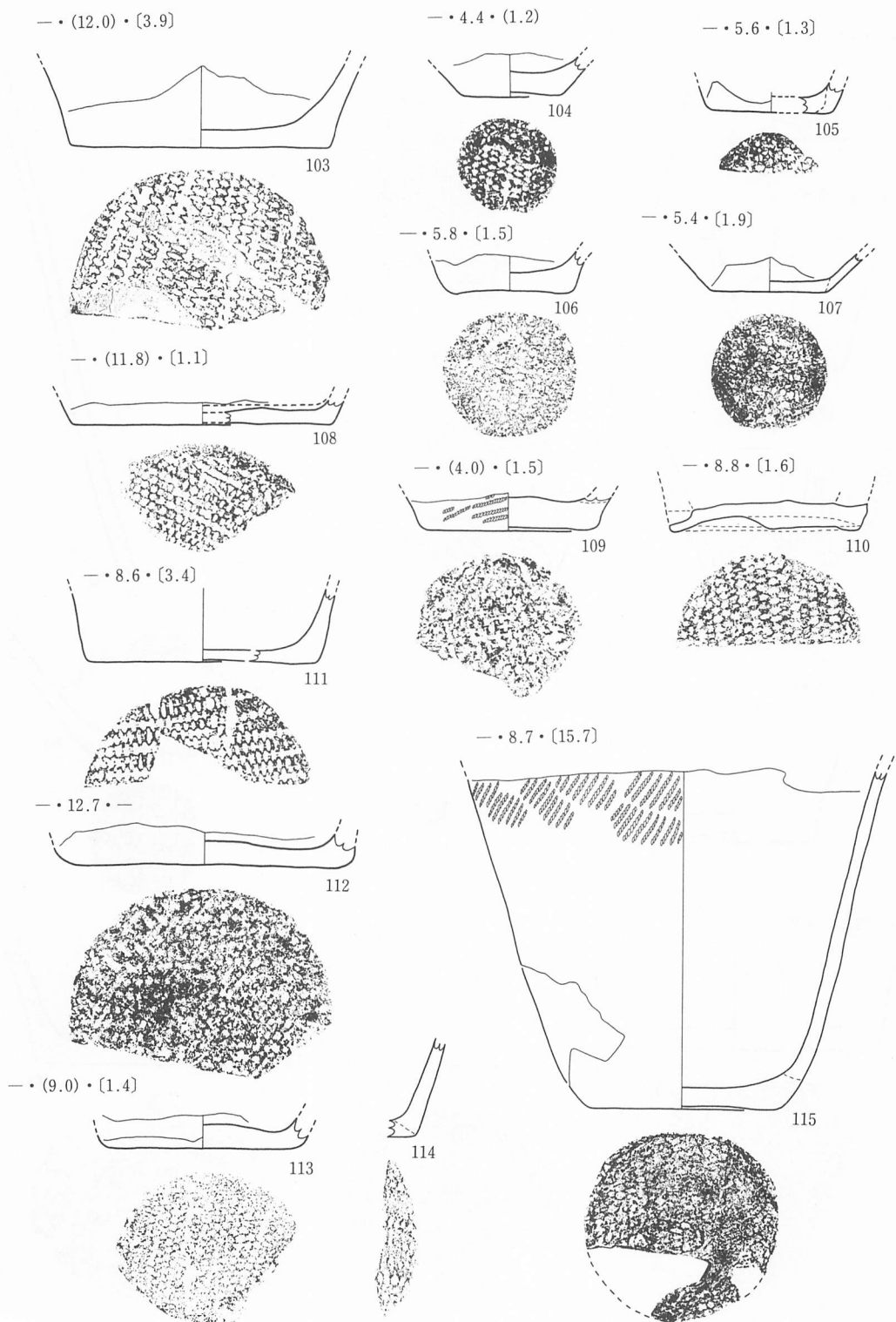
— • 5.4 • (5.5)

— • 12.5 • (4.2)

— • (5.6) • (5.4)

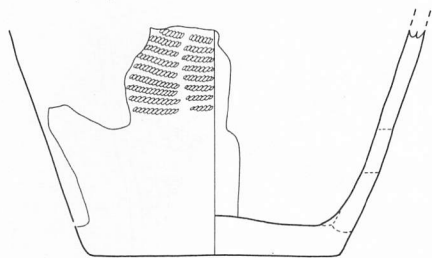


第24图 第八群 (第1、2类) 土器

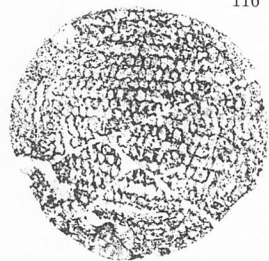


第25图 第八群 (第1、2类) 土器

— • 10.0 • (9.0)



116



— • 5.1 • (2.6)



117



118



119



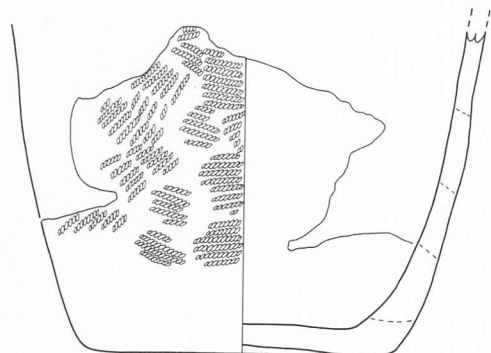
120



121



— • 12.3 • (13.0)



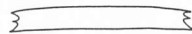
124



— • (11.0) • (3.2)



123



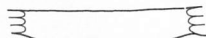
122



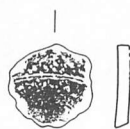
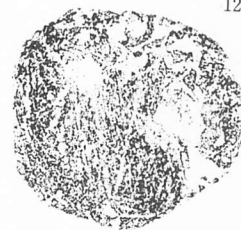
— • 9.5 • (2.1)



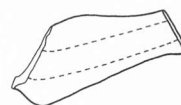
126



125

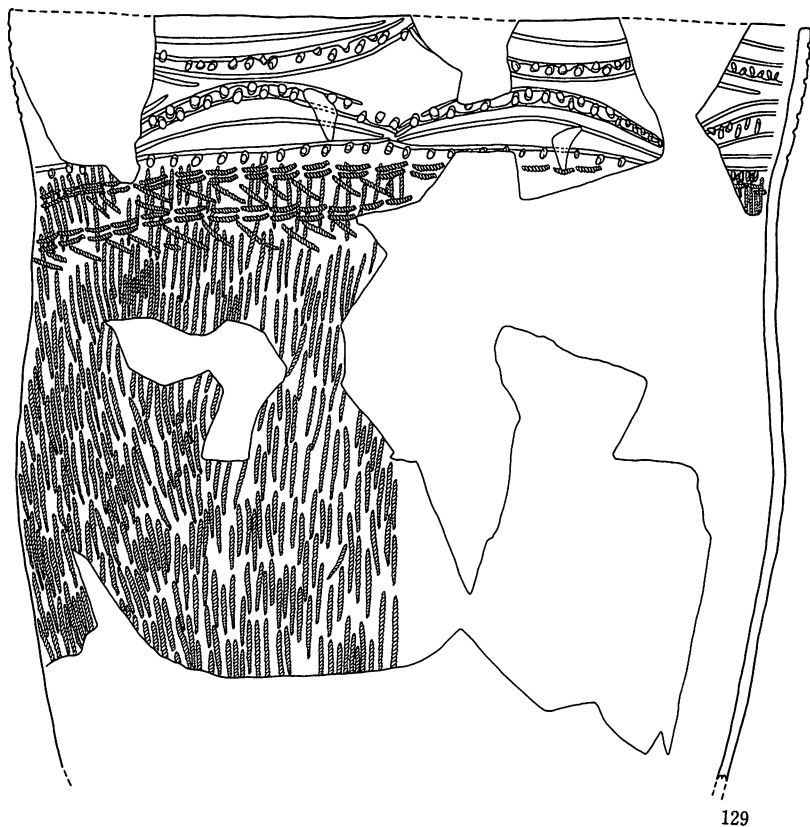


127

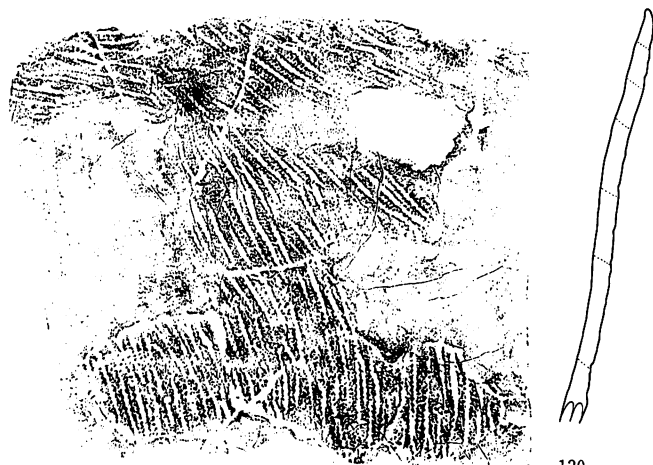


128

第26図 第Ⅷ群 (第1~3類) 土器・土製品

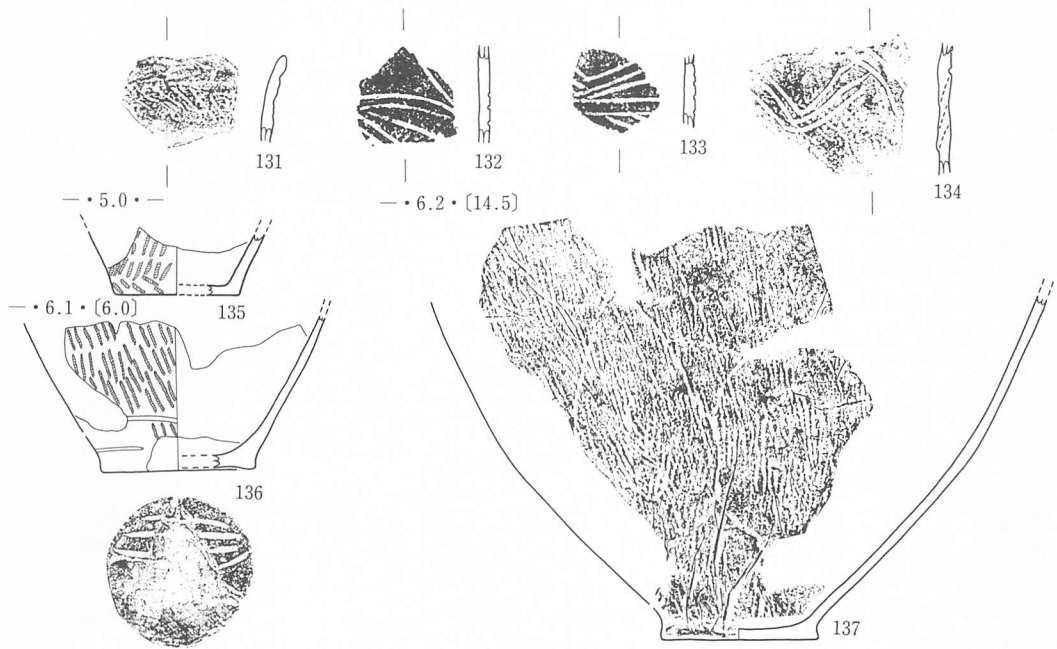


129



130

第27图 第VI群(第1、3类)土器



第28図 第VI群 (第2～3類) 土器

石器・石製品

石器・石製品は30点出土した。うち、石皿1点だけが遺構内から出土した。他は遺構外であるため、厳密には縄文・弥生時代のものだけでなく、平安時代のもも含まれていると思われるが、便宜上ここで一括して扱うことにする。

器種別にみると、石斧、石皿、磨石、砥石、凹石、石棒を含めた石製品と圧倒的に礫石器が多い。剥片石器は石匙、フレイク・スクレーパー類のみで非常に少ない。

石匙 (第29図 302～304、写真図版9)

302～304の3点が出土した。303は摘み部が、304は先端が欠損している縦形石匙である。不定形石器 (第29図 305～308、写真図版9)

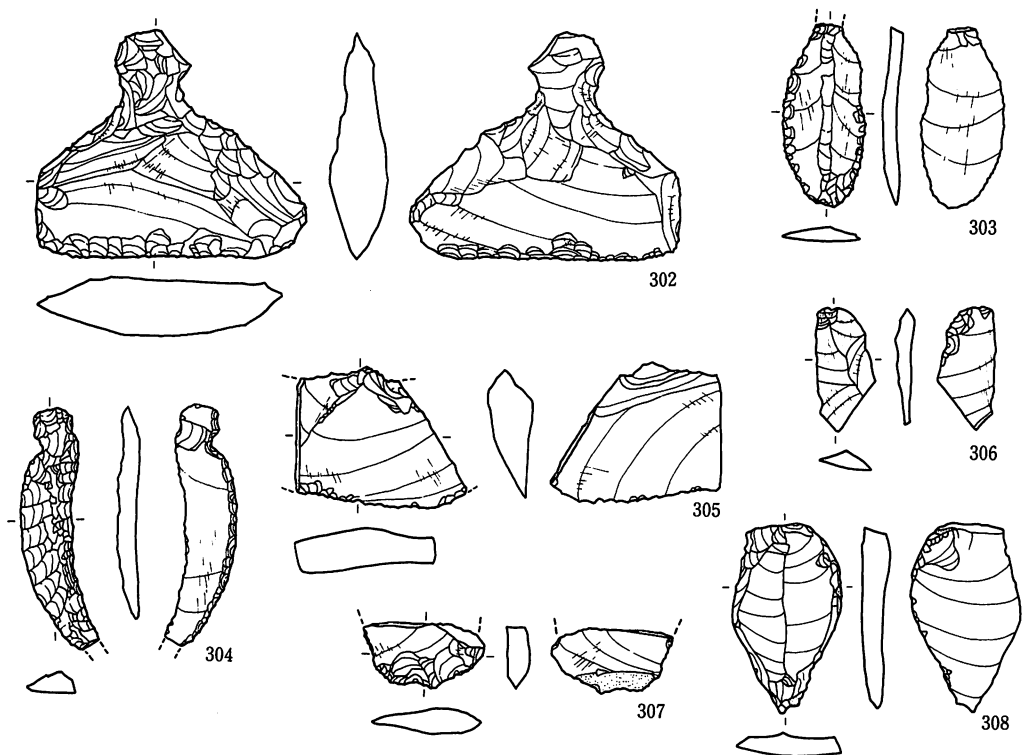
305～308が本類に属するが、うち305と306はリタッチド・フレイク、307はスクレーパー、308はフレイクである。305と306は部分的に細部調整がみられる。307は欠損品である。

石斧 (第30図 309～318、写真図版9)

309～311は打製石斧である。311は基部と思われるが、基部自体が縦に半分が欠損する。312～318は磨製石斧であるが、すべて一部が欠損している。

磨石・凹石 (第31図 319～323、写真図版10)

319～322は磨石である。前3点は偏平な石の端部を使用している。322は全面で風化が激しく明瞭な使用面は特定できない。323は浅い凹を有しており凹石と分類できるが、端部の一部には磨石として使用された可能性もある。



第29図 剥片石器

砥石 (第 32 図 324 写真図版 10)

324 の 1 点である。使用面が非常に偏平で鋭利に接することから、平安時代のものかもしれない。

石皿 (第 31～32 図 325～326、写真図版 10)

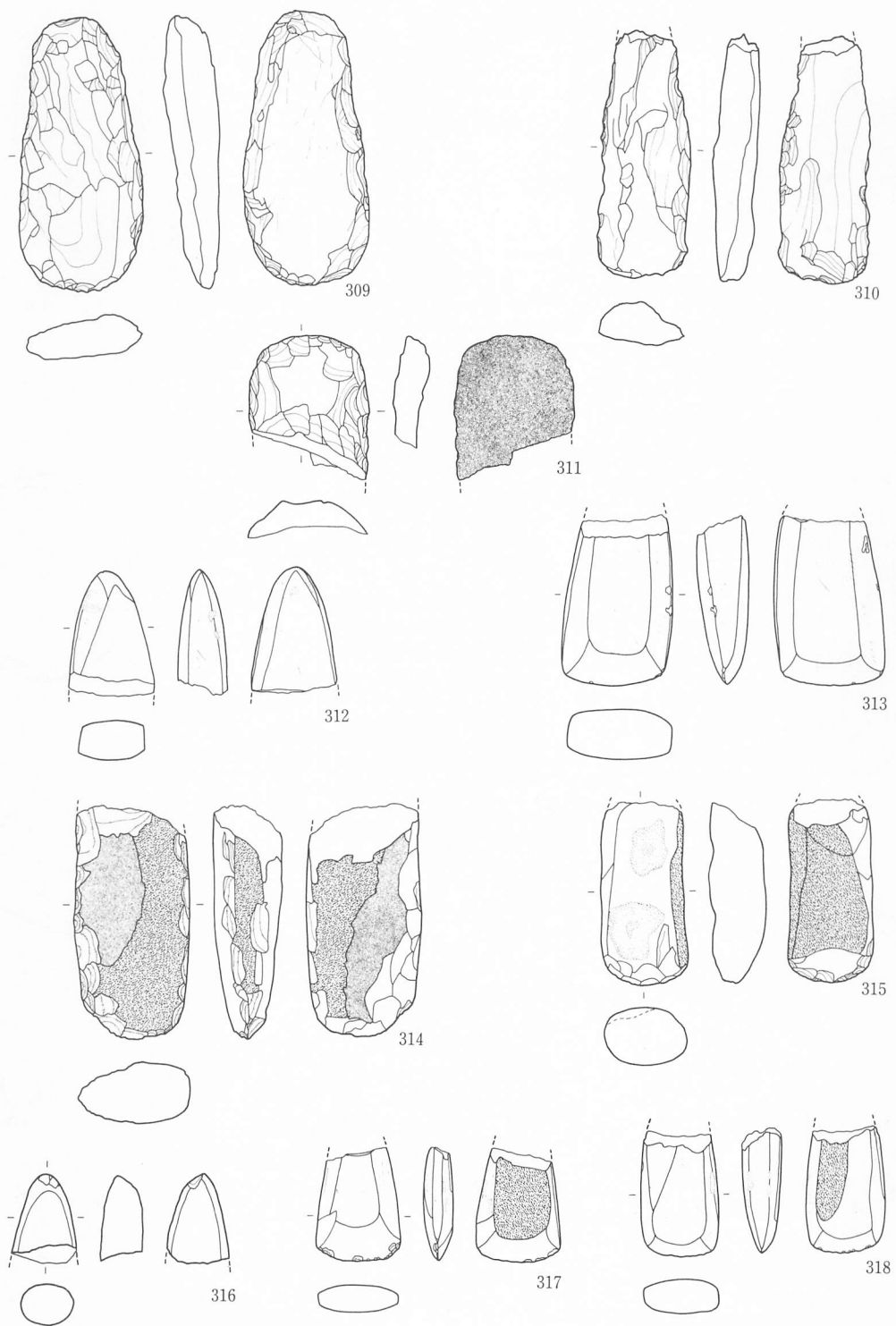
325 と 326 の 2 点であるが、いずれも欠損品である。特に后者は使用面に若干の溝状の凹が認められることから、有溝砥石の分類とすることも可能であろう。

石製品 (第 32 図 327～329、写真図版 10)

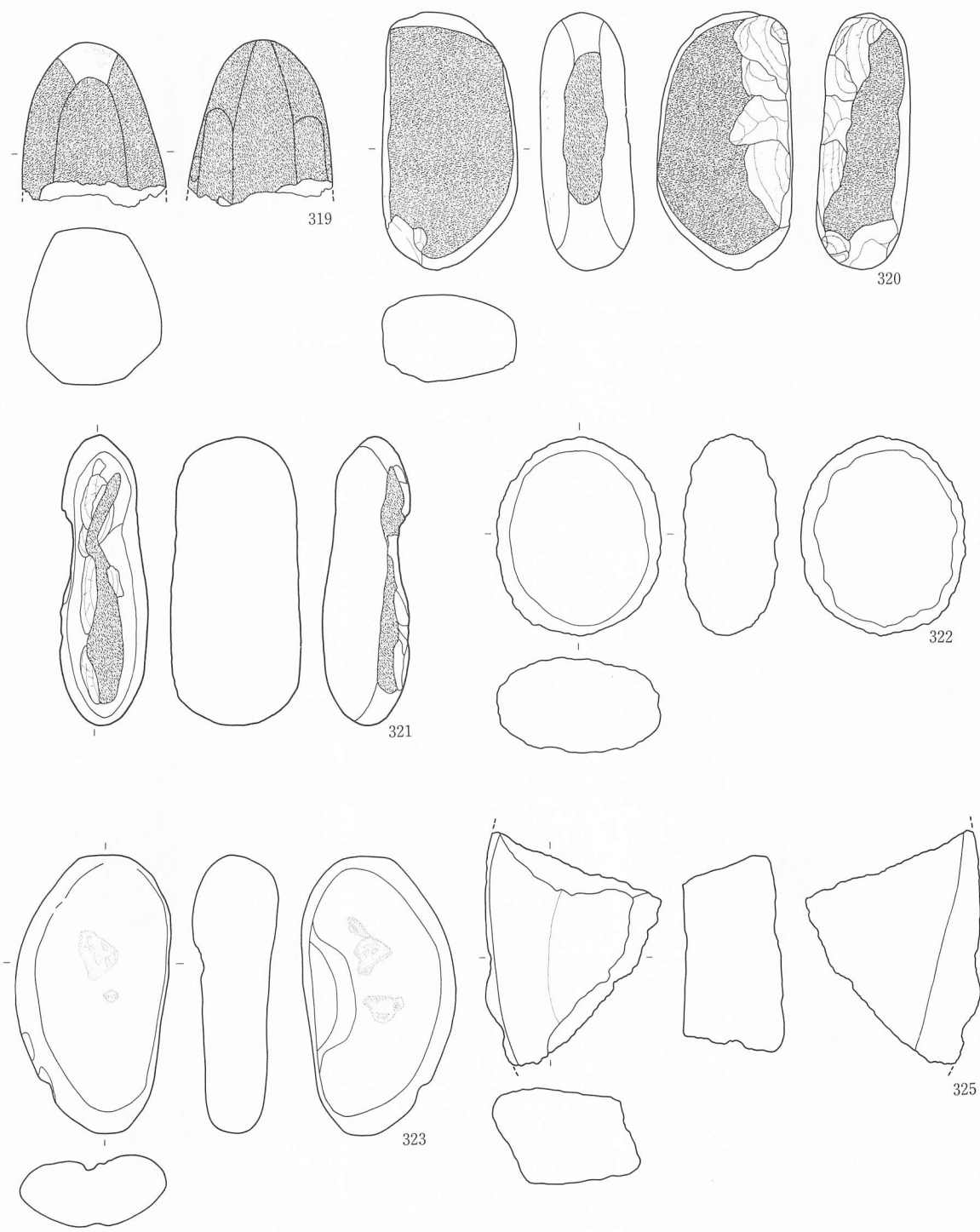
327～329 は用途不明の石製品である。327 は全面に光沢を帯びるほど研磨されている。328 は端部を両面から整形している。329 は縦に剥離した石刀状のものであるが、剥離した面から細部調整が若干加えられている。

石棒 (第 32 図 330、写真図版 10)

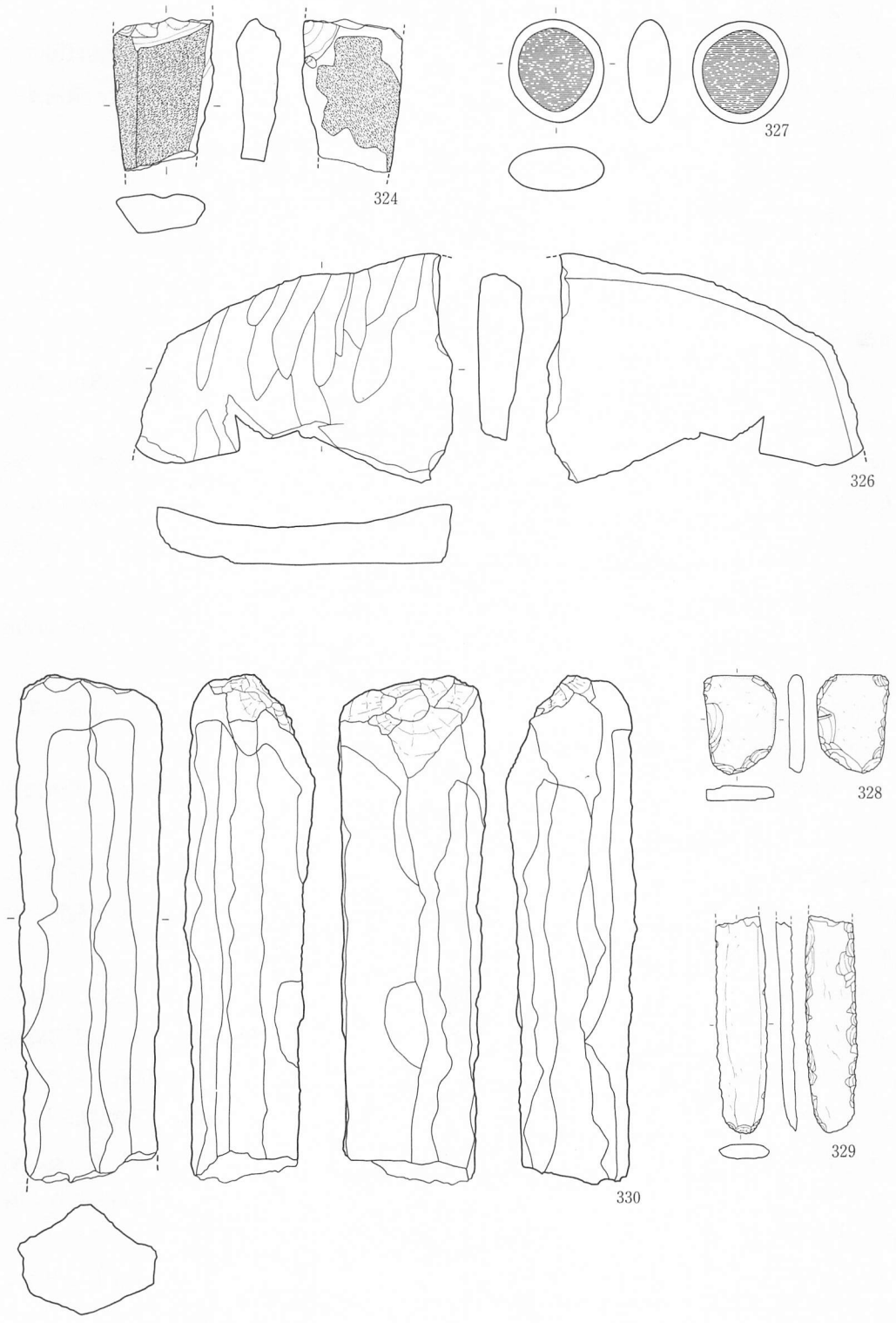
自然節理による石棒状のものである。明瞭な加工痕は見られない。



第30图 礫石器



第31图 礫石器



第32図 礫石器・石製品

[2] 古代以降

古代以降に属する遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟、焼土遺構2カ所である。遺物は竪穴住居跡から出土したものがほとんどであり、焼土遺構の周辺からあかやき土器の破片、遺構外から土師器、須恵器の小片等が若干出土している。

(1) 住居跡

検出された住居跡はX I N 7 d 住居跡1棟である。

X I N 7 d 住居跡

遺構（第33～34図、写真図版11～12）

（位置）調査区のほぼ中央に位置する。床面の標高は約287m、沢までの距離は約18m、比高は約3mである。

（埋土）上位は雨裂跡によって一部が流失している。壁際に若干の褐色土（壁の崩壊土）が混入するが、大半は黒褐色土の単層に近く、下部は暗褐色土に漸移する。軟らかく、締りのないシルトである。部分的ではあるが床に直接堆積する形で灰白色火山灰が認められ、カマド付近の床面にはより顕著に認められる。

（形状・規模）平面形はややいびつな長方形である。規模は開口部で5×4m、深さは25～30cmである。

（壁）上部は一部流失している。壁は黒色土～黒褐色土の地山で構成されている。ほぼ垂直に近い立ち上がりとなる。

（床）暗褐色土の床面で、ほぼ水平かつ平坦である。特に踏み固められた所はない。周溝はない。

（柱穴）柱穴はほぼ中央に1基検出された。円形で直径22cm、深さ26cmである。柱当りは認められなかった。この柱穴は人為的に埋められたものであり、上屋を支えるための柱跡とは考えられない。

（カマド）東隅に東向きに設置されている。角礫と土器を芯材として使用しているが、本体及び煙道部とも崩壊しており、細部の構造や規模は不詳である。燃焼部に形成された焼土の端部から壁までを本体の長さとし、カマドの両側に土坑があり、カマドの崩壊土が流れ込んでいることからこの土坑間を幅とすれば、本体の長さは1.5m、幅は90cmである。煙道部は掘り込み式で部分的に角礫を芯材に使用している。焼土は燃焼部と煙道部入口に形成されている。赤褐色で硬く、良好である。しかし、煙道部には見られない。なお、芯材として使用された土器の中にフィゴの羽口が含まれている。

（その他）住居の中央部付近には硬い焼土、住居跡の南隅には角礫が見られた。焼土は床面よ

り1~3 cmほど上位の黒褐色土の上に形成される。平面形はややいびつであるが円形で、規模は45~50 cmである。厚さは最大で7 cmである。角礫は土坑の南側の住居跡の隅に一括されている。数 cm大のほぼ同じ大きさで、加熱を受け赤化したものが多い。B4判程のビニル袋一つ半である。石材は硬砂岩である。廃棄されたものと考えられる。

カマド脇の床面から出土した甕の底に、周囲のカマドや床面で見られるような灰白色火山灰と思われるものが残存していた。この鑑定の結果は付篇に抄録した通りであるが、予想した十和田a火山灰ではなく、土壌の一つとみなされた。十和田系火山灰の可能性を指摘された火山灰は床面直上で採集したものである。

遺物 (第35~38図 138~152、331、501 写真図版13)

土器・土製品は甕、坏、羽口の3種類、ほかに台石1点、刀子1点が出土した。土器・土製品の大部分はカマドの芯材として使用されていたものである。

甕 (第35~37図 138~145、写真図版13)

a 138~141は粘土を巻き上げた後、体部を粗くヘラナデ調整した後、口縁部から体上半部にかけてロクロ整形するものである。138は口縁端部は鋭角に立ち上がり、ロクロ整形も丁寧である。内部もヘラナデ調整が施される。後の3点は口縁部の作りもなだらかとなり、体部に残るロクロ目もそれほど顕著なものではない。内部の調整はロクロ目のみである。

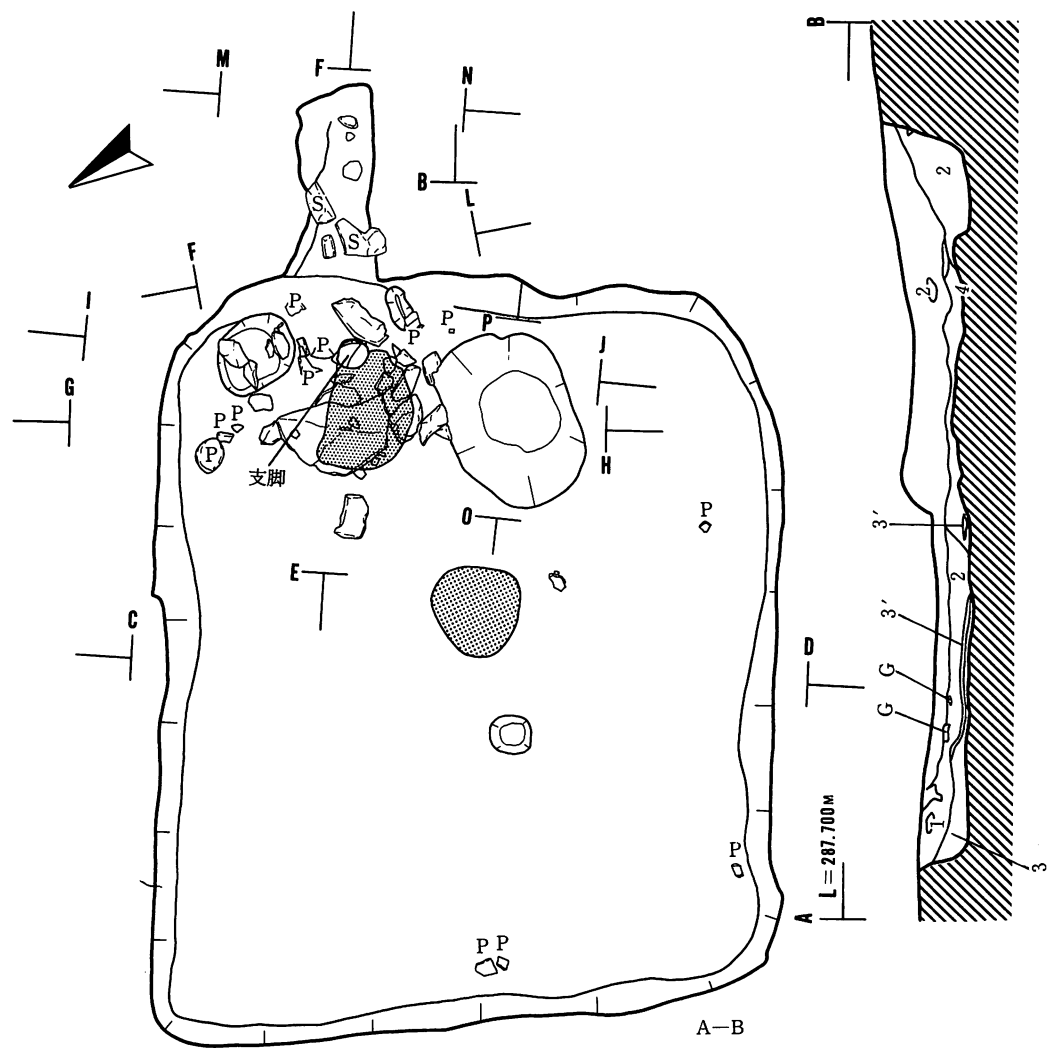
b 142~145はロクロ不使用のものである。口縁部は短く、外傾する。体部は縦位にヘラナデ調整が見られるが、それほど丁寧ではない。胎土も砂が多くざらざらしている。142の底部には圧痕が見られるが、原体は不明である。

坏 (第37図 146~150、写真図版13)

4点出土している。146は底部は回転糸切り無調整、内部は黒色処理がなされている。147は内外面ともヘラミガキは全く見られず、底部も回転糸切り無調整である。しかし、底部の外周に若干ではあるが盛り上げて高台状のものを作り出している。内面にはほとんどロクロ目が見られない。また、外面には黒斑が広がり、内部にも黒色処理が二次加熱を受けてとんだのではないと思われる薄い黒色部分が見られる。148も手法は前者と全く同様であるが、ただ、底部は糸切り痕を完全に消し、明瞭に高台を作り出しているし、内部には黒色が広がる。149は器壁のみで細部は不詳であるが、基本的には前2者と同様のものと考えられる。150は内外面黒色処理した高台付きの坏の底部である。胎土、調整等は極めて良好である。中央部を硯として二次使用している。

壺 (第37図 152 写真図版13)

152は須恵器の壺である。肩部には灰白色の自然釉がかかっている。

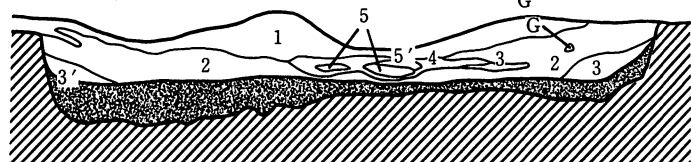


A-B

1. 黒褐色土 炭灰若干含む、植生根多い、上部雨裂により流失、5mm大の礫1%含む
2. 黒褐色土 5mm以上の礫5%、炭混入
3. 黒褐色土
- 3' 黒褐色土 3よりやや明るい
4. 暗褐色土 3に焼土粒が混ったもの、炭を含む
5. 赤褐色土 硬い焼土
- 5' 黒褐色土 4に焼土粒が混ったもの

C
L=287.700m

雨裂跡



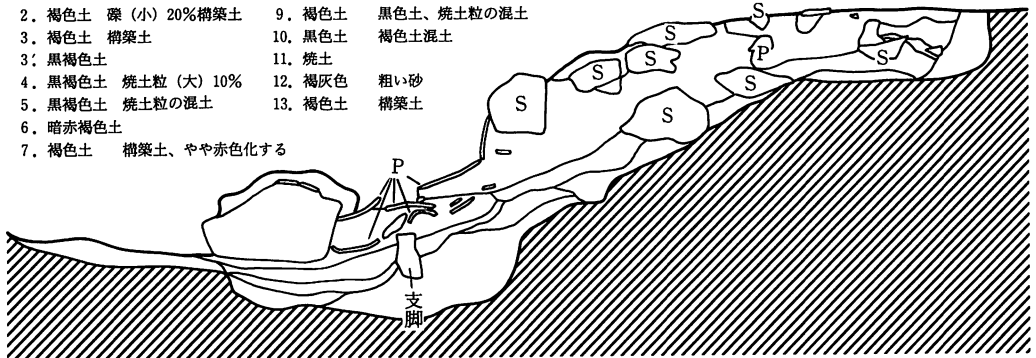
C-D

1. 黒褐色土 炭若干含む、植生根多い、上部雨裂により流失、5mm大の礫1%含む
2. 黒褐色土 5mm以上の礫5%、炭混入
3. 黒褐色土
- 3' 黒褐色土 3よりやや明るい
4. 暗褐色土 3に焼土粒が混ったもの、炭を含む
5. 赤褐色土 硬い焼土
- 5' 黒褐色土 4に焼土粒が混ったもの

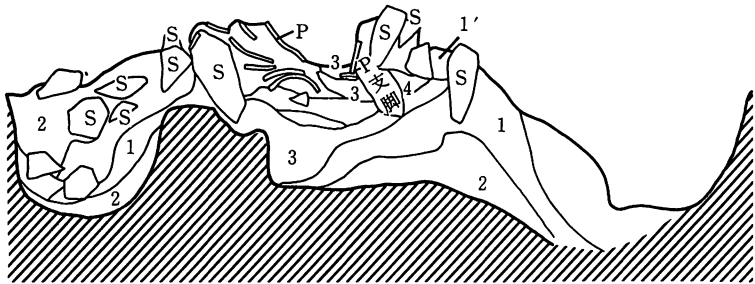
第33図 X I N 7 d住居跡

E L=287.700m
E—F

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 黒色土 | 8. 暗褐色土 焼土粒 (小)、褐色土粒の混土 |
| 2. 褐色土 礫 (小) 20% 構築土 | 9. 褐色土 黒色土、焼土粒の混土 |
| 3. 褐色土 構築土 | 10. 黒色土 褐色土混土 |
| 3': 黒褐色土 | 11. 焼土 |
| 4. 黒褐色土 焼土粒 (大) 10% | 12. 褐灰色 粗い砂 |
| 5. 黒褐色土 焼土粒の混土 | 13. 褐色土 構築土 |
| 6. 暗赤褐色土 | |
| 7. 褐色土 構築土、やや赤色化する | |



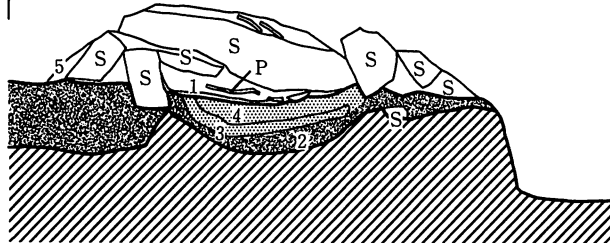
I L=287.500m
I—J



I—J

- | | |
|---------|--------------|
| 1. 黒褐色土 | 礫 2% カマドの構築土 |
| 1': 黒褐色 | 礫少々 構築土 |
| 2. 暗褐色土 | |
| 3. 褐色土 | 礫 5% カマドの構築土 |
| 3': 褐色土 | 3が少し焼けている |
| 4. 赤褐色土 | 3が焼土化したもの |

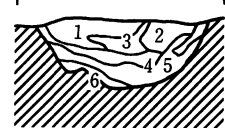
G L=287.200m
G—H



G—H

- | | |
|---------|---------|
| 1. 黒褐色土 | |
| 2. 黒色土 | 褐色土粒を含む |
| 3. 褐灰 | 焼土化したもの |
| 4. 構築土 | 焼土化したもの |
| 5. 黒褐色土 | 褐色土の混土 |

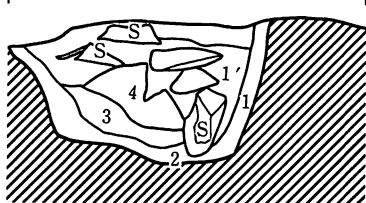
O L=287.200m
O—P



O—P

- | | |
|---------|---------------------|
| 1. 黒褐色土 | 全体的に黄褐色土を含む |
| 2. 黒色土 | 2mm大の小礫を含む |
| 3. 黒褐色土 | 2層がやや混じる |
| 4. 黒色土 | 場所により3mm大の礫を、炭化物を含む |
| 5. 黒褐色土 | 炭化物 1mm大の礫を含む |
| 6. 褐色土 | 5mm大の炭化物、壁の崩落土を含む |

K L=287.600m
K—L

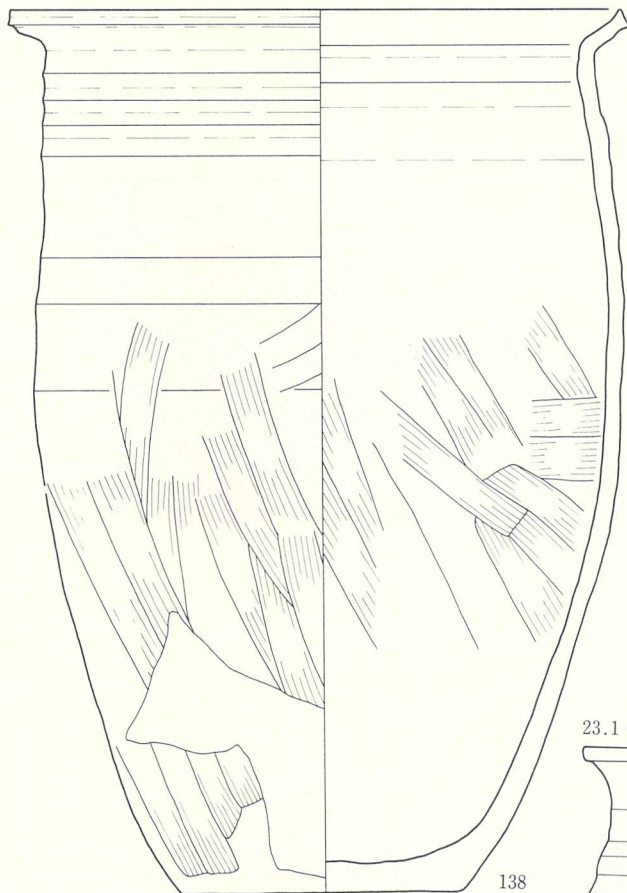


K—L

- | | |
|----------|------|
| 1. 黒褐色土 | 礫を含む |
| 1': 黒褐色土 | |
| 2. 黒色土 | 黒褐色土 |
| 3. 暗褐色土 | 焼土 |
| 4. 褐色土 | 構築土 |

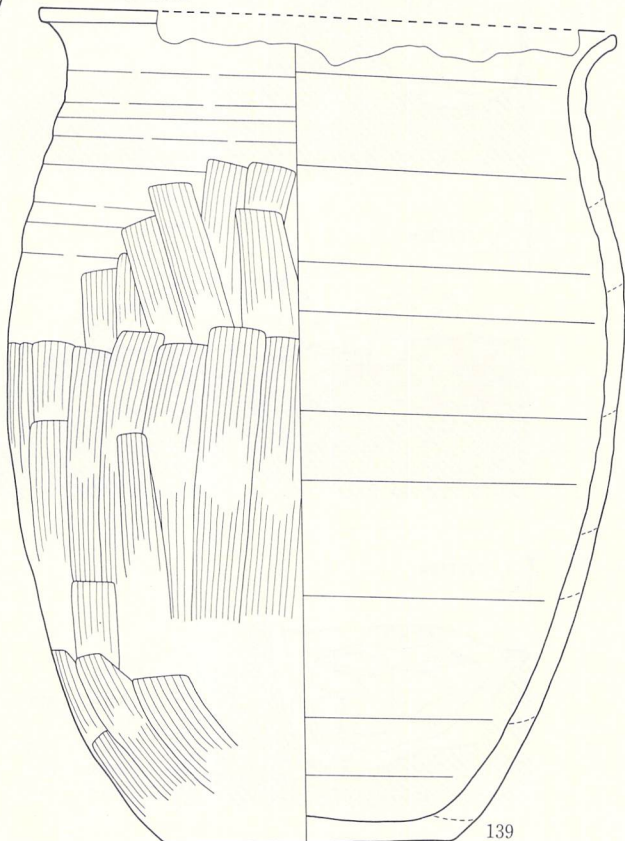
第34図 X I N 7 d 住居跡

(24.4) • (11.3) • 35.1



138

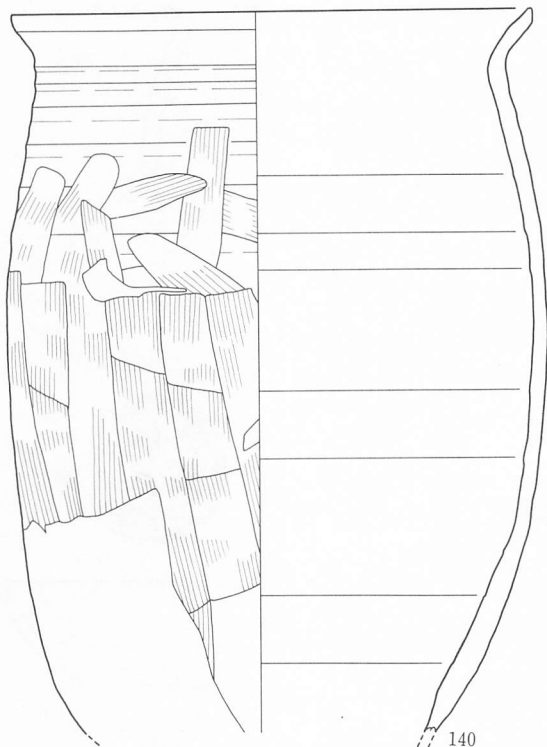
23.1 • 11.4 • 32.2



139

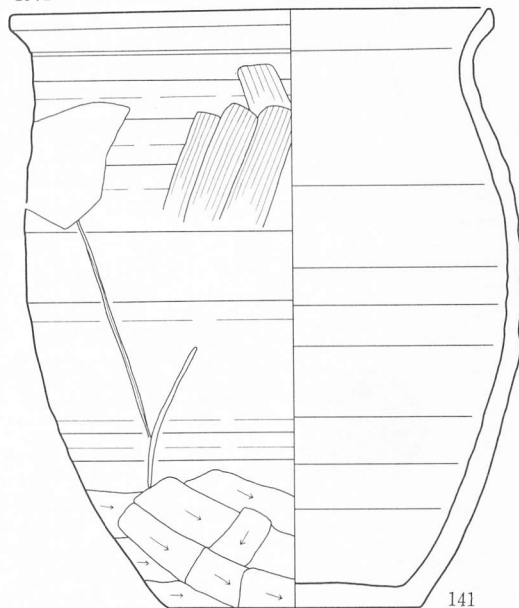
第35图 X I N 7 d 住居跡遺物

20.8 • — • (28.9)



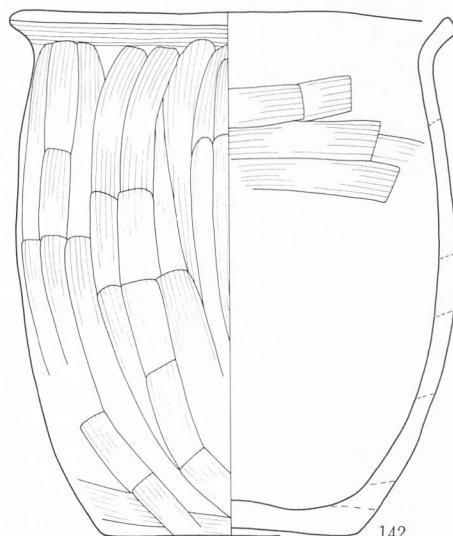
140

19.1 • 10.0 • 23.8



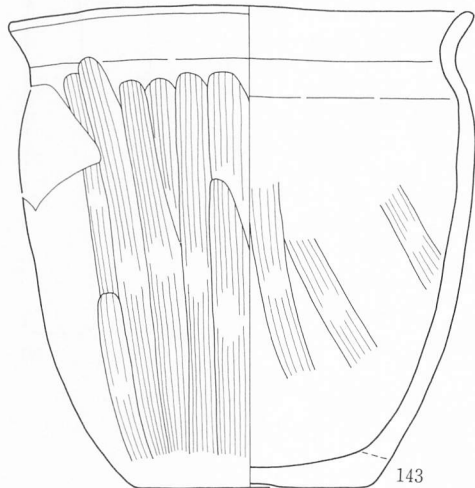
141

17.2 • 10.1 • 21.0



142

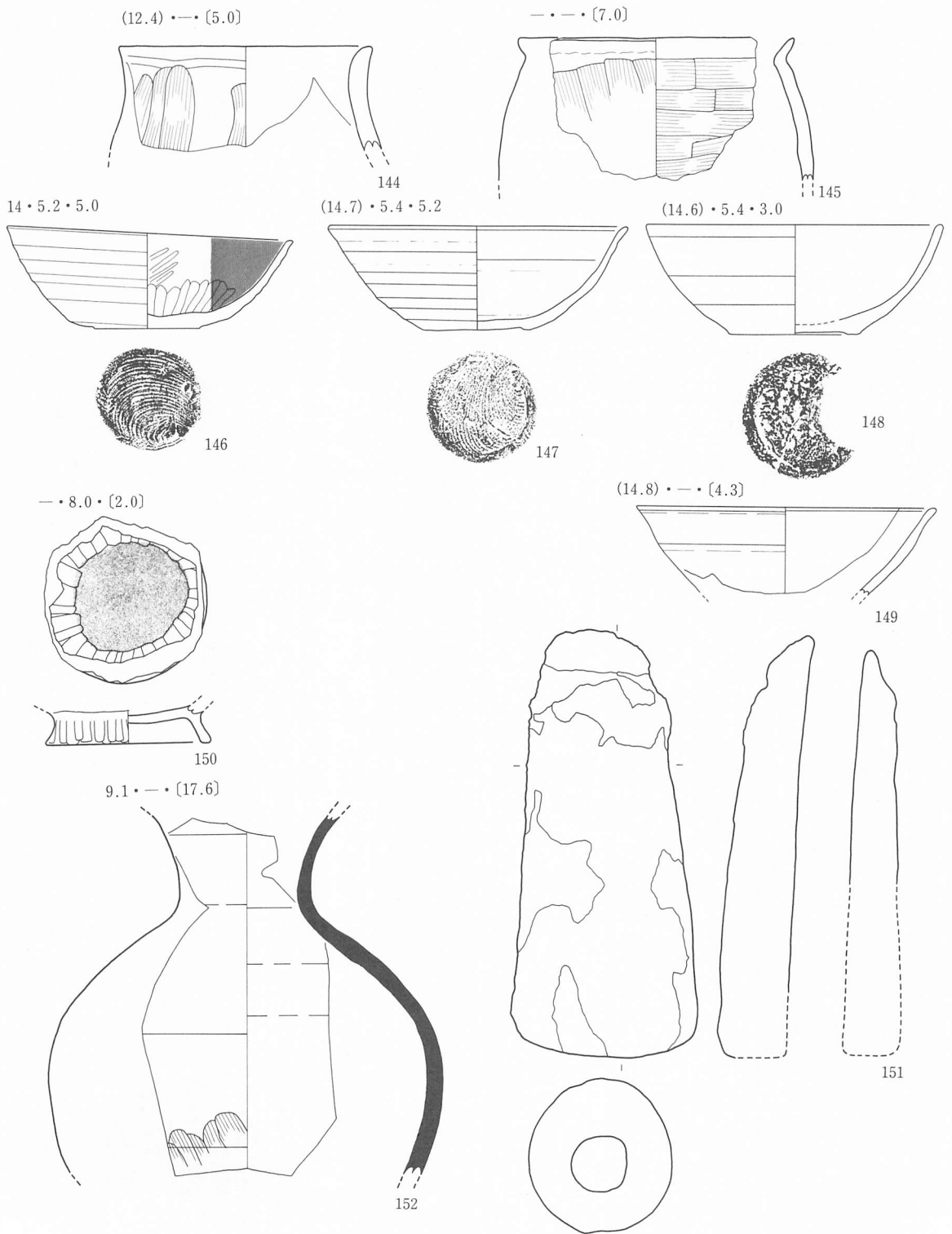
18.6 • 9.5 • 19.4



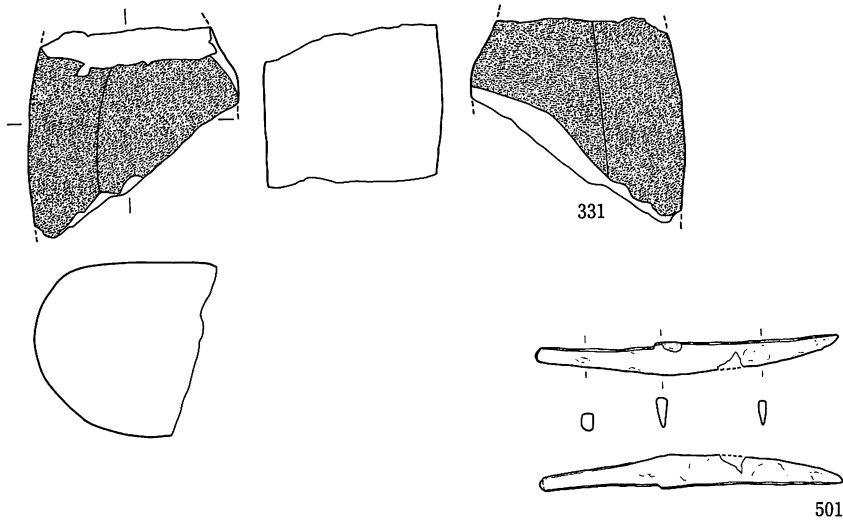
143



第36图 X I N 7 d 住居跡遺物



第37图 X I N 7 d 住居跡遺物



第38図 X I N 7 d 住居跡遺物

羽口 (第 37 図 151 写真図版 10)

151 はカマドの支脚として使用されていたものである。先端部から 2 cm 程は黒色のガラス状の溶解物が付着している。また、先端部から数 cm までは炉内に挿入されていたものである。

台石 (第 38 図 331)

カマド煙道部内より小片となって出土したもので、図示したのはそれらが接合した状態である。他には破片はなく明瞭な器種選定は困難である。表面は研磨されており、石皿として使用されたかもしれないが、ここでは一応台石としておきたい。

刀子 (第 38 図 501 写真図版 13)

刀子は東側床面から出土したもので、出土時点ではかなり腐食は進んではいたがまだ完形の状態であった。平造り、棟区を持つが明瞭な刃区は見られない。全長 12.1 cm、刀身部の長さ 7.2 cm、幅 9 mm、厚さ 4 mm、重さ (保存処理後) 8.5 g である。棟はわずかに反るがほぼまっすぐである。この刀子の成分分析結果は別添資料の通りであり、砂鉄使用の有無については不明である。

所属時期

これらの遺物の状況から相原編年の第IX群期、『岩手の土器』の第III-2群期に相当し、9世紀末～10世紀に位置づけられる。

(2) 焼土遺構

焼土遺構は2カ所である。これらは隣接しており同時存在と考えられるものである。

X I M 1 h 焼土

遺構 (第39図)

(位置) 調査区の北西に位置する。現況は道路として使用されていたところであり、2m程で沢に落ち込む変換点に達する。沢との比高は約2mである。

(検出状況) 表土直下約25cmで検出する。基本層序I層の中ごろから検出される。本遺構の周辺及び遺構内から回転糸切り無調整の底部を持つ坏の小片が数点発見された。

(形状・規模) 平面形はややいびつな台形状を呈する。規模は最大径75cm、厚さ3cmである。断面形は薄いレンズ状を呈するが特に強く焼けているところはない。

(その他) 周囲に掘り込等住居跡を窺わせるものは見られない。

遺物 (第39図153~154)

本遺構に伴う遺物は153と154の2点である。前者はロクロ目のみ、後者は回転糸切り痕とともに無調整である。小片であり、しかも二次焼成を受けていることから不詳な点が多いが、土師器の坏としておきたい。

所属時期

出土遺物から、X I N 7 d 住居跡とほぼ同時期が想定される。平安時代前半のものである。

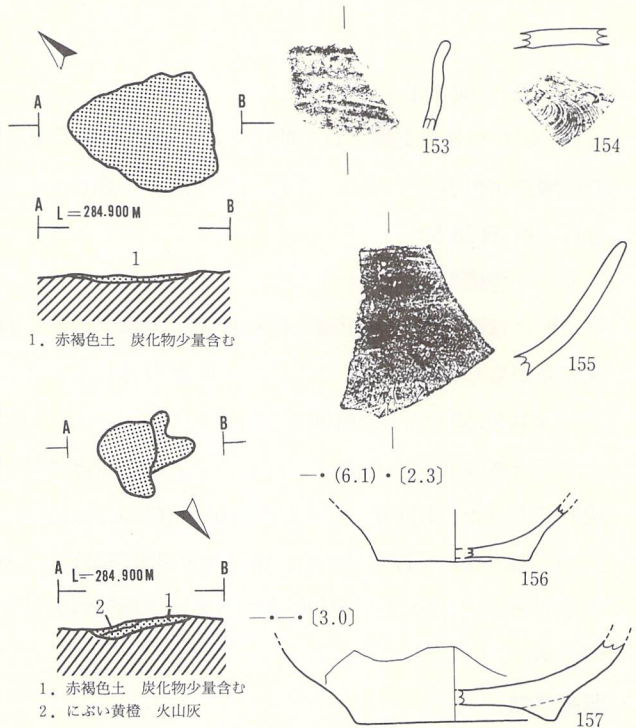
X I M 1 h-2 焼土

遺構 (第39図)

(位置) X I M 1 h 焼土の南東1.5mに位置する。

(検出状況) X I M 1 h 焼土と同一面で検出する。X I M 1 h 焼土と同時存在と考えられる。

(形状・規模) 平面形は円形と思われるが漸移層や炭化物の集中する部分も含めると不整形となる。規模は最大径55cmであるが、厚さ3cmほどの良好な焼土部分に限定すると、30cmである。断面形は薄いレンズ状を呈するが



第39図 X I M 1 h 焼土遺構
X I M 1 h-2 焼土遺構・遺物

特に強く焼けているところはない。

遺物 (第 39 図 155~157)

確実に本遺構に伴うものとしての遺物ではないが、X I M 1 h 焼土出土遺物及び周辺から出土した 155~157 も本遺構と強い関連があると思われる。いずれも土師器の坏である。

(3) 遺構外出土遺物

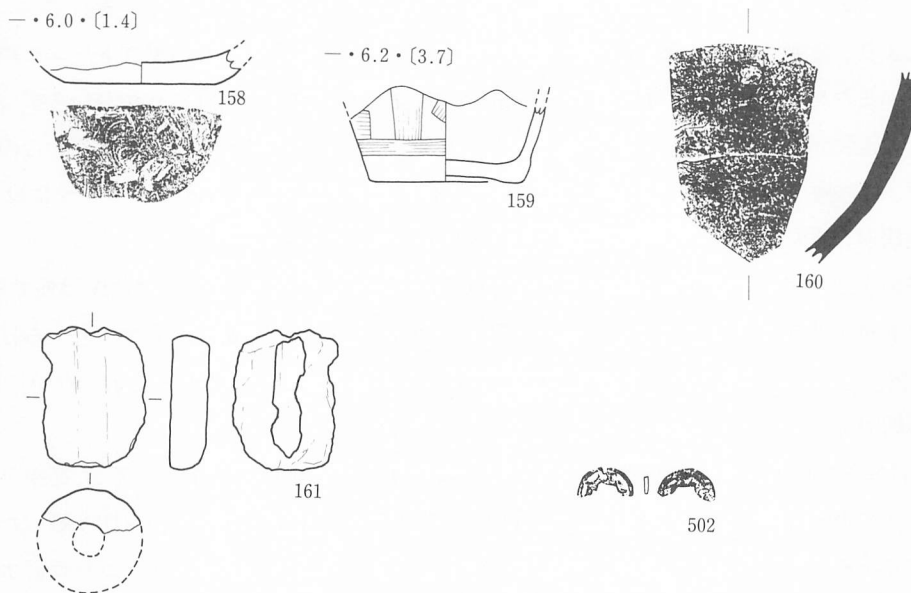
古代及びそれ以降の遺構外出土遺物は現代の遺物を除くと極めて少ない。数点の土師器・須恵器それに寛永通宝 1 点である。

土師器・須恵器 (第 40 図 158~161、写真図版 13)

158 は坏の底部である。回転糸切り後、粗く調整している。159 は甕の底部である。160 は須恵器の体部下半である。出土地点からみれば X I N 7 d 住居跡から出土した 152 と同一個体かもしれない。161 はファイゴの羽口である。152 の羽口とは異個体のものであり、161 のものは非常に小さい。通風孔の径は推定 13 mm である。

古銭 (第 40 図 502)

寛永通宝(502)1 点が出土した。半分以上が欠損している。「寛」と「寶」が判読できる。



第40図 遺構外出土遺物

4 まとめ

3区の記事を終わるにあたって次の3点について触れ、まとめにかきたい。

・遺構と遺物の関係について

出土した縄文・弥生土器は時期区分すれば縄文後期前葉から中葉にかけての土器、従来の土器形式でいえば後期は十腰内Ⅰ～Ⅲ式、加曾利B式等に比定される土器、晩期は前葉～中葉の大洞BC式～大洞CⅠ式、弥生は後期の常盤式等にほぼ限定されるようなまとまりをもって出土している。しかし、住居跡として確認できたものは縄文後期中葉（あるいは前葉末）の1棟だけである。そこで、各小グリッド毎の出土量を1kg単位で集計してみたのが第40図である。これで見ると、隣接するブロックを考慮に入れると土器が集中する箇所がXⅠN8d区が最大で、ついでXⅠM5j区を中心とする所が多く、以下XⅠN5b区、XⅠM4g区、XⅡN1b区に見られる。しかし、最大のXⅠN8d区はXⅠN7d住居跡の土師器が大半を占めるためここでは除外する。

XⅠM5j区付近は非常に土器が集中しているが、時期的には後期前葉の土器が多い。

XⅠN5b区付近は晩期前葉と中葉の土器、

XⅠM4g区付近は後期初頭～前葉の土器、

XⅡN1b区付近は後期前葉の土器が比較的多い。

そして、この土器の集中区には焼土遺構（廃棄されたものも含む）が伴っている。

もとより、本調査区の一部は相当人為的改変をなされた所であり、かつ試掘トレンチが数本入っているため、遺物の原位置論的手法は厳密には妥当性を欠く。それにもかかわらず、時期の異なる遺物が多少混入しているとはいえ上記のような大まかな傾向が把握できる。このことにより、住居跡として確認できた当該時期の遺構は1棟であるが、上記の4ブロックには1～2棟の住居が存在していた可能性を指摘できると思われる。

同様の手法を用いて土師期の遺構と遺物を見れば、確認されたXⅠN7d住居跡以外では、XⅠM1h焼土遺構付近以外にはその痕跡を見ることはできない。しかし、同所付近からは甕は1点の出土もなく、遺構としても焼土以外には何もなく住居跡を暗示させるものはなかった。

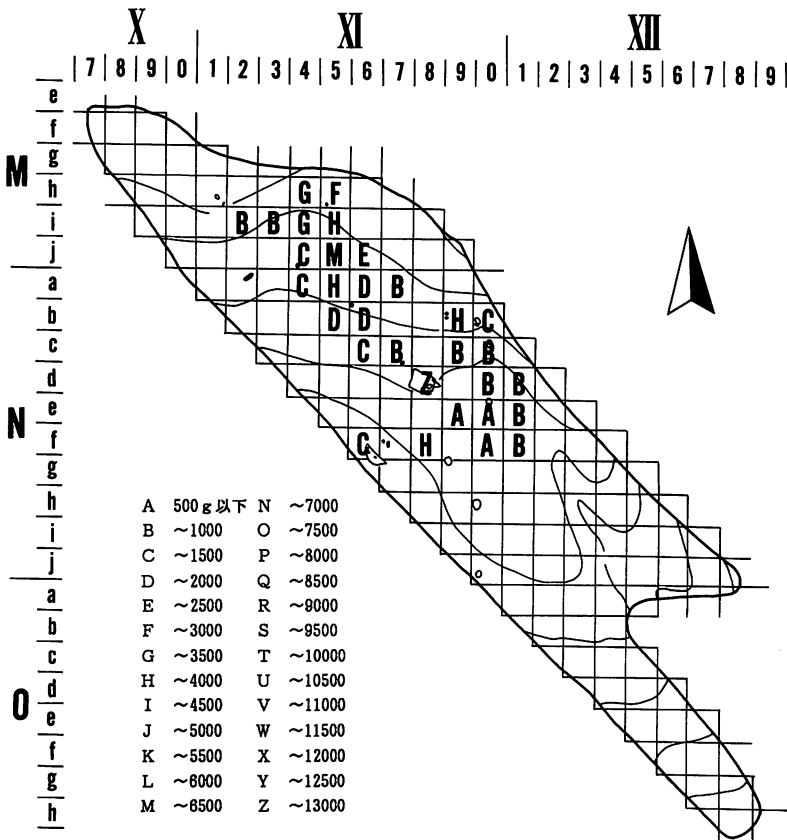
・土師器の坏について

146は底部は回転糸切り無調整で、内面をヘラミガキした後黒色処理をした坏で、従来から土師器として扱われていたものである。それに対して、147は回転糸切りで底部を切り離した後高台を作り出そうとしたものである。内面はヘラミガキ等は全く見られないが、ロクロ目すらほとんど見られないように滑めらかとなっている。それはあたかも布のようなもので撫で上げたとてもいいたいような様子である。内面の底部も凹凸がある。148は外面の底部は前者と同様であるが、高台の作り出しは一層顕著であり、粗雑な再調整で全く糸切り痕を消している。内面

は剥落もあり明瞭さを欠くが、147よりは研磨されているように見える。ただし、明瞭な研磨痕は見られない。これら二つの土器は黒色処理されたものかもしれない。器形、胎土、焼成等は後続する所謂あかやき土器に似る。土師器からあかやき土器に変化する過渡的形態なものであろうか。

・古代の時期分類について

本巻で取り扱う古代の時期はすべて平安時代である。当該時期の細分に当たっては3区で見たとおり、相原氏が提唱した編年と高橋信雄氏等がまとめられた『岩手の土器』によって見ていくことにする。相原編年の第VIII群期、『岩手の土器』第III-1群期を第VIII-1期(9世紀前半)とする。同様に、相原編年第IX群期、『岩手の土器』第III-2群期を第VIII-2期(9世紀後半)として取り扱うこととしたい。したがって、X I N 7d住居跡は第VIII-2期に分類される。



第41図 3区土器出土量分布図

第2表 3区土器・土製品 観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
1	XIN6f住	深鉢	(40.0)		[30.0]	櫛歯状工具による流水文	施文は雑	IV-2	8	6
2	XIN6f住	深鉢		5.6	[10.0]	単節 (LR)	炭化物付着	IV-2	〃	〃
3	XIN8f杭	壺	13.3		[13.2]	磨消縄文、単節 (LR)	残滓付着	IV-2	11	6
4	XIN8f杭	浅鉢				磨消縄文、単節 (LR)		IV-2	〃	〃
5	XIN8f杭	深鉢	(39.6)		[30.1]	単節 (LR)	炭化物付着	IV-2	〃	〃
6	XIN8f杭	深鉢				単節 (LR)	炭化物付着	IV-2	〃	〃
7	XIN8b焼	深鉢	16.7	10.6	24.6	隆帯、沈線、刺突	一部焼土内から出土	IV-1	15	〃
8	XIN9b埋設	深鉢			[18.6]	単節 (LR)	炭化物付着	IV~V	17	〃
9	XIN4a	深鉢				沈線文、単節 (LR)	炭化物付着	IV-1	18	7
10	XIM4i	深鉢				磨消縄文、竹管刺突、隆起線文		IV-1	〃	〃
11	XIN6c	破片				沈線文	残滓付着	IV-1	〃	7
12	XIM5f	破片				沈線文	残滓付着	IV-1	〃	〃
13	XIM5i	深鉢				沈線文、突起		IV-1	〃	7
14	XIN5b	破片				沈線文、刺突 (半截竹管)、突起	15、16 と同一	IV-1	〃	〃
15	XIN5a	破片				沈線文、刺突 (半截竹管)	残滓付着	IV-1	〃	〃
16	XIN5a	破片				沈線文、刺突 (半截竹管)	残滓付着	IV-1	〃	〃
17	XIN9b	破片				沈線文、刻み		IV-1	〃	〃
18	XIM5h	深鉢				磨消縄文、刺突 (竹管)	残滓付着、19、20 と同一	IV-1	〃	〃
19	XIM5j	破片				刺突 (竹管)		IV-1	〃	〃
20	XIM6j	深鉢				磨消縄文、刺突 (竹管)	残滓付着	IV-1	〃	〃
21	粗	破片				櫛歯状条痕文	22、23 と同一	IV-1	〃	〃
22	XIM	破片				櫛歯状条痕文		IV-1	〃	〃
23	XIN5b	破片				櫛歯状条痕文		IV-1	〃	〃
24	XIM	破片				磨消縄文、単節 (LR)	25、26 と同一	IV-1	19	7
25	XIM	壺				磨消縄文		IV-1	〃	〃
26	XIM4i	破片				磨消縄文、単節 (LR)		IV-1	〃	〃
27	XIM4i	壺				磨消縄文		IV-1	〃	〃
28	粗	破片				磨消縄文		IV-1	〃	〃
29	XIN4c	破片				磨消縄文		IV-1	〃	〃
30	XIN	深鉢				磨消縄文		IV-1	〃	〃
31	XIO	破片				磨消縄文		IV-1	〃	〃
32	XIN8b	破片				沈線文		IV-2	〃	〃
33	XIN9b	破片				磨消縄文		IV-2	〃	〃
34	XIM5h	破片				沈線文		IV-2	〃	〃
35	XIM4h	壺 (?)				磨消縄文、沈線文	化粧土塗布	IV-2	〃	〃
36	XIM5h	破片				磨消縄文、沈線文		IV-2	〃	〃
37	盛土	破片				磨消縄文、沈線文		IV-2	〃	7
38	XIM4h	破片				磨消縄文、単節 (RL)		IV-2	〃	〃
39	XIM5j	破片				磨消縄文、沈線文		IV-2	〃	〃
40	盛土	破片				磨消縄文、沈線文		IV-2	〃	〃

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
41	X I M	破片				磨消縄文、鐮状突起		IV-2	19	7
42	X I M 4 i	破片				磨消縄文、鐮状突起	40 と同一	IV-2	20	〃
43	X I M 5 j	袖珍土器	5.0		[3.4]	沈線文		IV-2	〃	〃
44	X I M 5 j	袖珍土器				沈線文		IV-2	〃	〃
45	X I M 5 j	袖珍土器				沈線文		IV-2	〃	〃
46	X I M 3 i	注口土器(?)				沈線文	黒色処理	IV-2	〃	〃
47	X I M 3 i	注口土器(?)				沈線文	46 と同一	IV-2	〃	〃
48	X I M 9 c	壺	(13.8)		[5.0]	磨消縄文		IV-2	〃	〃
49	X I M 6 c	深鉢				磨消縄文	中期末葉 (?)	IV-2	〃	〃
50	X I M 5 i	深鉢				沈線文		IV-2	〃	〃
51	X I M 5 j	深鉢				沈線文		IV-2	〃	〃
52	X I M 5 j	破片				磨消縄文、単節 (L R)		IV-2	〃	〃
53	X I M 5 j	片口土器				磨消縄文、沈線文		IV-2	19	
54	X I M 5 i	深鉢				磨消縄文、突起、単節 (L R)		IV-2	20	
55	X I M 5 j	破片				磨消縄文、単節 (L R)		IV-2	〃	7
56	X I M 4 h	壺				磨消縄文、入組文、単節 (R L)		IV-2	〃	〃
57	X I M 5 h	深鉢				磨消縄文、単線 (R L)		IV-2	〃	〃
58	X I M 5 h	破片				磨消縄文、入組文、単節 (R L)		IV-2	〃	
59	X I M 5 j	深鉢				磨消縄文、単節 (L R)		IV-2	〃	
60	X I M 6 j	破片				沈線文、刺突(竹管)、単節 (R L)		IV-2	〃	7
61	X I M 4 h	深鉢				沈線文、刺突(竹管)、単節 (R L)	60 と同一	IV-2	〃	〃
62	X I M	破片				磨消縄文、刺突(半截竹管)		IV-2	〃	〃
63	X I N 9 b	深鉢				刻み		IV-2	〃	〃
64	X I M 4 h	深鉢				沈線文		IV-2	21	〃
65	X I N 9 a	破片				磨消縄文、刻み		IV-2	〃	
66	X I M 5 i	深鉢				磨消縄文二股突起、単節 (L R)		IV-2	〃	7
67	X I N 0 C	破片				入組文	炭化物付着	VI-2	〃	〃
68	X I N 7 a	破片					入組文、刻み	VI-1	〃	〃
69	X I N 6 b	破片				入組文、刻み		VI-1	〃	〃
70	X I M 6 j	破片					入組文、刻み	VI-1	〃	〃
71	X I M	破片				磨消縄文、刻み	赤彩 (?)	VI-1	〃	〃
72	X I N 6 a	破片				磨消縄文(入組文)		VI-1	〃	〃
73	X I M 6 a	注口土器			[5.0]	磨消縄文(入組)、刻み		VI-1	〃	〃
74	X I M 5 i	深鉢			[10.5]	沈線文、刻み、突起、単節 (L R)	炭化物付着	VI-2	〃	〃
75	X I N 5 a	壺				隆沈線文		VI-2	〃	
76	X I M 6 a	鉢				沈線文、刻み、山形突起		VI-2	〃	7
77	X I N 5 b	破片				沈線文、刻み		VI-2	〃	〃
78	X I M	破片				沈線、刻み、単節 (R L)	残滓付着	VI-2	〃	〃
79	X I M 5 i	破片				沈線文		VI-2	〃	〃
80	粗	破片				沈線文		VI-2	〃	〃
81	X I N 9 b	深鉢				沈線文、B状突起、単節 (L R)		VI-2	〃	〃

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
82	X I N 6 d	深鉢			[6.1]	口縁部無文帯、山形突起		VII	22	
83	X I M 5 j	破片			[6.0]	口縁文無文帯		VII	8	8
84	X I N 6 b	深鉢				単節 (L R)		VII	8	8
85	X I M 5 j	破片				頸部無文帯、原体圧痕		VII	8	8
86	X I M 5 j	破片				頸部無文帯		VII	8	8
87	X I M	深鉢				原体圧痕、単節 (L R)	炭化物付着	VII	8	8
88	X I N 5 a	深鉢	(32.0)		[22.0]	単節 (R L)	化粧土塗布	VII	8	8
89	X I M	深鉢	(24.2)		[22.2]	単節 (L R)	炭化物付着、調整は雑	VII	23	8
90	X I M 5 j	深鉢	(33.5)		[20.0]	単節 (L R)		VII	8	8
91	X I M 5 h	深鉢			[17.0]	単節 (L R)	円筒土器 (?)	VII	22	
92	X I M 5 h	深鉢			[23.0]	単節 (L R)	炭化物付着	VII	24	
93	X I N 6 a	破片				網目状捺糸文	炭化物付着	VII	23	8
94	X I M 5 i	深鉢	4.3		[6.4]	無文、平底	黒色処理	VII	24	8
95	X I N	袖珍土器(?)	3.6		[1.6]	上げ底		VII	8	
96	X I M 2 h	深鉢	4.5		[7.6]	単節 (L R)		VII	8	8
97	X I M 4 h	深鉢	7.1		[5.6]	上げ底		VII	8	
98	X I M 5 a	破片				上げ底		VII	8	8
99	X I M 5 a	深鉢	5.4		[5.5]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	8
100	X I M 4 i	深鉢	12.5		[4.2]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
101	X I I N 1 d	深鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
102	X I N 7 a	深鉢	(5.6)		[5.4]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	8
103	X I M 6 j	深鉢	(12.0)		[3.9]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	25	
104	X I N 6 j	鉢	4.4		[1.2]	網代痕、再調整		VII	8	
105	X I M 6 a	鉢	(5.6)		[1.3]	網代痕、再調整		VII	8	
106	X I M	深鉢	5.8		[1.5]	網代痕、再調整		VII	8	
107	X I M 5 h	鉢	5.4		[1.9]	網代痕、再調整		VII	8	
108	X I M 5 g	鉢	(11.8)		[1.1]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
109	X I M 2 h	深鉢	(4.0)		[1.5]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
110	X I M 4 i	深鉢	8.8		[1.6]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)	三枚重ね	VII	8	
111	X I M 5 i	深鉢	(8.6)		[3.4]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
112	X I M 4 j	鉢	(12.7)			網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
113	X I M 5 i	深鉢	(9.0)		[1.4]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
114	X I I O	深鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
115	X I N 5 b	深鉢	(8.7)		[15.7]	網代痕、再調整	内面はじけ多い	VII	8	
116	X I N 5 a	深鉢	10.0		[9.0]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	26	
117	粗	鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
118	X I M 5 h	深鉢				網代痕、再調整		VII	8	
119	粗	鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
120	X I M	鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
121	X I M 8 i	鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	
122	X I N 9 c	深鉢				網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VII	8	

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
123	X I M 5 j	深鉢		(11.0)	[3.2]	網代痕 (一つ越え一つ潜り)		VIII	26	
124	X I M 5 i	深鉢		12.3	[13.0]	単節 (LR)、木葉痕、再調整		VIII	〃	
125	X I M 5 i	深鉢				笹葉痕		VIII	〃	
126	X I M 4 j	鉢		9.5	[2.1]	圧痕		VIII	〃	
127	X I I N 2 f	円盤状土製品				沈線		VIII	〃	8
128	X I M 5 j	注口土器				無文		VIII	〃	〃
129	X I N 5 b	甕	(32.0)		[30.0]	交互刺突文、連弧文、捺糸文		IV-3	27	〃
130	X I M 6 j	甕				捺糸文 (RL)	残滓・炭化物付着	IV-3	〃	〃
131	X I I O	破片				捺糸文		IV-3	28	〃
132	X I M 4 a	破片				沈線文		IV-3	〃	〃
133	X I M 4 a	破片				沈線文	157 と同じ	IV-3	〃	〃
134	X I N	破片				沈線文(山形文)		IV-3	〃	〃
135	X I M 5 i	甕		(5.0)		捺糸文 (RL)		IV-3	〃	
136	X I N 5 a	甕		(6.1)	[6.0]	捺糸文、沈線文		IV-3	〃	8
137	X I M	甕		(6.2)	[14.5]	捺糸文 (RL)		IV-3	〃	〃
138	X I N 7 d 住	甕	24.4	11.3	35.1	上一ロクロ整形、下へラケズリ		VII-2	35	13
139	X I N 7 d 住	甕	23.1	11.4	32.2	上一ロクロ整形、下へラケズリ	炭化物付着	VII-2	〃	〃
140	X I N 7 d 住	甕	20.8		[28.9]	上一ロクロ整形、下へラケズリ	炭化物付着	VII-2	36	〃
141	X I N 7 d 住	甕	19.1	10.0	23.8	上一ロクロ整形、下へラケズリ	炭化物付着	VII-2	〃	〃
142	X I N 7 d 住	甕	17.2	10.1	21.0	へラナデ、ロクロ不使用	炭化物付着、調整は雑	VII-2	〃	〃
143	X I N 7 d 住	甕	18.6	9.5	19.4	へラナデ、ロクロ不使用	器壁剝落多い	VII-2	〃	〃
144	X I N 7 d 住	甕	(12.4)			へラナデ、ロクロ不使用		VII-2	37	〃
145	X I N 7 d 住	甕	(13.4)		[7.0]	へラナデ、ロクロ不使用		VII-2	〃	〃
146	X I N 7 d 住	坏	14.0	5.2	5.0	回転糸切り無調整	内面黒色処理	VII-2	〃	〃
147	X I N 7 d 住	坏	14.7	5.4	5.2	回転糸切り無調整	内面黒色処理 (?)	VII-2	〃	〃
148	X I N 7 d 住	坏	(14.6)	(5.4)	3.0	高台付き	内面黒色処理 (?)	VII-2	〃	〃
149	X I N 7 d 住	坏	14.8		4.3		あかやき土器 (?)	VII-2	〃	〃
150	X I N 7 d 住	坏		8.0	[2.0]	高台付き、硯転用	内外面黒色処理	VII-2	〃	
151	X I N 7 d 住	羽口	5.0	8.5	20.9		孔-2.7 cm	VII-2	〃	
152	X I N 7 d 住	壺	(9.1)		[17.6]	下半部へラケズリ	肩部に自然釉	VII-2	〃	13
153	X I N 1 h	坏					あかやき土器 (?)	VII-2	38	
154	X I N 1 h	坏				回転糸切り無調整		VII-2	〃	
155	X I M 3 h	坏				厚手	立ち上がりがかきつい	VII-2	〃	
156	X I M 4 h	坏		(6.1)	[2.3]			VII-2	〃	
157	X I M 3 j	坏		(7.9)	[3.0]	高台付き	内面黒色処理	VII-2	〃	
158	X I I O	甕		(6.0)	[1.4]	回転糸切り無調整	摩耗している	VII-2	〃	
159	X I N	甕				へラナデ、底部再調整		VII-2	〃	13
160	X I N 9 e	壺				自然釉	須恵器	VII-2	〃	
161	X I I O	羽口			[5.5]		カマド内出土	VII-2	〃	

第3表 3区石器・石製品一覧表

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	図版 番号	写真 図版
			長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部				
301	XIN8f 坑	石皿	13.6	14.2	2.6	670.0	○		細砂質凝灰岩		10	6
302	XIN9b	石匙	6.0	7.2	1.6	47.5	○		珩質泥岩		29	9
303	XIM4h	石匙	4.8	2.2	0.4	3.1	○		粘板岩ホルンフェルス		〃	〃
304	XIM4h	石匙	6.4	2.0	0.5	5.2	○		珩質泥岩		〃	〃
305	XIN9b	リタッチ	3.7	4.5	1.2	13.4	○		珩質泥岩		〃	〃
306	XIM5h	リタッチ	3.3	1.6	0.5	1.9	○		珩質泥岩		〃	〃
307	XIM5i	スクレーパー	1.7	3.2	0.7	3.2	○		珩質泥岩		〃	〃
308	XIN5b	フレーク	5.0	2.9	0.6	10.6	○		チャート質粘板岩		〃	〃
309	XIM5h	石斧	12.2	5.5	2.4	180.0	○		緑泥石片岩		30	〃
310	XIM5h	石斧	11.0	4.0	2.0	110.0	○		滑石片岩		〃	〃
311	XIN7c	石斧	5.4	5.4	1.7	60.0	○		滑石片岩		〃	〃
312	XIIN1d	石斧	5.6	3.9	1.8	60.0	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
313	XIIN1e	石斧	7.4	4.7	2.2	132.0	○		流紋岩		〃	〃
314	XIN5b	石斧	10.4	5.2	3.1	210.0	○		緑泥石片岩		〃	〃
315	XIM5h	石斧	8.2	3.9	2.6	130.0	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
316	XIN6a	石斧	4.1	2.8	1.8	20.1	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
317	XIM5h	石斧	6.9	3.7	1.3	37.5	○		珩質緑色細粒凝灰岩		〃	〃
318	XIM6j	石斧	5.8	3.5	1.6	55.1	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
319	XIM5i	磨石	7.7	7.6	7.3	470.0	○		凝灰質粘板岩		31	10
320	XIN5a	磨石	11.1	6.3	4.1	420.0	○		輝石安山岩		〃	〃
321	XIM5h	磨石	13.5	4.2	4.1	420.0	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
322	XIN7c	磨石	9.4	7.7	4.5	450.0	○		角礫質硬砂岩	風化が著し	〃	〃
323	XIN9b	凹石	12.9	7.1	3.9	420.0	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃
324	XIM4i	砥石	7.1	4.7	1.8	80.0	○		流紋岩		32	〃
325	XIN0b	石皿	10.9	8.2	4.5	190.0	○		安山岩溶岩		31	〃
326	XIM	石皿	14.5	10.5	2.1	375.0	○		花崗閃緑岩		32	〃
327	XIN6a	石製品	4.8	4.4	2.0	53.4	○		チャート		〃	〃
328	XIM5j	石製品	4.5	3.3	6.9	16.3	○		流紋岩		〃	〃
329	XIM5j	石製品	9.9	2.4	0.7	17.4	○		硬砂岩		〃	〃
330	XIN9e	石棒	23.3	6.8	5.1	1050.0	○		流紋岩		〃	〃
331	XIN7d住	石皿	8.3	8.5	7.1	550.0	○		凝灰質硬砂岩		38	

V 上八木田IV遺跡

遺跡台帳番号	LE18-1164
調査略号	KY IV-90
調査面積	3,180 m ²
調査期間	平成2年6月1日～7月31日
整理期間	平成2年11月1日～平成3年3月31日
調査担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 専門職員 相原 伸裕
整理担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 専門職員 相原 伸裕

1 4区の地形概観と遺跡の立地

4区は北に向かって開かれた袋状の地形であり、北側を除く周囲は尾根によって囲まれている。遺跡の東西には湧水がある。東側の小沢は尾根を迂回し、遺跡の北側を西流し、遺跡の北西隅で西側の小沢と合流する。水量はそれほど多くはないが、渴れることはない。遺跡はその沢の付近の緩やかな北斜面に立地する。

遺跡がのる北斜面の微地形は次のようになっている。頂上から約10度の勾配で降りてきた斜面は沢から20～30m手前で一旦急に勾配を減じ、若干平坦に近い斜面となる。これは人為的に削平を受けたもので、遺跡の西側は沢に沿うようになり奥まで削平され、東側は尾根の脚部に直接続くためそれほど広範囲とはなっていない。この削平によって生じた段差は最大で30～40cmであるが、削平された全域を面的な広がりとして明瞭に把握することはできない。この削平された部分にはナラを主体とする（若干のクリも見られる）多数の木根が見られる。いずれも樹齢25～26年のものである。削平されなかった斜面上方にはそのような木根は見られない。

遺跡は周囲を尾根に囲まれ袋状になっているため強風にさらされることはなく、しかも尾根がそれほど高くないため日当りはよい。古代の住居跡が発見された所の標高は280mである。

遺跡の基本的な土層の堆積状況については次項で述べるが、概括的には斜面であるため上方では黒色土（I層）と暗褐色土（II層）の層は薄く、下方は厚い。また、層厚の相違だけでなく、一部には暗赤褐色の再堆積層や漆黒の層が見られるなど変化に富んでいる。

遺跡の地理的な環境を概括すれば以上のとおりである。ここで発見された遺構と遺物は、縄文時代と古代（平安時代）のものである。縄文時代の土坑と陥し穴は遺跡の西側を流れる沢沿いに作られ、古代の住居は遺跡の東側から西流する沢沿いに作られている。縄文土器と石器の大部分はI層の上位から出土し、土師器と須恵器は殆どが遺構内から出土した。殆どの遺物を包含し、古代の住居跡がのるI層が部分的に削平されたため、遺跡としては良好に保存されていたとは言い難い。

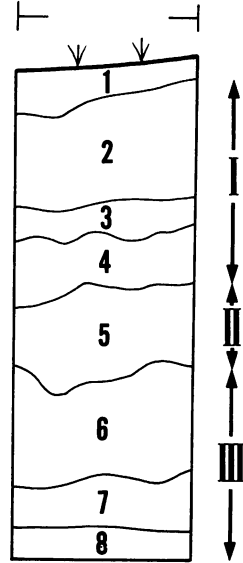
2 基本層序

斜面に展開された遺跡であり一部は削平されているため、全域が同一の層序・層厚となっているわけではない。そこで比較的遺存状態がよいと思われるXVI K1jグリッドで見られる層序を基本的な層序をなすものと捉えた。同地点は遺跡のやや東に寄り、一部は削平が始まる所でもある。

大別すれば黒色土（I層）、黒褐色土（II層）、褐色土（III層）である。I層は更に3層に細分されるが、上位2層が大きく削平されている。したがって、I-3層が土師期の検出面となっている所が多いが、本来はI-2層が同期の検出面となるものと思われる。縄文時代の遺構検出

面はII層である。III層は基盤層である。本遺跡で見られる土層のうち、同地点で見られない土層は暗赤褐色の再堆積土と漆黒の土層の2層である。これらはいずれも東側の尾根の脚部付近に見られる。暗赤褐色土は尾根の脚部に堆積しており、基盤層である明褐色土の上に直接載っている。小礫を含み、締りが無い。漆黒の土層はこの暗赤褐色土に続く斜面下位側に見られる。クロボク質で極めて粘性が強い。

L = 282.400M

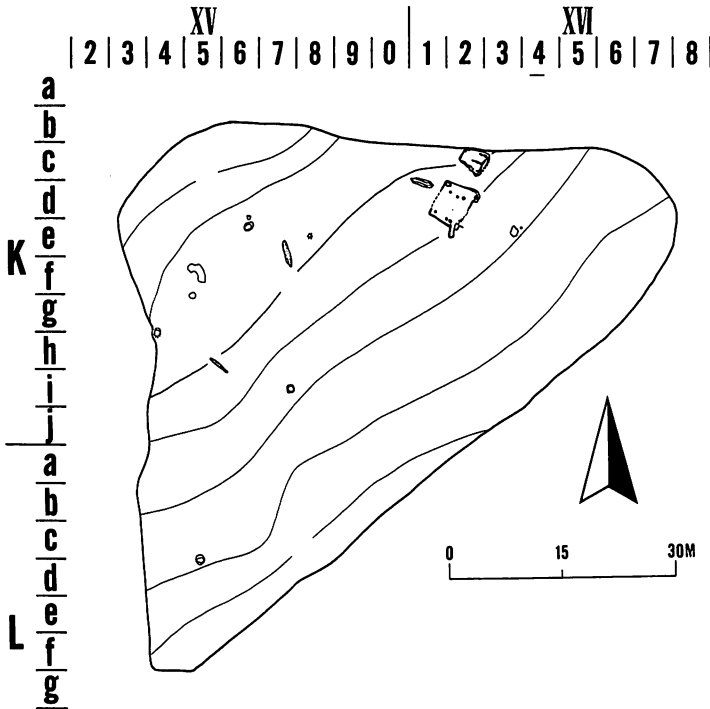


3 検出された遺構と遺物

(1) 縄文・弥生時代

縄文時代に属する遺構は土坑4基、墓墳1基、陥し穴3基、焼土遺構1箇所である。遺物は土器と石器が出土した。土器は縄文時代後期が中心で、量的には遺物収納用コンテナ3箱である。土製品はない。石器は少なく、礫石器が主で剥片石器はフレークを含めても僅か7点である。

第42図 基本層序



第43図 4区遺構配置図

(1) 土坑・墓壙

検出された土坑を断面の形状で分類すれば、ピーカー状のもの2基、フラスコ状のもの1基、袋状のもの1基である。規模は小さい。

X V K4g 土坑

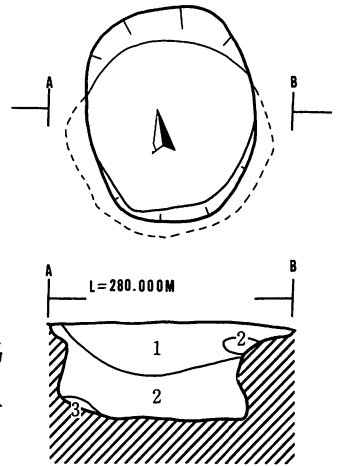
遺構 (第44図)

(位置) 調査区西端の沢に落ち込む傾斜変換点に位置する。沢までの比高は約1mである。

(埋土) 上位は黒色土、下位は黒褐色土の2層である。下位は褐色土粒が若干混入する事もあるが、水が吹き出すため、酸化第二鉄が浮き出し全体に赤っぽい。埋土は全体に軟らかい。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形は所謂頸部を持たないフラスコ状の土坑である。開口部径90cm、底部径118cm、深さ47cmである。

(壁) 黒～黒褐色土である。オーバー・ハングは緩い。崩落の跡



- 1. 黒色土
- 2. 黒色土 1に褐色土が小ブロックで混入
- 3. 黒褐色土 褐色土、黒色土の混入

第44図 X V K 4 g 土坑

は見られない。酸化第二鉄を多く含む土壌のため下位ほど硬い。

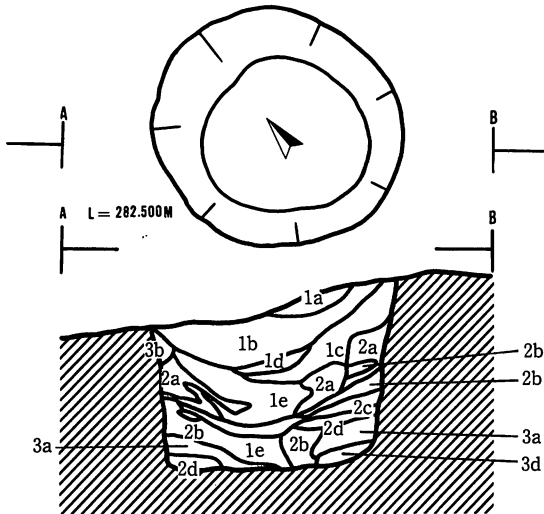
(底部) 黒褐色土で硬い。平坦で中央が若干低くなる。中央に底面を二分するように幅3cm、高さ2cmほどの帯状の土塊がある。人為的なものか自然に作られたものかは不明である。

(その他) 本遺構は風倒木痕を切って作られていたため、検出時に開口部を明瞭な輪郭として捉えることができなかった。だめ押しのトレンチを入れて、底部および壁を確認した。そのため、開口部の北側は掘り過ぎとなっている。

X V L5c 土坑

遺構 (第45図、写真図版14)

(位置) 調査区の南西にあたり、北流する沢から約10m東で、周囲の微地形からみれば旧沢跡(埋没谷)の一部に位置する。沢までの比高は約3mである。本調査区の中では最も高い位置



- 1a 黒色土 褐色土が小ブロックで混入
- 1b 黒色土
- 1c 黒褐色土 褐色土が粉状に混入
- 1d 黒褐色土 1cより褐色土の混入が多い
- 1e 黒色土 黒褐色土との混入
- 2a 暗褐色土
- 2b 暗褐色土 壁の崩壊土
- 2c 褐色土 壁の崩壊土を含む
- 2d 黒褐色土 壁の崩壊土と黒色土との混入
- 2e 暗褐色土 褐色土と黒色土との混入
- 3a 黄褐色土 壁の崩壊土
- 3b 暗褐色土 黒色土若干混入

第45図 X V L 5 C 土坑

に占地する。

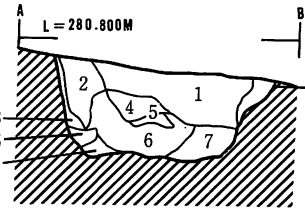
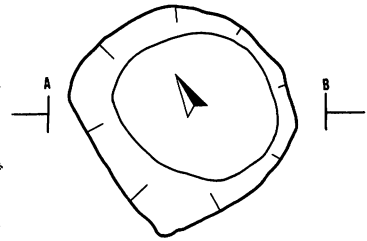
(埋土) 黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土で構成され、軟らかく、U字状の自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状の土坑である。開口部径 130 cm、底部径 115 cm、深さ 95 cm である。

(壁) 褐色土でほぼ垂直に立ち上がる。崩落の跡は見られない。

(底部) 褐色土で硬い。平坦かつ水平である。

(その他) 埋没谷の沢頭に近いため、浸透してきた水は容易には枯渇しない。



1. 黒色土 壁の崩落と思われる土粒を一部含む
 2. 黒褐色土 一部黄色土粒を含む
 3. 黒褐色土 壁の崩落と思われる土を多く含む
 4. 黒色土
 5. 黒褐色土 細かなオレンジ色の粒を含む
 6. 灰黄褐色土 褐色土
 7. 黒褐色土 黄褐色土粒、黒褐色土粒、灰黄褐色土を多く含む
 8. 黒褐色土 黄色の粒、細かい礫を含む
- 第46図 XV K 7 i 土坑

XV K7i 土坑

遺構 (第 46 図、写真図版 14)

(位置) 調査区の中央からやや西に寄る。北流する沢から約 25 m 東で、周囲の微地形からみれば若干馬の背状に小高く張り出す傾斜変換点に位置する。

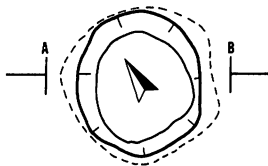
(埋土) 黒色土、灰黄褐色土、黒褐色土の 3 層に大別される。全体に粘性があり、締まっている。自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状の土坑である。開口部径 115 cm、底部径 75 cm、深さ 45 cm である。

(壁) 褐色土でほぼ垂直に立ち上がる。

(底部) 褐色土で硬い。中央がやや乱調な所もあるが、概ね水平で平坦である。

(その他) 開口部の一部に掘り過ぎがある。



XV K8e 土坑

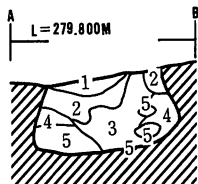
遺構 (第 47 図、写真図版 14)

(位置) 調査区の北西にあたり、西流する沢から約 20 m 南で、周囲の微地形からみれば若干馬の背状に小高く張り出す先端に位置する。沢までの比高は約 5 m である。

(埋土) 基本的には黒褐色土で構成されるが、褐色土粒の含有率や硬さ等により 5 つに細分される。全体に軟らかく、自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は円形、断面形は所謂頸部を持たないフラスコ状の土坑である。開口部径 60 cm、底部径 80 cm、深さ 43 cm である。

(壁) 褐色土である。オーバー・ハングはきつくない。埋土の観察



1. 黒色土
2. 黒褐色土 黄色土粒、褐色土粒を含む
3. 黒褐色土 黄褐色土粒、黒褐色土粒を含む、全体的に灰色がかっている
4. 黒褐色土 壁の崩落土を含む、灰黄褐色に近い
5. 黒褐色土 3層をやや含む

第47図 XV K 8 e 土坑

から見れば崩落の跡は見られない。下位ほど膨らんでおり、袋状である。

(底部) 褐色土で硬い。中央が低くなる鍋底である。

X V K6e 墓壇

遺構 (第 48 図)

(位置) 調査区の北西にあたり、西流する沢から約 20 m 北で、周囲の微地形からみれば埋没谷に位置する。沢からの比高は約 2.5 m である。

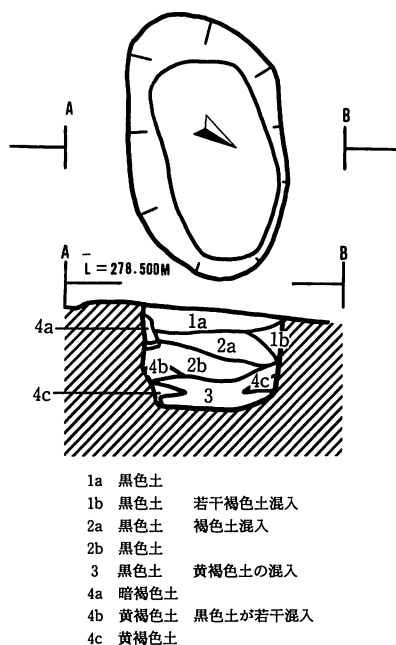
(埋土) 黒色土、黒褐色土で大半を占め、周囲にわずかに黄褐色土が見られる。極めて粘性が強く、硬く締まっている。水平化した堆積状況で人為堆積と思われる。

(形状・規模) 平面形は楕円形、断面形はビーカー状である。開口部径 90×145 cm、底部径 55×105 cm、深さ 55 cm である。

(壁) 上位は黒褐色土、中～下位は褐色土でほぼ垂直に立ち上がる。崩落の跡は見られない。

(底部) 褐色土で硬い。平坦かつ水平である。

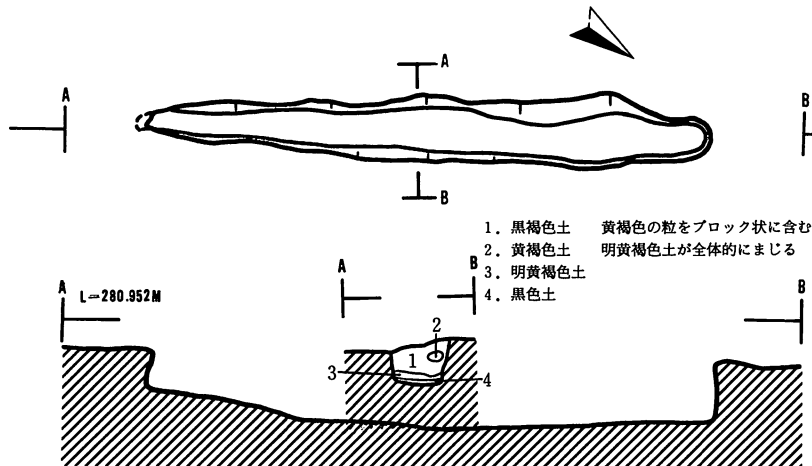
(その他) 埋没谷に占地するため、浸透してきた水は容易には枯渇しない。本遺構は形状と埋土の状況から墓壇と認定したものであるが、出土遺物は発見できなかった。



第48図 X V K 6 e 墓壇

(2) 陥し穴

X V K5h 陥し穴 遺構 (第 49 図、写真図版 15)



第49図 X V K 5 h 陥し穴

(位置) 調査区の西に位置し、北流する沢から約 15 m 東である。周囲の微地形からみれば埋没谷に位置する。沢からの比高は約 1 m である。

(埋土) 下位に若干黄褐色土が堆積

するが、ほぼ黒褐色土で大半を占める。軟らかく部分的には砂が含まれる。

(形状・規模) 平面形は溝状、断面形はピーカー状である。開口部径 30 cm×3 m、底部径 20 cm×3 m、深さ 20 cm である。

(壁) 褐色土でほぼ垂直に立ち上がる。

(底部) 褐色土で硬い。平坦かつ水平である。逆茂木痕等はない。

(その他) 本遺構の周辺は埋没谷だった所を大きく削平された所であり、遺構の下部のみが遺存していたものである。

X V K7f 陥し穴

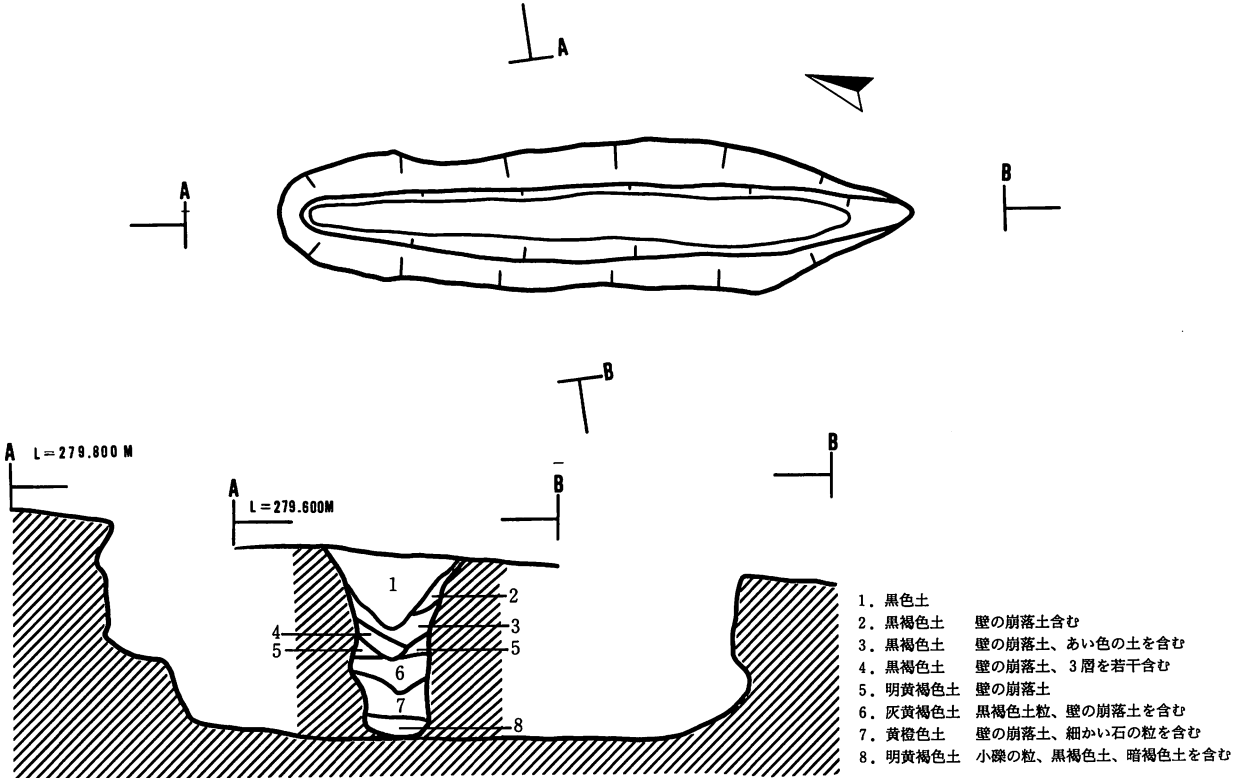
遺構 (第 50 図、写真図版 15)

(位置) 調査区の北西にあたり、西流する沢から約 20 m 北で、周囲の微地形からみれば埋没谷に向かう傾斜変換点に位置する。現在の沢からの比高は約 3 m である。

(埋土) 黒色土、黒褐色土、明黄褐色土、灰黄褐色土の 4 層からなる。自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は溝状、断面形はピーカー状である。開口部径 75 cm×3.5 m、底部径 55 cm×2.9 m、深さ 1 m である。

(壁) 上位は黒褐色土、中～下位は褐色土で部分的には崩落の跡が見られるが、ほぼ垂直に立ち上がる。両端部はオーバー・ハングしない。逆茂木痕等はない。



第50図 X V K 7 e 陥し穴

(底部) 褐色土で硬い。平坦かつ水平である。

(その他) 平面形は溝状ではあるが、一方の端部に向かって急速にしぼむため舟形状に見える。

XVI K1c 陥し穴

遺構 (第51図、写真図版15)

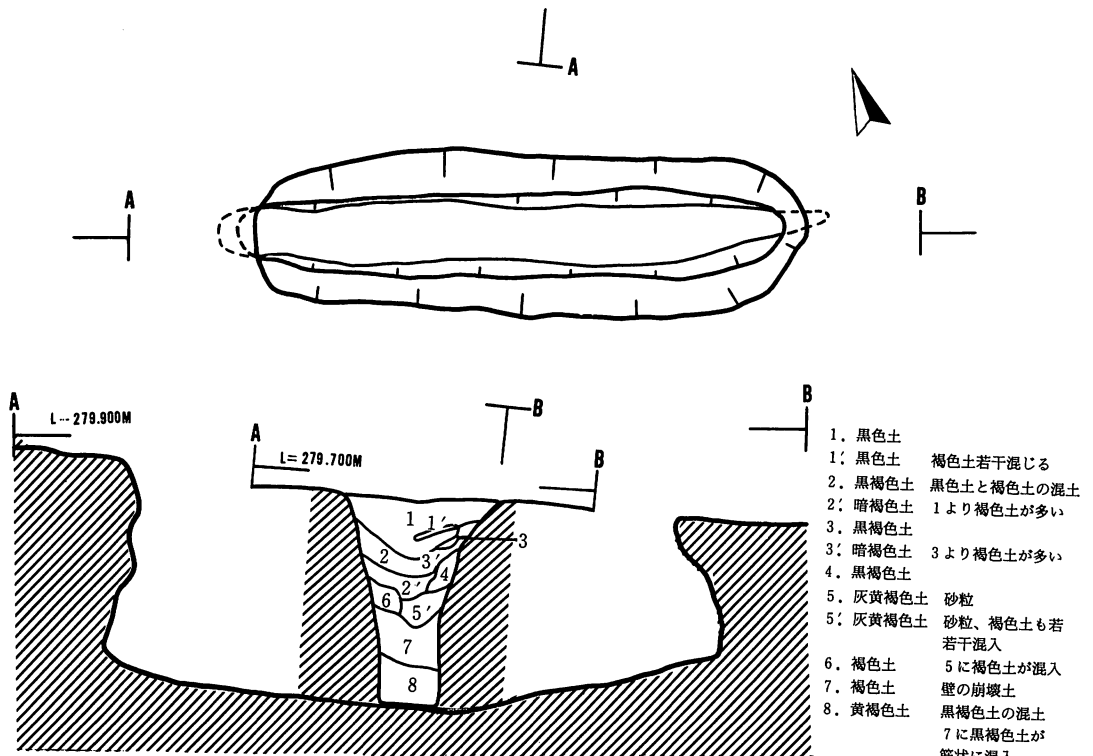
(位置) 調査区の北側に位置し、西流する沢から約7m北で、沢に向かって落ち込む傾斜変換点に位置する。沢からの比高は約1.5mである。

(埋土) 黒色土、黒褐色土、灰黄褐色土、明黄褐色土の4層からなる。自然堆積である。

(形状・規模) 平面形は溝状、断面形はピーカー状である。開口部径 85×295 cm、底部径 30×325 cm、深さ 135 cm である。

(壁) 上位は黒褐色土、中～下位は褐色土でほぼ垂直に立ち上がる。大きな崩落の跡は見られない。両端部はオーバー・ハングする。

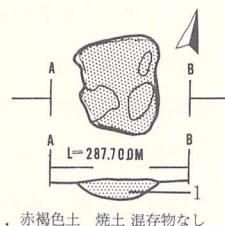
(底部) 褐色土で硬い。平坦であるが、鍋底状に中央が若干低くなる。



第51図 XVI K 1 c 陥し穴

(3) 焼土遺構

調査区の西際には、焼土遺構が表土から表土直下の層に相当数形成されていた。しかも、人為的な削平が大規模に行われていたため、それらの時期決定には層位的な見方を機械的に適用することはできない。また、当該遺構は同一検出面で縄文土器片や弥生土器片に混じって現代の遺物も出土させるものがあるため、これらの焼土遺構群はすべて割愛することとする。したがってここで取り上げる焼土遺構は、層位的に攪乱を受けていない現地性の1遺構のみである。



第52図 X V K 6 d 焼土

X V K6d 焼土

遺構 (第 52 図、写真図版 15)

(位置) 調査区の北西に位置し、南 1 m で X V K6e 墓墳に隣接する。

(検出状況) 黒色土中に形成される。周囲には何等の掘り込み等は認められないが、周辺には廃棄された焼土が少なくとも 4 箇所は見られる。

(形状・規模) 平面形は不整円、断面形はレンズ状である。最大径 54 cm、厚さ 10 cm である。

(その他) 本遺構が検出されたところは埋没谷にあたる所であり、一段と黒色土が深くなる所である。廃棄されたとみなした焼土はブロック状となって散乱されていたものである。

(4) 遺構外出土遺物

土器

出土した遺物の総量は遺物収納用コンテナで 5 個である。うち、遺構外から出土した土器は 1 箱と非常に少なく、すべて破片である。遺構外から出土した土器の大部分は土師器であり、縄文土器と弥生土器は極めて少ない。

時期的には縄文の前期、中期、後期、晩期及び弥生中期等である。

第II群土器 (縄文前期) (第 53 図 1、写真図版 16)

図化したのは 1 の 1 点である。口縁部は丸みを帯びる。縄文原体を平行に数条押圧する。胎土は細かな長石を含み全体として緻密である。焼成は良好である。表面には炭化物が付着しているため黒褐色となっているが、本来は赤褐色である。この遺物は廃棄された焼土内から出土したものであるため、本来何処で使用されていたものか不明である。

縄文前期後葉の円筒土器下層式 C に比定されるものである。ただし、その胎土等から前期とするには若干の疑問も生ずる。

第III群土器 (縄文中期) (第 53 図 2~4、写真図版 16)

2 は大木 9 式、3、4 は大木 10 式に比定される磨消縄文である。当該土器は図示したもの以外

にも若干出土しているが、同一個体のもと思われるため割愛する。

第IV群土器（縄文後期）（第53図5～8 写真図版16）

5は縄文を施文した上から沈線文を描く。6は口縁部に刻み帯がめぐる。7はよく研磨した後、沈線文による文様を構成する。手法は大洞BC式に通じるものがあるが、突孔が認められ、体部下半とみなされる（あるいは肩部）ことから、器種は壺または鉢状のものとは考えられず、香炉形土器と考えられる。8は磨消縄文で平行沈線文を持つ。

5は後期前葉から中葉の十腰内1～2式に、6～8は後期中葉加曾利B3式に比定される。

第V群土器（縄文晩期）（第53図9）

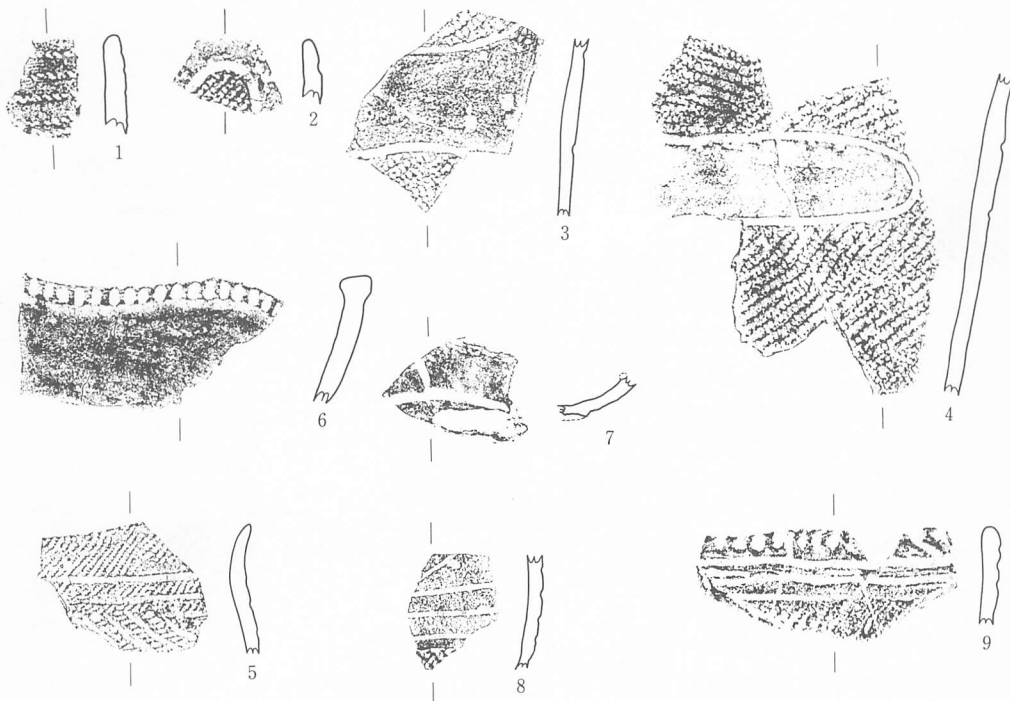
9は平行沈線文と口縁部に刻みが入る。大洞C1式に比定される。

第VI群土器（弥生土器）（第54図10～18、写真図版16）

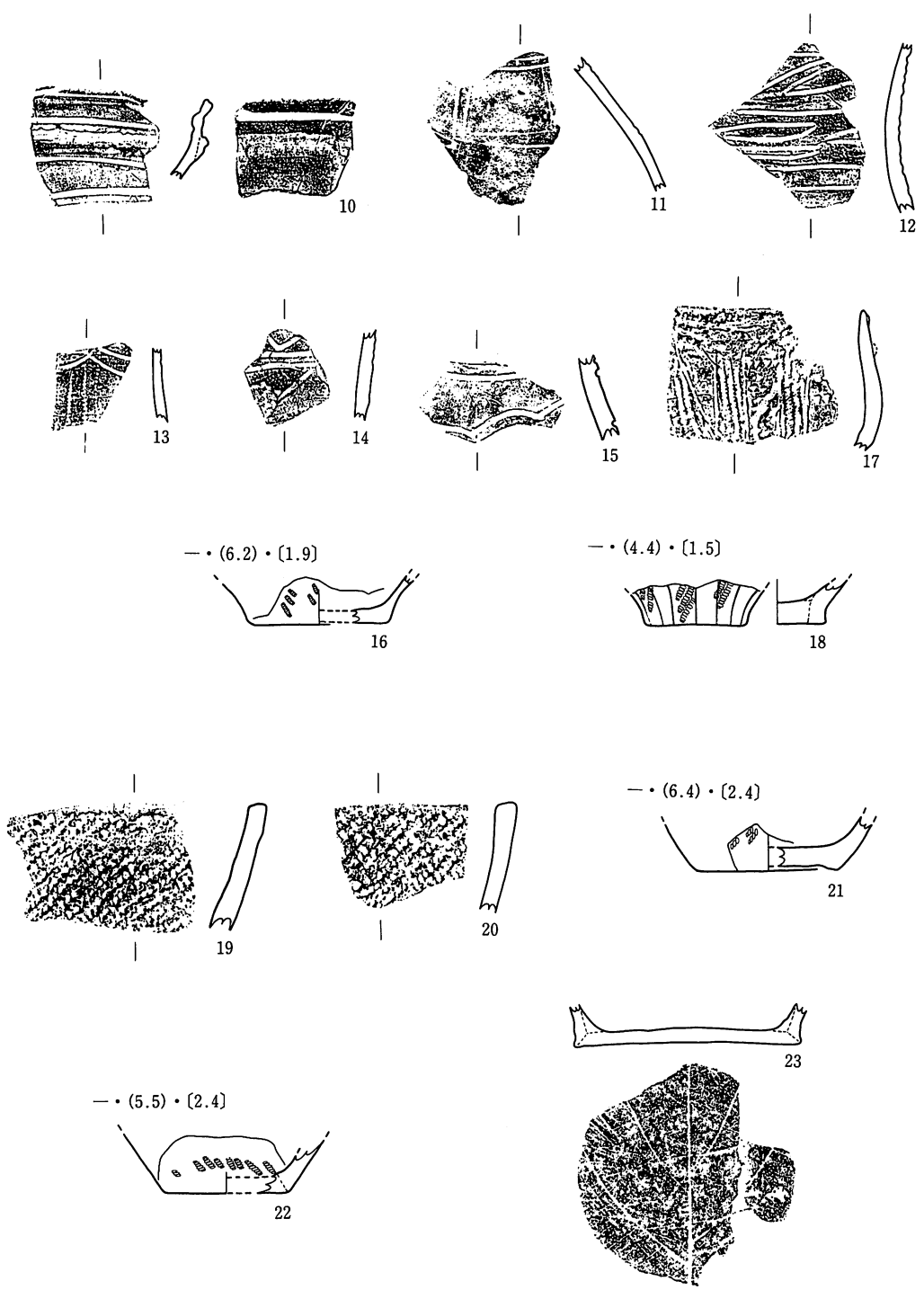
10は平行沈線文で、八起島式に比定される。

11～15は矩形、変形工字文状ないし弧状、山形等の沈線文である。11は砂を大量に含む胎土で沈線は浅い。15の沈線は深くシャープである。橋本式併行と思われる。

17は口縁部、18は底部であるが同一個体と思われる。口縁部には微隆帯を持ち細い沈線で縦に区画される。区画帯の中には一つ置きに縄文と三角形の刺突が充填される。口唇部と微隆帯には細かな刻みが付けられる。体部下半は縦に細い沈線によって区画された中に縄文が一つ置



第53図 第II～V群土器



第54图 第VI·VIII群土器

きに充填される。後北C2式に比定される。

第Ⅷ群土器（時期不詳の土器）（第54図19～23）

本群に含まれるものは縄文、胎土、焼成等からほとんどは中期から後期に属するものと思われる。19、20は口縁部、21は底を削って周囲を高台状に作り出したものである。22は体部下端に1cmほど残して磨消してある。小片で施文も薄いことから不詳な点が多く、あるいは弥生土器の可能性もある。23は木葉痕をもつ深鉢形土器の底部である。

石器

石器も少なく僅かに14点である。その中には、土師器に伴うと思われるものも含まれているが、便宜上ここで取り扱うことにする。

石鏃（第55図101、写真図版16）

1点出土した。完形品で茎を持つものである。

石斧（第55図102～105、写真図版16）

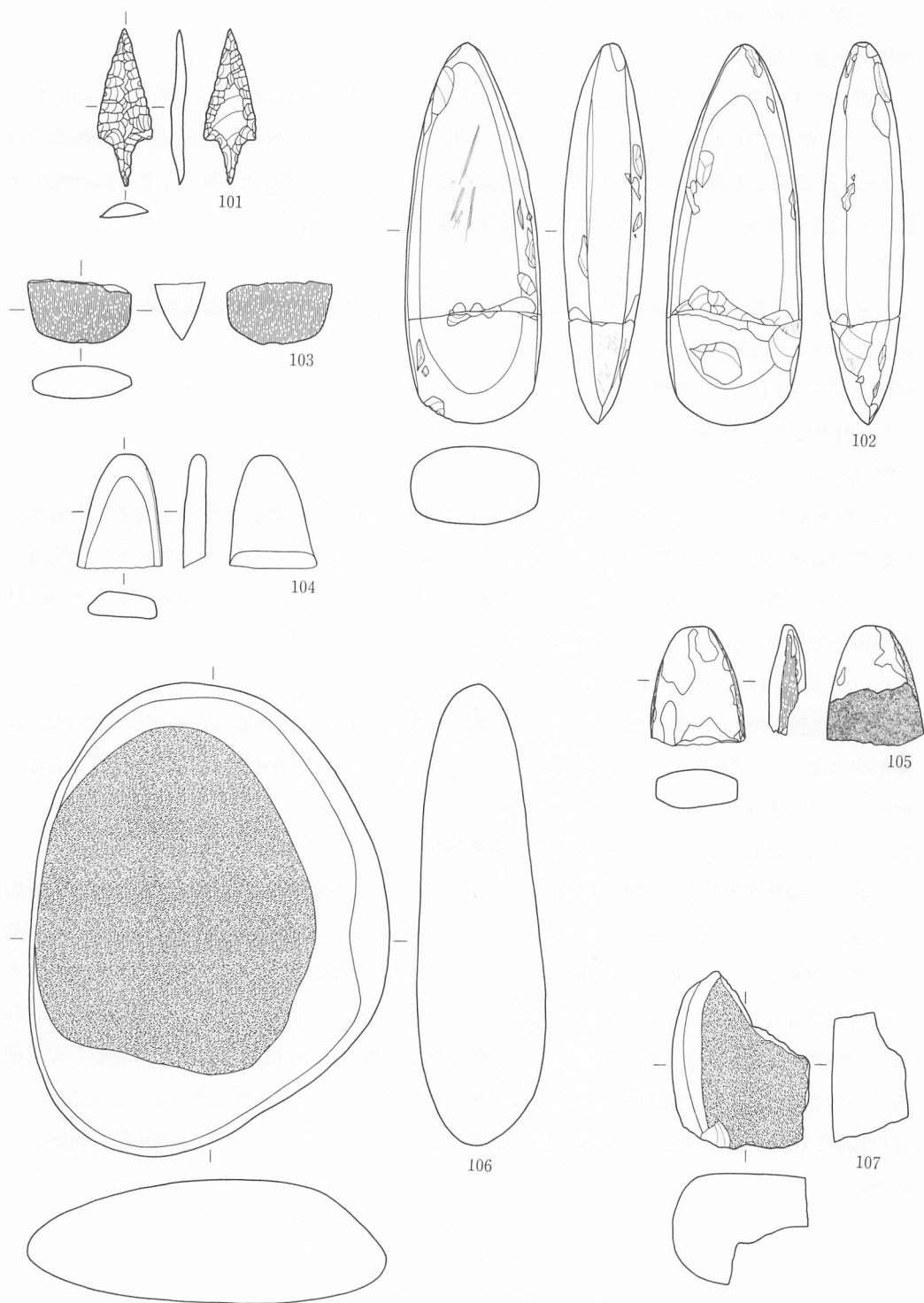
4点出土した。102は25mも離れた地点から出土したものが接合したものである。全面が光沢を帯びるほどよく研磨されたもの（接合部や稜線を明らかにするためスクリーンは使用しなかった）である。刃部から5cmの所で破断したものである。103は刃部のみ、104と105は基部のみであるが、いずれも磨性石斧である。

石皿（第55図106、107、写真図版16）

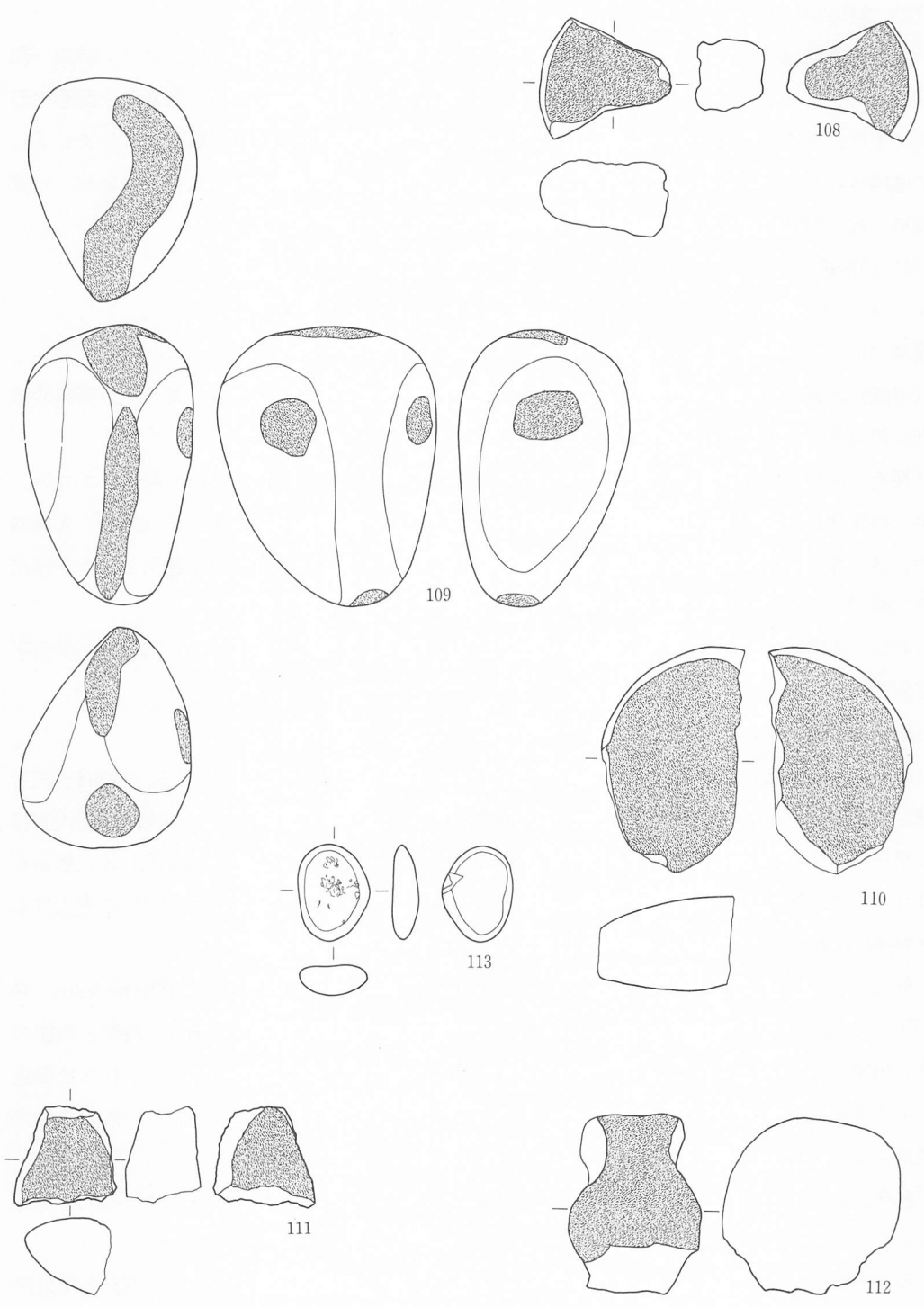
106は完形、107は一部欠損している。前者は16×23.5cmの楕円形状の小型のものである。使用面は蒲鉾状に端部が下がる。後者は大半が欠損しているため形状・規模とも不明である。加熱をおび、赤化している。

磨石・凹石・敲石（第56図108～113、写真図版16）

これら3種類の石器は多種類の機能を合わせ持ったものが多いため一括して取り上げるものである。しかし、ここでは単独の使用痕を持つ物が多い。108は石材が溶岩であるため、本来的に多孔質である。したがって、磨石として使用されたのは間違いないが、凹石の性格も有するかは特定できない。109は敲石で6箇所を使用している。陵部は磨石としても使用したかもしれない。使用面は明瞭であるが、使用に伴って窪んだ所は浅い。110は両面と陵部も磨石として使用している。111と112は108と同じ材質であり、磨石として使用された物である。ただし、前者は扁平、後者は棒状のものである。113は扁平な川原石である。より平らな面に敲打痕が見られる。



第55图 剥片石器、礫石器



第56図 礫石器

(2) 古代以降

古代の遺構は竪穴住居跡4棟である。うち形状や規模が判明したもの2棟、カマド跡の一部しか遺存していなかったもの2棟である。遺物は土師器、須恵器、金属器である。土師器や若干の須恵器が遺構外から出土しているが、これは人為的に削平されたり、試掘トレンチによって破壊されたことによると思われる。したがって、確実には伴っているとはいえないが、当該遺構と強い関連が考えられる遺物は本項で取り扱うこととした。

(1) 住居跡

XVI K1d 住居跡

遺構 (第 57～58 図、写真図版 17)

(位置) 調査区の北側に位置し、西流する沢から約7m北で、沢に向かって落ち込む傾斜変換点に位置する。沢からの比高は約1.5mである。

(埋土) 黒色土、黒褐色土、褐色土(焼土)の3層から成るが、黒色土は部分的にしかない。焼土は床面に直接のる。黒褐色土の締まりは地山のそれと変わらない。褐色土(焼土)も同様に、硬くなっている所やシルト状の所もあるが、締まりはよい。検出面は黒色土であり、検出時で輪郭を正確に捉えることはかなり困難である。

(形状、規模) 長方形である。規模は4.5×5.0m、深さは最深部では50cmとなるが、斜面下位側では10cm程度で比較的浅い。

(壁) ほぼ垂直に近い立ち上がりで、特に崩落しているところはない。

(床) 床面は褐色土までは達せず、掘り方も褐色土まで達しているのは僅かである。北隅は土坑と認定するほどではないが、長軸が50cmほどの楕円形をした窪みがある。深さは10cmで屋内側はなだらかに立ち上がる。東隅にも同様に同規模のものがあるが、平面プランから見れば本住居からはみ出す位置にあり、本住居に接する他の土坑かもしれない。しかし、本遺構の明瞭な埋土は本住居跡の床面より下の土だけで上位になるほど地山との区別はほとんどできない。

柱は6本であるが、柱間は不規則である。計測値は芯芯間でP1P2-3.5m、P3P4-3.2m、P5P6-3.25m、P1P3-0.6m、P3P5-1.75m、P2P4-0.8m、P4P6-1.1mである。西側と東側の柱穴列間は3m以上もある。3本が並ぶ各列も等間隔にはなっていない。しかし、これらは褐色土中に深く埋置された痕跡を持っており、柱穴としては疑問の余地はない。また、東側の柱穴列はいずれも柱痕跡が明瞭で割材を使用している。

各柱穴の深さはP1-53cm、P2-53cm、P3-24cm、P4-43cm、P5-14cm、P6-56cmである。

(カマド) カマドの主体部はトレンチのため完全に消滅し、燃焼部に形成された焼土と煙道部が遺存している。煙道部は掘り込み式で芯材に礫を使用している。特に煙出し部は礫で外周を

半円状にしっかりと積み上げられている。

(その他) 本遺構は中央部を試掘トレンチによって完全に破壊されてしまったものである。また、焼失住居跡であるが、西側はほぼ完全に焼土で被われているのに対し、東側は焼土がほとんど見られず、紛状の炭が床面に広がっている。

遺物

坏 (第 59 図 24~30、写真図版 20)

図示したものは 7 点である。いずれも破片で、図上復元できたものは 29 の 1 点である。7 点中 5 点は内面黒色処理したものであり、図示は省略したが内外面黒色処理の坏も出土している。29 の胎土は緻密、焼成も良好で極めて硬い。それに対して 30 の胎土はやや雑で、整形も 29 のようなシャープさに欠ける。26 は高台付きの坏である。

壺・甕 (第 59~60 図 31~39、写真図版 20)

31 は須恵器の壺である。肩部があまり張らない。体部下半はヘラナデないしヘラケズリのような調整痕がかすかに見られるが、部分的であり詳細は不明である。

32~38 は甕形土器であるが、完形となるものはない。図示しなかった土器を含めてもロクロ不使用の土器が多い。ロクロ使用の 33 はロクロ不使用のものに比べて胎土は緻密でやや薄い。しかし、37 と 38 は粗砂が多くやや雑である。

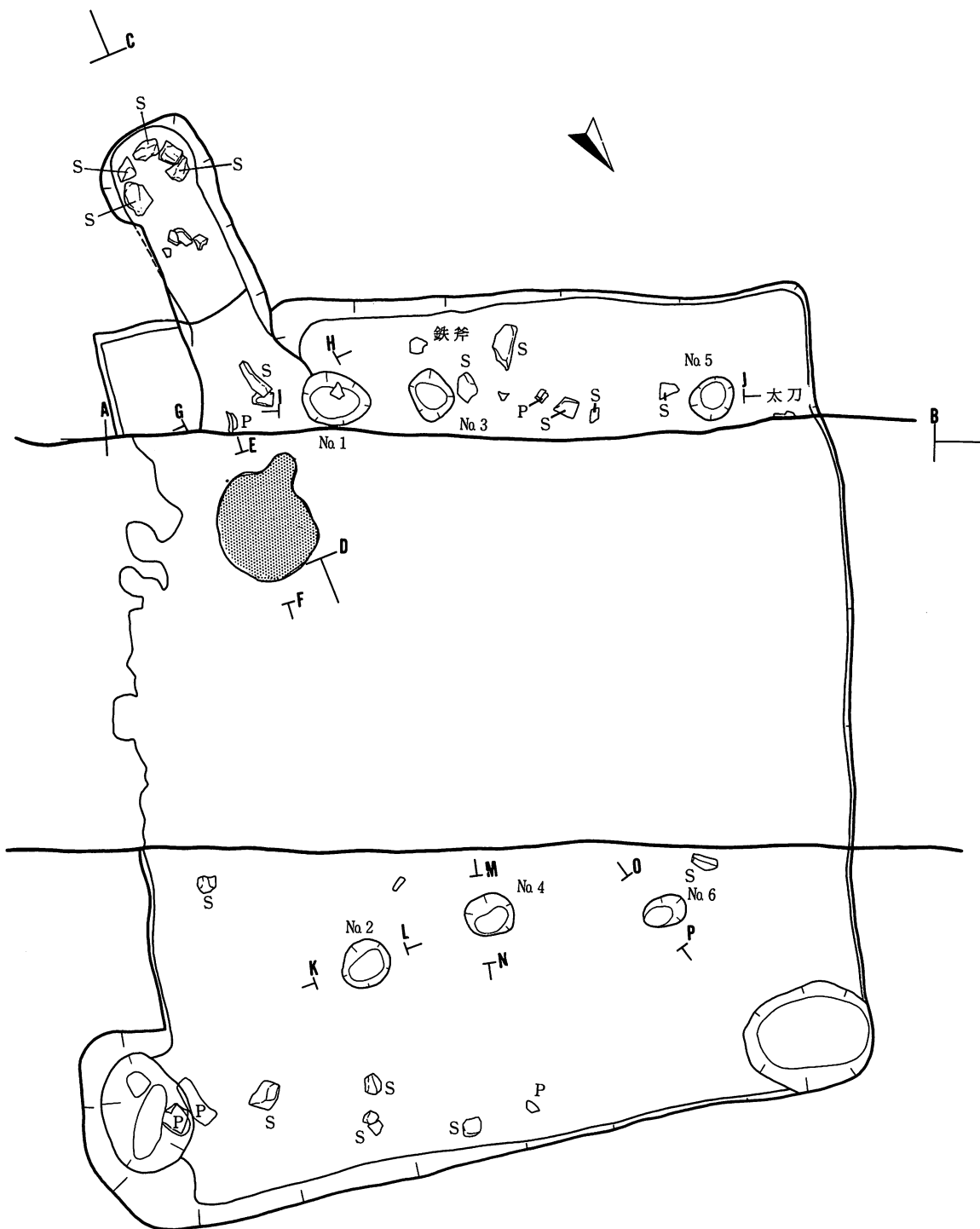
砥石 (第 60 図 113、写真図版 20)

石器は砥石が 1 点出土した。3 面を使用している。完形ではない。石質は流紋岩で仕上げ砥石である。

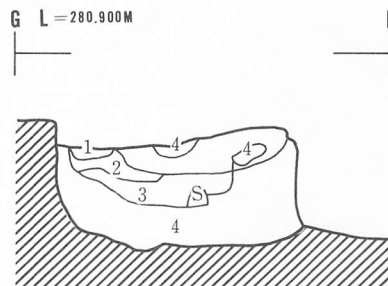
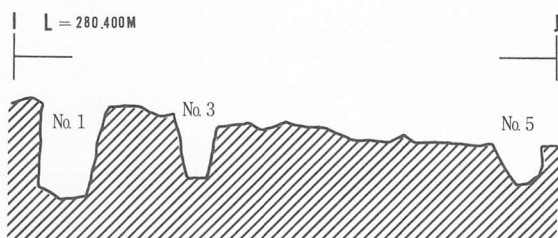
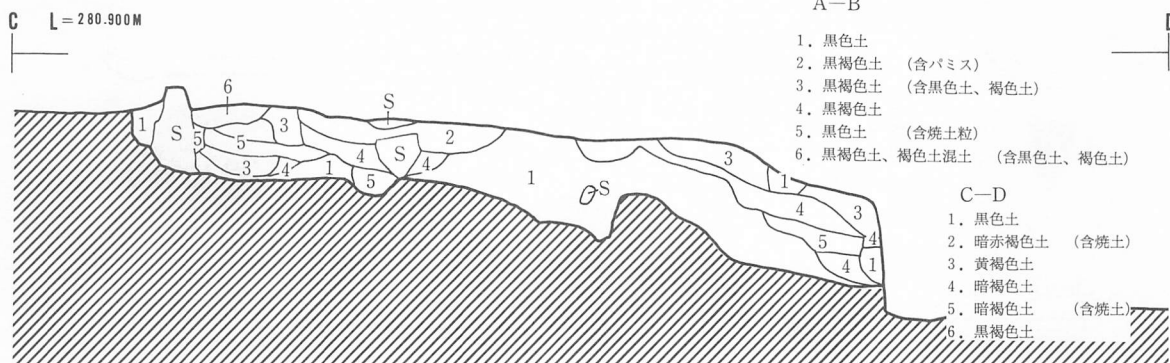
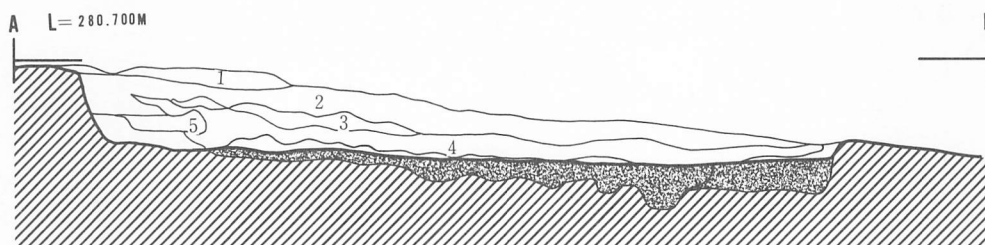
金属器 (第 61 図 201~203、写真図版 20)

201 は古刀の太刀である。切先部はすでに失われている。平造り、棟は角棟で、浅い腰反りとなっている。茎は深く反り、上部は絞られて茎尻(柄頭)は膨らむ。茎尻は入山形で手貫緒を下げたと思われる穴が 1 孔見られる。棟区も刃区も見られない。鏝は桑鏝で下方がすぼむ。切羽はない。各部の計測値は第 62 図に示したとおりである。重さは 320 g (保存処理後、以下同じ) である。

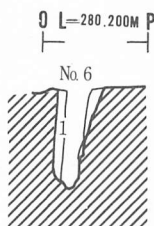
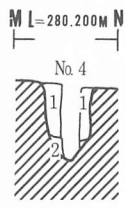
202 は穂積具である。木質部は残っていない。一方に止め釘が遺存している。長さ 8.6 cm、幅 1.8 cm、厚さ 3 mm、重さ 7.9 g である。203 は鉄斧である。遺存状況は良好である。長さ 13 cm、幅 5 cm、基部の径 5.6×4.2 cm、鋼材の厚さ 6 mm、重さ 496 g である。204 は鉄製紡錘車である。一部欠損が見られる。直径 4.8 cm の円形で、中央の孔は径 5 mm、重さ 16.9 g である。刀は北西隅の床面、鉄斧は西側の埋土上位(焼土より上)から出土した。穂積具と紡錘車は東側の床面(P 2 付近)から出土した。以上の金属器の成分分析結果については本編の終わりに掲載した資料を参照されたい。



第57図 XVI K 1 d 住居跡

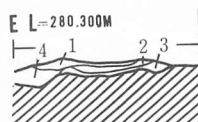


- G-H
1. 明黄褐色土
 2. 赤褐色土 (含焼土)
 3. 極暗赤褐色土
 4. 黒色土



No. 4 No. 6

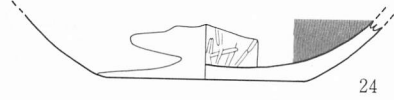
1. 黒色土、褐色土の混土 (含黒色土)
2. 褐色土



- カマド燃料部
1. 橙色土 焼土
 2. 明赤褐色土
 3. 褐色土
 4. 黒色土

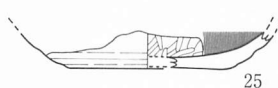
第58図 X VI K1d 住居跡

—• (8.4) • [2.4]



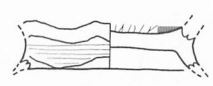
24

—• (6.4) • [1.4]



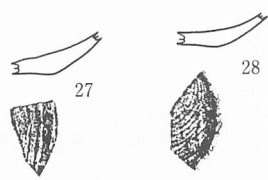
25

—••• [1.1]



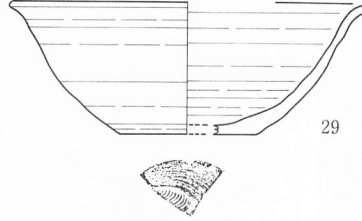
26

(14.0) • (5.4) • 5.3

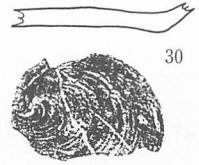


27

28

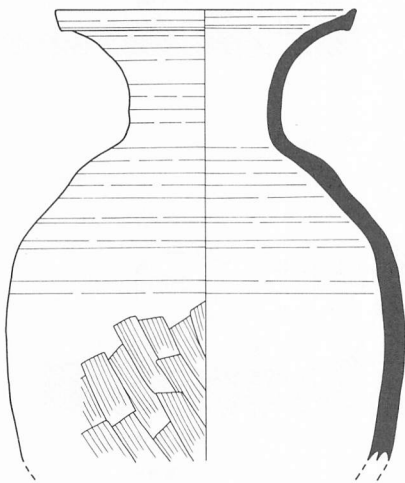


29

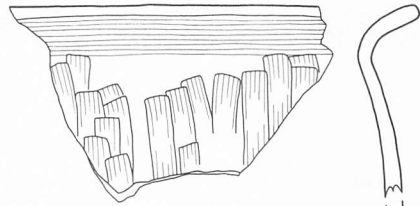


30

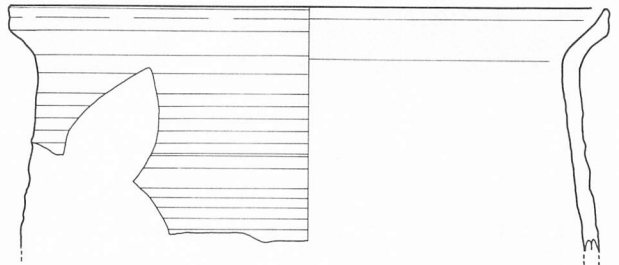
12.0 • —• [13.0]



31

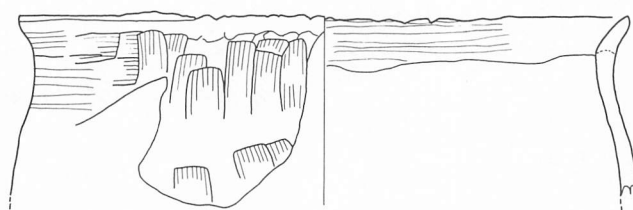


32



33

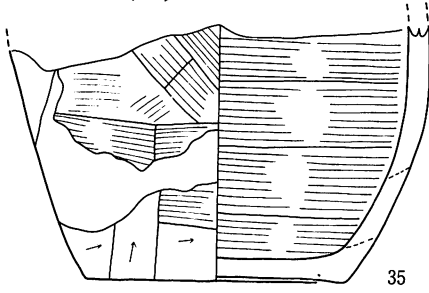
(24.0) • —• [7.2]



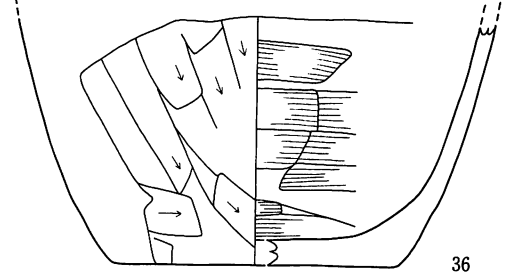
34

第59図 XVI K 1 d 住居跡・遺物

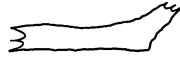
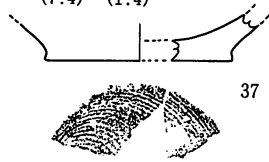
— • (10.4) • (9.7)



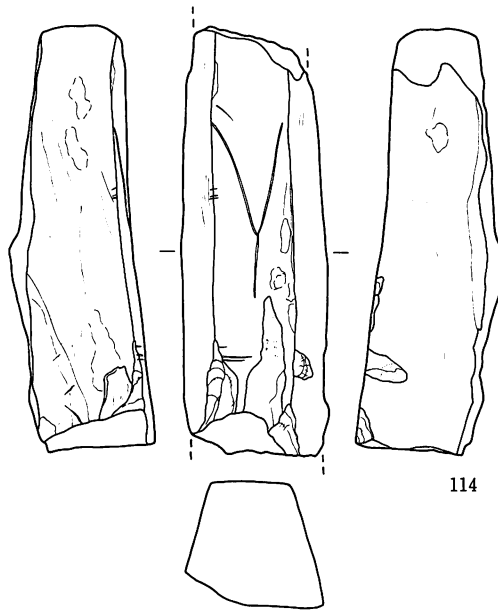
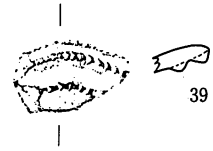
— • (11.4) • (9.6)



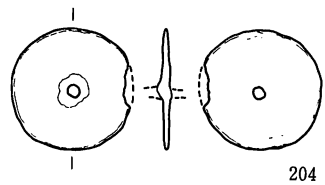
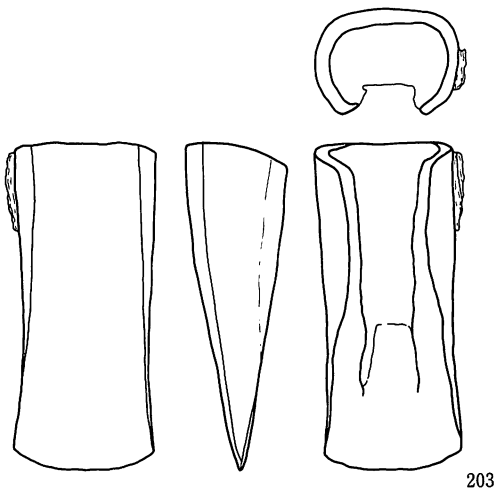
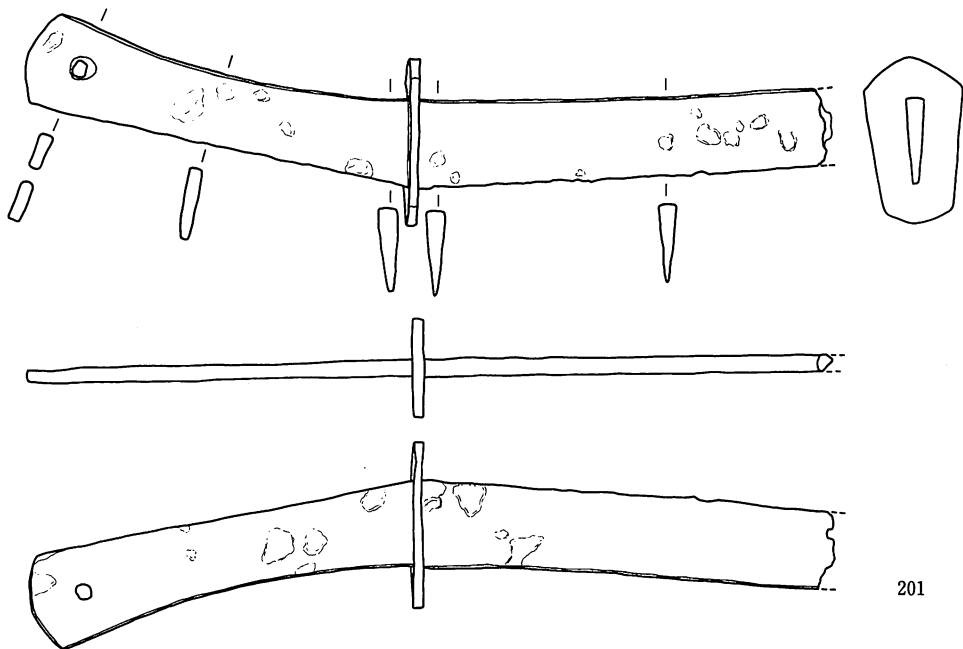
— • (7.4) • (1.4)



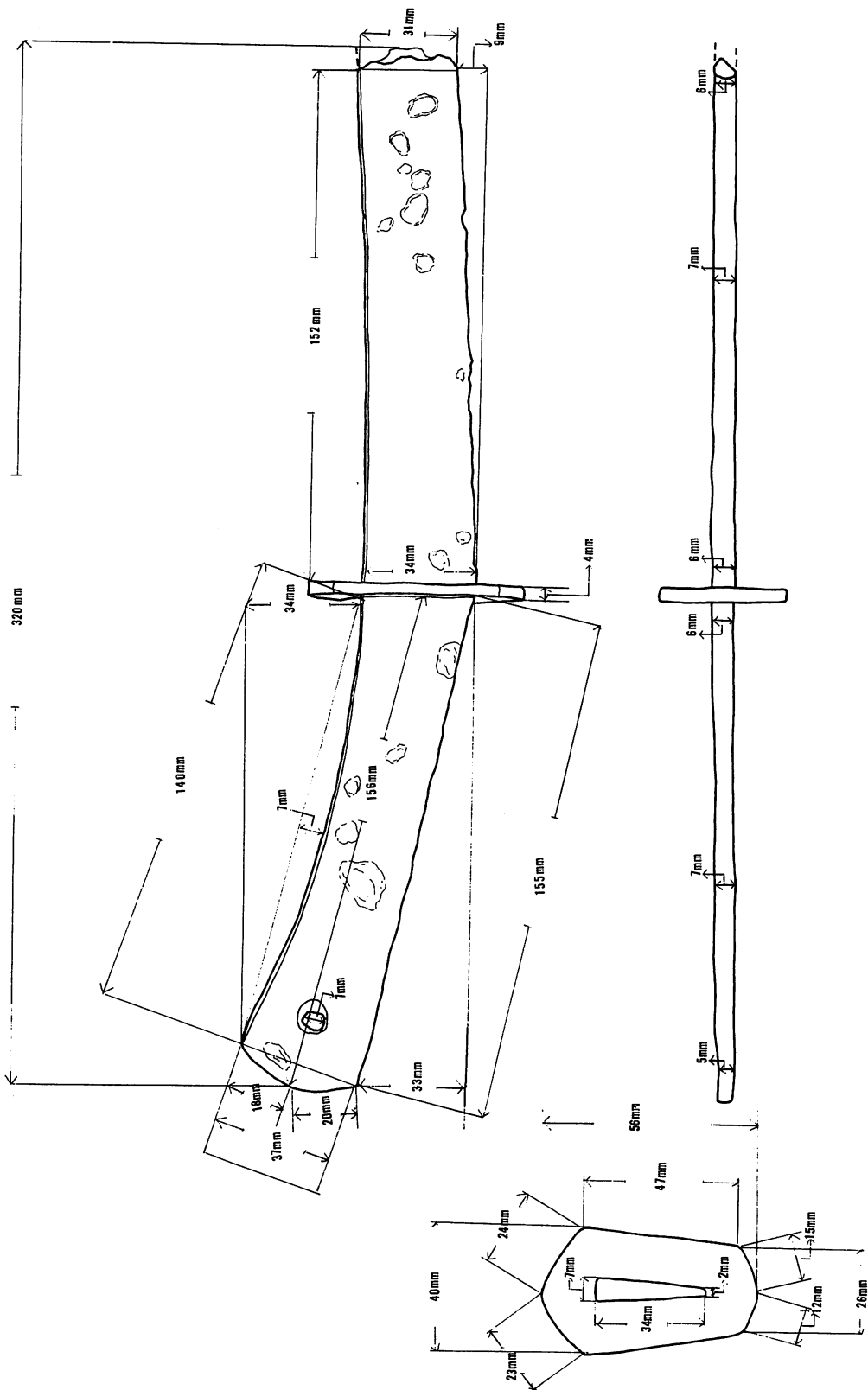
38



第60图 X VI K 1 d 住居跡・遺物



第61図 XVI K 1 d 住居跡・遺物



第62図 太刀細部計測値

所属時期

土器に着目すれば、相原編年の第Ⅷ群期、『岩手の土器』における第Ⅲ-1群期に並行し、第Ⅷ-1群（9世紀前半）に位置づけられる。

XVI K2c 住居跡

遺構（第63図、写真図版18）

（位置）西流する沢際に占地し、2.5 m でXVI K1d 住居跡に接する。

（検出状況）埋土と地山の区別がつかず、掘り下げの過程で床面に廃棄されていた焼土層の一部を検出した。

（埋土）暗褐色土が点在するが、ほぼ黒褐色土の単層である。若干ではあるが、灰白色火山灰が含まれる。地山に比し軟らかい。東側に廃棄された焼土と褐色のシルトが薄く堆積する。灰白色火山灰は3区のX I N7d 住で見られたものと同じであるが、量的にははるかに少ない。

（形状、規模）北辺が沢に向かって流失しているため、遺存している形状は台形であるが、本来は方形であったと思われる。一辺が3.2 m である。向きはXVI K1d 住居跡と一致する。

（壁）黒色土で若干外反する。高さは20～25 cm である。北壁は流失している。

（床）黒色土で硬く締まっている。北辺の一部を除いて壁際に周溝がややじぐざぐに回る。また、ほぼ中央から東壁に向かってV字状の溝が延びる。東側の床にはカマドの破壊による焼土や褐色の構築土と思われる土が薄く散乱している。柱穴はない。

（カマド）ほぼ完全に破壊されている。カマドの芯材に使用したと思われる角礫3点がカマドの周囲に転がっている。燃焼部に当たる所は鍋底状にくぼんではいるが、明瞭な焼土は見られない。

遺物

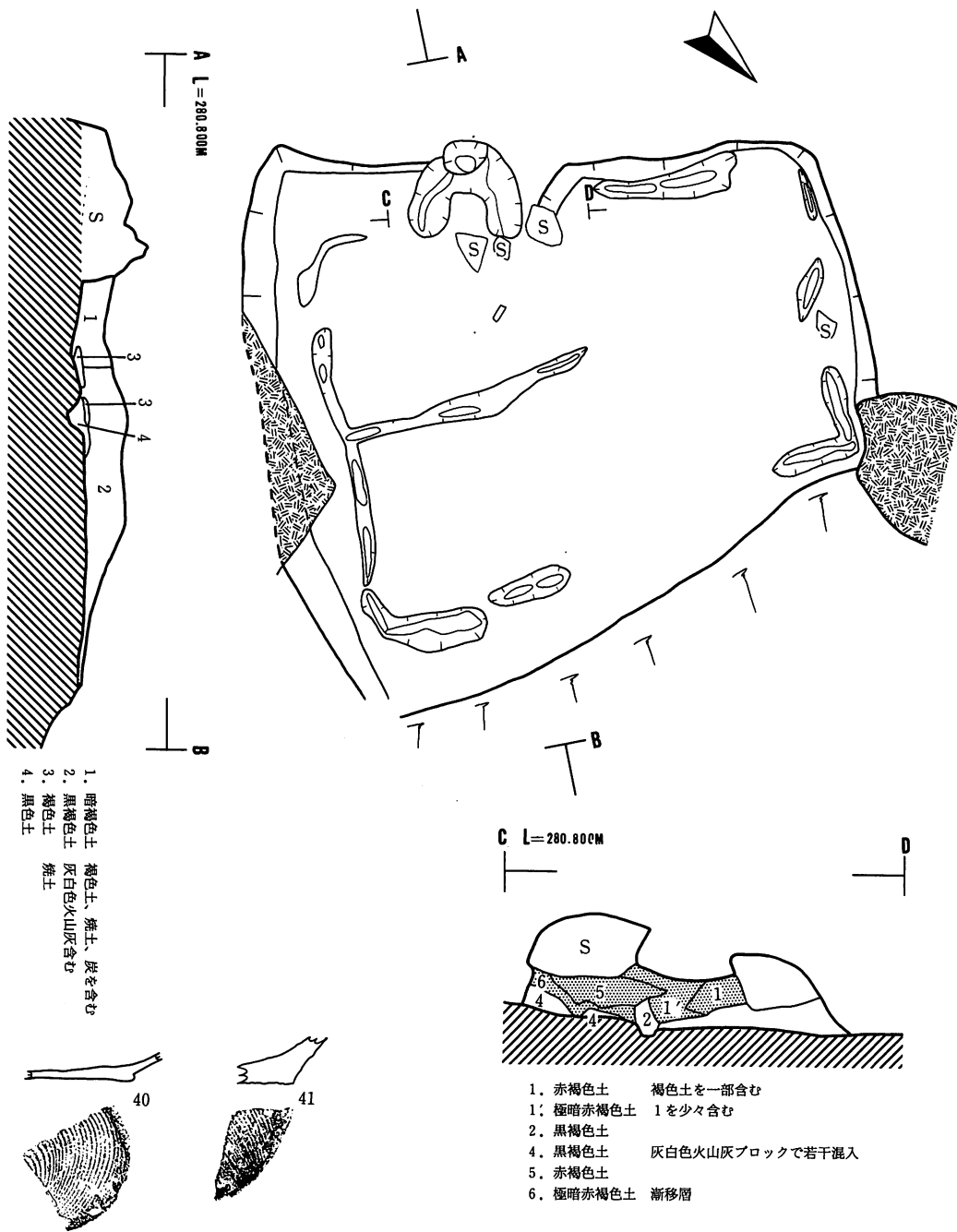
ほとんど遺物はなく、床面から坏1点と甕2点が出土した。

坏（第63図40、写真図版20）内面黒色処理した坏である。底部の切り離しの技法は雑である。胎土は粗いが焼成は良好で硬い。

甕（第63図41）2点とも底部であるが、41はロクロ使用で底部、体部とも再調整はない。もう1点は平底で体部下端に見られる調整はヘラケズリである。推定直径10 cm である。図示は省略した。

所属時期

時期決定資料が少ないため、不明である。ただし、灰白色火山灰が十和田a火山灰とすれば10世紀代が想定される。また、火山灰に着目して時期を推定するなら、その堆積状況から3区のX I N7d 住居跡に後続するものと推定される。



第63図 X VI K 2 c 住居跡・遺物

XVI K3e 住居跡

遺構（第 64 図、写真図版 19）

（位置）XVI K1d 住居跡の東 6 m に位置する。

（検出状況）完全に破壊されており、カマドの焼土のみが検出された。

（埋土・形状・規模・壁・床）不明である。

（カマド）上部構造は全く破壊され痕跡を残していない。燃焼部に形成された現地性焼土と破壊によって散乱した焼土が見られるのみである。燃焼部の焼土は 8 cm で明赤褐色で硬い。

（その他）人為的な削平により遺構のほとんど消滅し、遺存していたカマドの燃焼部に形成された焼土も一部が試掘トレンチによって破壊されてしまった。したがって、第 4 表の東トレンチ出土の土器の一部は本住居跡の遺物の可能性もある。

遺物（第 64 図 42～44、写真図版 20）

図示したのは 3 点であるが、他にも若干の土師器の小破片が得られた。

坏 胎土は粗砂を含まず、焼成もそれほど硬くはない。底部は回転糸切りである。明瞭な調整痕は見られないが、ロクロ目はほとんど見えず、糸切り痕は僅かに見える。あたかも、非常に緩く溶かした粘土に漬けたような様相を呈する。

甕 43 と 44 は異個体である。ともにロクロ整形した口縁部で、口縁部は有段を持って立ち上がる。口唇部は鋭い稜線となる。

所属時期

時期決定資料が少ないため、かなり困難ではあるが、出土遺物から XVI K1d 住居跡の時期に後続する時期と思われる。第 VIII-2 期（9 世紀後半から 10 世紀代）に位置づけられる。

XV K5f 住居跡

遺構（第 65 図、写真図版 19）

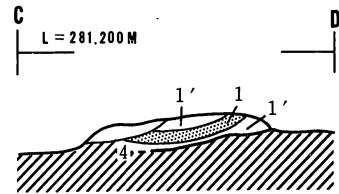
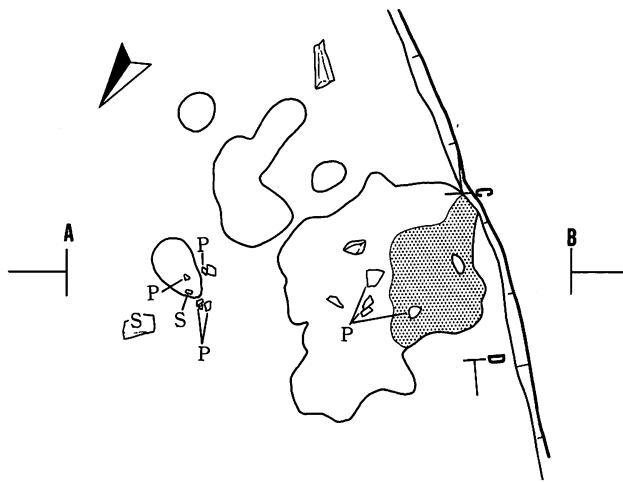
（位置）調査区西端の沢から約 10 m に位置する。沢からの比高は約 1.2 m である。

（検出状況）カマドの燃焼部に形成された焼土とその斜面下方で掘り方と思われる灰白色の粘土質シルトが含まれるやや濁った褐色土が L 字状に検出された。

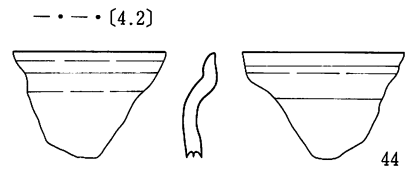
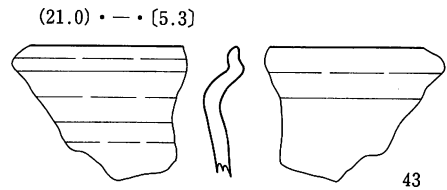
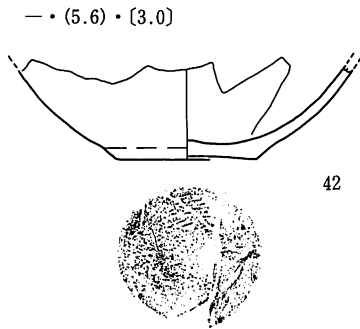
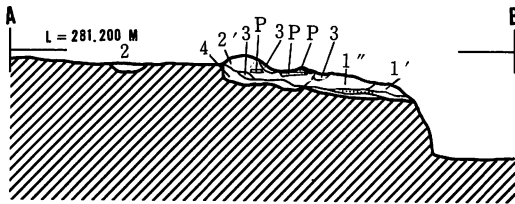
（形状・規模）掘り方及び焼土の位置や形状から推定すれば、方形で一辺が 5 m 程度のものと思われる。

（壁・床）削平されており不明。

（カマド）焼土は直径が 85～90 cm のほぼ正円で、厚さは 15 cm、明赤褐色で極めて硬い。焼土の周辺から若干の土師器が出土した。



- 1. 明赤褐色土 (カマド燃焼部焼土)
- 1: 明赤褐色土 1より若干黄色土ぎみ
- 1': 赤褐色土 1'より更に黄色土、黒色土化する
- 2. 褐色土 カマド構築土、土器を含む
- 2': 明赤褐色土 2がかたく焼成された所
- 3. 暗赤褐色土 黒色土に焼土粒が混入している
- 4. 黒色土



第64図 XVI K 3 e 住居跡・遺物

遺物（第 57 図 45～50、写真図版 20）

確実に本住居跡に伴う遺物はない。しかし、少なくとも 45～47 は焼土の脇から焼土と一緒に検出されたものであり、ほぼ伴うものとみなして良いと思われる。48 も住居跡と推定できる範囲内から同様の出土状況を示した土器で一応ここで取り扱うこととする。49、50 は本住居跡との関連は極めて薄い。しかし、付近に該当する遺構がないことと本遺構が人為的な破壊を受けたものであることを考慮すれば、ここで取り上げてよいと考えたものである。

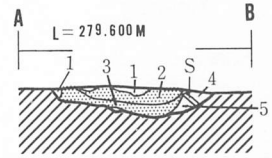
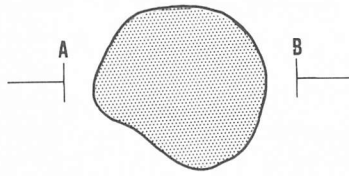
坏 45 は回転糸切りで内外面とも無調整である。成形がやや雑で内面の底部は成形時にできるへそ状の盛り上がりが見られる。46 は内面黒色処理、底部は回転糸切り無調整、47 は内面を丁寧に研磨し赤色の化粧土を薄く塗布している。底部外面は回転糸切りであるが、ヘラ状工具による若干の痕跡がみられる。

壺 48 は一応土師器の壺とする。口縁部は大きく外側に広がる。口唇部は細くなって稜線状となる。口縁部の中段は薄く剥落しておりその面に三角形の刺突が約 3 cm の間隔で横に一行に 3 点並ぶように看取される。刺突は内面までは達せず浅いものであるが、2 点は明瞭である。内外面に赤色の化粧土を塗布し、丁寧なヘラミガキが施される。頸部は一段とすぼまり、縦位にヘラミガキが行われる。

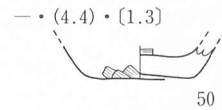
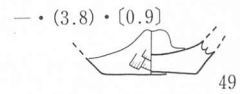
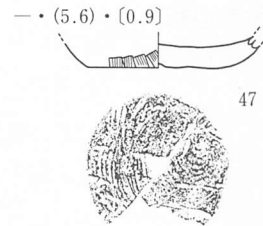
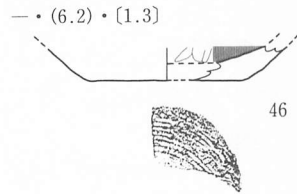
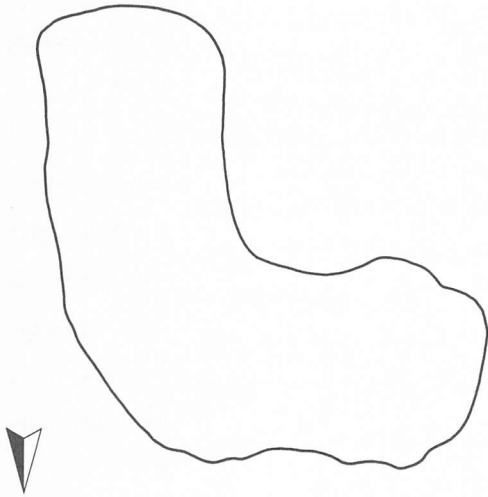
甕 49 と 50 の 2 点であるが、ともに直径が 4 cm 程度の底部である。49 は球胴甕の可能性もある。両者とも胎土は灰白色に近い褐色土で 47 に酷似する。

所属時期

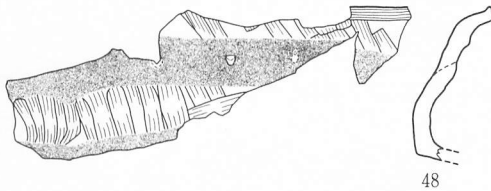
時期決定資料を欠くため、不明である。しかし、本遺構に共伴する可能性が最も強い坏に着目すれば X VI K1d 住居跡の時期に並行する可能性が強い。その場合は第 VIII-1 期（9 世紀前半）に位置づけられる。



- 1. 黒色土 赤褐色土粒、炭化物を含む
- 2. 褐色土 赤褐色土粒を少し含む
- 3. 赤褐色土
- 4. 黒褐色土 赤褐色土をブロック状と粒状に含む
- 5. 黒色土



(19.2) • — • [6.2]



第65図 X V K 5 f 住居跡・遺物

(2) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は土師器と須恵器である。これらの出土地点はある程度のまとまりを持つことから、人為的な破壊によって遺構は消滅し、若干の遺物が残存した状況と考えられる。したがって、調査区内には本来使用されたであろう礫等は何処かに処分されたらしく全く発見されていない。同様に、遺物総量も遺物収納コンテナ2個である。

坏 (第66図51~61、写真図版20)

坏は内面黒色処理され、底部の切り離しは回転糸切り無調整のものがほとんどである。器形が分かる51と52から見れば、器壁の立ち上がりはそれほど立ち上がるものでもなければ、大きく外反するものでもない。内面の調整は丁寧なものが多い。57と58は黒色の処理されたものであるが、炭化物はほとんど消滅している。59は唯一の高台付き坏であり、60は高台である。大きさも一致するし、出土地点もほぼ同じであることから同一個体の可能性はある。ただし、直接接合はしない。61は上記の坏とは著しく異なり、胎土には粗砂が多く含んでおり、内外面ともミガキの調整痕が見られる。ただし、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。

甕 (第66~67図62~72、写真図版20)

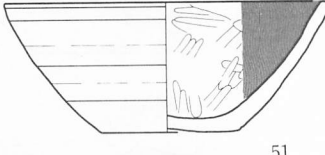
62は完形の小型の甕である。胎土は粗砂を多く含む良質ではない。体部の最大径はほぼ中央にあり、やや大きい口縁部は外反する。体部の調整はヘラケズリした後ヘラミガキ調整が施される。口縁部はナデ調整した後、内側に赤色顔料を用いて縦位に線が描かれる。線は合計7本である。線の幅は14mmで間隔は不揃いである。体部上半の内面には赤色が若干認められるが、これは口縁部に彩色した時に流れ込んだものである。全体として雑な造りの感じがする。63は62よりひとまわり大きく、調整の技法は全く同様であるが非常に丁寧である。64は口縁部から体部上半にかけてロクロ整形し、体部はヘラケズリをした長胴甕である。ヘラケズリは弱く、むしろヘラナデの状態である。それに対して、65の口縁部はくの字状に大きく外反し、ナデ調整であるが、体部はむしろヘラミガキで丁寧である。胎土も前者は粗砂を多く含むのに対し、後者は金雲母と細砂を含む緻密なものである。66は把手付き甕の把手である。非常に丁寧なミガキ調整を加えている。67は厚手の甕で、残滓が付着している。68と69の底部は回転糸切り無調整である。

70~72は青灰色をした須恵器の甕である。同一個体の可能性が強い。口縁部の造りや叩き目文等整形技法においてもかなり丁寧に造られ、胎土、焼成も良好である。器表面は平行叩き目文、裏面には平行線文の当て具痕が見られる。

古銭 (第67図205)

遺構外の粗掘り中に「寛永通宝」1点が出土した。

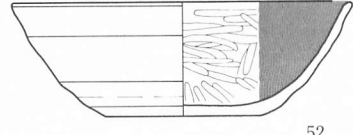
(13.0) · 5.2 · 5.2



51



13.6 · 6.2 · 4.5



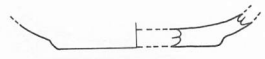
52



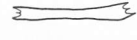
53



— · (6.6) · (0.9)



54



55



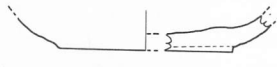
— · (0.6) · (0.8)



56



— · (7.0) · (1.1)



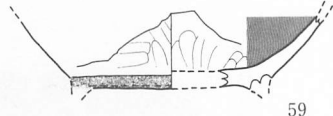
57



58



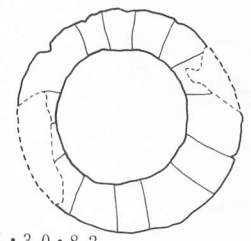
— · — · (2.7)



59

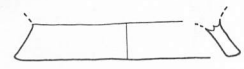


61



9.1 · 3.0 · 8.2

— · 9.0 · (1.5)

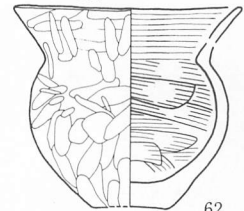


60

— · (3.6) · (1.7)



63

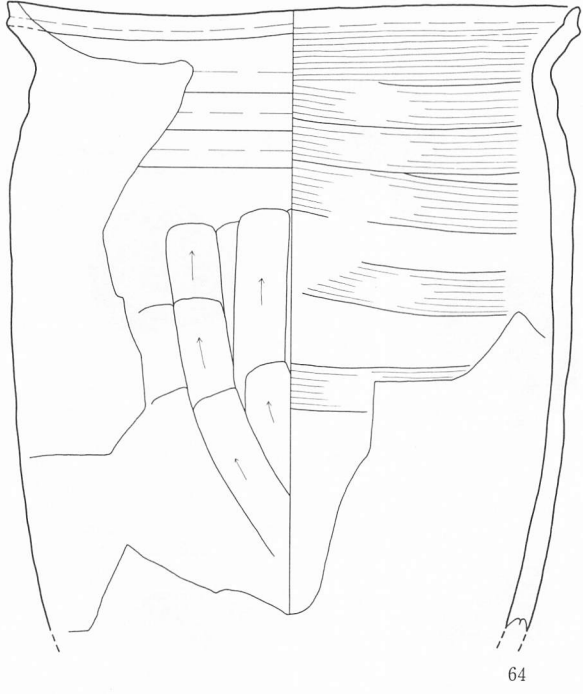


62

…朱塗り

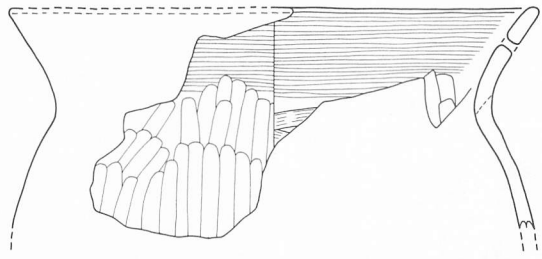
第66図 第VII群土器

(22.8) · — · [25.0]

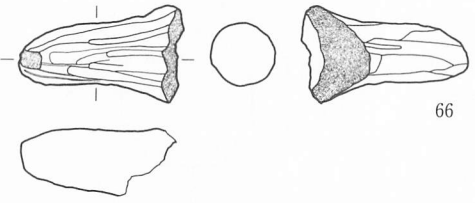


64

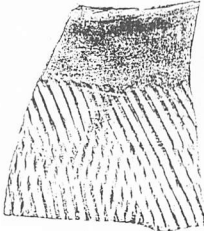
(21.2) · — · [8.8]



65

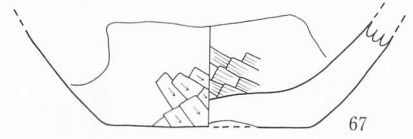


66



71

— · (8.4) · [3.7]



67

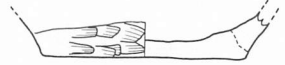
— (9.0) · [1.9]



68



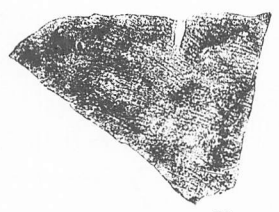
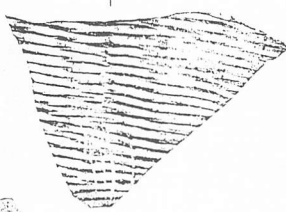
— · (8.2) · —



69



70



72



205

第67图 第七群土器

4 まとめ

・縄文・弥生時代について

縄文時代の土坑・陥し穴類は検出されたが、住居跡は発見されなかった。しかし、後世の人為的な削平を考慮に入れると居住空間として利用されていなかったとは言えない。

時期的には縄文中期末葉から後期中葉と弥生後期の遺物が中心である。しかし、遺構、遺物とも少なく、全体像を理解することは困難である。本遺跡は県道によって便宜的に5区と分けられたものであるから、5区との関連で考察する方がより実像に迫るものと考えられる。

・XVI K1d 住居跡の時期について

遺構の遺存度と内包していた遺物とからXVI K1d 住居跡を取り上げ、特にその時期決定について若干の考察を加えておきたい。

まず、遺構についてであるが、規模はほぼ5m四方であり、並のものである。しかし、その掘り込みは黒色土が厚いこともあってか、褐色土までは達していない。柱穴は6本であるが、その間隔は不揃いである。柱には割材が用いられている。類例は県内でも幾つか見られる。カマドは南西隅に寄り、煙道部は掘り込み式である。

4区の発掘結果のみならず、本調査区の周囲には広範囲に試掘トレンチを入れていることや、地形から考えると、本住居跡の周囲に何棟かが同時存在した可能性は認められるものの、多数の住居が並ぶ大規模な集落の可能性はない。

遺物のうち土器は坏と甕である。坏は内面黒色処理、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。甕は上半部をクロロ整形するもので球胴甕や口縁部に有段を持つような長胴甕等は見られない。須恵器の壺は共伴するが、坏はない。これらの状況からすれば、9世紀前半に位置づけられることは間違いないものと思われる。同時に出土した太刀は、平安期初頭ないし奈良期の8世紀末まで遡る可能性があるとされる。^{*}₁また、鉄製紡錘車はこれまでのところ県内では全て平安時代の遺跡からのみ発見されている。(高橋 1984)^{*}₂鉄斧は袋状に巻き込むところが離れるタイプで、これは志波城跡からは複数の出土例が報告されている。(高橋 前掲書)

以上のことから、本遺構は平安時代前葉に位置づけられるものである。

・二三の土器について

XVI K1d 住居跡が平安時代前葉(9世紀前半)に位置づけられるとすれば、同住居床面から出土した39の土器はどう理解されるものであろうか。口縁部は大きく外反し、口唇部やその直下に回る隆起帯に付けられる細かな刻みは、断面が三角形をなす。技法的には後北C2式ないし後北D式と見られる。小片のため器形を推定するのは困難であるが、少なくとも当該土器のものとするれば器形的には極めて珍しく、江別市坊主山遺跡出土に見られる口縁部が大きく外反する鉢(「縄文土器大観 4」P.243)のものであろうか。^{*}₃しかし、仮にそうであったとしても

後北 C2 式ないし D 式が 9 世紀前半まで下がるということは、伝製品としての時間的なロスを如何に認めたとしても疑問が残る。しかし、当該住居跡からの出土ではないものの 17 と 18 の存在も考慮する必要がある。これは口唇部及びその直下に走る隆起線に細かな刺突がはいり、縦位に沈線で区画された中に、三角形の刺突と縄文が交互に充填される。沈線で区画されることや刺突文が区画内で横位に展開されるなど、細かな点では典型的な後北 C2 ないし D 式とは異なるとは言え、ほぼこれらに並行するものと考えられるものである。

更に、48 の土器はより理解が困難なものである。器種は壺と想定したい。口縁部の形は五領式の土師器に通じるものがあるが、内外に赤色の化粧土を塗布した後、丁寧なヘラミガキ調整が施されること、剥落しているため詳細は不明であるが横位に刺突が加えられていると思われること、頸部に縦位のヘラミガキ調整が明瞭に加えられていること等から五領式並行の土師器とすることは困難である。器形を別とすれば、技法的には北海道系の土器に通じるものがある。しかし、北大式にしても、擦文土器を考えても類例を見いだすのは困難である。

以上の土器はいずれも北海道系を考慮せざるを得ない土器である。しかも、出土地点が異なるし、同時期のものかどうかは不明である。39, 17, 18 は仮に同時存在だったとしても、48 も同じ範ちゅうに納まるものとは言い難い。とすれば、この上八木田地区には古代のある時期に何度かに渡って北海道方面との交流が行われたことになる。

また、39 の土器が如何に床面からの出土だからと言っても本住居跡に伴うものではなく、流れ込んだものかもしれない。しかしまた、伴うものだとすればこれまでの土器の編年観を変える貴重なものとなるものである。今後の資料の増加を待って検討したい。

* 1 梅原氏のご教示による。

* 2 高橋氏の指摘後、県内における当該資料が増加しており、それらについても検討を加えたが、8 世紀代（奈良期）に遡る発見例は今のところない。

* 3 筆者は当該遺跡の本報告書や実物を実見していないため、誤認をしているかもしれない。

第4表 縄文・弥生等土器・土製品観察表

遺物番号	出土地点	器種	部位	計測値			文様体等	備考	時期	図版番号	写真図版
				口径	底径	高さ					
1	XVIK 2i	破片	口縁部				原体側面圧痕	廃棄された焼土中	II-3	53	16
2	XVIK 8f	破片	口縁部				磨消縄文		III-3	〃	〃
3	XVK 4g	深鉢	体部				磨消縄文		III-3	〃	〃
4	XVK 4f	深鉢	体部				磨消縄文		III-3	〃	〃
5	XVIK cd	破片	口縁部				沈線文	施文が浅い	IV-1	〃	〃
6	XVK 5f	深鉢	口縁部				刻み帯		IV-2	〃	〃
7	XVK 9c	香炉形	体部				沈線文	突孔を有する?	IV-2	〃	〃
8	XVIK 3d	破片	体部				沈線文	炭化物付着	IV-2	〃	〃
9	XVK 4f	深鉢	口縁部				沈線文、刻み	炭化物付着	V-2	〃	〃
10	XVK 5e	浅皿	口縁部				平行沈線文		VI-2	54	〃
11	XVK 5i	破片	体部				沈線による区画文		VI-2	〃	〃
12	XVK 8g	甕	体部				沈線文		VI-2	〃	〃
13	XVK 9c	破片	体部				沈線文		VI-2	〃	〃
14	XVK 4c	破片	体部				沈線文		VI-2	〃	〃
15	XVL	破片	体部				連弧文		VI-2	〃	〃
16	XVIK	甕	底部		(6.2)	[1.9]	捺糸文		VI-2	〃	〃
17	XVK 6d	鉢	口縁部			[6.2]	微隆帯、三角形刺突、沈線	炭化物付着	VII	〃	16
18	XVK 8d	破片	底部		4.4	[1.5]	沈線、単節(RL)	炭化物付着	VII	〃	〃
19	XVIK 1d	深鉢	口縁部				単節(LR)	炭化物付着	VIII-1	〃	〃
20	XVK 5d	深鉢	口縁部				単節(LR)	炭化物付着	VIII-1	〃	〃
21	XVK 4f	深鉢	底部		(6.4)	[2.4]	上げ底		VIII-3	〃	〃
22	粗	破片	底部		(5.5)	[2.4]	磨消縄文	施文が不鮮明	VIII-3	〃	〃
23	XVL	深鉢	底部		23.0		単節(LR)、木葉痕		VIII-3	〃	〃

第5表 4区石器・石製品一覧表

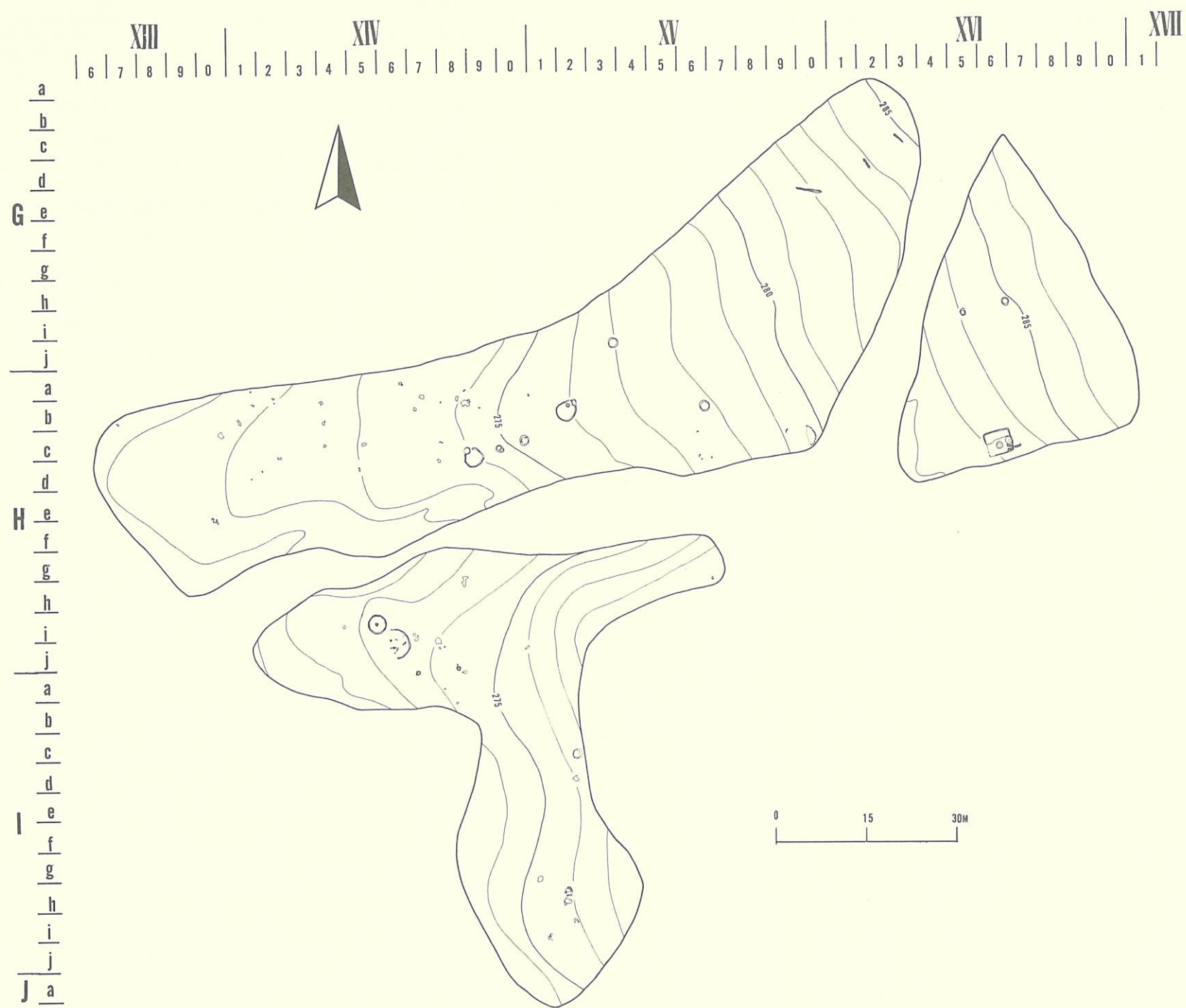
遺物番号	出土地点	器種	計測値				欠損状況		石	材	備考	図版番号	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部					
101	XVK 9d	石鏃	4.7	1.6	4.0	2.0	○		珪質粘板岩		55	6	
102	XVIK 7h	石斧	17.1	6.2	3.5	515.0	○		チャート質淡緑色凝灰岩		〃	〃	
103	XVK 4f	石斧	2.8	6.0	2.2	37.2	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃	
104	XVK 0f	石斧	5.1	3.8	12.0	31.4	○		粘板岩ホルンフェルス		〃	〃	
105	XVK 4h	石斧	5.3	4.3	1.8	57.2	○		硬砂岩		〃	〃	
106	XVIK 4f	石皿	21.3	16.2	5.5	3200.0	○		硬砂岩		〃	〃	
107	粗	石皿	8.0	6.2	5.0	210.0	○		凝灰質硬砂岩	加熱を受ける	〃	〃	
108	XVK 6d	磨石	5.4	5.8	3.3	75.0	○		両輝石安山岩溶岩		56	〃	
109	XVK 0e	敲石	12.9	9.5	9.5	1180.0	○		硬砂岩		〃	〃	
110	東トレンチ	磨石	10.0	6.0	3.7	340.0	○		凝灰質硬砂岩		〃	〃	
111	粗	磨石	4.4	4.5	3.5	58.5	○		両輝石安山岩溶岩		〃	〃	
112	東トレンチ	磨石	5.6	8.7	7.6	260.0	○		安山岩溶岩		〃	〃	
113	粗	敲石	3.8	2.1	1.2	22.5	○		チャート質粘板岩		〃	6	
114	XVIK 1d住	砥石	17.0	6.0	5.1	678.0	○		流紋岩	平安時代	〃	〃	

第6表 4区 古代土器・土製品 観察表

遺物 番号	出土地点	器種	計測値			文様体等	備考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
24	XVIK1 d 住	坏		(8.4)	[2.4]	内面黒色処理、底部再調整		VII-1	59	20
25	XVIK1 d 住	坏		(6.4)	[1.4]	内面黒色処理、底部再調整		〃	〃	〃
26	XVIK1 d 住	坏			[1.1]	内面黒色処理、高台付き	床	〃	〃	〃
27	XVIK1 d 住	坏				内面黒色処理、底部再調整		〃	〃	〃
28	XVIK1 d 住	坏				内面黒色処理、回転糸切り無調整	床	〃	〃	〃
29	XVIK1 d 住	坏	(14.0)	(5.4)	[5.3]	回転糸切り無調整	床	〃	〃	29
30	XVIK1 d 住	坏				回転糸切り無調整	床	〃	〃	〃
31	XVIK1 d 住	壺	12.0		[13.0]	体下半ヘラナデ	須恵器	〃	〃	20
32	XVIK1 d 住	甕				ヘラナデ	カマド	〃	〃	〃
33	XVIK1 d 住	甕	(24.0)		[9.4]	ロクロ使用	床、炭化物付着	〃	〃	20
34	XVIK1 d 住	甕	(24.4)		[7.2]	ロクロ不使用、ヘラナデ		〃	〃	〃
35	XVIK1 d 住	甕		10.4	[9.7]	ロクロ不使用、ヘラケズリ	床、炭化物付着	〃	〃	60
36	XVIK1 d 住	甕		(11.4)	[9.6]	ロクロ不使用、ヘラケズリ	床	〃	〃	〃
37	XVIK1 d 住	甕		(7.4)	[1.4]	回転糸切り無調整		〃	〃	〃
38	XVIK1 d 住	甕				回転糸切り無調整	床	〃	〃	〃
39	XVIK1 d 住	鉢				隆起帯、刻み	床、炭化物付着	〃	〃	〃
40	XVIK2 c 住	坏				内面黒色処理、回転糸切り無調整	床	VII-2	63	〃
41	XVIK2 c 住	甕				回転糸切り無調整	床	〃	〃	〃
42	XVIK3 e 住	坏		(5.6)	[3.0]	回転糸切り無調整、ナデ	カマド	〃	64	20
43	XVIK3 e 住	甕	(21.0)		[5.3]	ロクロ整形	床	〃	〃	〃
44	XVIK3 e 住	甕			[4.2]	ロクロ整形	カマド	〃	〃	〃
45	XVK5 f 住	坏		(4.4)	[0.7]	回転糸切り無調整		〃	〃	65
46	XVK5 f 住	坏		(6.2)	[1.3]	内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
47	XVK5 f 住	坏		(5.6)	[0.9]	回転糸切り後粗い調整	内面に化粧土塗布	〃	〃	〃
48	XVK5 f 住	壺	(19.2)		[6.2]	内外面ヘラミガキ	内外面に化粧土塗布	〃	〃	20
49	XVK6 f	甕		(3.8)	[0.9]	ヘラミガキ		VII 1~2	〃	〃
50	XVK6 f	甕		(4.4)	[1.3]	ヘラケズリ		〃	〃	〃
51	東トレンテ	坏	(13.0)	(5.2)	5.2	内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	66	20
52	XVK2 i	坏	13.6	6.2	4.5	内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
53	東トレンテ	坏				内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
54	XVK8 d	坏		(6.6)	[0.9]	内面黒色処理、回転糸切り無文帯		〃	〃	〃
55	XVIK5 h	坏				内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
56	XVIK3 g	坏		(6.0)	[0.8]	内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
57	XVIK3 g	坏		(7.0)	[1.1]	内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
58	XVIK	坏				内面黒色処理、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
59	東トレンテ	坏		(8.0)	[3.0]	内外面黒色処理、高台付き	高台は剥落	〃	〃	〃
60	XVII	坏		(9.0)	[1.5]	ヨコナデ		〃	〃	〃
61	XVK8 c	坏				内外面再調整、回転糸切り無調整	胎土に粗砂を含む	〃	〃	〃
62	XVK7 d	甕	9.1	3.0	8.2	ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面口縁部に朱彩	VII-1	〃	20
63	XVK0 e	甕		(3.6)	[1.7]	ヘラケズリ後ヘラミガキ		VII 1~2	〃	〃
64	東トレンテ	甕	(22.8)		[25.0]	上ーロクロ整形、下ーヘラケズリ		〃	67	〃
65	XVIK1 b	甕	(21.2)		[8.8]	ヨコナデ、ヘラミガキ	補修孔、炭化物付着	〃	〃	〃
66	XVK9 e	把手				ヘラミガキ	長さ5.8 cm	〃	〃	20
67	東トレンテ	甕		(8.4)	[3.7]	ヘラケズリ	炭化物・残滓付着	〃	〃	〃
68	XVIK1 h	甕		(9.0)	[1.9]	ヘラケズリ、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
69	東トレンテ	甕		(8.2)		ヘラナデ、回転糸切り無調整		〃	〃	〃
70	XVIK4 c	甕				内面に自然釉	須恵器	〃	〃	〃
71	東トレンテ	甕				体部上端は無文、叩き目	須恵器	〃	〃	20
72	XVIK1 d	甕				叩き目	須恵器	〃	〃	〃

VI 上八木田V遺跡

遺跡台帳番号	LE18-1126
調査略号	KY V-90
調査面積	7,590 m ²
調査期間	平成2年7月16日～11月7日
整理期間	平成2年11月1日～平成3年3月31日
調査担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 文化財専門調査員 齊藤 実 千葉 孝雄 専門職員 相原 伸裕
整理担当者	主任文化財専門調査員 平井 進 専門職員 相原 伸裕



第68图 5区遺構配置図

1 5区の地形概観と遺跡の立地

5区は西に向かって開かれた袋状の地形であり、西側を除く周囲は尾根によって囲まれている。遺跡の北、東、南に3本の沢が流れている。これらを仮に北沢、東沢、南沢と呼ぶ。北沢は北尾根の脚部、東沢は更に奥の東側尾根と北側尾根の2箇所それぞれ湧水を持つ。湧水地点はいずれも海拔276~280m付近である。南沢は4区から流れてきたものである。これら3本の沢はXIII区付近で合流し、八木田沢となって西流する。北沢と東沢の水量はそれほど多くはないが、渴れることはない。南沢は沢としては相当量の水量を有する。遺跡はこれらの沢沿いに立地する。沢によって3ブロックに分けられるため、一番東側をA区、その西側に続く区域をB区、南側にT字状に広がる区域をC区と呼ぶこととする。遺跡の中心はB区の中央から西側の僅かに馬の背状を呈する平坦地と、C区の舌状に張り出した馬の背状の低い尾根の上である。同所は、西流する沢を挟んでB区の遺構、遺物が集中する所の対岸にあたる。

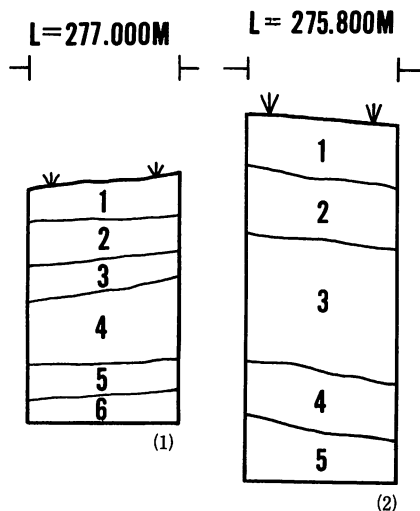
2 基本層序

遺跡の土層は斜面とそれを開析する沢が幾筋にも流れを変え、一部には再堆積層を構成するなど複雑に入り組んでおり、遺跡全体の層序を統一的に捉え模式図化する事は出来ない。そこで、遺跡の中央付近のXIVH 0aグリッド(1)とXVI 1aグリッド(2)地点での土層柱状図を示しておく。

(1)は1~2層が黒色土のシルトである。1は表土で締まりがない。3層は黒褐色土、4層はやや濁った褐色土、5は黒褐色土となり、6より下は基盤層の褐色土となる。したがって、厳密には1~5の全部の層が再堆積層と見られなくもないが、一般的には3~6が再堆積と呼ばれるものである。

(2)は1が黒褐色土のシルトで表土である。2、3は締まりに違いはあるものの黒色土で厚い堆積となっている。4層、5層は(1)での5層、6層に相当する。

しかし、前述したように、複雑な土層と薄い所では基盤層までが僅か20cmにもならない所もあり、しかもその層中に多量の遺物が縄文早期から土師器まで混然として包含されていた。したがって、本遺跡では層位的発掘は不可能であった。



第69図 5区土層柱状図

3 検出された遺構と遺物

〔1〕縄文時代

縄文時代に属する遺構は竪穴住居跡6棟、土坑7基、陥し穴3基、炉跡ないし焼土遺構44箇所である。遺物は土器・土製品と石器・石製品が出土した。土器は縄文時代前期が中心で、量的には遺物収納用コンテナ25箱である。石器はフレイク、チップ類を除くと約300点出土した。礫石器が多い。

(1) 住居跡

検出された住居跡は6棟である。出土遺物等によって、時期を特定できるものは前期後葉2棟、後期後葉1棟、晩期前葉1棟の合計4棟、時期不明のもの2棟である。

XIV H 5 i 住居跡

遺構（第70図、写真図版21）

（位置）C区尾根の上に位置する。沢との比高は約2mである。

（検出状況）XIV H5i 炉跡の断面を調査していた時、その下に位置していた本住居跡の炉を発見した。平面形はほとんどその時点では把握できなかった。

（埋土）黒褐色土と暗褐色土の2層に大別されるが、黒褐色土が卓越する。その黒褐色土は地山に比し締まりがなく、色調では区別し難いが掘り過ぎることはなかった。

（形状・規模）平面形は円形、直径（床面で測定、以下同じ）2.8mである。

（壁）壁高は概ね15cmで崩壊している所はない。

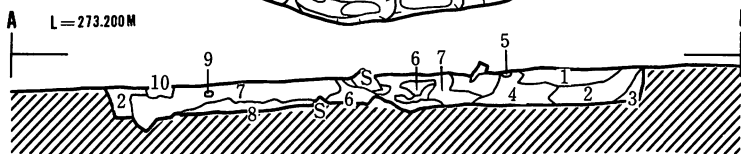
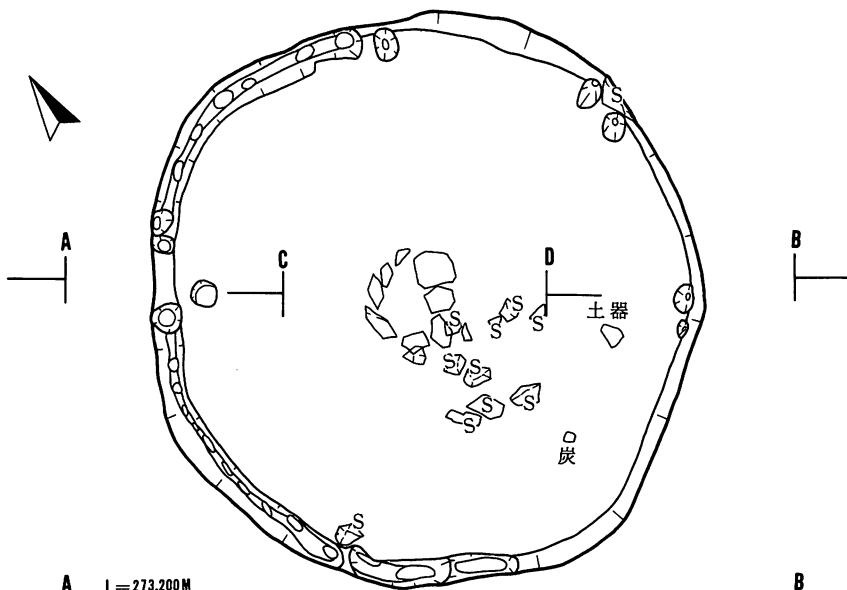
（床）ほぼ水平で平坦である。斜面の下方側に周溝が回る。周溝は杭跡状となっている。周囲に床面より10cmほど円錐形にくぼむ所が4箇所見られたが、所謂支柱穴はない。もしも、そのくぼみが柱穴痕とすれば、その配置から後2本の柱穴痕が想定され、6本柱であった可能性が高い。特に踏み締められている所はない。

（炉）ほぼ中央に石囲い炉1基がある。大小8個の山石を用いて造っている。焼土は10cmほど見られるが、直接地山が焼成を受け硬く焼けている所は5センチほどである。炉の作り替えの痕跡は見られない。

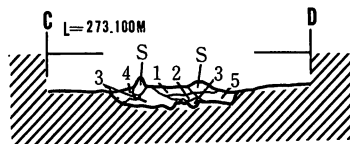
（その他）炉の南側には炉に使われていたものと同様な礫が散乱していたが、それらは焼成を受けた痕跡等は見られなかった。

遺物（第70図1、写真図版33）

1の土器は一部は炉の中から、一部は床面からでた深鉢である。口縁部、底部ともに欠くため不祥な面もあるが、口縁部文様帯の下端に横位に浅い沈線が引かれ、そこから体部には綾絡文が垂下する。厚手で赤褐色を呈す。大木6式または大木7a式に比定される。

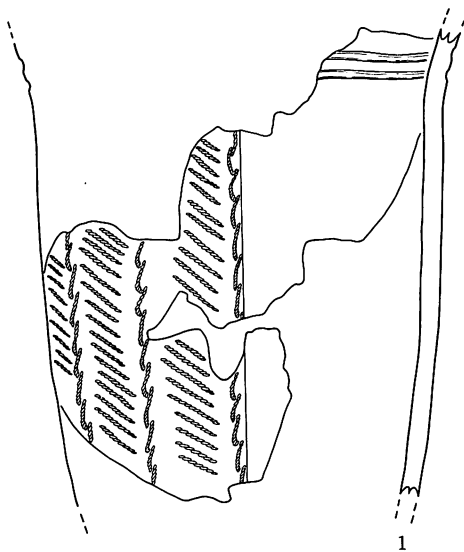


1. 黒色土
2. 黒褐色土 (含、炭)
3. 暗褐色土 (含、黒褐色土、褐色土)
4. 暗褐色土 (含、黒褐色土、褐色土、炭)
5. 暗褐色土 焼土
6. 黒褐色土 (含、焼土粒、黄褐色パミス、黒褐色、炭)
7. 黒褐色土 (含、炭)
8. 暗褐色土
9. 赤褐色土 焼土
10. 黒褐色土 淡い焼土



1. 黒褐色土 (含、焼土、炭化材)
2. 暗赤褐色土 焼土
3. 黒褐色土 (含、砂)
4. 黒褐色土
5. 黒褐色土 (含、褐色土、粘土)

--- (18.8)



第70図 XIV H 5 i 住居跡・遺物

所属時期

1の土器から、前期末葉から中期初頭に位置づけられる。

XIVH 6i 住居跡

遺構 (第71図、写真図版22)

(位置) C区尾根の上に位置する。西流する沢との比高は約2.3m、南流する沢からは約3mである。

(検出状況) 炭化物、焼土粒が暗褐色土内に含まれ、ほぼ円形に検出された。

(埋土) 下位に黄褐色土が部分的に散見されるが、締まりのない暗褐色土の単層である。

(形状・規模) 円形で直径4.6mである。

(壁) 全体として掘り込みは浅く、斜面下位では壁は流失している。しかし、斜面上位では一部基盤層の褐色土を掘り込んでおり最大の壁高は40cmとなる。

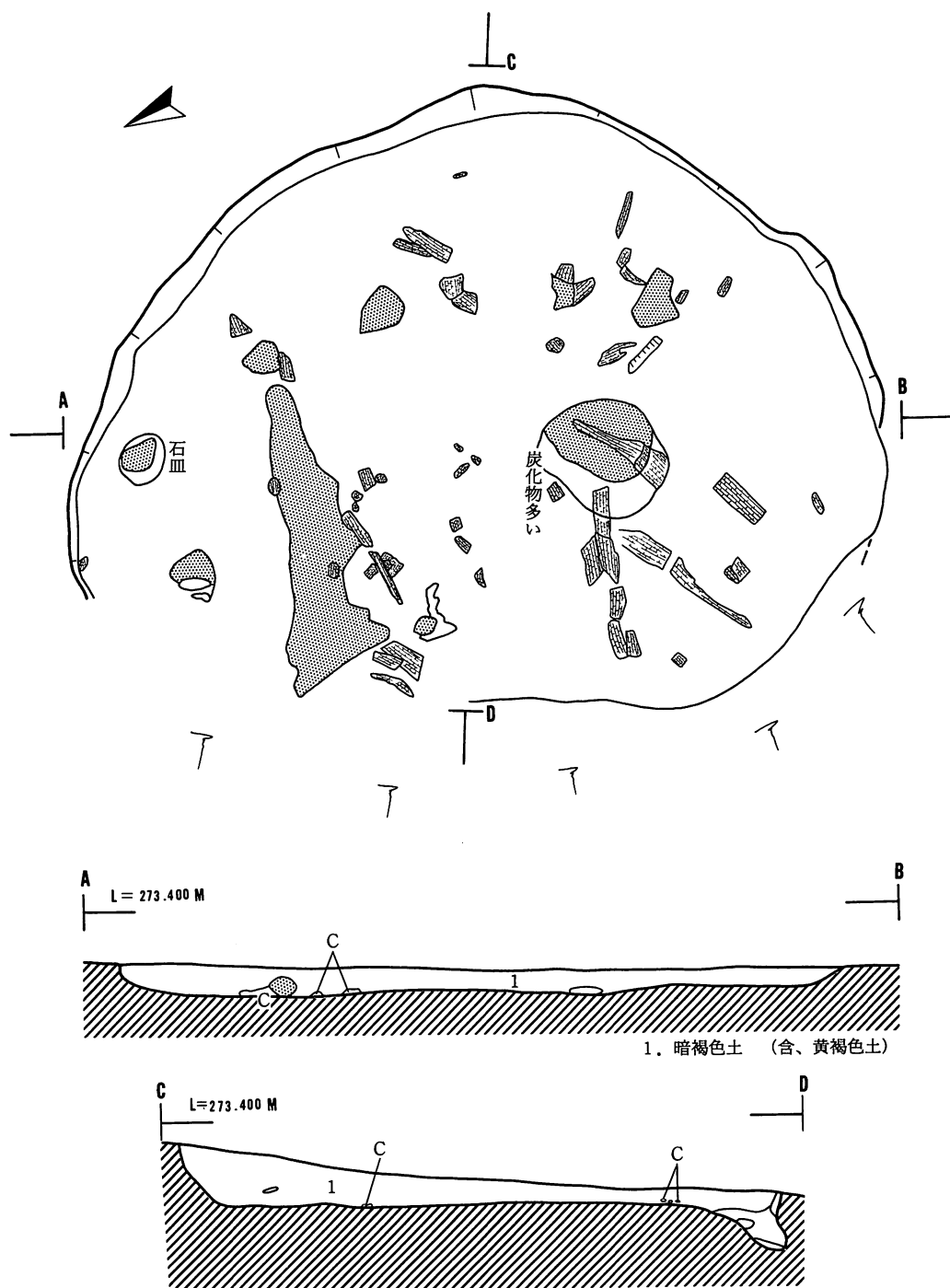
(床) 基盤層の褐色土を床面とする。水平で平坦である。周溝、柱穴等は見られない。

(炉) 中央よりやや南によった所に地床炉1基を有する。楕円形で規模は45×65cm、厚さ4cmである。炉の南側により多くの炭が分布している。

(その他) 焼失住居である。炭化材は多く出土したが、いずれも完全な形として遺存しているものはない。また、加工痕を有するものも見られない。炭化材の向きは概ね中央を向いている。最大幅は15cmである。しかし、長さは最大でも1.5mである。焼土は斜面上位側により多く分布する。また、中央よりやや北によった所には厚さ5~10cmの焼土が幅30cmほどの帯状となって検出された。この焼土帯はほぼ床に密着しているが、床は赤化していない。

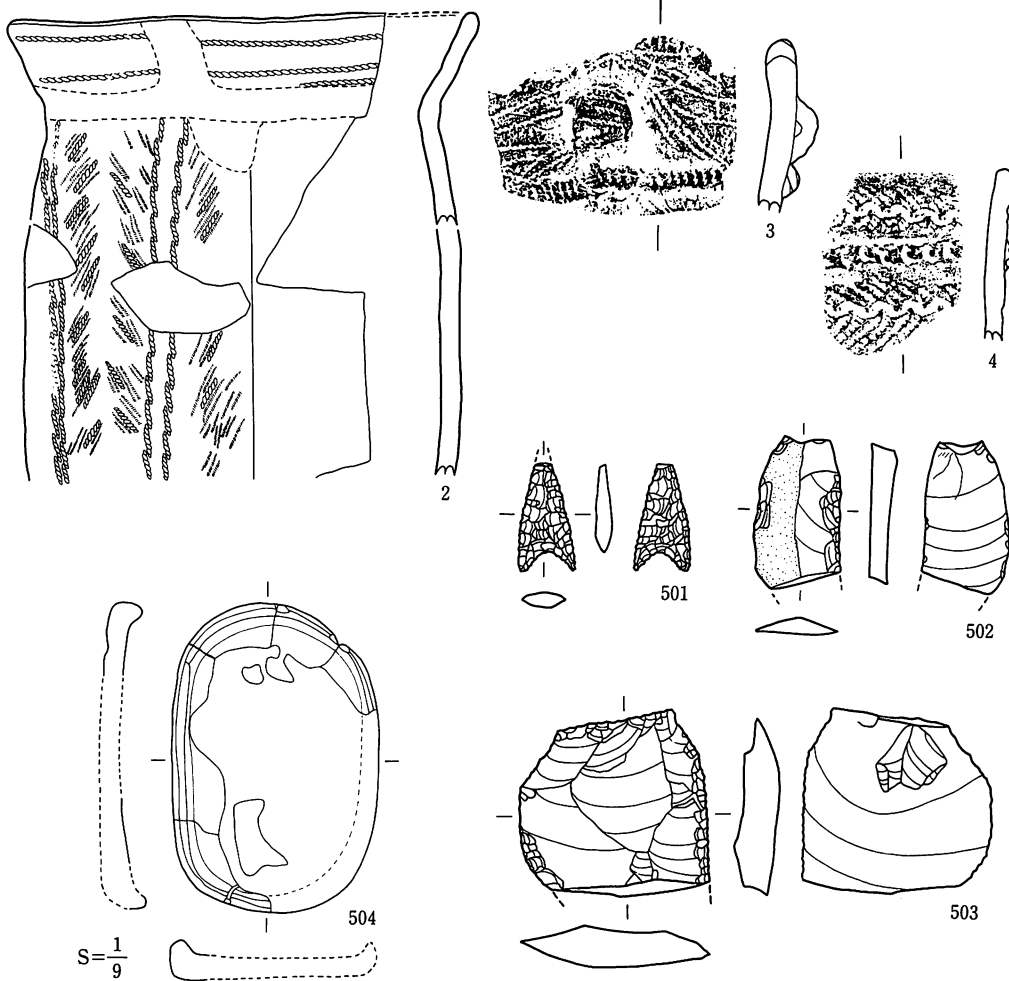
遺物 (第71~72図2~4、501~504、写真図版33)

2は深鉢の上半部である。平縁で、口縁部文様体は隆帯で4分割され、中に1段Rの原体側面圧痕が3条回る。体部にはLr(あるいはLrr)とRL閉端原体を用いた綾絡文が垂下する。3は橋状把手状の小さな貼付文が施される。口縁部には原体側面圧痕が押圧される。4は隆起帯1本を巡らし、その上に半截竹管で刺突が加えられる。口縁部、体部とも横位の綾絡文が展開する。口縁部幅は3cmである。501は無茎の石鏃で先端部が欠損する。502、503はスクレーパーで一部欠損している。以上の遺物は全て埋土内から出土したものである。504は石皿で出土した時点では完形品であったが、石質が極めて脆くなっておりそのままの状態を取り上げることはできなかった。出土地点は西壁で、立てかけた状態で出土したものである。内面を1~1.5cmほど彫り込んで作ったものである。使用面は一部の観察だけであるが、凹凸が激しくざらざらしている。



第71図 XIV 6 i 住居跡

18.8・—・18.4



第72図 X IV H 6 i 住居跡・遺物

所属時期

出土した土器により、縄文前期末葉から中期初頭に位置づけられる。

XV I1a 住居跡

遺構 (第 73 図、写真図版 23)

(位置) C 区の東側に位置する小高い山の脚部に位置する。同地点は傾斜変換点にあたり、本遺構より東側は急斜面となって上っていく。西側は XIV H6i 住居跡の方に向かって緩やかに舌状に張り出す地形となっている。

(検出状況) 斜面のだめ押しにより、炉跡と住居跡の埋土断面を検出した。

(埋土) 暗褐色土、黒褐色土、黒色土の 3 層に大別されるが、暗褐色土が卓越する。U 字状の自然堆積である。ただし、埋土より上に褐色土が 30 cm 程も堆積している。これは本遺構の東側に県道を通した時の廃土と考えられる。

(形状・規模) 斜面下位側が流失しており全形は不詳であるが、楕円形ないしややゆがむ程度の円形と考えられる。規模は推定の直径が 2.8 m 程度と思われる。

(壁) 最大壁高は 94 cm である。上位は外反するが、概ね直線的に立ち上がる。

(床) 水平かつ平坦である。周溝はない。柱穴は 2 基検出された。P1 は 22 cm、P2 は 34 cm である。しかし、全体の配置は不明である。

(炉) 石囲い炉である。斜面下位側の石はなくなっている。削平に伴うものと思われる。

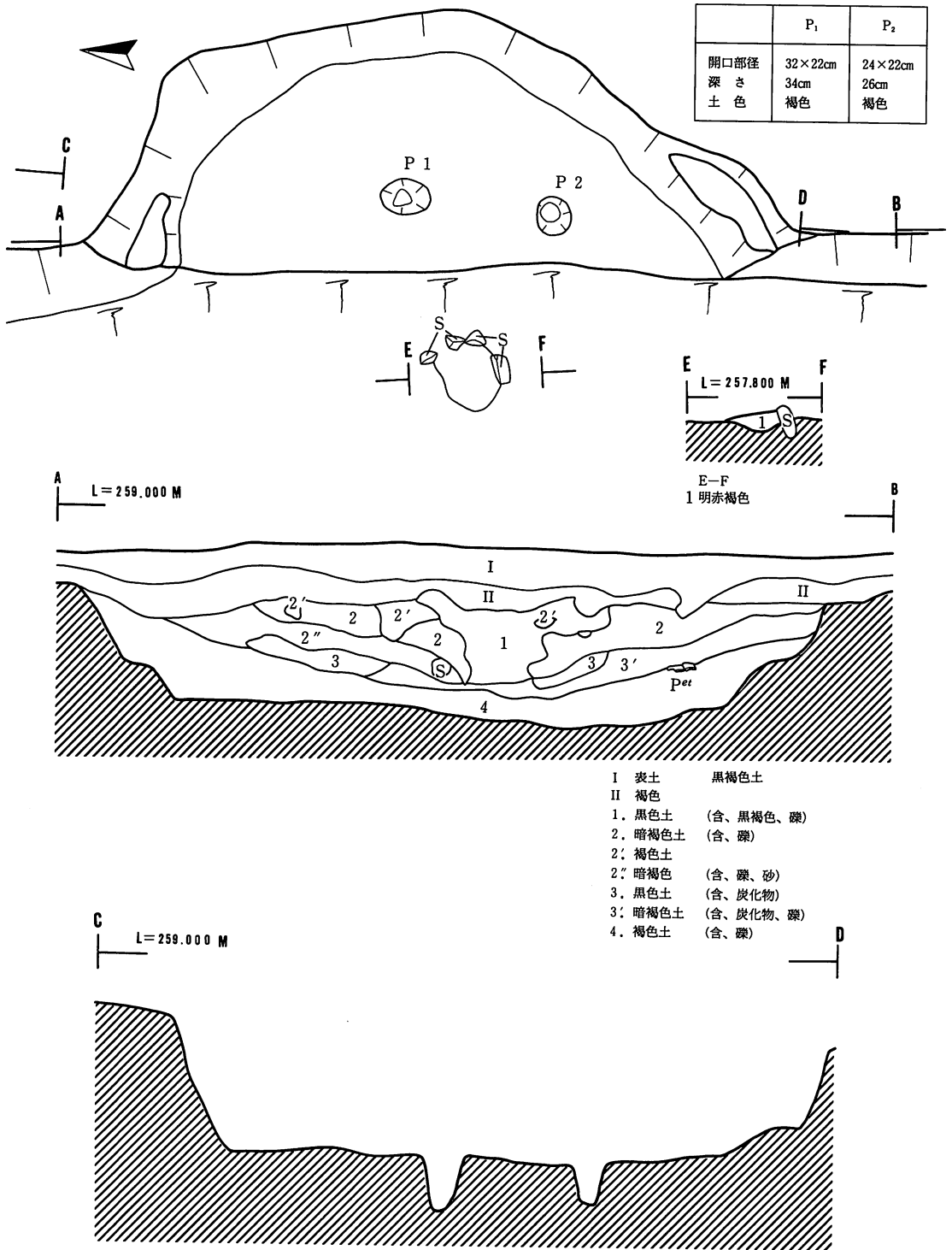
遺物 (第 74 図 5~14、505~507、写真図版 33)

5、6 は床直上、他は埋土上位から出土した土器である。5 は刻み帯を有する磨消縄文、6 は高さ 3 mm ほどの付け高台を有する底部である。埋土内から出土した土器は B4 判大のビニル袋 2 個分であるがほとんど埋土上位のものであり、本遺構に伴うかどうかは疑問である。7~10 はすべて刻み帯を有し、磨消部を有する土器である。11 は隆帯に区画された中に 3 本の波形沈線文が充填される。12 は整った隆起帯を貼付する。13 は付け高台を有する深鉢の底部である。14 は非常に丁寧な磨きを加えた壺である。

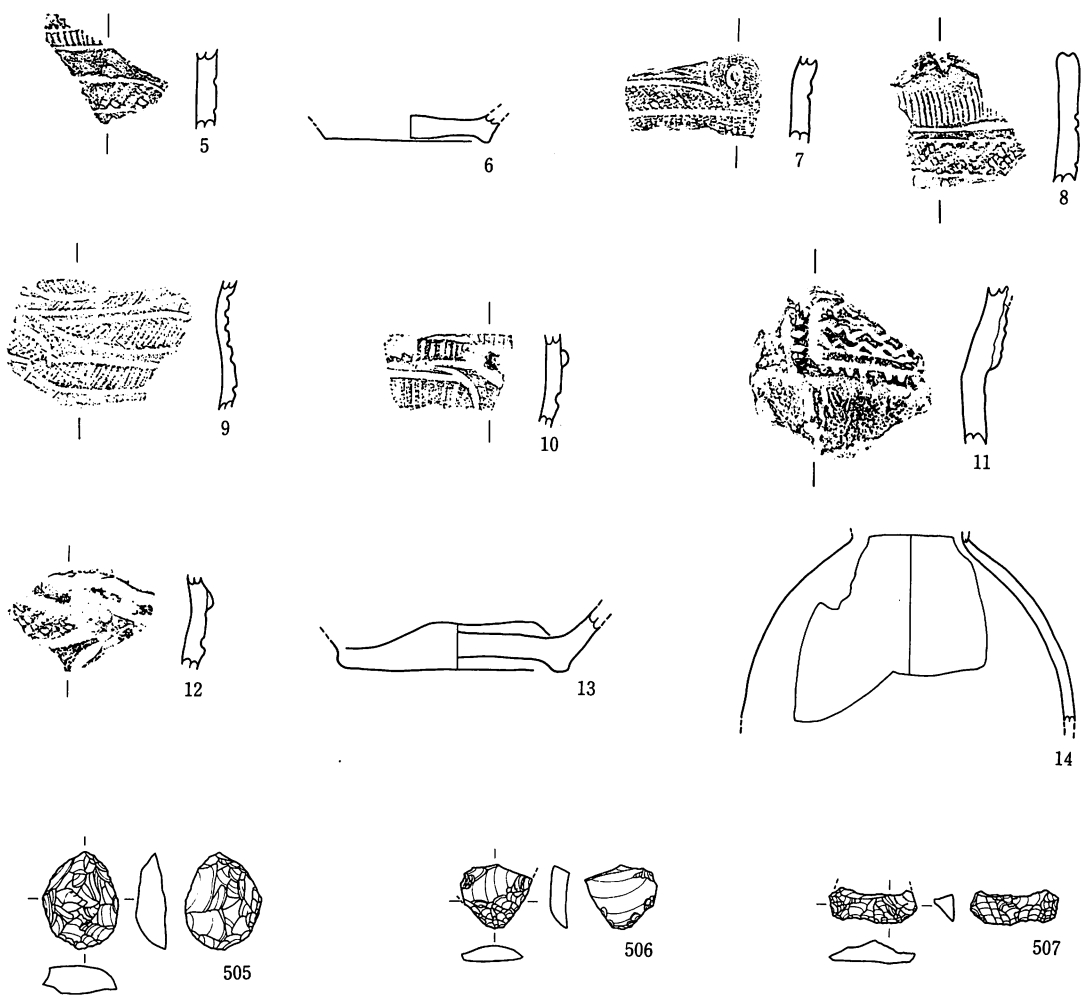
石器は炉の近くの床面から 6 点が出土した。そのうちフレーク 3 点は省略する。505~507 はスクレーパーである。505 は完形のラウンド・スクレーパー、後の 2 点の一部を欠損する。

所属時期

5 と 6 の遺物及び遺構の形態から縄文後期後葉に属する。



第73図 XV11a 住居跡



第74図 XV la 住居跡・遺物

XIVH 8c 住居跡

遺構 (第 75 図、写真図版 24)

(位置) B 区中央付近に位置し、沢までの距離は 12 m、比高 1 m である。

(検出状況) 試掘トレンチによって埋土の一部が露出していた。

(埋土) 木根痕等による多少の攪乱痕と含有物によって細別はされるが、基本的には黒褐色土の単層である。

(形状・規模) 最終形態は六角形に近い。規模は直径 2.7 m ほどである。

(壁) 一部は岩や基盤層となるところもあるが、基本的には黒褐色土が壁となる。埋土と地山の違いはほとんど色調では判別がつかず、締まりと含有物等によって判別がつく。

(床) 一部は礫層を床面とする。部分的に若干低くなる場所がある。周溝や柱穴は検出されなかった。

(炉) 3 基の作り替えがある。最も新しい炉は土器埋設炉であり、この炉に破壊されているのが石囲い炉である。この二つは同一床面で検出されている。この土器埋設炉の北西際にこれらに先行する土器埋設炉がある。この先行炉は床面より 20 cm 下がっている。

(その他) 北西側は XIV H8c 土坑を切っている。

3 基の炉跡が確認されたことや平面形の形状から、3 期の建替があるかもしれない。しかし、それは埋土の観察等からは判断がつかなかった。

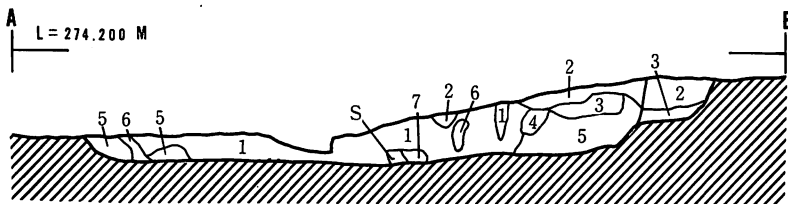
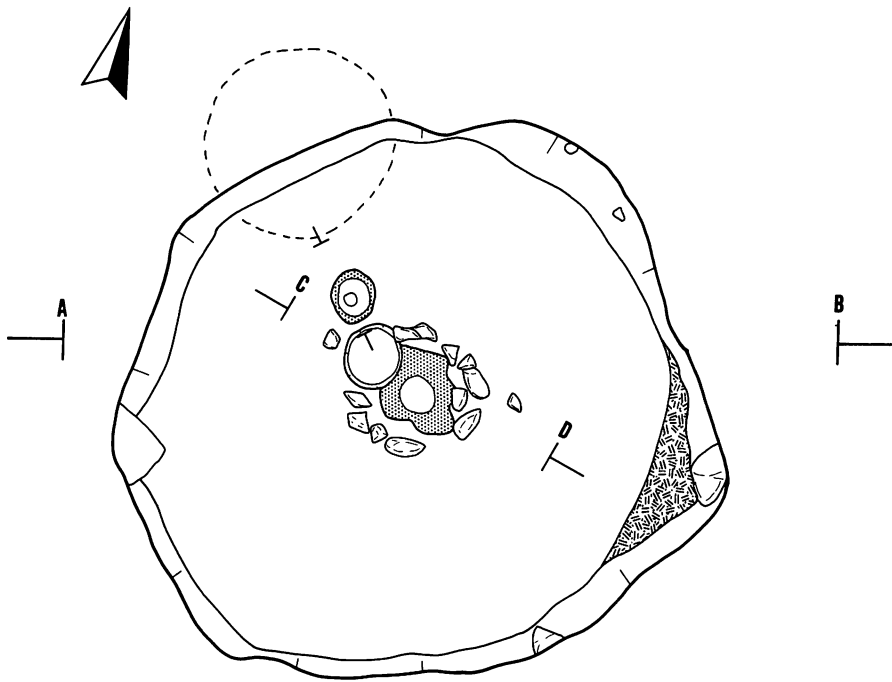
遺物 (第 76 図 15~27、508 写真図版 33)

本遺構からはコンテナ 2 個分出土した。15 は新しい土器埋設炉として使用されたもので口縁部、下半部とも打ち欠かれている。16 は先行する土器埋設炉として使用された壺である。頸部より上と体下半部が打ち欠かれている。17 は新しい土器埋設炉内から出土した。18~27 は埋土内から出土したものである。18 は三叉文、19、20 は羊歯状文、21 は口唇部に B 型突起が付き半肉彫り状の雲形文が施文される。21 は無文で上げ底の深鉢、22 は高台で上端に刻み帯が回る。化粧土を塗布しくすんだ赤褐色を呈する。23、24 は瘤付き土器である。25 はロクロ不使用の坏の底部片と思われる。26 は無文の深鉢である。27 は円盤状土製品である。

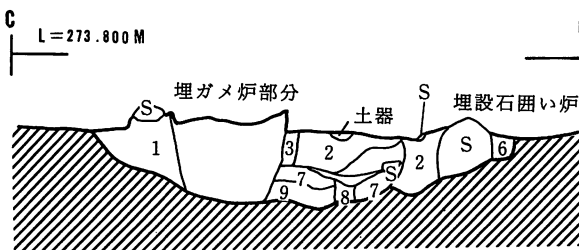
508 は土器埋設炉内から出土したスクレーパーである。埋土内から 4 点のフレークと磨石の破片 1 点が出土したが、これらについては省略する。

所属時期

遺物の状況から縄文晩期前葉に位置づけられる。

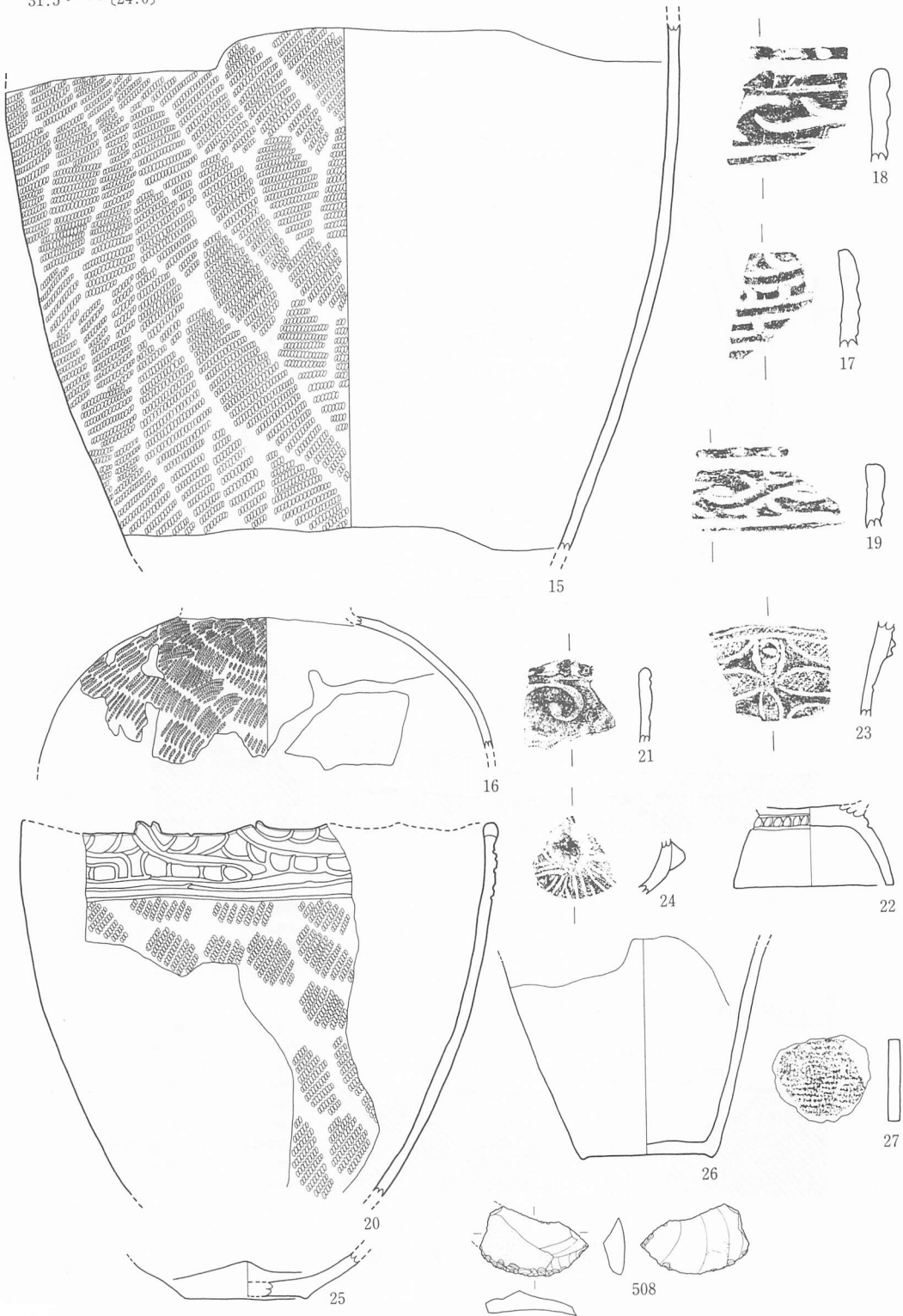


- 1. 黒褐色土 (含、炭火物)
- 2. 黒褐色土
- 3. 黒褐色土
- 4. 黒褐色土 (含、焼土粒)
- 5. 黒褐色土
- 6. 黒褐色土 (含、白い粒)
- 7. 黒褐色土 (含、黄い粒)



- C-D
- 1. 灰褐色土 (含、焼土粒)
 - 2. 黒褐色土 (含、炭火物)
 - 3. 暗褐色土 (含、焼土)
 - 4. 黒褐色土 (含、炭火物)
 - 5. 暗褐色土
 - 6. 黒褐色土 (含、礫)
 - 7. 極暗赤褐色土 焼土 (含、炭火物)
 - 8. 黒褐色土 (含、炭火物)
 - 9. 黒褐色土

第75図 XIV H 8 c 住居跡



第76图 X IV H 8 c 住居跡・遺物

X V H1a 住居跡

遺構 (第 77 図、写真図版 25)

(位置) XIV H8c 住居跡の北東約 14 m の所に位置する。馬の背状の平坦地のほぼ中央付近に位置し、沢までの距離は約 17 m、沢との比高は約 1 m である。

(検出状況) 試掘トレンチによって埋土の一部が露出していた。

(埋土) 黒色土と黒褐色土の 2 層に大別される。しかし、特に斜面下位側の壁は同様の黒褐色土であるため一部掘り過ぎているかもしれない。

(形状・規模) 斜面下位側が膨らむが、隅丸長方形ないし小判状を呈するものと思われる。規模は長軸 3.2 m、短軸 2.8 m である。掘り過ぎとすれば短軸は 2 m 程度かもしれない。

(壁) 斜面上位側の壁(北～東壁)は、下部は褐色土(再堆積土)を幾分掘り込み、上位は礫混じりの硬い層である。西壁は下部で礫層となり、上部もやや締まっている。斜面下位側に当たる南壁は明瞭に検出したとは言い難い。特に南西壁にその傾向が強い。この土質は上位側から運ばれてきた堆積土であり、壁にも埋土にも部分的ではあるが何層にも砂が散見される所である。したがって、ここは埋土に礫を含まないこと、地山と比べて若干黒いことを指標として検出したものである。正確には不詳とすべきかもしれない。

(床) 全体には平坦で、水平である。しかし、中央よりやや北東寄りの所に抜根によると思われる、極めてぼそぼその締まりの無い黒色土が入る落ち込みが見られる。炉、周溝及び柱穴はまったく見られない。

(その他)形状から見れば、南西壁の部分はかなり掘り過ぎている可能性が高い。したがって、図化した部分はこれ以上には広がらない範囲と理解されるべきである。しかしまた、確実に掘り過ぎたとも言いきれない。したがって、不祥な部分の範囲については下端を点線で表した。

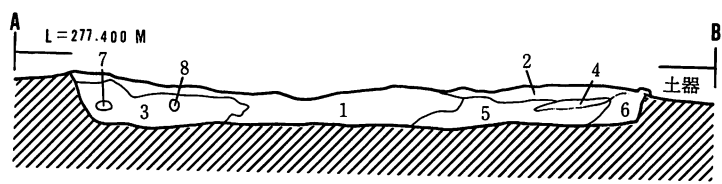
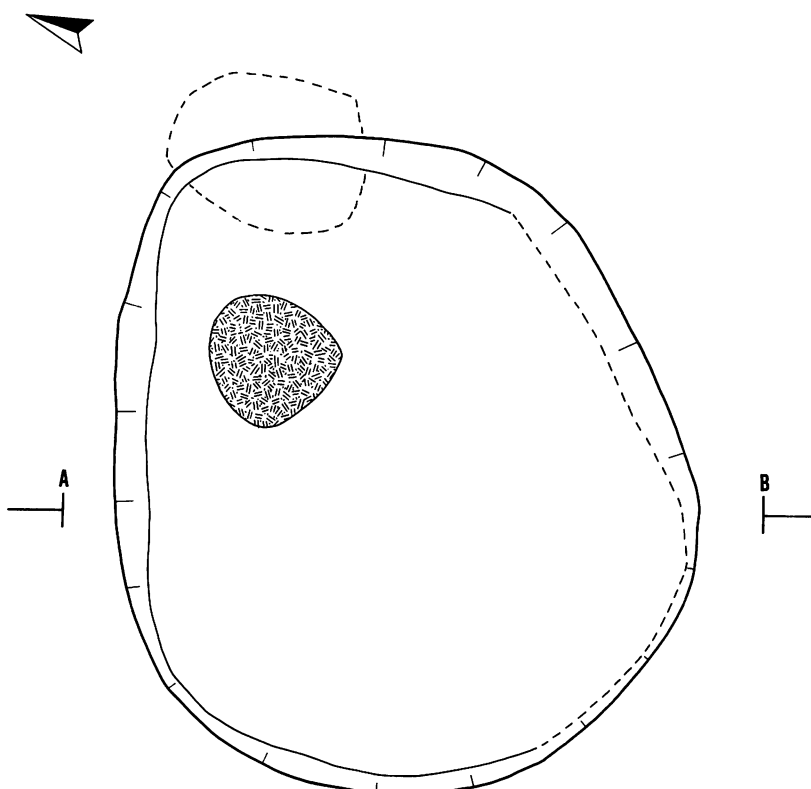
北東隅で X V H2a 土坑を切っている。

遺物 (第 77 図、写真図版 33)

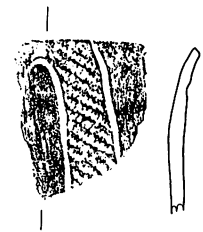
28 は埋土内から出土したもので、磨消縄文を有する。大木 9 式に比定される。他には地文のみの土器で、時期を窺えるような土器は全く出土していない。小さなフレーク 2 点が埋土中から出土している。図化等は省略する。

所属時期

28 も共伴するとは言い難く、時期決定資料を欠くことから不明である。



- 1. 黑色土
- 2. 黑色土
- 3. 黑色土
- 4. 黑色土
- 5. 黑褐色土
- 6. 黑色土 (含、黑褐色土)
- 7. 黑褐色土
- 8. 黑褐色土



28

第77図 XVH 1 a 住居跡・遺物

X V H0b 住居跡

遺構 (第 79 図、写真図版 26)

(位置) B 区の西斜面の傾斜変換点より若干上位に位置する。斜面がやや急で、沢までの距離は 4 m 弱である。

(検出状況) 表土直下で、褐色の地山に対し、黒色土が半円状に検出された。

(埋土) 黒色土、暗褐色土および汚れた褐色土の 3 層である。中央部は黒色土、周囲は汚れた褐色土が卓越する。

(形状・規模) 遺存していたのは斜面上位側の半分であるが、小判状ないし長方形である。規模は長軸 3.2 m、短軸は残存値で 1.5 m である。

(壁) 斜面上位ではほぼ垂直に立ち上がる。最大の壁高は 15 cm である。

(床) ほぼ平坦で水平である。炭化物が帯状に集中するところがある。

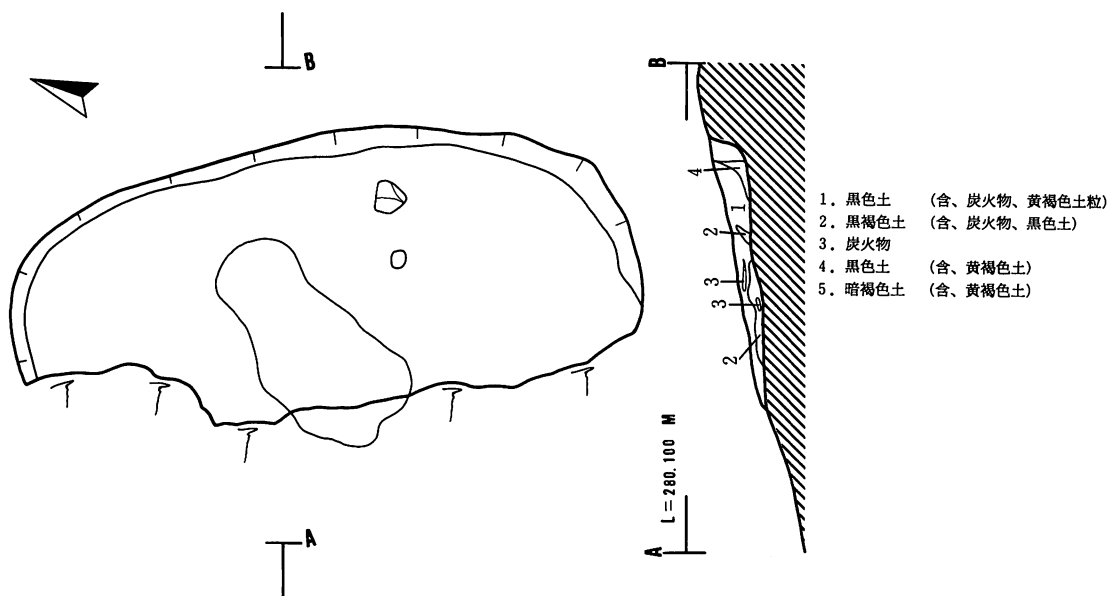
(炉) 発見されなかった。

遺物

床面からやや黄色がかった灰白色の粘土塊が出土した。また、埋土内から小さなリタッチ・ド・フレーク 1 点が出土しているが図化は省略する。それ以外の出土遺物はまったくない。

所属時期

時期決定資料を欠くため、不明である。しかし、遺構の形態からみれば縄文前期と思われる。



第78図 X V H 0 b 住居跡

(2) 土坑

5区から検出された縄文・弥生時代に属する土坑は10基である。そのうち、共伴遺物や他の遺構との切り合い等から所属時期が明かとなったのは4基である。

XVI 2c 土坑

遺構 (第79図、写真図版27)

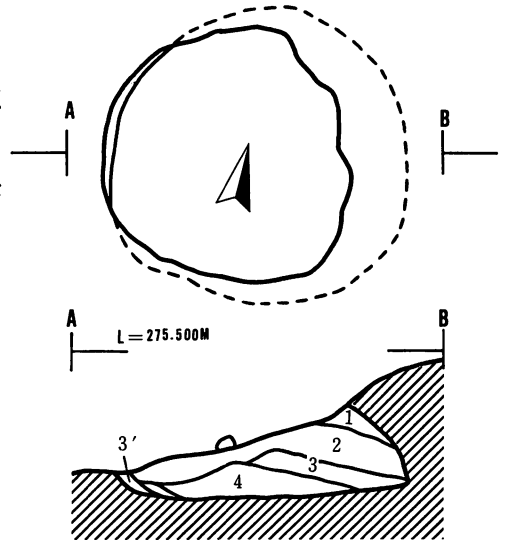
(位置) C区の東にある山の脚部に位置する。同地点は沢に向かって急に落ち込む傾斜変換点である。

(検出面) 本遺構の上部には暗褐色土の再堆積土がのり、大木7a式の土器や石器がまとまって出土した所で、本遺構はその精査中に発見したものである。

(埋土) 黒褐色土、暗褐色土、褐色土に分けられる。全て再堆積土で締まりがない。自然堆積である。

(平面形・規模) 平面形は円形、断面形はフラスコ状である。底部の規模は1.5mほどである。

(壁・底部) 壁の大部分は流失しているが、オーバー・ハングはきつい。底部は水平、かつ平坦である。



- 1. 黒褐色土 (含、灰黄褐色土、焼土)
- 2. 黒褐色土 (含、炭火物、灰黄褐色土)
- 3. 暗褐色土 (含、焼土、炭火物)
- 3'. 暗褐色土
- 4. 褐色土 (含、暗褐色土、炭火物)

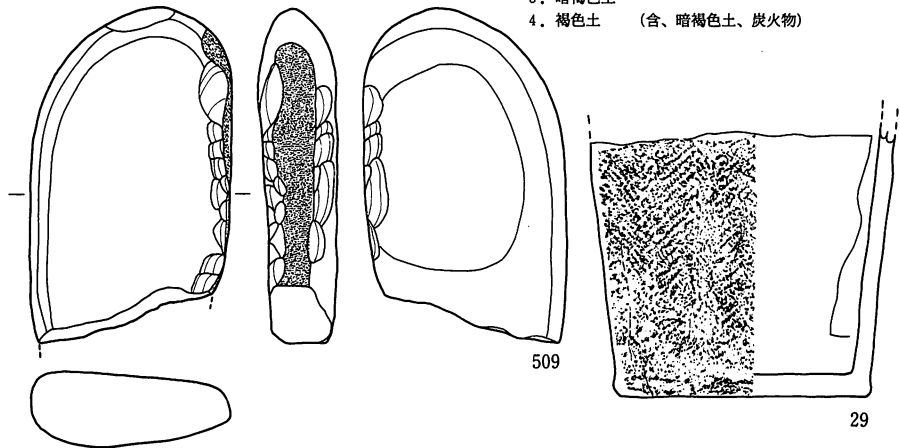
遺物 (第79

図、写真図版

34)

29は埋土下位から出土した深鉢の体下半部で、大木6~7a式並行である。

509は扁平な磨石である。



第79図 XVI 2c 土坑・遺物

所属時期

出土遺物により、前期末葉から中期初頭にかけての遺構と思われる。

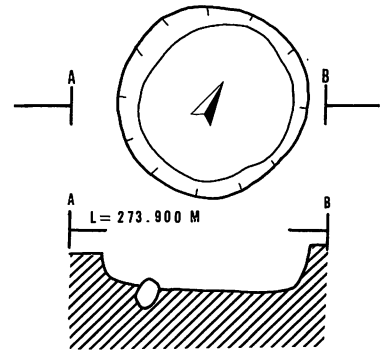
XIV H8c 土坑

遺構 (第80図、写真図版27)

(位置) B区中央付近に位置し、沢までの距離は14 mである。
 (検出面) XIV H8c 住居跡を精査中に本遺構の一部を検出した。
 (埋土) 極暗褐色土の単層である。焼土粒や粉炭が認められる。
 (平面形・規模) 平面形は円形、断面形は浅いため皿状となる。
 開口部径で1.1 m、深さ20 cmである。

(壁・底部) 壁、底部とも黒褐色土である。底部は水平であるが若干礫が露出している。

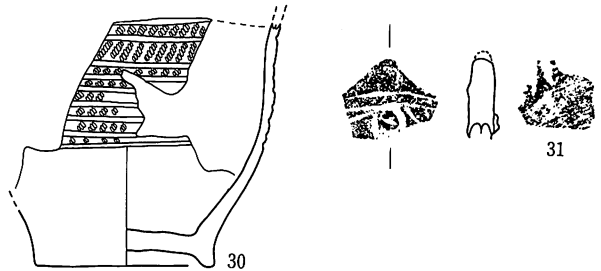
(その他) XIV H8c 住居(晩期)に切られる。



遺物(第80図、写真図版34)

30は深鉢の体下半部である。地文の上に平行沈線文が8本回
 る。十腰内4~5式に並行すると思
 われる。31は瘤付き土器の口縁部
 である。32は縄文のみの深鉢の体
 部下半である。胎土や縄文から後
 ~晩期のものである。510は横形
 石匙である。

— 7.2・[10.0]



所属時期

出土遺物やXIV H8c住居(晩期)に切られることから縄文後期後葉と思われる。

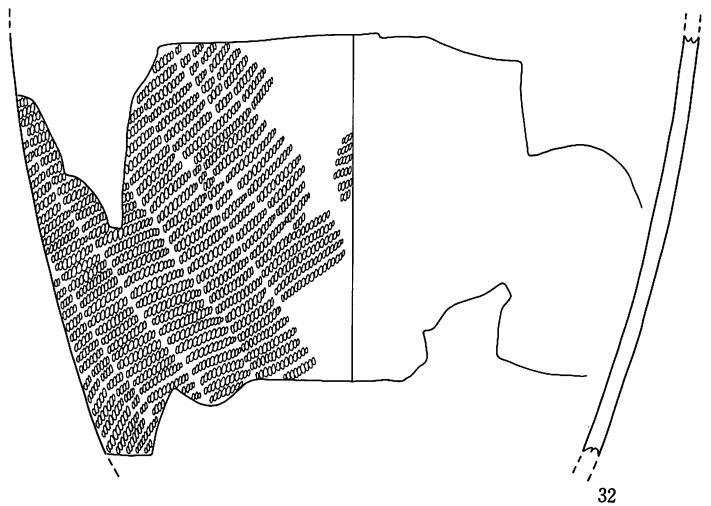
XIV H9c 土坑、XIV H9c-2 土坑 遺構(第81図、写真図版27)

(位置) B区のほぼ中央XIV H8c住居跡の東約3 mに位置する。

(検出面) 木根のため、プランは不明であった。木根を除去する過程で検出した。2基の土坑の重複で、XIV H9c土坑がXIV H9c-2土坑を切っている。

(埋土) 黒褐色土と思われるが、詳細は不明である。

(平面形・規模) それぞれは円形を基調とする。断面形はビーカー状を呈する。XIV H9c土坑



第80図 XIV H 8 c 土坑・遺物

は底部径で 45~50 cm、深さ 30 cm、XIV H9c-2 土坑は底部径で 75~80 cm、深さ 35 cm である。

(壁・底部) 壁はともに黒褐色土で構成され、直線的に立ち上がる。底部はXIV H9c 土坑は褐色土を若干掘り込む。XIV H9c-2 土坑は黒褐色土である。礫のため平坦ではないが、水平である。

(その他) 本来は別々に取り扱うべきであるが、上記の経過を辿ったため一括して取り扱った。

遺物 (第 81 図、写真図版 34)

33 は XIV H9c 土坑から出土した高台付き深鉢で、羊歯状文を施文する。その下部から 510 の石匙が出土した。34 と 35 は XIV H9c-2 土坑から出土した。前者は口縁部に波状沈線文とボタン状の貼り瘤が付けられる。大木 6~7 a 式に比定される。後者は半截竹管による沈線文で、大木 6 式に比定される。

所属時期

XIV H9c 土坑は出土遺物により、縄文晩期前葉のものである。XIV H9c-2 土坑は縄文前期末葉から中期初頭のものと思われる。

XIV H0c 土坑

遺構 (第 82 図、写真図版 28)

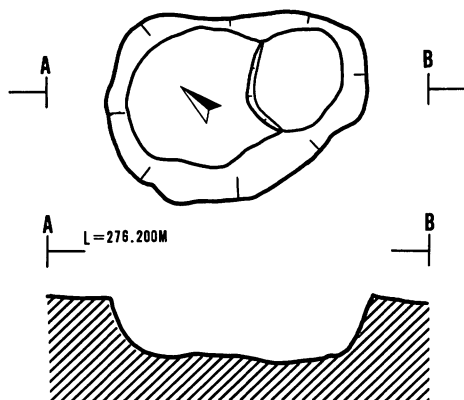
(位置) XIV H 9 c 土坑の東 4 m に位置する。

(検出面) 暗褐色土の地山に対し黒褐色土が円形の広まりとして検出される。

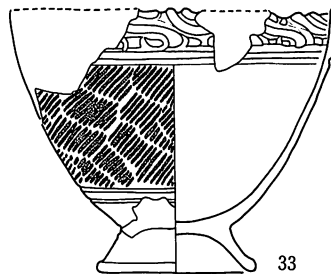
(埋土) 埋土最上位に焼土が形成されている外は、黒褐色土でラミナが認められる。自然堆積である。

(平面形・規模) 平面形は隅丸長方形に近い。断面形はフラスコ状となる。開口部径 140×170 cm、深さ 50 cm である。

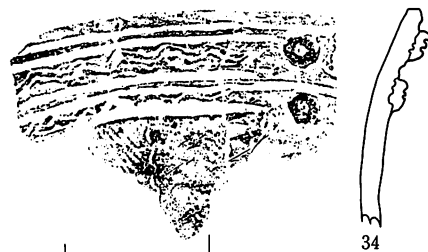
(壁・底部) 壁は黒褐色で構成され、底部は褐色



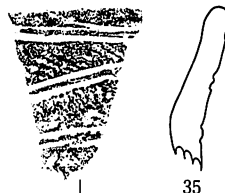
(13.0)・6.3・10.6



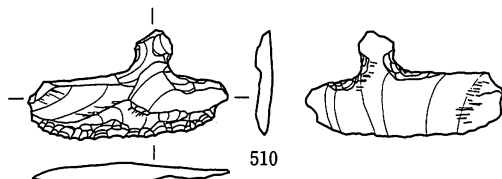
33



34



35



510

第81図 XIV H 9 c 土坑、
XIV H 9 c-2 土坑・遺物

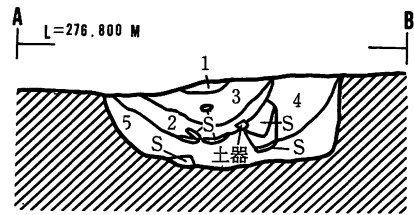
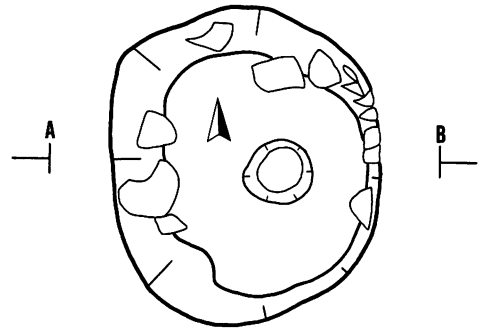
土となる。底部と壁の境は不明瞭なところがあり、一見鍋底状に見える。底部は地山の角礫が多数露出し、一部にはくぼむ所もあることから、水平ではあるが凹凸が激しいように見える。

(その他) 埋土上位にXIVH 0c焼土がのる。

遺物 (第82~84図、写真図版34)

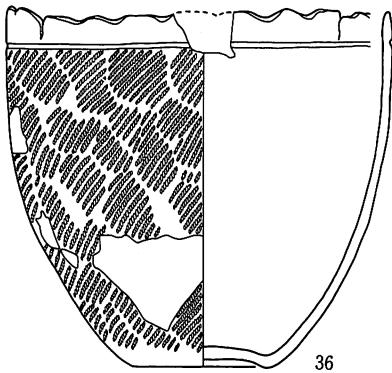
本遺構内からは多量の遺物が出土した。36は小型の深鉢で、口縁部は小波状口縁で1本の沈線が回る。底部は上げ底である。内部に残滓が付いている。37はLRの地文のみの深鉢である。口唇部から6cm下がった所が最大径となり、口縁部にかけてすぼまる。外面に炭化物が相当量付着する。38は口縁部のみであるが、大型の深鉢である。三叉状入り組み文である。外面に相当量の炭化物が付着する。39も同様であるが、口縁部には退化した三叉文が施文される。40は

15.3・5.5・14.3

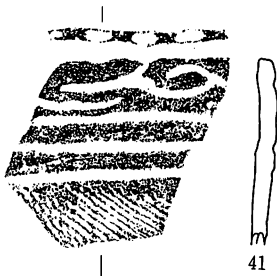


1. 赤褐色土
2. 黒褐色土 (含、炭火物)
3. 黒褐色土 (含、炭火物、焼土礫)
4. 黒褐色土
5. 黒褐色土 (含、礫)

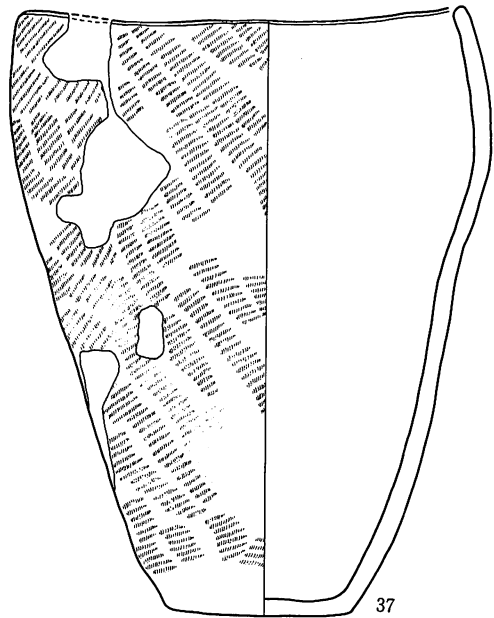
17.6・7.3・24.5



36



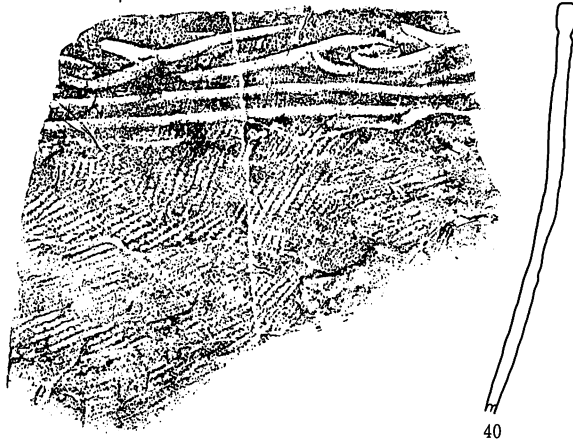
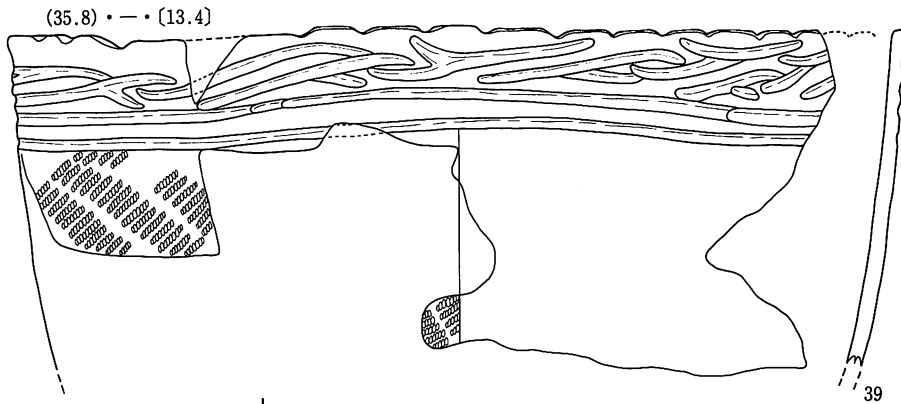
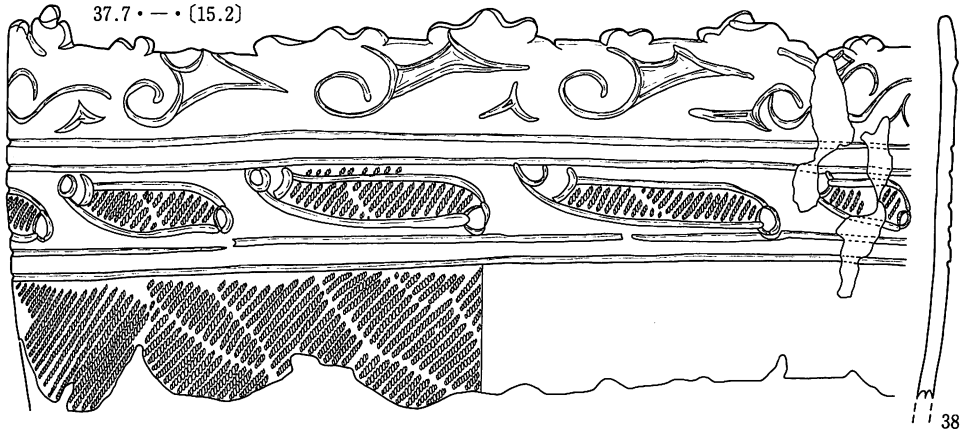
41



37

第82図 XIVH 0c土坑・遺物

39 と同一個体と思われる。40 には内面に篋状工具によるナデ調整が明瞭に看取される。41 は文様等は 39、40 と同様であるが、文様体は狭くなっており、異個体のものである。42～44 は縄文のみの深鉢である。



第83図 XIV H 0 c 土坑遺物

511 は打製石斧か半円状偏平打製石器かは見解が分かれるものである。一方の側縁部に敲打痕ないし摩滅痕とおぼしき痕跡も見られるが不明瞭なため、一応、打製石斧としておきたい。

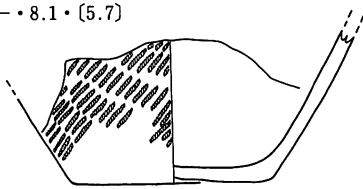
所属時期

出土遺物から縄文晩期前葉に位置づけられる。

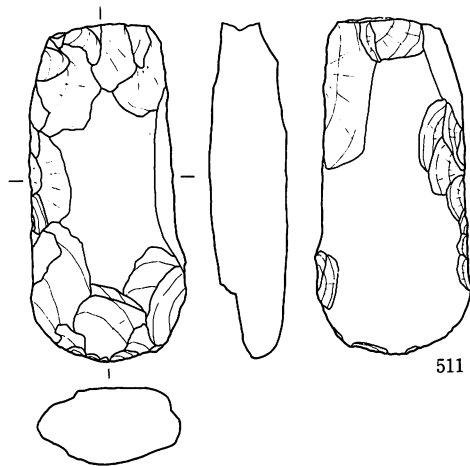
(37.0)・---・(14.2)



---・8.1・(5.7)



44



511

第84図 XIV H 0 c 土坑遺物

X V H2a 土坑

遺構 (第 85 図、写真図版 28)

(位置) B 区の平坦地のほぼ中央付近に位置し、沢までの距離は約 18 m である。

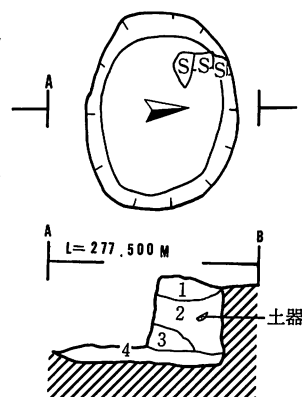
(検出面) X V H1a 住居の精査中に検出した。

(埋土) 土色は黒色だけで構成されるが、明るさによって細分が可能である。シルトで軟らかい。

(平面形・規模) 平面形は楕円形、断面形はピーカー状である。規模は開口部で長軸 105 cm、短軸 80 cm、同じく底部径では 85×65 cm、深さ 45 cm である。

(壁・底部) 壁の下部は褐色土を掘り込んでいるが、概ね黒褐色土である。開口部付近は若干雨水の影響で削られているが、大きく崩落した所はない。底部は水平かつ平坦である。

(その他) X V H1a 住居に切られている。



1. 黒色土 (含、2mmの石)
2. 黒色土
3. 黒色土 (含、黄褐色土)
4. 黒色土 (含、黄褐色の粒、暗褐色土)

第85図 X V H 2 a 土坑

遺物

所謂人工遺物はない。しかし、自然礫 3 点が底部から出土した。礫自体にも加工痕や使用痕は見られない。また、組石でも埋置したものでもない。

所属時期

X V H1a 住居跡より古い。同居跡の時期が不明なため、不明としておく。

X V G3i 土坑

遺構 (第 86 図、写真図版 28)

(位置) B 区の中央からやや東よりの傾斜変換点に位置する。

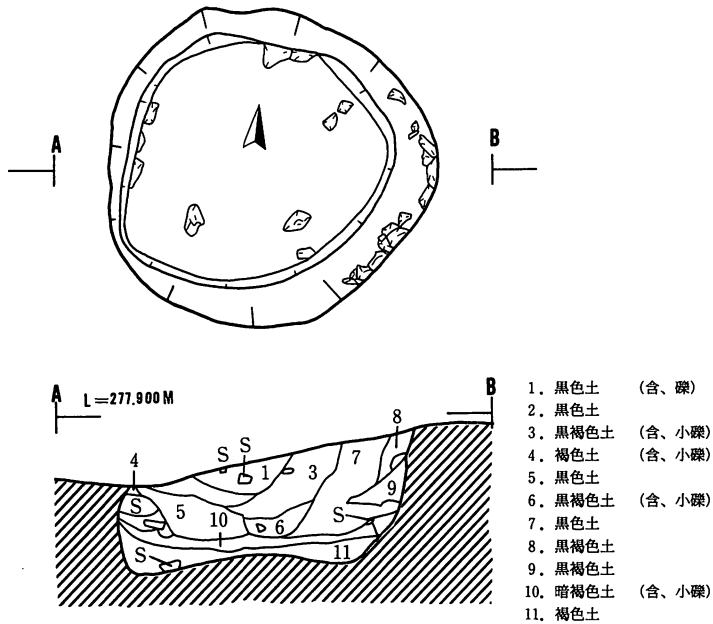
(検出面) 褐色土の地山に対して黒色土が円形に検出された。

(埋土) 黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土の 4 層に大別されるが、黒褐色土が卓越する。

(平面形・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状である。開口部径は 1.75 m、底部径は 1.25 m、深さ 60~70 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも褐色土で構成されるが、礫混じりのため凹凸が激しい。

(その他) 時期決定資料を欠き、不明である。



第86図 XV G 3 i 土坑

XV H6a 土坑

遺構 (第 87 図、写真図版 29)

(位置) B 区の中央付近の傾斜変換点に位置する。

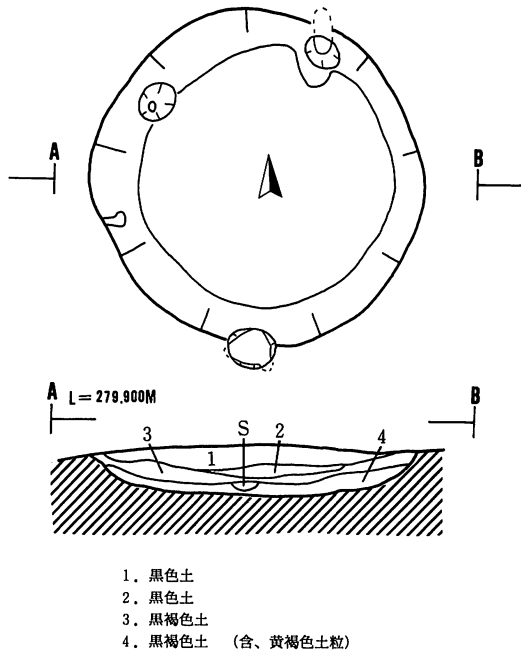
(検出面) 黒褐色土の地山に対し、黒色土が円形に検出された。

(埋土) 黒色土と黒褐色土の 2 層に大別される。自然堆積である。

(平面形・規模) 平面形は円形、断面形は皿状を呈する。規模は開口部径で 175~180 cm、底部径 130~135 cm、深さは 28 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも礫層に当たるため、凹凸が見られる。しかし、底部は水平かつ平坦である。

(その他) 時期は不明である。



第87図 XV H 6 a 土坑

XVI G5h 土坑

遺構 (第 88 図、写真図版 29)

(位置) C 区の西側緩斜面に位置する。微地形でみればその周囲はより緩やかな斜面となっている。

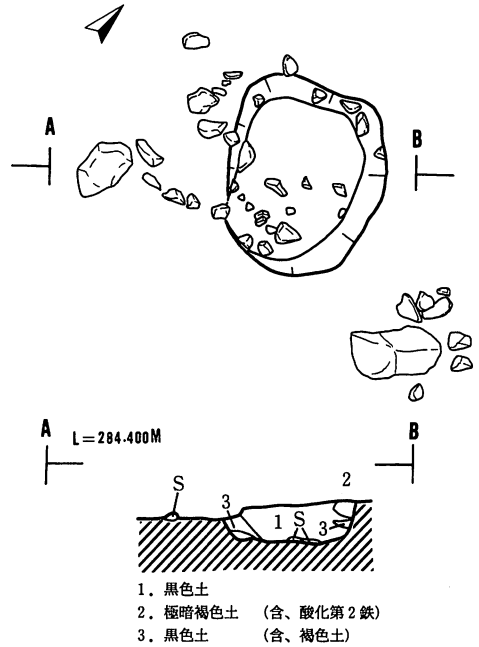
(検出面) 褐色土の地山に対し、黒色土が円形に検出された。

(埋土) 若干の極暗褐色土が見られるが、黒色土の単層に近い。軟かいシルトである。

(平面形・規模) 平面形は楕円形、断面形はピーカー状である。規模は開口部径 85×100 cm、底部径 60×85 cm である。深さは 20 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも礫混じりの褐色土であり、凹凸が激しい。

(その他) 時期は不明である。



第88図 XVI G 5 h 土坑

XVI G6h 土坑

遺構 (第 89 図、写真図版 29)

(位置) C 区の西側緩斜面に位置する。検出された土坑群の中では最も高い位置にある。検出面の高さは海拔 284.5 m である。

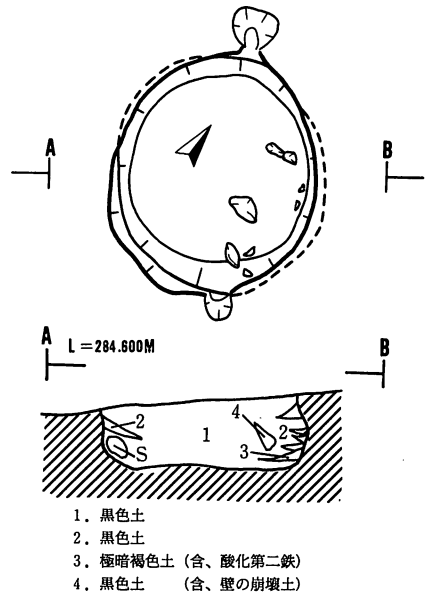
(検出面) 褐色土の地山に対し、黒色土が円形に検出された。

(埋土) 若干の極暗褐色土が見られるが、黒色土の単層に近い。軟かいシルトである。

(平面形・規模) 平面形は円形、断面形はピーカー状である。規模は開口部径 110 cm、底部径 90 cm である。深さは 45 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも褐色土である。底部には若干の礫が露出する。壁は部分的にオーバー・ハングするが、これは埋没過程で壁が崩落したことによる。

(その他) 時期は不明である。



第89図 XVI G 6 h 土坑

(3) 陥し穴

陥し穴は3基検出された。いずれも溝状のものである。検出された所はB区北東斜面で概ね等高線に沿う方向に延びており、3基は一連のものと考えられる。出土遺物はなく時期決定はできないが、これまで他遺跡からの報告例に従って、縄文時代のものでおきたい。

XVI G3c 陥し穴

遺構 (第90図、写真図版30)

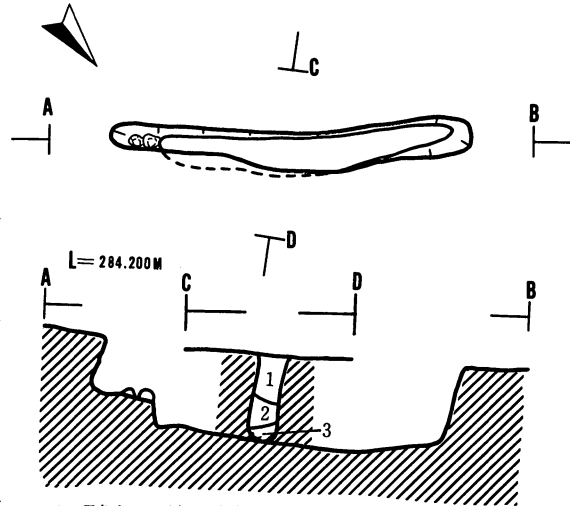
(位置) B区の西側緩斜面の最も東よりに位置する。同地点のより東側は急斜面となって登り、西側はそれに比すと緩やかな斜面となって下る。傾斜変換点である。

(検出面) 褐色土の地山に対し、黒色土が帯状に検出された。

(埋土) 黒色土と黒褐色土の互層になっている。締まりのないシルトである。

(平面形・規模) 平面形は溝状、断面形はピーカー状である。規模は開口部径20×190 cm、底部径20×155 cmである。深さは50 cmである。

(壁・底部) 壁・底部とも褐色土であり、崩壊は見られない。両端はオーバー・ハングしない。



第90図 XVI G 3 c 陥し穴

XVII G 2 c 陥し穴

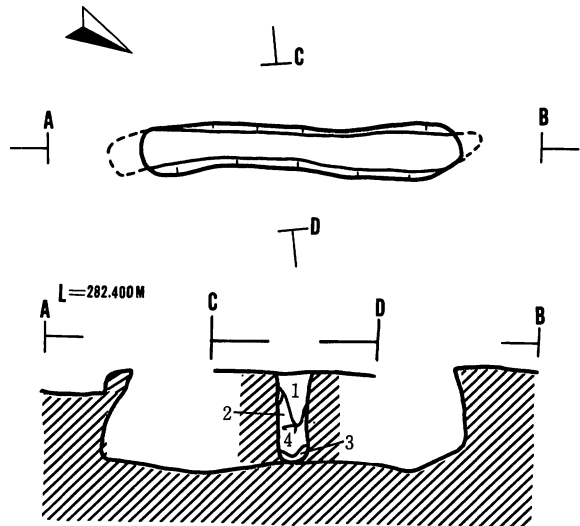
遺構 (第91図、写真図版30)

(位置) B区の西側緩斜面に位置する。XVI G3c 陥し穴の南西約8 mの地点である。

(検出面) 褐色土の地山に対し、黒色土が帯状に検出された。

(埋土) 黒色土、黒褐色土および黄褐色土の3層からなっている。硬く締まっている。

(平面形・規模) 平面形は溝状、断面形はピーカー状である。規模は開口部径25×170 cm、底部径20×200 cmである。深さ



第91図 XVII G 2 c 陥し穴

は 50 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも褐色土であり、崩壊は見られない。両端はオーバー・ハングする。底部幅はむしろ中央がやや狭くなっている。

X V G9d 陥し穴

遺構 (第 92 図、写真図版 30)

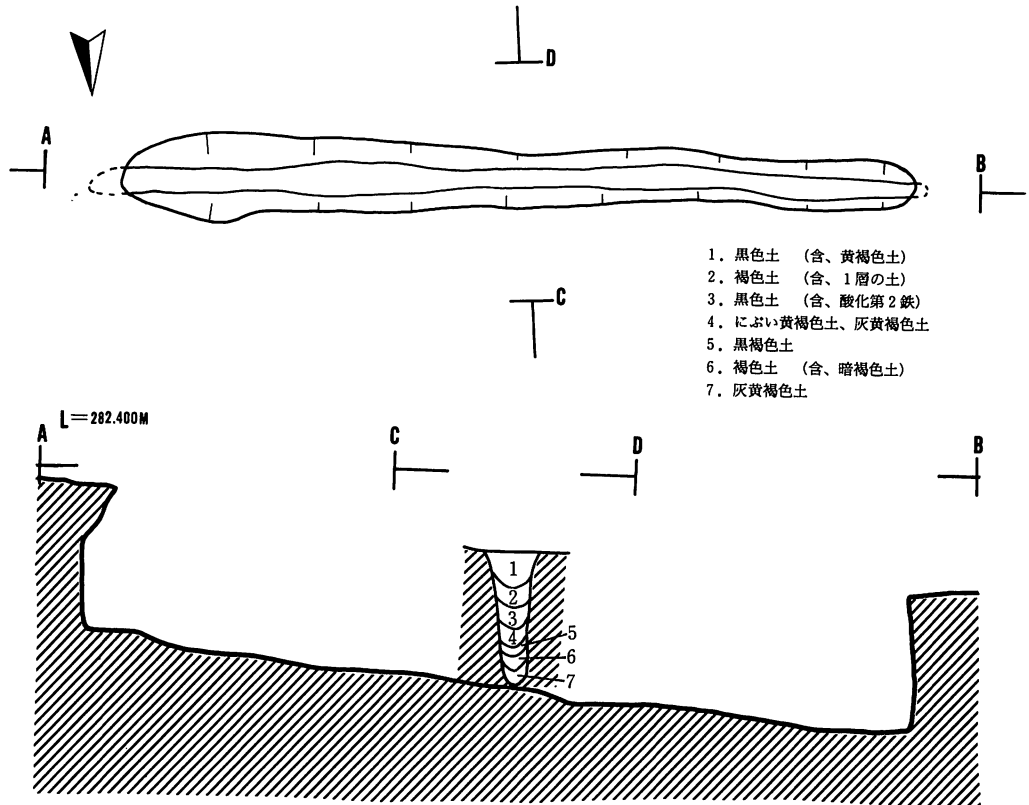
(位置) B 区の西側緩斜面の最も西よりに位置する。同斜面のほぼ中間に位置する。

(検出面) 褐色土の地山に対し、黒色土が帯状に検出された。

(埋土) 黒色土、黒褐色土および黄褐色土の 3 層が互層となっている。下位ほど硬く締まっている。

(平面形・規模) 平面形は溝状、断面形はビーカー状である。規模は開口部径 30×400 cm、底部径 10×450 cm である。深さは 70 cm である。

(壁・底部) 壁・底部とも褐色土であり、崩壊は見られない。両端は若干オーバー・ハングする。



第92図 X VI 9 d 陥し穴

(4) 焼土遺構および炉跡

焼土遺構は45箇所、炉跡は4基検出した。炉跡と認定したものは全て石囲い炉である。焼土遺構の一部は重なり合っているため、数え方によっては若干の加減が考えられる。この焼土遺構については第7表にまとめ、参考例として第94図に3遺構のみ図示することとし、他の実測図は割愛する。

表は次の要領で作成されたものである。

No.は第80図に記載した番号と同じものである。

層は検出した土層であるが、1は表土直下に見られる黒色土、2は黒褐色から暗褐色(汚れた褐色土を含む)の再堆積層、3は褐色土(基盤層)を示す。

位は前記の層中の位置を示す。上は上位面、中は中位、下は下位を示す。

焼成は発色と締まりから、「淡い」は色調は極暗褐色で締まりが悪く、輪郭も不明瞭なもの、「普通」は中心となる所が明るく輪郭も明瞭であるが、硬く締まっている分けではないもの、「良好」は明赤褐色で硬く締まっているもの、概ね厚さ10cmを越えるものである。

平面径は明赤褐色部分の測定値であり、漸移層や炭化物の範囲等は含まれていない。また、全ての測定値は1cm未満は原則として四捨五入となっている。

なお、焼土遺構及び炉跡は共伴遺物を特定することは極めて難しく、検出面からおおよその時代を特定するのが普通である。しかし、本調査区のような整齐とした層序を持たない場合はその方法も無理である。したがって、厳密には現代の焼土遺構以外のものは全て含んでいると考えられる。以上が全遺構に付いての時期決定を見送った理由である。

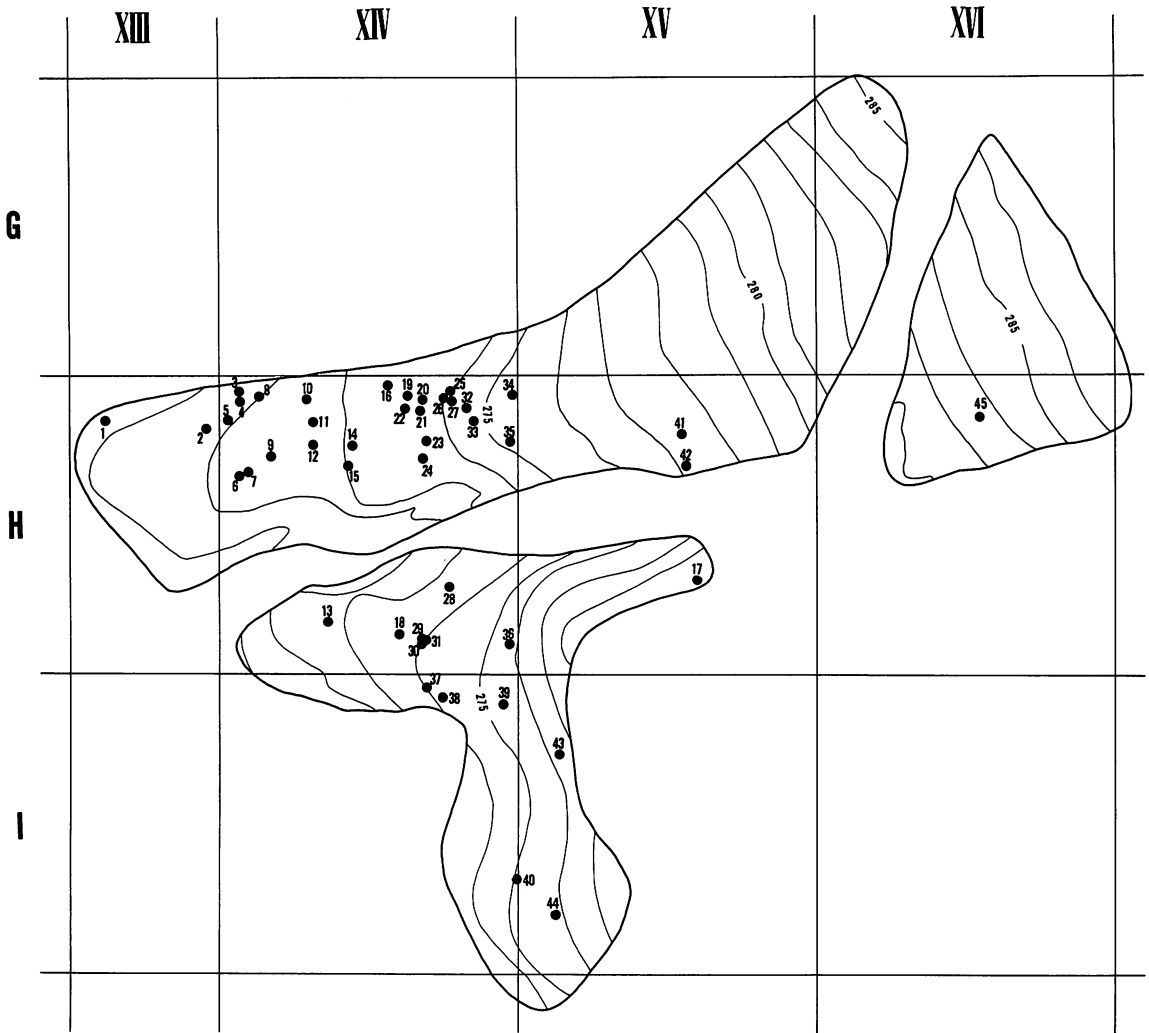
第7表及び第93図から言えることは次の事である。

- ①検出された焼土遺構の75.5%はXIV H区に集中する。
- ②焼成度では、淡いものが最も多く(20遺構、44.5%)良好なものは少ない(9遺構、20%)。
- ③焼土の厚さでは、10cm以上は少なく(10遺構、22%)、逆に5cm以下は非常に多い(19遺構42%)。なお、第7表では表さなかったが、焼土の中心を複数持つものが極めて多い(26遺構、57.7%)。

①について若干補足しておきたい。XIV H区はそれよりも東側の斜面に対してかなり平坦となっている地帯である。これは地図で見る以上に、現場では明瞭な勾配の差を感じる。また、同時にそれまでは水量も少なくしかも流れがやや速かった沢が、沢幅も増し流れは緩やかとなり水量も増す所に当たる。あるいはまた、単に周囲の斜面に対し一定のフラット面を有している所という条件もある。したがって、居住またはそれに準ずる行為を為した場所ではあるが、その規制条件は不明である。しかし、ここに焼土遺構が集中する事は事実であり、人々がある一定期間ここに活動していたことが窺える。

第7表 焼土遺構一覧表

No.	遺構名	層	位	焼成	平面径	厚	備考
1	XIIIH 7 b 焼土	2	上	普通	27×34	7	周囲には若干の縄文土器
2	XIIIH 0 b 焼土	1	中	良好	80×120	15	焼土の下から土師器片1点出土
3	XIVH 1 a 焼土	2	上	淡い	17×25	4	シルト状になっている
4	XIVH 1 a-2 焼土	1	中	普通	38×40	12	小ブロック状になっている
5	XIVH 1 b 焼土	2	上	普通	45×115	10	中心部は2箇所、後～晩期の遺物多量
6	XIVH 1 d 焼土	2	上	普通	16×24	2	焼土は薄いがやや硬い、断面作図不可
7	XIVH 1 d-2 焼土	2	下	淡い	15×40	1	極めて淡く、断面作図不可
8	XIVH 2 a 焼土	1	下	普通	35×40	5	中心部は2箇所、前～中期の遺物
9	XIVH 2 c 焼土	2	上	普通	35×38	8	シルト状になっている
10	XIVH 3 a 焼土	1	上	普通	40×58	10	縄文の遺物多量
11	XIVH 4 b 焼土	1	上	普通	48×54	8	焼土内から石皿の破片出土
12	XIVH 4 c 焼土	1	上	普通	35×40	6	小ブロック状になっている
13	XIVH 4 i 焼土	1	上	淡い	40×63	3	
14	XIVH 5 c 焼土	1	上	普通	45×85	8	焼土内から縄文後期の土器出土
15	XIVH 5 c-2 焼土	1	下	普通	25×80	5	周囲に多量の縄文土器
16	XIVH 6 a 焼土	1	上	普通	35×60	8	周囲から To-a 検出
17	XIVH 6 g 焼土	1	上	淡い	30×40	5	
18	XIVH 6 i 焼土	1	上	普通	45×55	6	
19	XIVH 7 a 焼土	1	中	良好	70×80	8	周囲から多量の遺物が出土
20	XIVH 7 a-2 焼土	1	中	淡い	20×34		極めて淡く、厚さ測定不能 遺物なし
21	XIVH 7 b 焼土	1	中	普通	30×40	10	
22	XIVH 7 b-2 焼土	1	上	良好	45×78	7	硬い
23	XIVH 7 c 焼土	1	上	淡い	18×35	5	中心部は2箇所
24	XIVH 7 c-2 焼土	2	下	淡い	40×65	12	斑に明赤褐色の部分あり
25	XIVH 8 a 焼土	1	中	淡い	22×48	8	4個の礫が加熱を受けている
26	XIVH 8 a-2 焼土	1	中	淡い	40×86	7	
27	XIVH 8 a-3 焼土	1	中	良好	80×160	15	
28	XIVH 8 h 焼土	1	中	良好	25×35	10	
29	XIVH 8 i 焼土	1	上	淡い	97×120	1	断面作図不可
30	XIVH 8 i-2 焼土	1	上	普通	26×36	4	やや硬い
31	XIVH 8 i-3 焼土	1	上	淡い	20×30	2	
32	XIVH 9 b 焼土	1	中	淡い	20×35	2	周囲から多量の遺物が出土
33	XIVH 9 b-2 焼土	1	中	淡い	22×55	3	周囲から多量の遺物が出土
34	XIVH 0 a 焼土	1	上	良好	25×45	6	
35	XIVH 0 c 焼土	1	上	淡い	30×35	1	
36	XIVH 0 i-2 焼土	1	上	淡い	25×86	1	
37	XIV I 7 a 焼土	1	上	淡い	22×30	7	
38	XIV I 8 a 焼土	1	上	淡い	35×35	5	シルト質だが硬い 縄文土器多数
39	XIV I 0 a 焼土	1	上	淡い	26×35	5	
40	XIV I 0 g 焼土	1	上	良好	82×115	7	
41	XV H 6 b 焼土	1	上	淡い	10×15	5	
42	XV H 6 c 焼土	1	上	普通	8×22	6	
43	XV I 2 c 焼土	1	上	良好	75×100	15	縄文中期の遺物多い
44	XV I 2 h 焼土	1	上	良好	60×70	14	周囲から時期不明の縄文土器
45	XVIH 6 b 焼土	1	上	淡い	15×35	8	平安時代の住居跡と同じ検出面

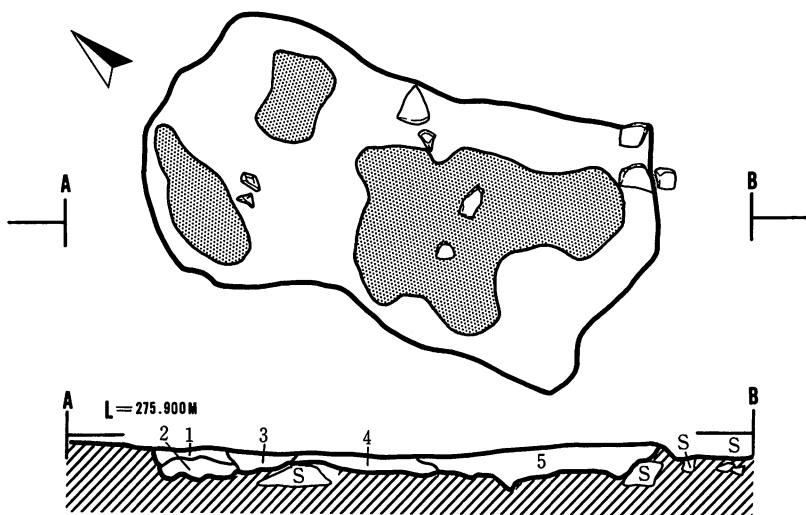


第93図 焼土遺構分布図

②からは、ある程度の加熱により地山が焼土化するものの、所謂古代以降に多く作られるようなカマドまで火力を増すものはほとんどない、ことが分かる。

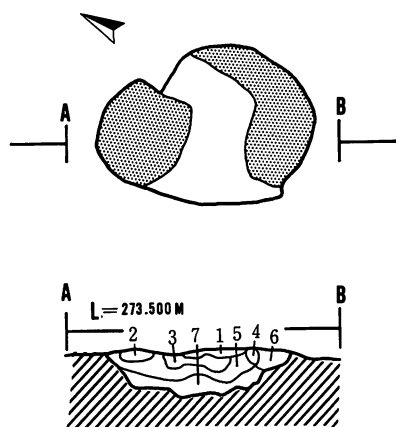
③からは、頻繁に燃やす位置を変えていたことが窺える。

次に炉跡を見ることにする。



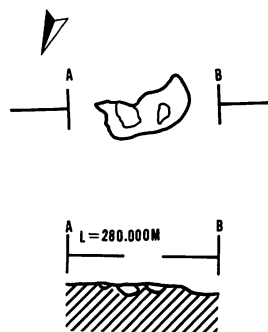
XIV H 8 a 烧土

1. 黑色土
2. 暗赤褐色土 (含、烧土粒)
3. 黑褐色土
4. 黑色土
5. 赤褐色土 (含、烧土)



XIV H 6 i 烧土

1. 黑褐色土
2. 赤褐色土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 暗褐色土
6. 暗赤褐色土 (含、黑褐色土)
7. 黑褐色土



XV H 6 b 烧土

赤褐色土 (含、黑褐色土)

XIV H 8 a 烧土
 第94图 XIV H 6 i 烧土
 XV H 6 b 烧土

XIII H0e 炉跡

遺構（第 94 図、写真図版 32）

（位置）B 区の西端で、西流する沢の北西約 8 m に位置する。沢は幾分淀むように蛇行する。

（検出面）黒褐色土直下で褐色の地山に直接石を埋め込んでいる。

（平面形・規模）一部の石は失われているが、ほぼ円形と思われる。規模は直径 75 cm、焼土は一部に認められる程度で厚さは 4 cm である。

（その他）北側に淡い焼土、南側には廃棄された焼土が見られる。炉跡の周辺はフラットであるが、柱穴等は見られない。

XIV H5i 炉跡

遺構（第 94 図、写真図版 32）

（位置）C 区の西へ張り出す低い尾根のほぼ中央に占地する。XIV H5i 住居跡の真上に位置する。

（検出面）一部の石はすでに露出し、一部の石は試掘トレンチによって破壊されていた。

（平面形・規模）平面形は円形、規模は直径 60 cm、焼土は内部に見られ、厚さは 4 cm である。

XIV H7j 炉跡

遺構（第 94 図）

（位置）XIV H5i 炉跡の南東約 8 m に位置し、南沢に落ち込む傾斜変換点に近い。

（検出面）表土直下で焼土を検出し、石の抜き取り痕を確認する。

（平面形・規模）平面形は円形、規模は直径 70 cm、焼土の厚さは 7 cm であるが、硬い焼土は一部分であり、大半は暗赤褐色の軟らかいシルト状となっている。

（その他）石は全て抜き取られている。また、全体を皿状に掘り石を埋置して造ったものである。周囲からは沢山の縄文前期の土器が出土した。

XIV H8j 炉跡

遺構（第 94 図、写真図版 32）

（位置）XIV H7j 炉跡の東 7 m に位置する。

（検出面）黒色土上位面で検出された。

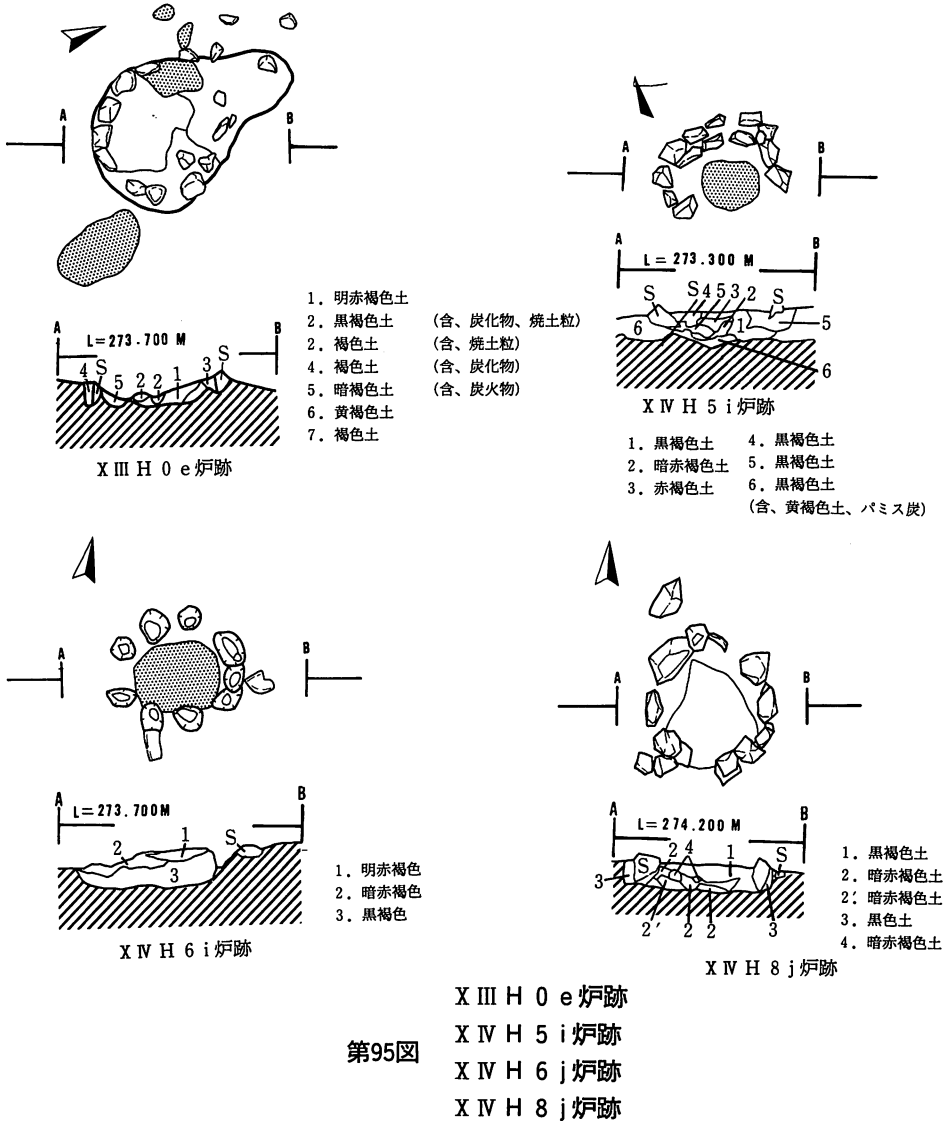
（平面形・規模）平面形は円形、規模は直径 70 cm、焼土は暗赤褐色の淡いシルトであり、所謂焼土とはみなし得ないものである。

（その他）使用している石の大きさは不揃いではあるが、30 cm 大の大きな石も使用し、全体と

してかなりしっかりと造られている。1個の石が抜き取られてすぐ近くに転がっていた。周囲からは大木7a式と後期後葉（瘤付き土器）が沢山出土した。

以上4基の炉跡については次のことが指摘できる。

- ① C区に1基、B区に3基と占地に片寄りがみられる。
- ② いずれも表土直下であり、周囲から遺物は出土するが、柱穴等の掘り込みは見られない。
- ③ 炉の平面形は円形、規模はほぼ70cmで同じである。
- ④ 炉の内部には明瞭な焼土が造られていない。
- ⑤ 炉の周囲には人工的なフラットは見られないが、概ね平坦な所に位置している。



(5) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は遺物収納用コンテナ約 16 箱である。若干の土師器、弥生土器を含むが大半は縄文土器である。石器は 756 点出土した。陶磁器及び古銭も若干表採されている。陶磁器はすべて近現代のものであり、古銭は「寛永通宝」のみの 4 点であるため、割愛する。

第 I 群土器（縄文早期）（第 96 図 45～54、写真図版 35）

45～49 は貝殻沈線文土器で小さな棒状刺突文を有する。暗青灰色をしており同一個体である。物見台式に比定される。50～52 は条痕文土器で、内外に施文される。条痕は全て横位ないし斜行し、縦位となるものはない。胎土は砂が多い。早稲田 3 類ないしムシリ 1 式に並行すると思われる。53、54 は砲弾状の尖底である。良好な焼成で、胎土に石英の粒子が含まれる。僅かな縄文とミガキ部分のみの底部であり形式名は比定できない。

第 II 群土器（縄文前期）

第 1 類（第 96～97 図 55～59、写真図版 35）

前期初頭から前葉に属する土器群である。本類は早稲田 6 類併行、大木 1～2 a 式並行に比定される。小量で完形品はない。全て胎土に植物性繊維を含む。55 は深鉢の尖底であるが丸みを帯び焼成も軟らかくなる。56 は大型の深鉢で撚りの粗い原体圧痕で幅広の文様帯が構成される。この 2 点は 3 段の撚りで前者は反撚り、後者は合い撚りと思われる。57 はループ文、58 は平縁で口唇部に指頭圧痕が加えられる。59 は 58 と同一個体かもしれない。

第 2 類（第 97 図 60～63、写真図版 35）

前期後葉から末葉の土器で円筒下層式 d、大木 6 式並行の土器群である。口縁部文様体の構成により一応大木 6 式並行と捉えたが、大木 7 a 式に分類されるかもしれない。60 は縦位に、61 は横位に波状沈線文が施文される。61 は口縁端部に部分的に隆帯が貼付される。口縁部文様帯は平行沈線間に波状沈線文が 2 段に施文されるだけで、縦位に分割されることはない。62 は口縁部に数条の平行沈線がめぐる。61 と 62 の体部文様は閉端の羽状縄文が縦位に施文した後、縦位に磨消している。これらは大木 6 式並行と思われる。63 は口縁部に原体圧痕が 3 本押圧され、地文には木目状撚糸文が施文される。円筒下層式 d に比定される。

第 III 群土器（縄文中期）

本群に属する土器は前葉、中葉、後葉に分けられる。うち前葉の土器が卓越する。前葉の土器は大半が大木 7 a 式に比定される。当該土器は細分が可能かもしれないが、ここでは一括して取り扱うこととし、細分に当たっては文様構成によるものとする。したがって、当該土器の類別は編年を念頭に置いたものではない。

第1類 (第98～109図 64～188、写真図版 35～40)

本類は第Ⅲ群土器のうち前葉に属する土器を一括する。文様帯の構成により以下のように細分される。

1 口縁部に原体圧痕文が施文されるものを一括する。これらは原体圧痕のみで文様帯が構成される一群と体部との境に隆帯を貼付する一群とに分けられる。

a 64、65は口縁部が外反気味に立ち上がる。前者は口縁部に原体側面圧痕文を数本巡らし、後者は無文である。後者の体部には3本一組となる綾絡文が垂下する。両者とも赤褐色で胎土は良好である。後者には丁寧なミガキが施される。この2点は大木6式に比定されるかもしれない。66、67は幅広の口縁部に数本の原体側面圧痕を施文した後、隆帯を貼付することにより分割させる。口縁部はほぼ直立する。大木7a式に比定される。68～73は原体圧痕のみで円筒上層式a～bと思われる。ただし、73は後葉に属するかもしれない。74、75は口縁部と体部の境に微隆起帯を、76と77は口縁端部にやや幅広の隆帯を貼付しその上に原体圧痕を、78～80は幅広の隆帯を縦位に貼付し、その上に原体を押圧する。

b 78～93は口縁部文様帯は原体圧痕によって構成され、体部の境に隆帯を貼付する一群である。平縁が多いが、86、88、89のように山形口縁となるものや、84のように小波状口縁となるものも見られる。原体圧痕は口縁部に平行するように押圧されるのが基本であるが、90や91のように山形ないし波形となるものも見られる。体部との境に貼付された隆帯には原体が押圧されるものと棒状ないし板状工具による刻みないし連続刺突が加えられるものがあり、やや前者が多い。しかし、半截竹管による連続刺突は見られないようである。半截竹管を使用した例は87のみで、圧痕した後半截竹管で薄く沈線を引いたものである。

2 沈線で文様帯を構成する一群を一括する。これらは平行沈線文、波状沈線文、縦位の短沈線文、幾何学沈線文、山形沈線文等に分けられる。

a 94～102は平行沈線を主体とする土器群である。94、95は体部との境に隆帯を持たないものである。このような例は少ない。後者は平行沈線の変形山形沈線文が施文され、突起の部分には半円状の隆帯が貼付される。平行沈線の幅が狭いことや、変形山形沈線が入るなど相違点があるものの、前掲62の土器はあるいは本項に属するかもしれない。97は山形沈線文を施文した後に原体圧痕を平行に施文したものである。

b 103～112は波状沈線文を主体とする土器群である。103、107のように平行沈線を伴わないものも見られるが、多くは平行沈線間に波状沈線が充填される。波状沈線は単線(104、106)、複線(105、107)、複々線(110)が見られるが、複線が卓越する。また、施文具は109等に見られる棒状のものと、108に見られる半截竹管のものがあるが後者は少ない。沈線は滑らかに連続する波状口縁が主であるが、中には103のように断続的なものも見られる。111、112は波

状沈線文と山形沈線文との中間の土器かもしれない。

c 113～123 は縦位の短沈線が隙間なく充填される一群である。前項と同様本項も 110、114 のように平行沈線で 2 段に分けられるのが一般的である。その区画帯の中に何も充填されないもの(113、114)、波状沈線が描かれるもの(115、116)、山形沈線が描かれるもの(117、122)、曲線文が描かれるもの(120) 等が見られる。118、119 のように半截竹管を使用するものも希には見られるが、ほとんどは細い棒状工具を用いている。113 は山形突起から隆帯が垂下するように貼付される。この突起の数は不明である。120 は口唇部に鳥の頭部を模した突起が付けられる。頂部には突孔が見られる。この突起から隆帯が垂下する。この突起の数も不明である。この両者とも垂下する隆帯を境に左右の文様が異なっている。121 は口唇部に小さな山形突起が付き文様帯を分割させてはいるが、左右に分割させるより左側を一つの単位として囲む形となっている。120 と 121 は後述する第 4 類に分類できる土器であり、本類と第 4 類は強い関連を有することを暗示させる。

d 124～133 は短沈線が太くなり、間隔があいてくるなど退化の傾向を有するものと幾何学的な文様を描く一群である。短沈線が同一方向を向くもの(126、127)と、異方向を向き矢羽状となるもの(124、125、128、133)がある。また、124 のように刺突が加わるもの、132 のように半截竹管を使用し押し引き沈線を施文するものも見られる。129～132 は幾何学文様を構成する。128 は体部文様体が横位に展開する羽状縄文である。

e 134～137 は大波状沈線文ないし変形山形沈線文を施文する一群である。137 は周囲を分割することはないが、本類に属するほとんどの土器は 135 や 136 のように 2 本の隆帯で 4 分割している。

3 本類は三角印刻文を有する一群である。ただし、五領ヶ台式に見られる大きな三角印刻文または三叉文のようなものは見られず、小さな三角印刻文の集合となっている。138 は五領ヶ台式に見られる幅広の文様帯に伴って上下に三角印刻文を巡らすなど比較的同形式の影響を受けたものと思われる。しかし、橋状把手を配する点や隆帯によって大きな楕円形の文様帯を持つなど、関連を窺える点と相違が際だつ点とがある。139 は貼付した隆帯に三角印刻文が施文されることによって隆帯はあたかも逆三角形文の集合体となっている。140 は三角印刻文が 2 段ないしそれ以上巡る。141 は半截竹管を使用し、142 と 143 は三角印刻文が退化傾向を示し、144～146 は沈線化の傾向を強める。なお、144 は壺の頸部際の破片である。146 は橋状突起が付けられる。本類に属する土器は 139 を除くと一様に赤味がかった。厚さは 5～9 mm で一定しない。

4 本類は連続刺突ないし刻みを有する土器群である。147～154 は半截竹管を使用する押し引き沈線を有するものである。体部との境に隆帯を持つもの(147、148、151、154)、持たないもの

(149、150、152、153)とがあり、双方合い半ばする。155 は口縁端部にくの字状の刻みと棒状刺突が回る。羊角状突起が付けられる。156 は口縁部に半截竹管による連続刺突が3列回り、中に沈線で渦巻文等が施文される。無文の太く短い隆帯が貼付される。157、158 は浅い沈線を引いた上に細かな刻みが施文される。横褐色の化粧土が塗布されている。159～176 は刻みを有する土器である。中には173、174のように沈線を伴わないものも見られるが、ほとんどのものは沈線を伴う。しかし、166、167のような沈線による渦巻文や170のように連弧文に刻みが付けられるものは少ない。177～180 は棒状刺突を有するものである。177 は一部が、178 は全面が交互刺突文となっている。180 は櫛歯状条痕文が放射状に施文される。

5 本類は隆帯で文様を構成する土器である。181 は隆帯が口縁端部に回るだけであり、このような例は少ない。ほとんどは太い隆帯で区画帯を作り、中に沈線文を充填する。隆帯は一般に入り組み状で精練さに欠ける。187 の器形は舟形を呈すると思われる。両端部に隆帯や沈線で渦巻文を作る。胎土は緻密で焼成も良好である。

第2類 (第110図188～192、写真図版40)

本類に属する土器は中期中葉のもので大木8a～8b式に比定される。図示した5点以外は同一個体の数片のみである。188～190は大木8a式の浅鉢である。191、192は大木8b式の深鉢である。

第3類 (第110～111図193～206、写真図版40)

本類は中期後葉の土器で、193～199は大木9式に、200～206は大木10式に比定される。両群とも典型的な様相を示している。

第IV群土器 (縄文後期)

第1類 (第111～113図207～234、写真図版40～41)

本類に属する土器は中期末葉から後期前葉までを一括する。本類には東北北半の土器と南半の土器が見られる。大湯式、十腰内I式、南境式、門前式、宮戸1b～2a式等が比定される。主体となるのは十腰内I式であり南半の土器は少ない。207～209は隆起線文に棒状刺突が伴うものである。210は内外に鱗状突起を持つ。211は沈線が蛇行しながら垂下する。212～215は棒状刺突が加わるものである。216、217は地文をもたず前者は沈線のみ、後者は隆沈線状に盛り上がり文様を構成する。218～229は磨消縄文であるが、218、219は磨消部が文様の主体となるのに対して、他は帯縄文となって文様を構成する。230～234は地文に帯縄文が描かれる。230、233は3～4本を1単位とする沈線文が描かれる。233、234は同一個体である。

第2類 (第113～114図235～245、写真図版41～42)

本類に属する土器は中葉の土器を一括する。十腰内II～IV式、宮戸2b式等が比定される。数量的には少ない。235は灰白色をし胎土には砂を多く含む。同様の胎土を持つものは他にはな

い。236は無頸の壺である。上部には矩形の磨消部を持つ。238、239、241、242は磨消縄文が大きく展開するもの、237、240、242～244は口唇部にB型突起がつくもの、243～245は刻み帯が施文されるものである。

第3類 (第114～115 図246～261、写真図版41～42)

本類に属する土器は後葉の所謂瘤付き土器ないしその並行関係にある土器およびそれ以降の土器を一括する。十腰内V式、宮戸3a～3b式に比定される。246～253は瘤付き土器であり、刻み帯や磨消を有する土器である。254～258は瘤付き土器に後続する土器であり三叉文のはしりが窺われる土器である。ただし、256の高台は前段階のものかもしれない。259の鐸形土製品以降は便宜上ここに掲載した。260は無文の注口土器でかなり歪んでいる。注口部の下に退化したふぐりがつく。261はミニチュア土器でよく研磨した後放射状の沈線文が施文される。

第V群土器 (縄文晩期)

第1類 (第115～116 図262～279、写真図版42)

本類に属する土器は晩期前葉の土器群で、大洞B～BC式に比定される。262～272は三叉文、玉抱き三叉文を有する一群である。胎土は緻密であり整形技法は丁寧である。273～279は羊歯状文を有する一群である。279のように胎土が緻密なものも見られるが、275のように粗砂が多く施文も粗雑なものも多くみられる。

第2類 (第116～118 図280～300、写真図版43)

本類に属する土器は中葉の土器群で、大洞C1～C2式に比定される。280～283は半肉彫り状の大胎骨文ないし入り組み文を持つ一群である。284～293は歯列状文、294、295は沈線文、296は磨消縄文である。297～300はあるいは1類に入るかもしれない。299は口縁部径約9cmの小型の皿で丁寧な作りである。300は鳥形の突起で浅鉢に付いていたと思われる。

第VI群土器 (弥生土器)

本群に属する土器は少ない。出土したものの約8割を図示した。

第1類 (第118 図301～311、写真図版43)

本類に属する土器は弥生中期に属する土器で、八起島式に比定されるものないしその並行関係にあるものである。301は短頸壺の口頸部、302～305は浅鉢、306は赤彩された台付き浅鉢(高坏)である。301～306は半肉彫り状の平行沈線を基本とするもので八起島式並行としておくが、あるいは大洞A'式かもしれない。307～311は八起島式に比定される。307は浅鉢、308は甕、309は台付き浅鉢と思われる。

第2類 (第118～120 図312～338、写真図版43～44)

本類に属する土器は弥生後期に属する土器で、一本松式、赤穴式に比定される。312～315は細く彫りの浅い沈線で亀甲状の文様を描く。3本1単位が多く見られる。体部は縦位の擦糸文が

施文される。316～325 は平行沈線化した弧状文ないし入り組み文に、地文は斜行ないし垂下する捺糸文が施文される。326、327 は連弧文に刺突が伴うものである。328、329 は波状文、330、331 は原体圧痕と刺突により文様を構成する。332～334 は交互刺突文、335 は口唇部には刻みが付けられ、内側の口縁端部には鋭く深い沈線が1本巡る。336～338 は捺糸文のみの甕形土器である。339 は捺糸文が施文され、340 は無文の蓋形土器である。341 は沈線文を持つ底部で体下端部に突孔されている。342 は捺糸文が施文される底部である。

第VIII群土器（時期不明）

本群に属する土器は厳密には時期不明のものを一括したが、可能な限り想定される時期に付いてコメントを加えておく。

第1類（第120～123 図 343～347、354、366～369、写真図版 44）

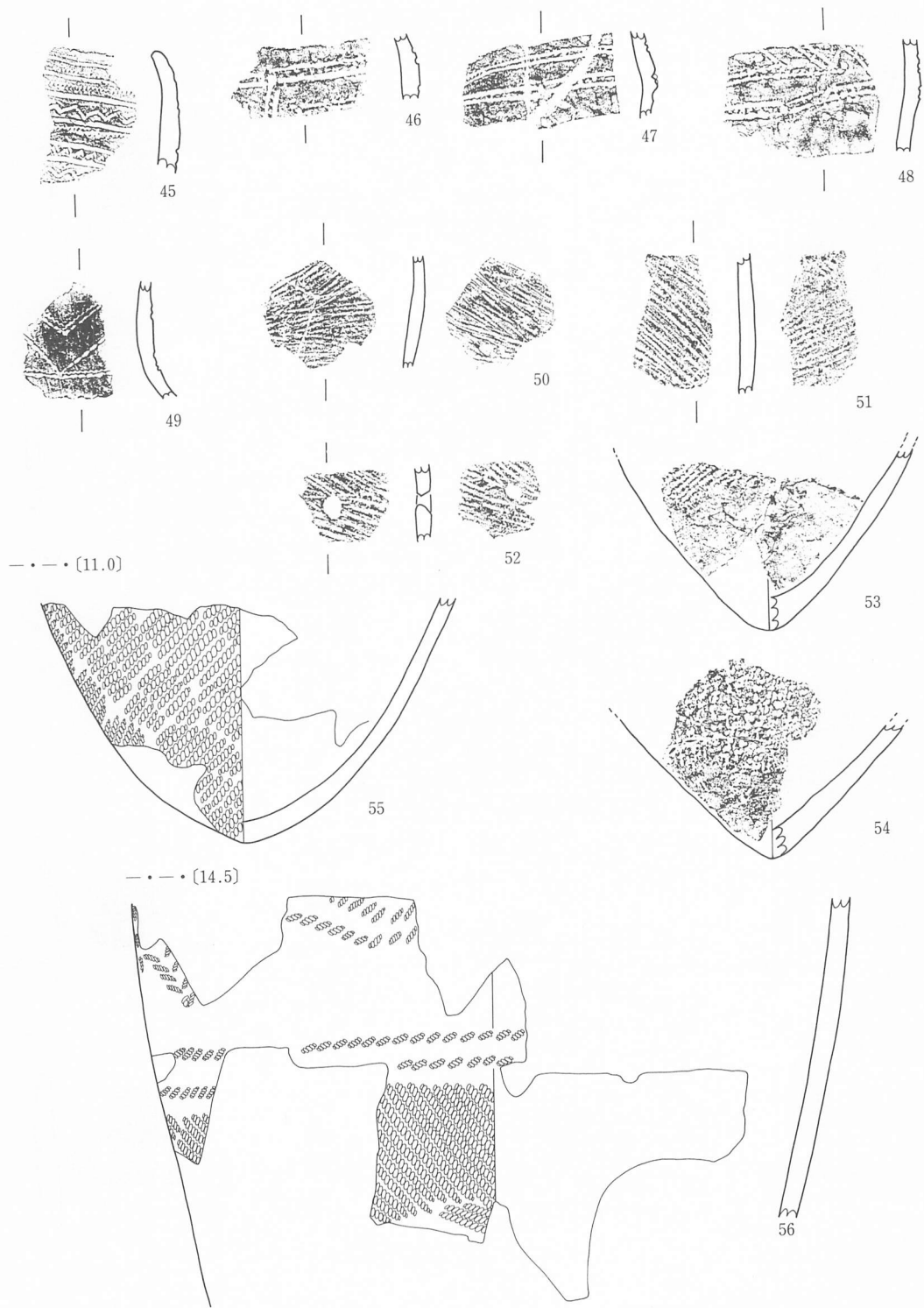
深鉢形土器を一括する。343 は胎土が脆く上げ底である。形式名は不明であるが、縄文前期前葉と思われる。344、366、368、369 は中期初頭、354 は晩期中葉に位置づけられるかもしれない。367 は後～晩期かもしれない。345～347 は深鉢形土器の破片である。以上の土器の原体を見れば単節斜縄文(343,344,354,367)、複節斜縄文(368,369)、無節斜縄文(345,366)、網目状捺糸文(347)が見られる。346 の原体は不明であるが、縄文や網代、組み紐等ではない。

第2類（第120～122 図 348～353、355～360、364、365、写真図版 44）

壺、注口土器、高台等を一括する。348 はミニチュア土器の底部で上げ底である。349～353 は実用品かどうかは不明であるが、小型の壺である。350 は地文の上に沈線が回る。後期かもしれない。364、365 は直接接合はしないが同一個体で、広口壺である。無文であるが、口唇部にA型突起と無文の粘土帯が貼付される。底部からの立ち上がりは丸みを持って立ち上がる。底部は凹凸が見られ、丁寧な整形とはなっていないが、全面にミガキが施される。暗赤褐色～黒褐色をし、器厚は8～10 mm である。中期前葉（五領ヶ台II式並行）に比定されるかもしれない。355、356 は注口土器の注口部である。357、358 は小型の深鉢である。ともに丁寧なミガキが見られる。359、360 は無文の高台である。縄文晩期かもしれない。

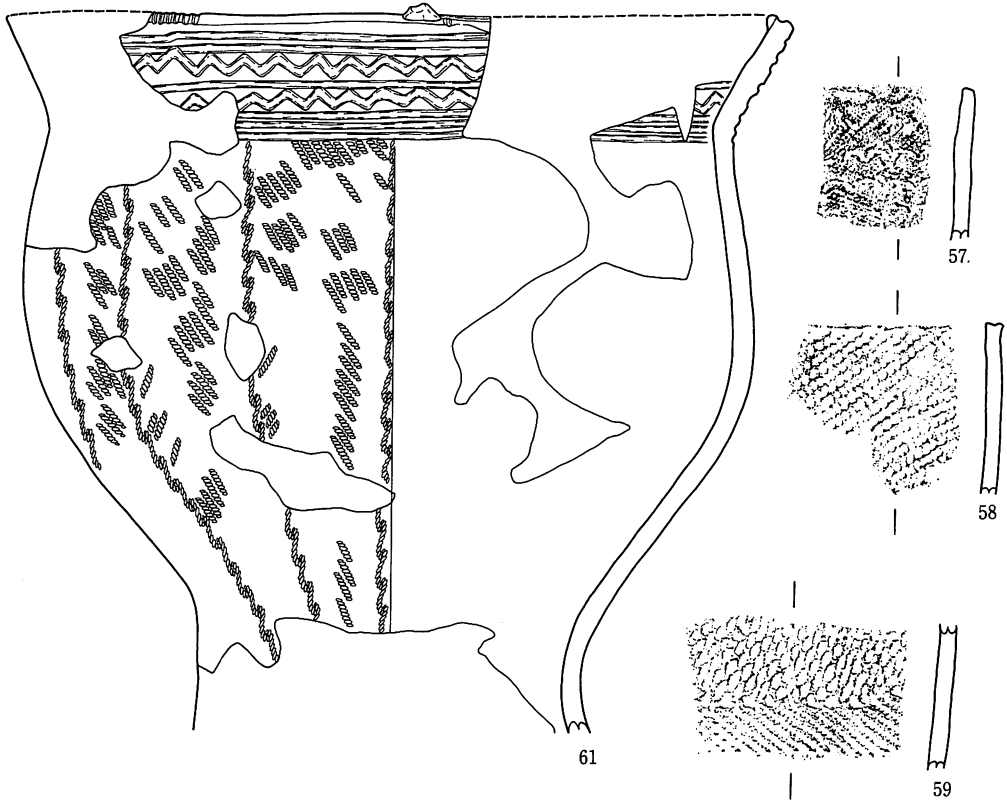
第3類（第121 図 361～363、写真図版 44）

土製品を一括する。361 は耳飾り、または糸巻き状土製品である。周囲が欠損している。362 は土偶、363 は板状土偶である。前者は両肩前方部に円形刺突文が3段施文され、襷架けに沈線が背面まで回る。褐色で胎土に粗砂を含み、研磨はされていない。頭部、両手、両足は欠損し、腹部で割れて出土した。上半身と下半身は約17 m 離れて出土した。364 は赤褐色でよく研磨した後、表裏に櫛歯状沈線文が施文されている。しかし、小破片であり詳細は不明である。

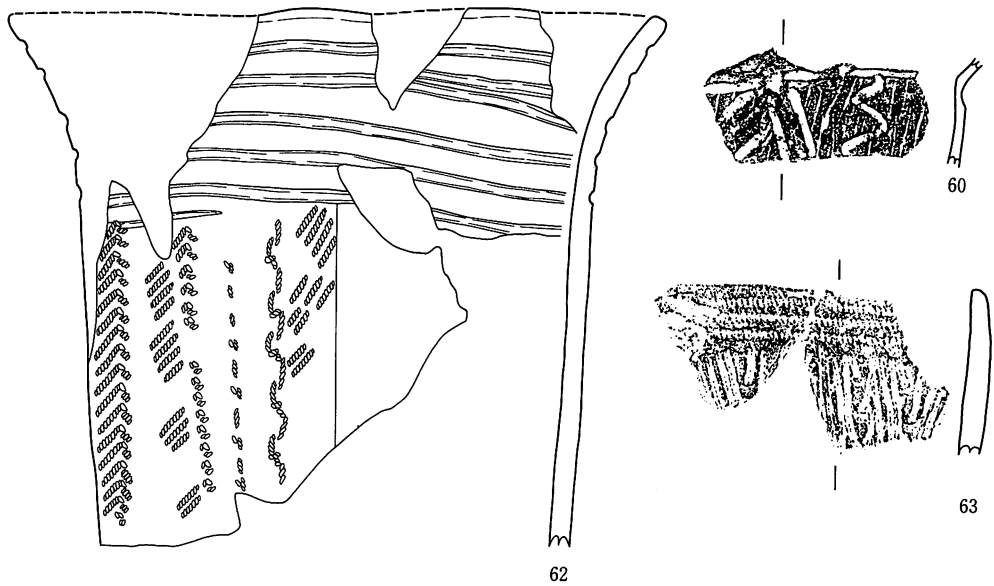


第96图 第I·II群土器

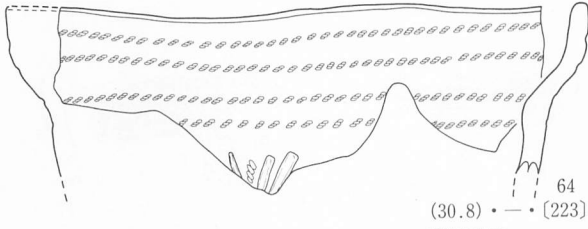
(30.3) · · · [28.8]



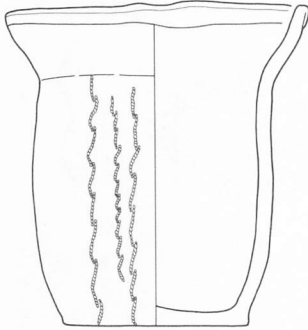
(34.0) · · · [19.5]



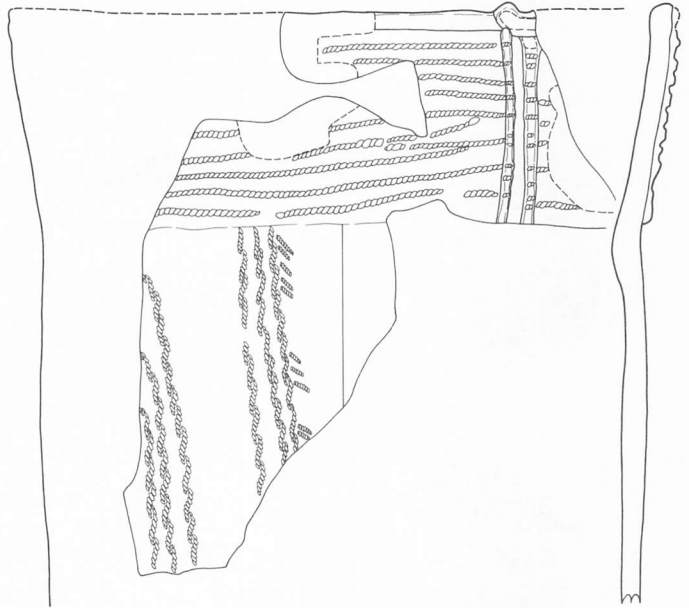
第97图 第II群土器



12.2 • 7.3 • 12.8

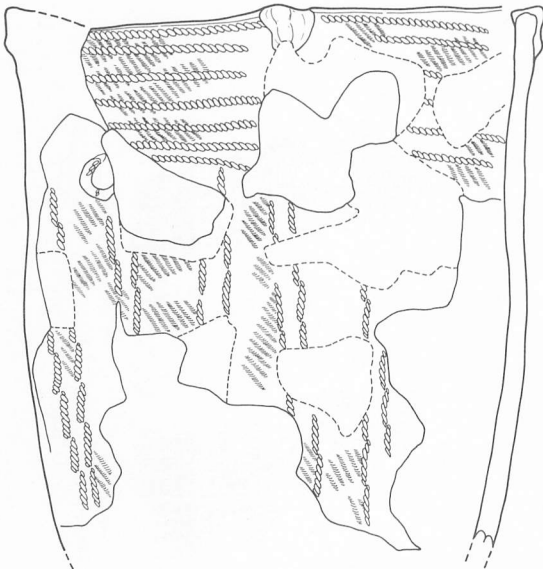


65

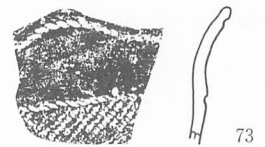
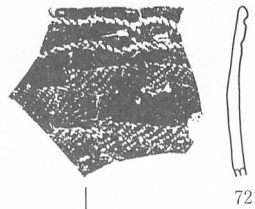
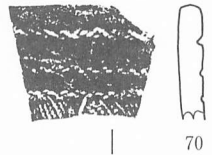
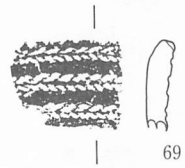


66

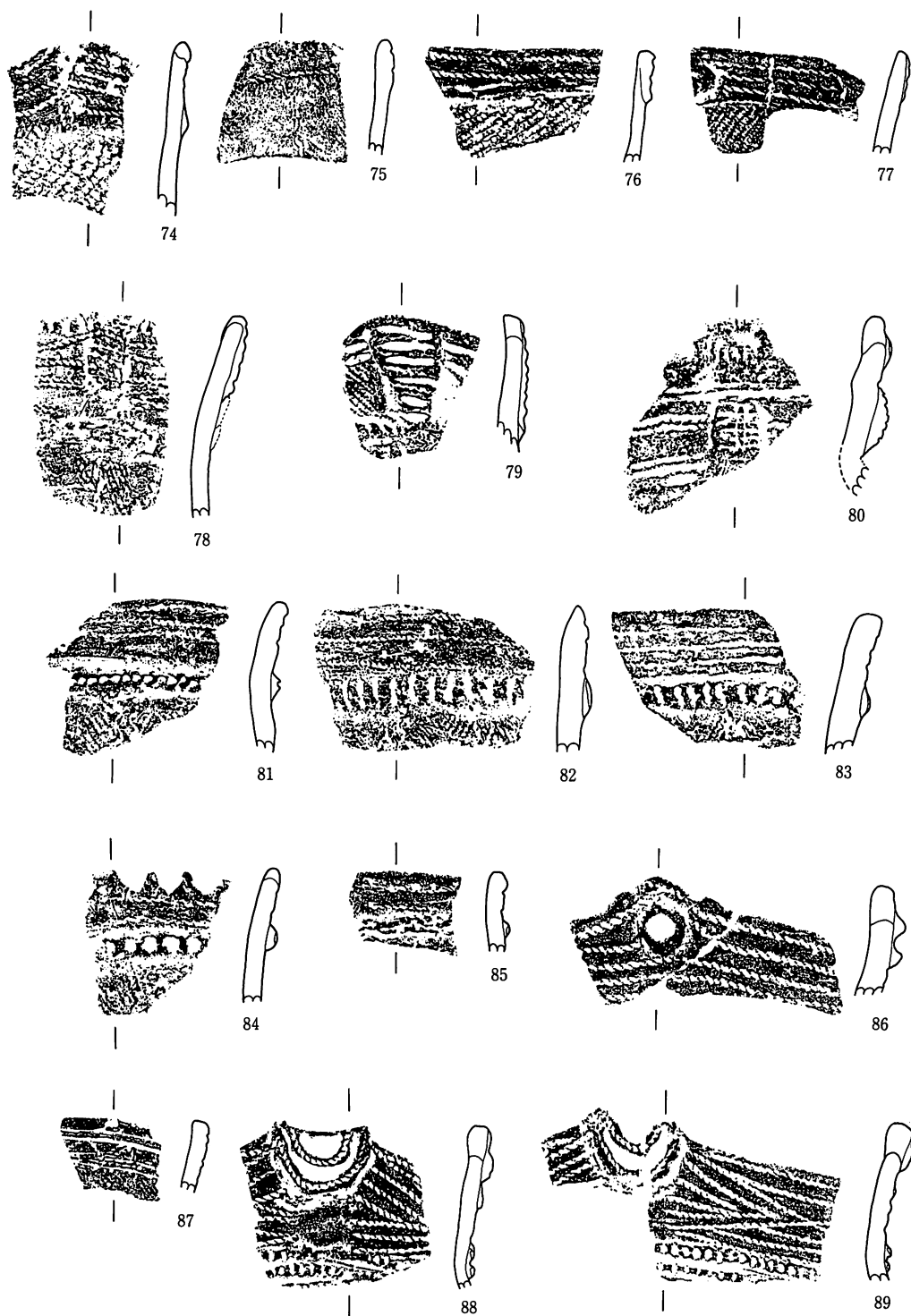
(21.6) • — • [21.7]



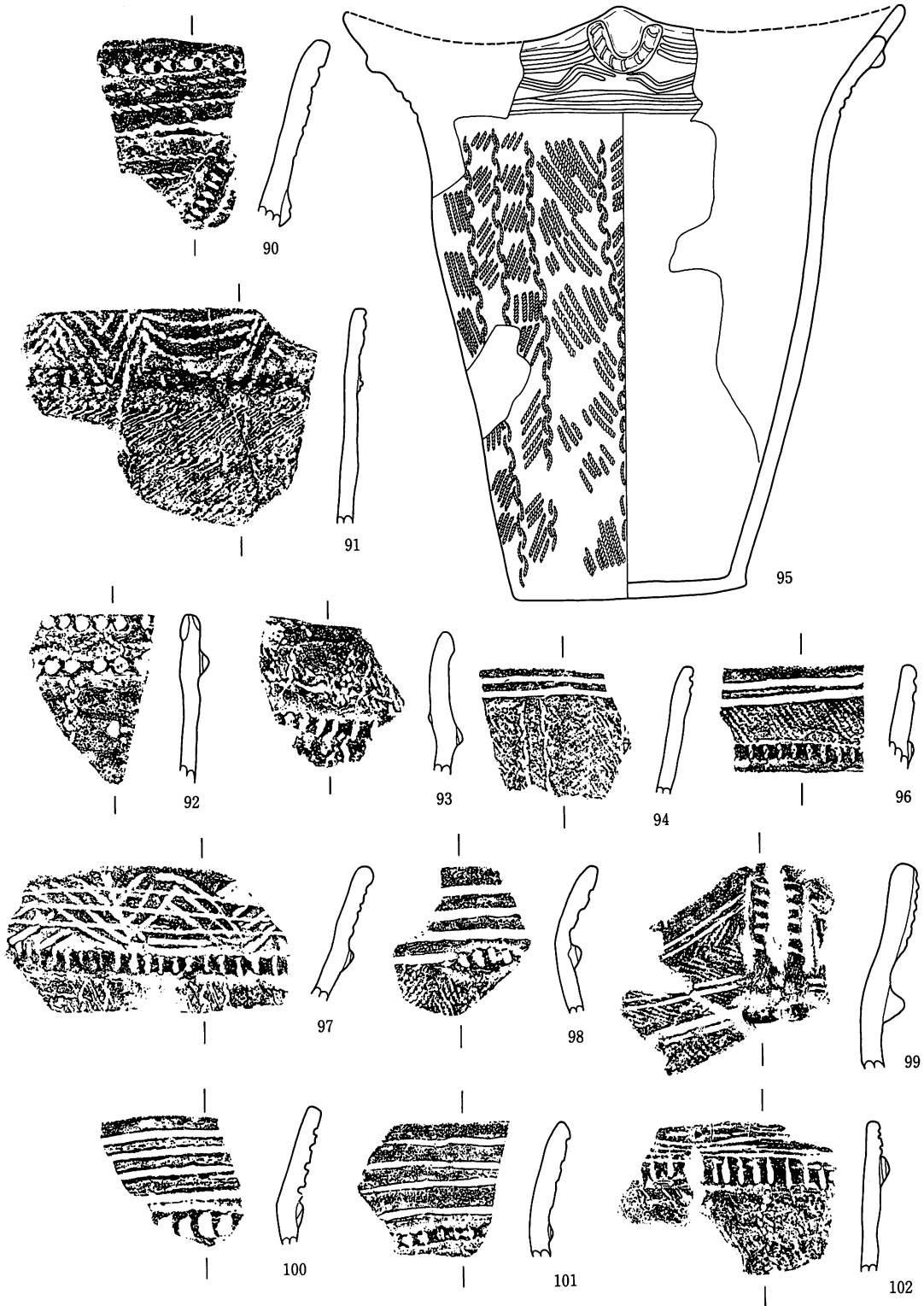
67



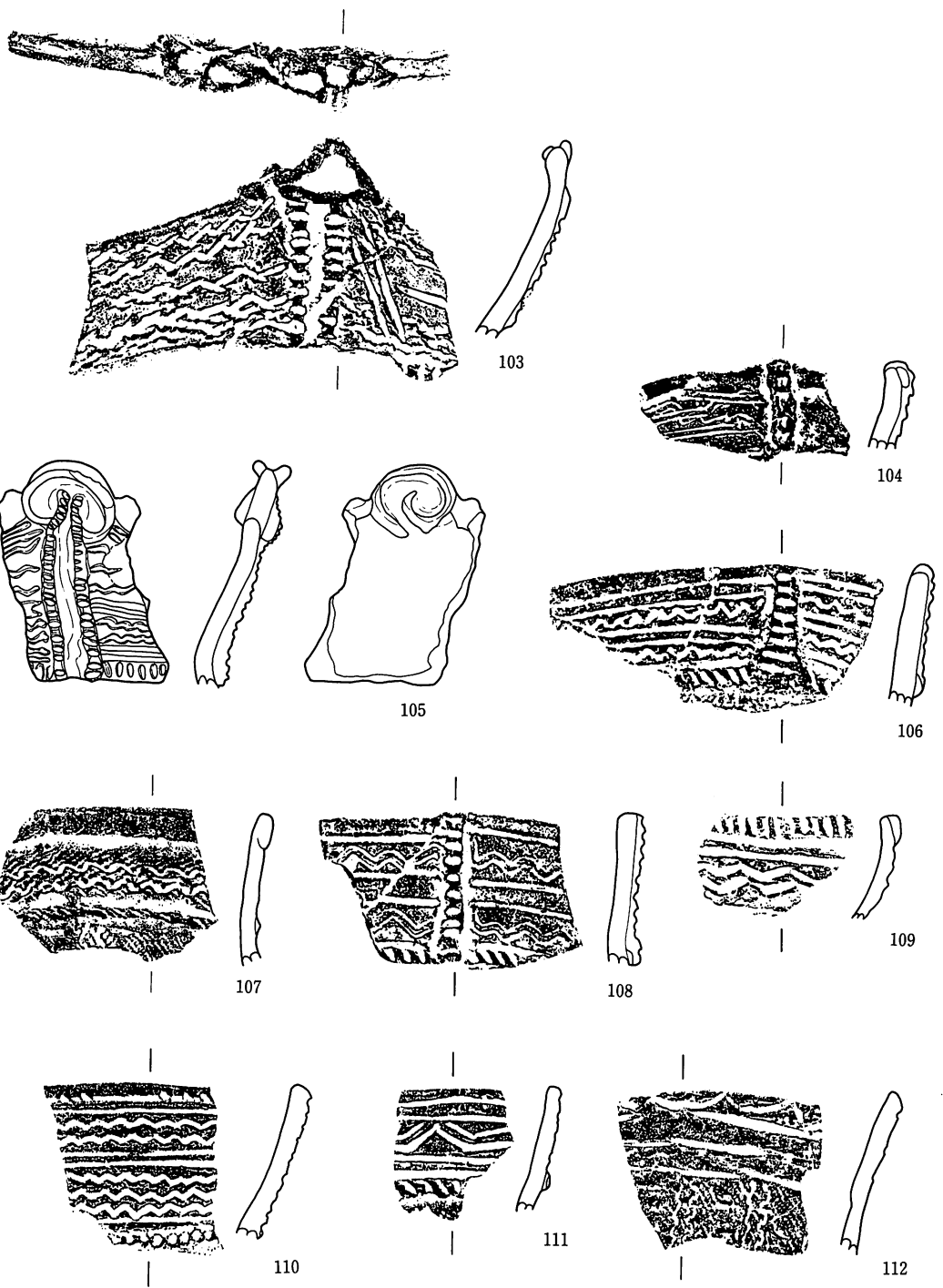
第98图 第三群土器



第99图 第三群土器

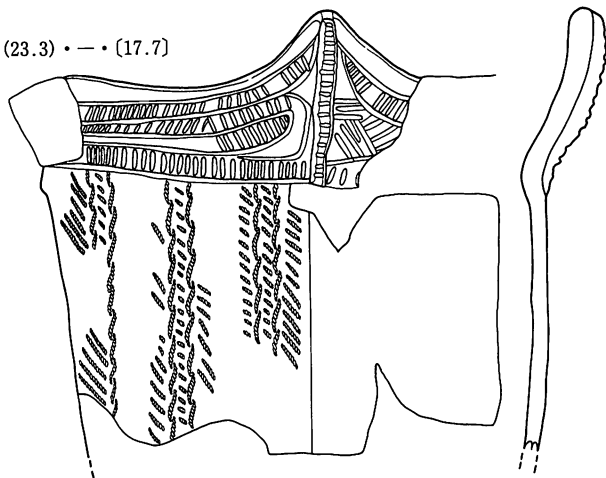


第100图 第Ⅲ群土器



第101图 第Ⅲ群土器

(23.3) · — · (17.7)



113



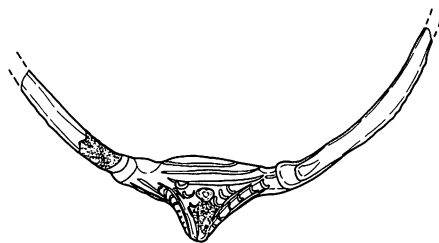
114



115



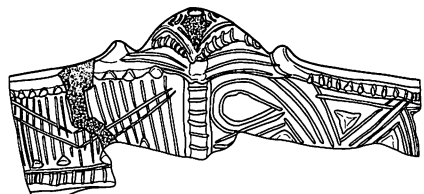
116



117



118

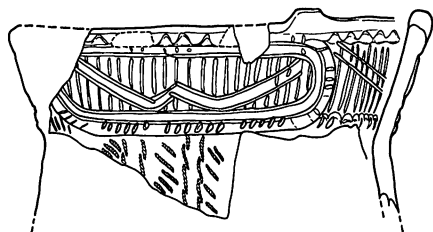


120

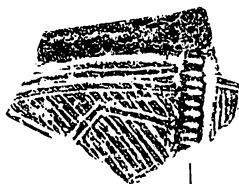


119

(16.8) · — · (8.3)



121

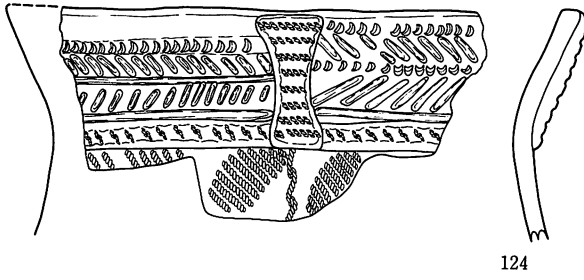


122

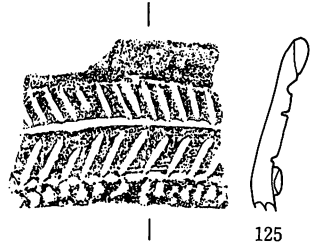


123

第102图 第Ⅲ群土器

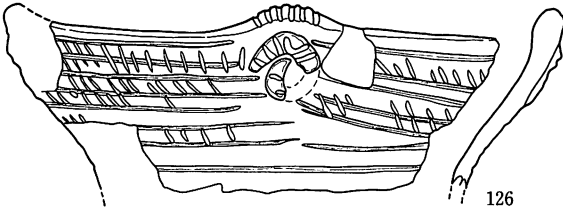


124

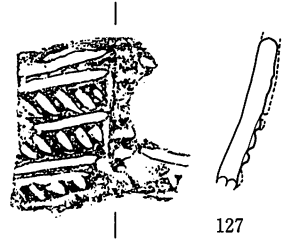


125

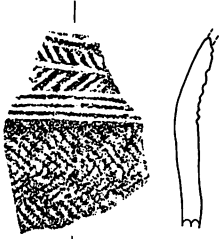
(22.4) · - · (7.2)



126



127



128



129

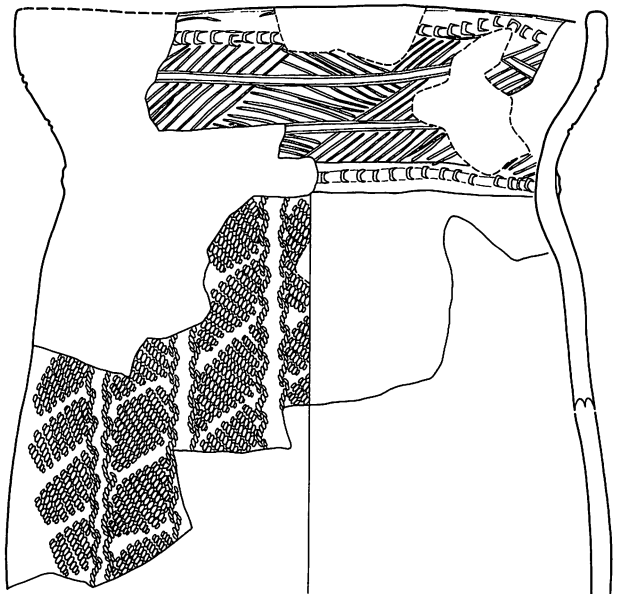
(23.6) · - - -



130



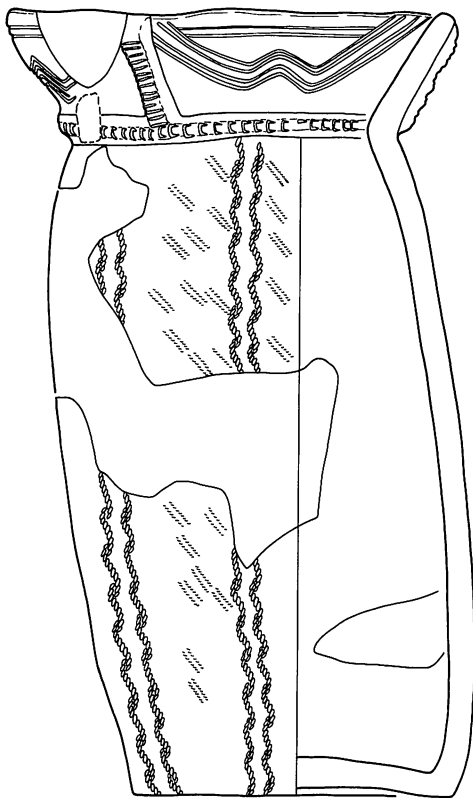
131



132

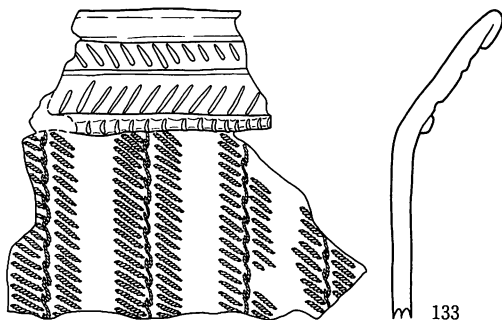
第103图 第Ⅲ群土器

(18.0) · 13.1 · 31.3

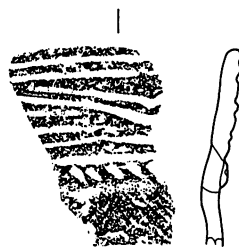


135

--- · (11.9)

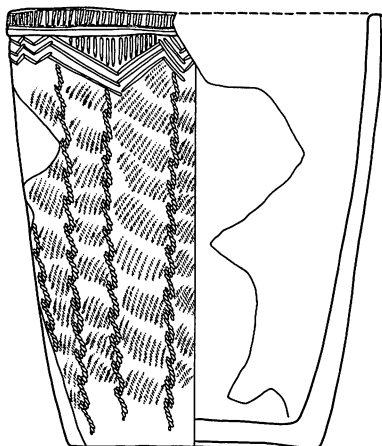


133



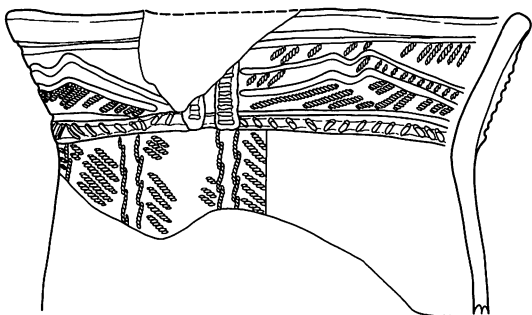
134

(15.0) · 10.0 · 17.3



137

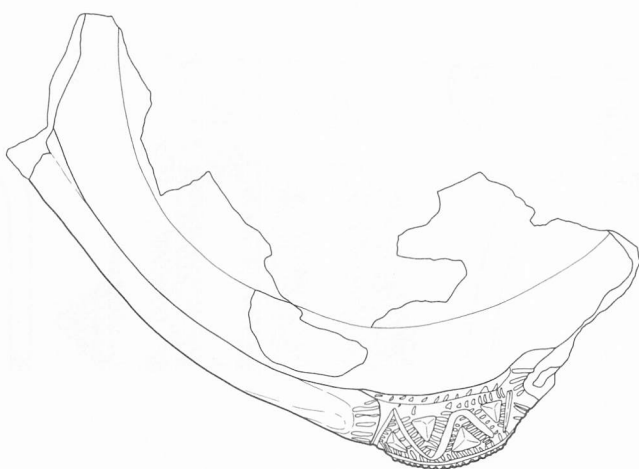
(21.0) · --- · (12.1)



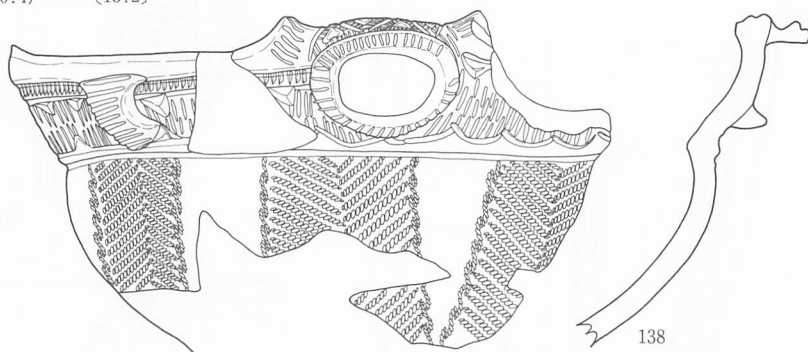
136



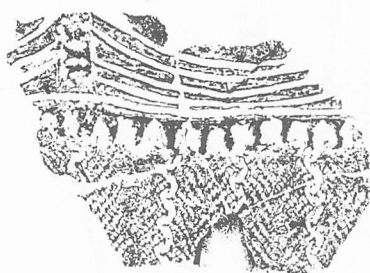
第104图 第Ⅲ群土器



(30.4) · · · (13.2)

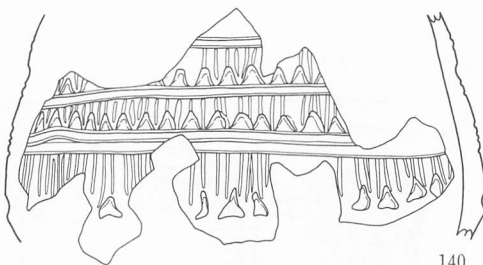


138



139

· · · · (9.4)



140



141

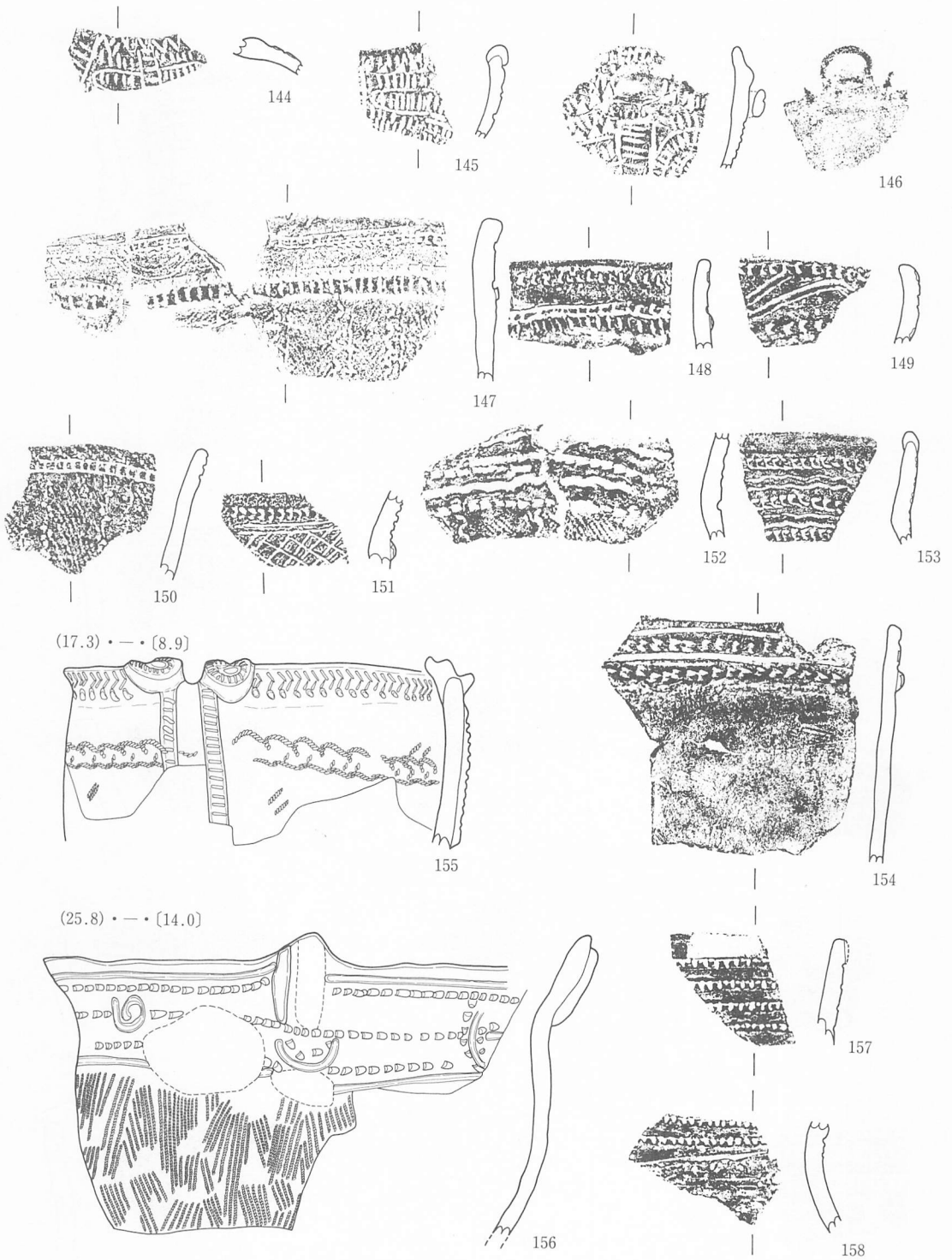


142

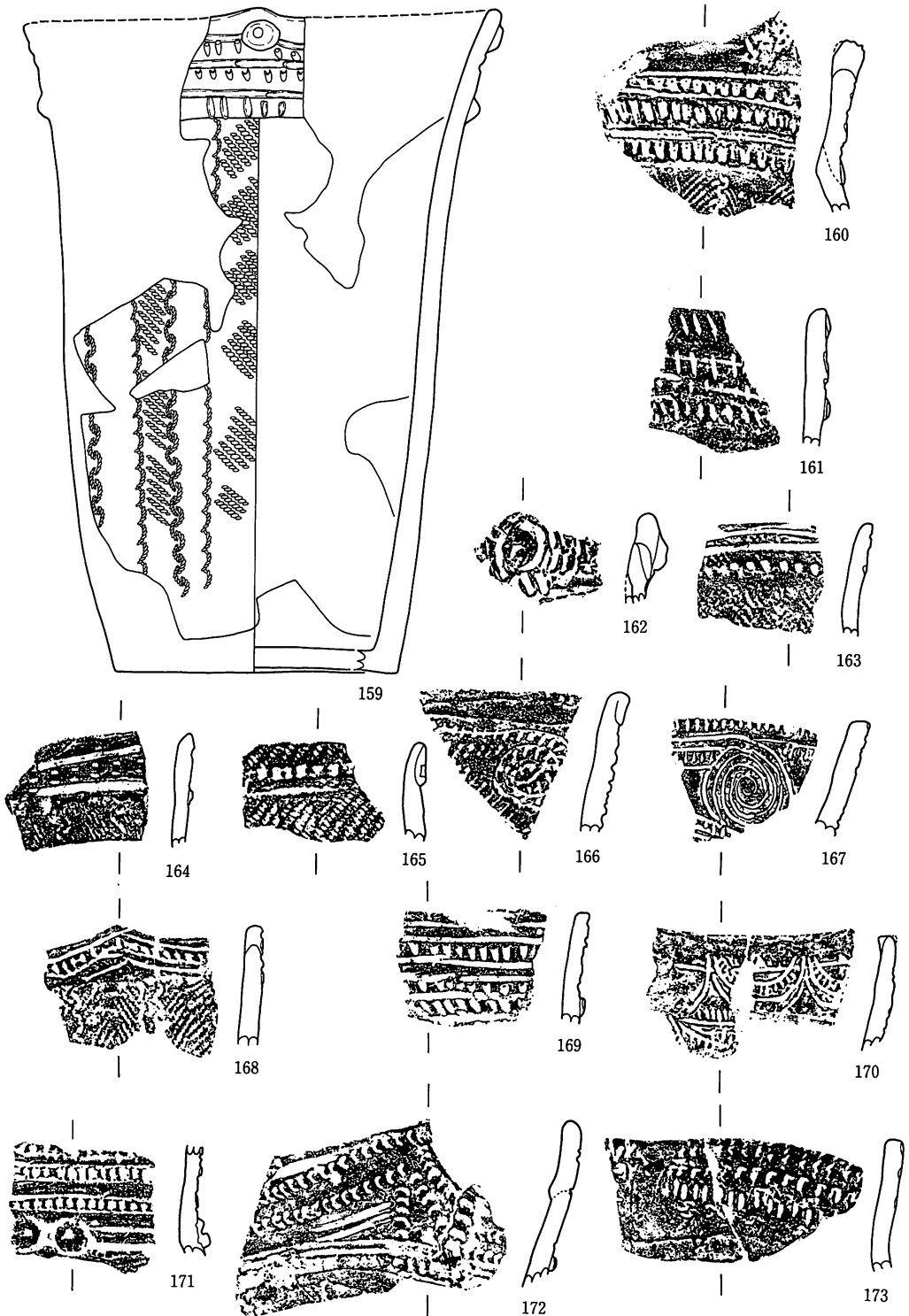


143

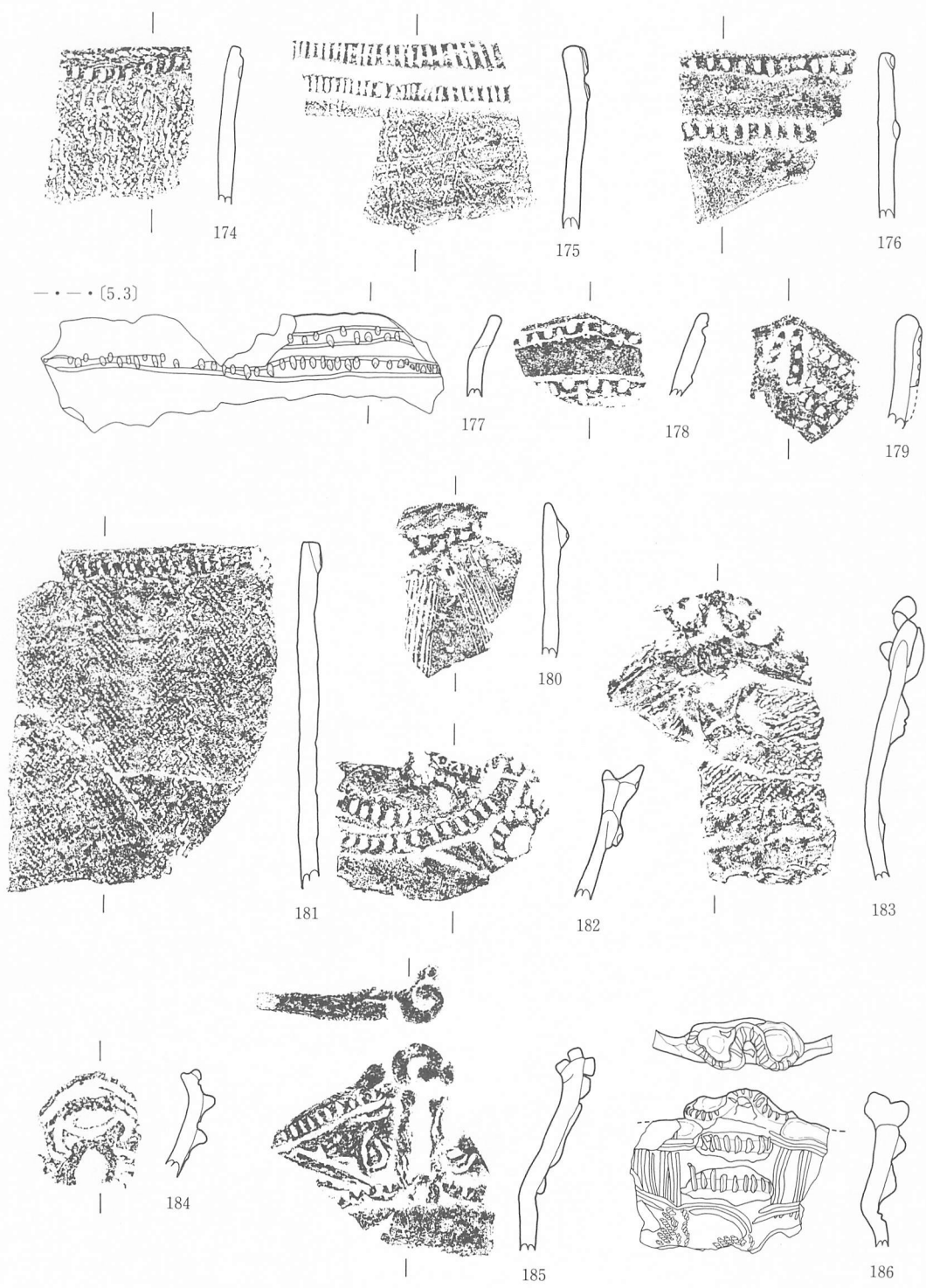
第105图 第三群土器



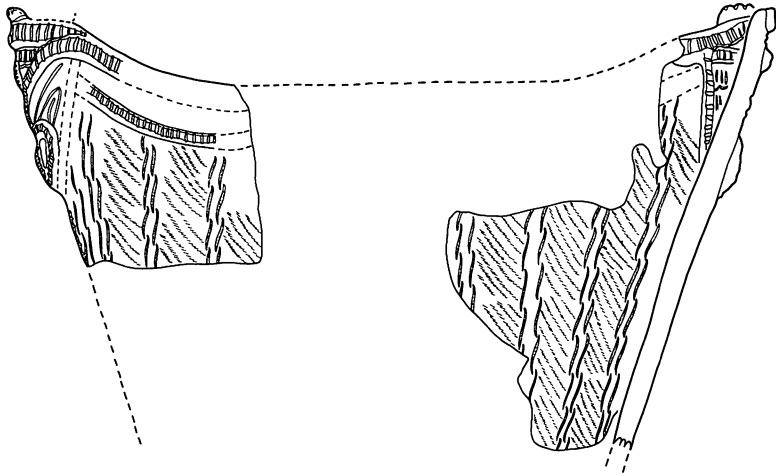
第106图 第Ⅲ群土器



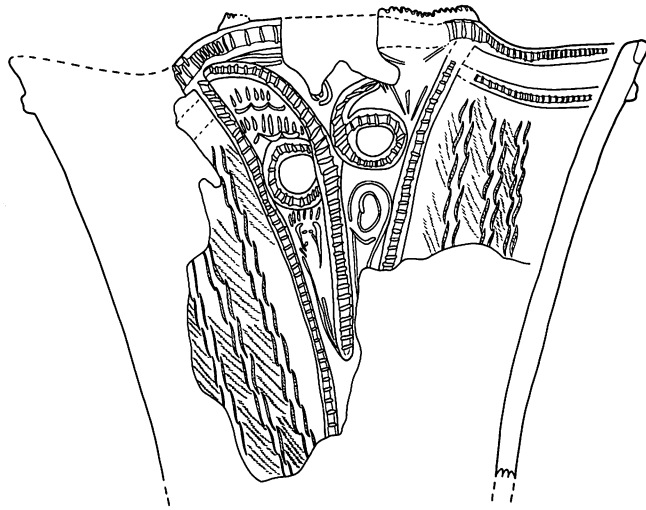
第107图 第三群土器



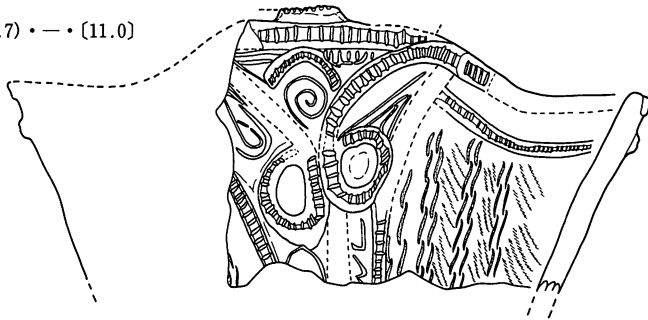
第108图 第Ⅲ群土器



(20.7) · — · (19.5)

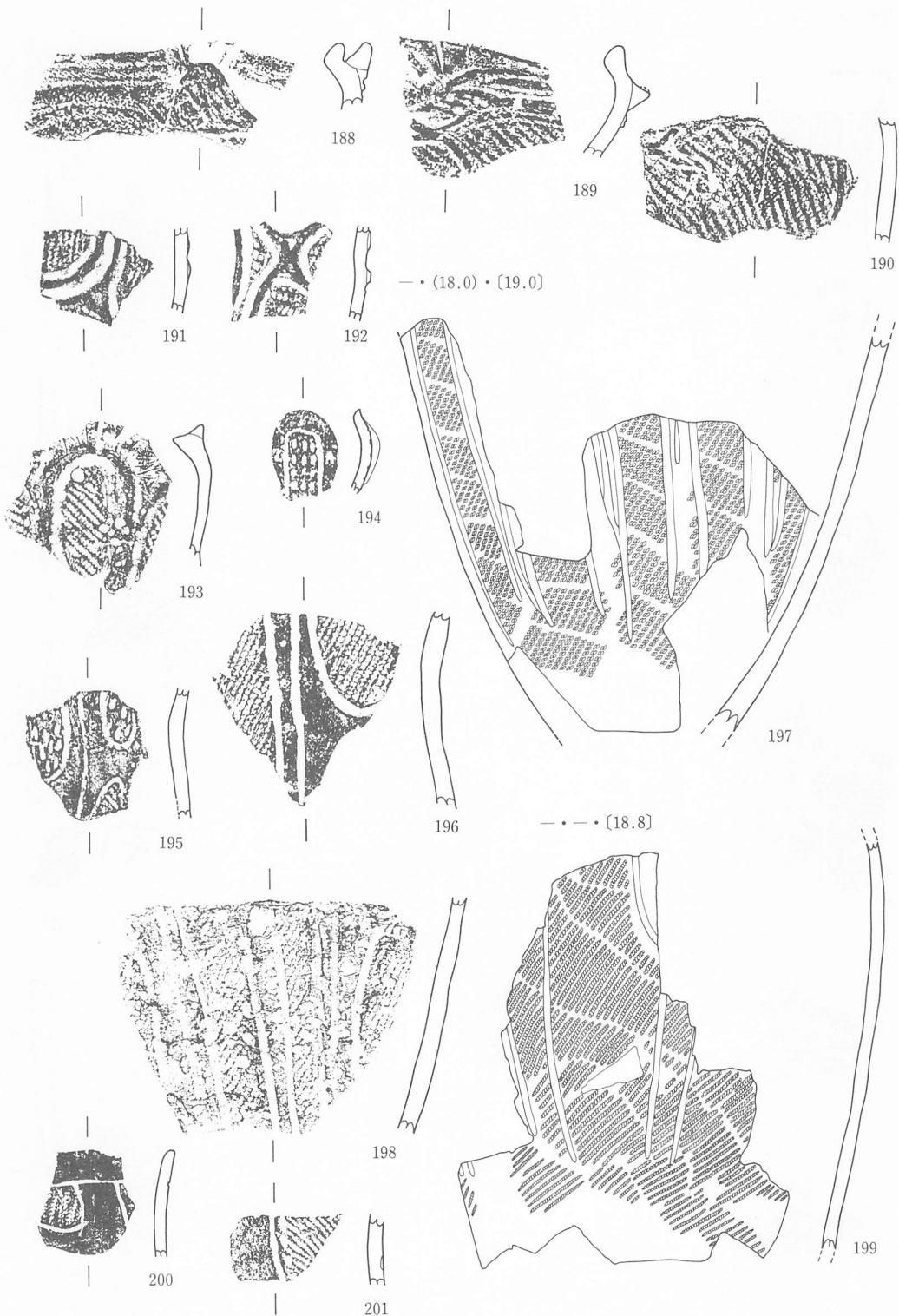


(20.7) · — · (11.0)



187

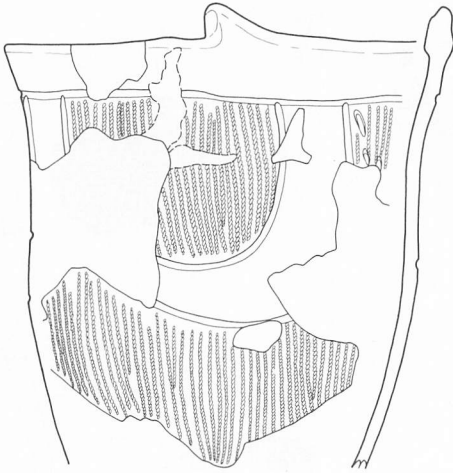
第109图 第三群土器



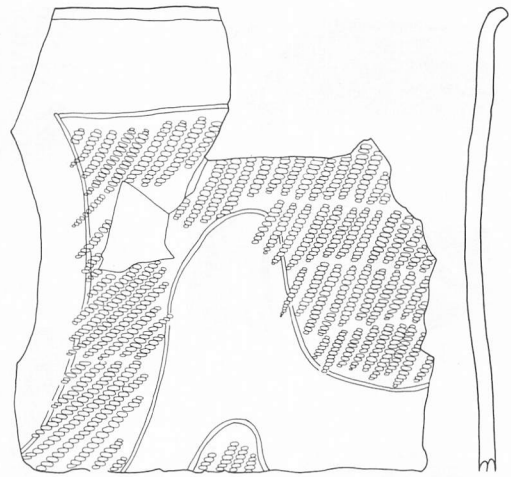
第110图 第三群土器

17.9 • — • [18.4]

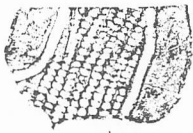
— • — • [18.5]



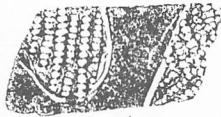
202



203



204



205



206



207



208



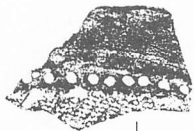
209



210



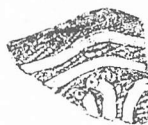
211



212



213



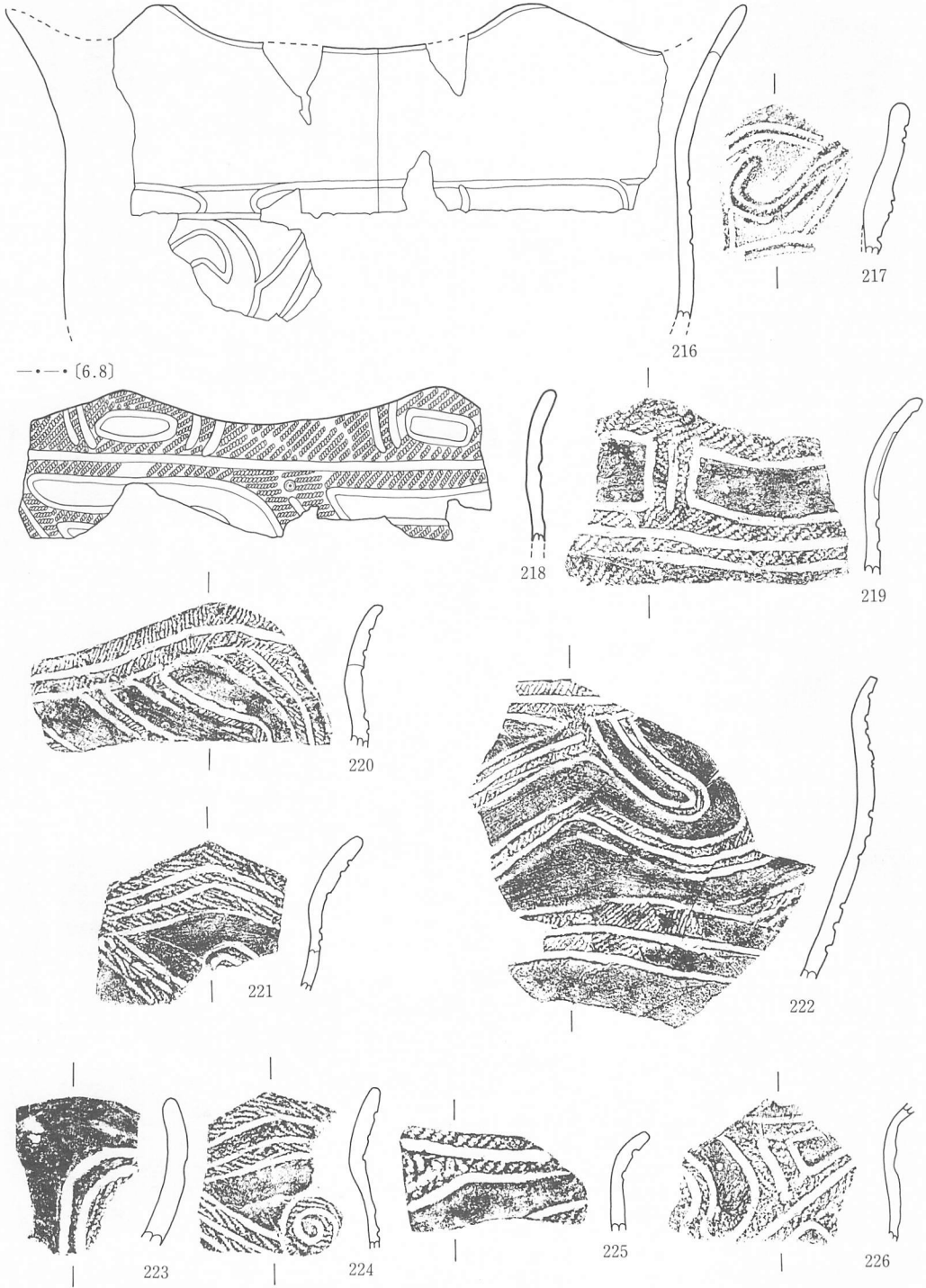
214



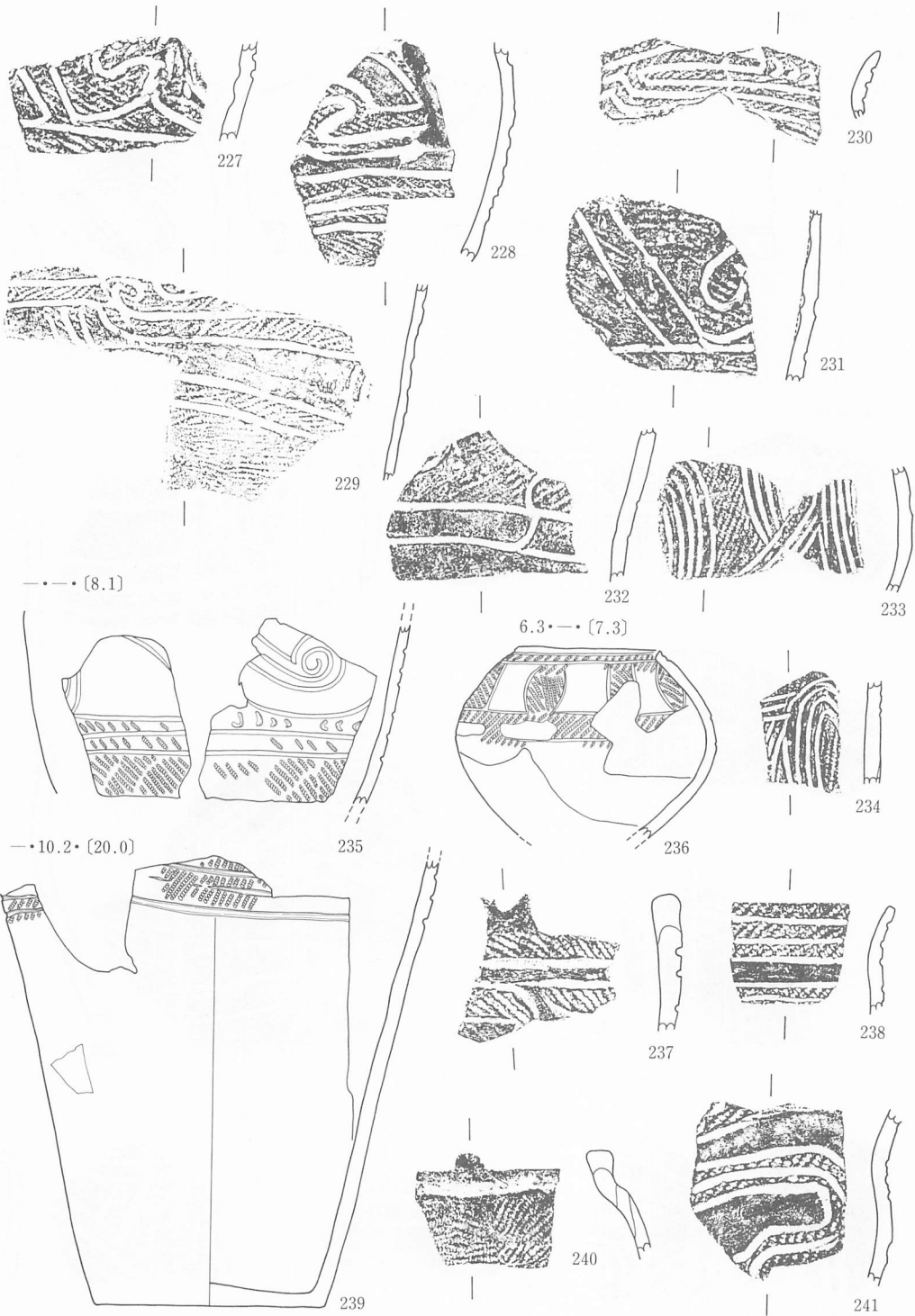
215

第111图 第III·IV群土器

(31.5) ··· [13.9]

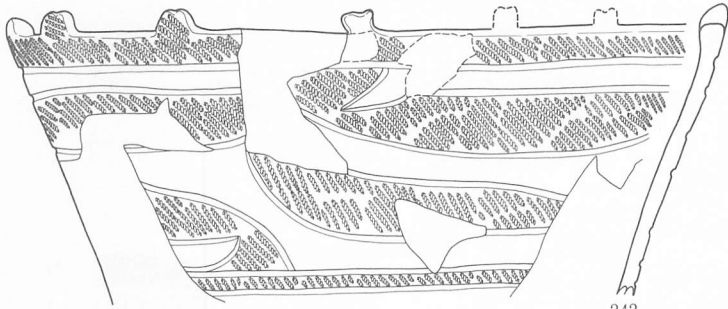


第112图 第IV群土器

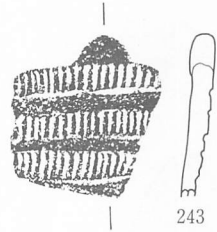


第113图 第IV群土器

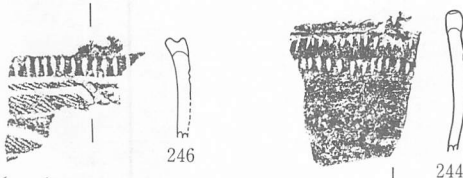
28.8 ··· (11.5)



242

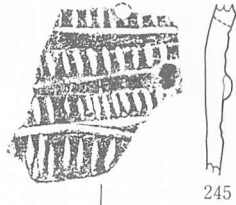


243



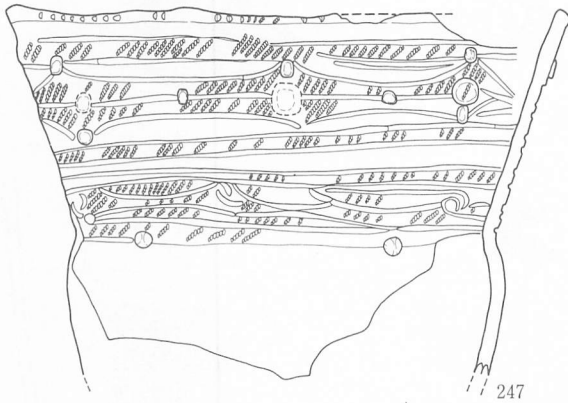
246

244



245

22.5 ··· (14.5)



247



248



249



250



251



252



253

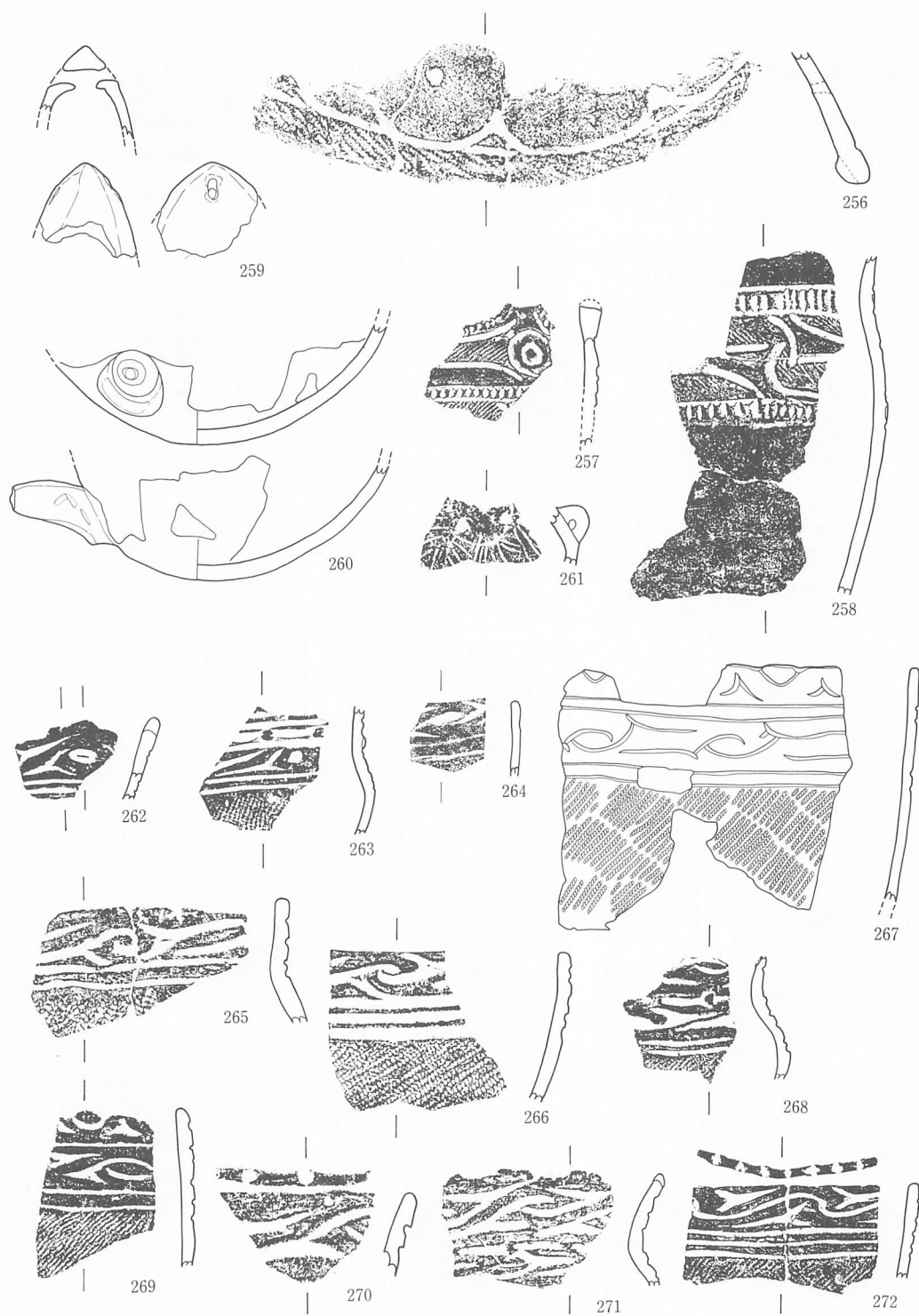


254

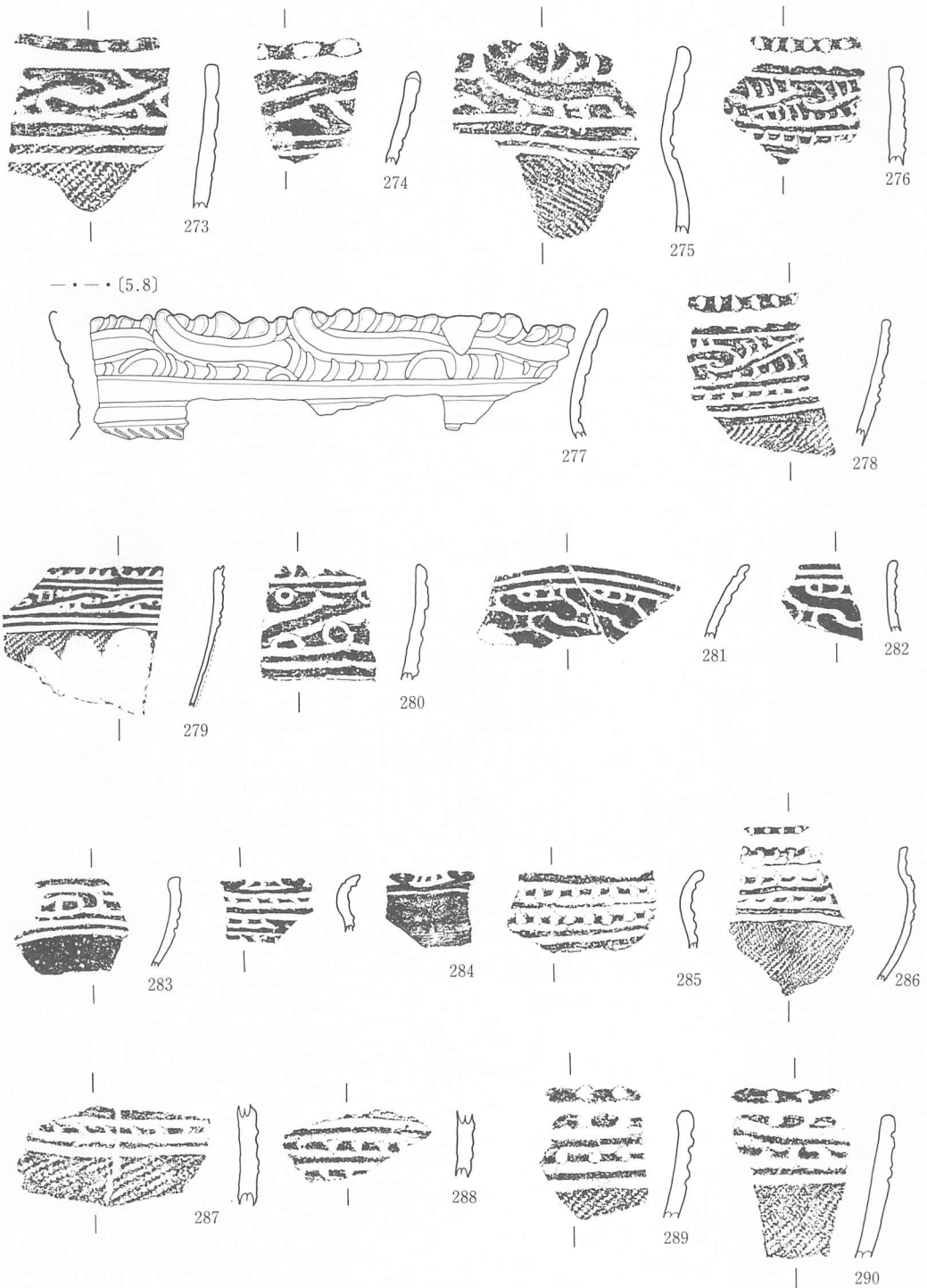


255

第114图 第IV群土器

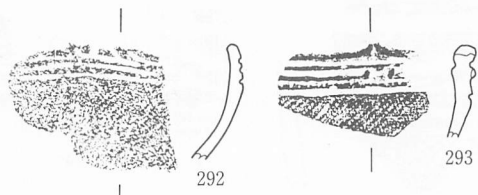
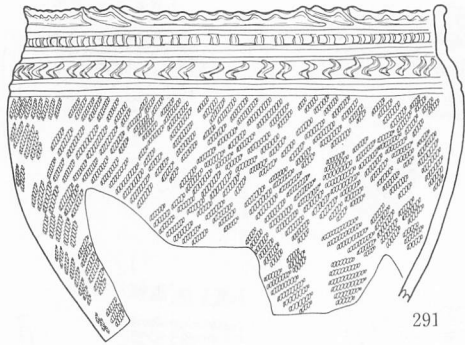


第115图 第IV·V群土器

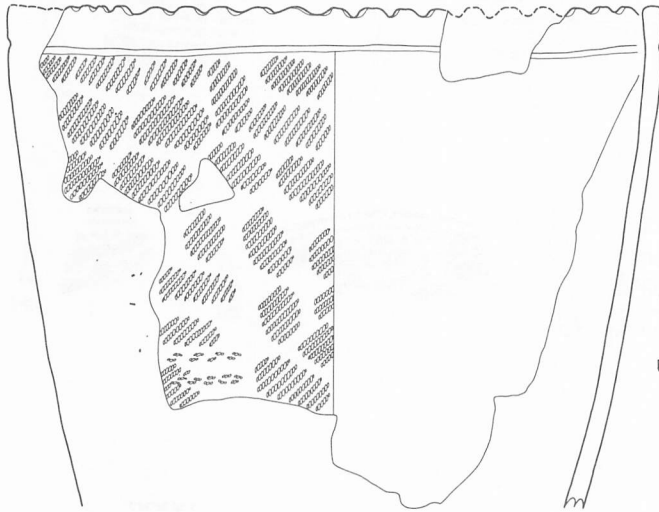


第116图 第V群土器

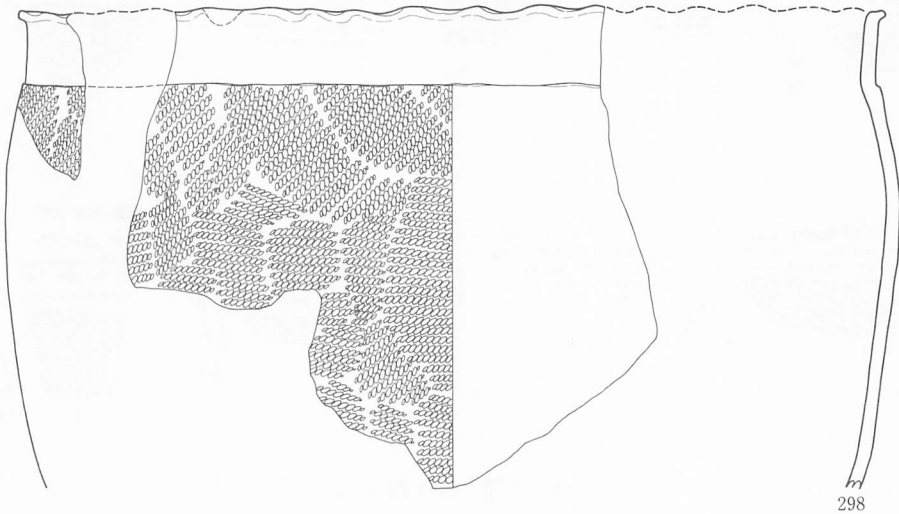
(17.3) ··· [12.9]



(27.8) ··· [19.5]

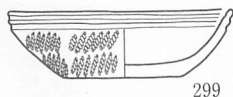


(34.6) ··· [19.2]

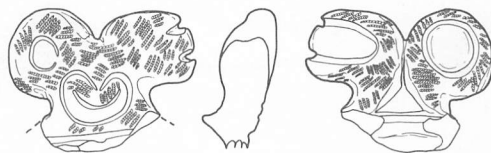


第117图 第V群土器

9.1 • 5.0 • 2.8

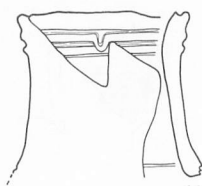


299



300

(7.0) • — • [6.6]



301



302

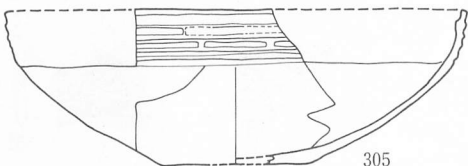


303



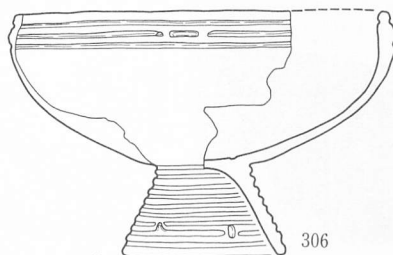
304

(18.4) • (6.0) • 6.1



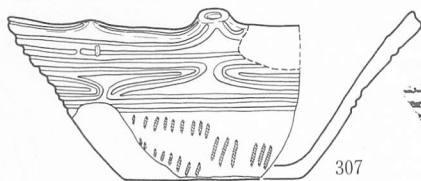
305

(15.5) • 6.0 • 9.5

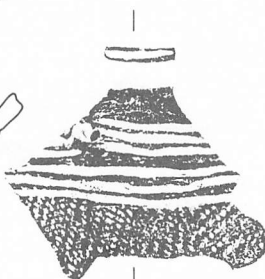


306

16.6 • (7.0) • 6.7



307



308



309



310



311



312



313



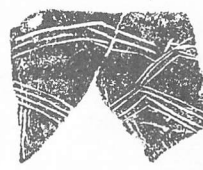
314



315

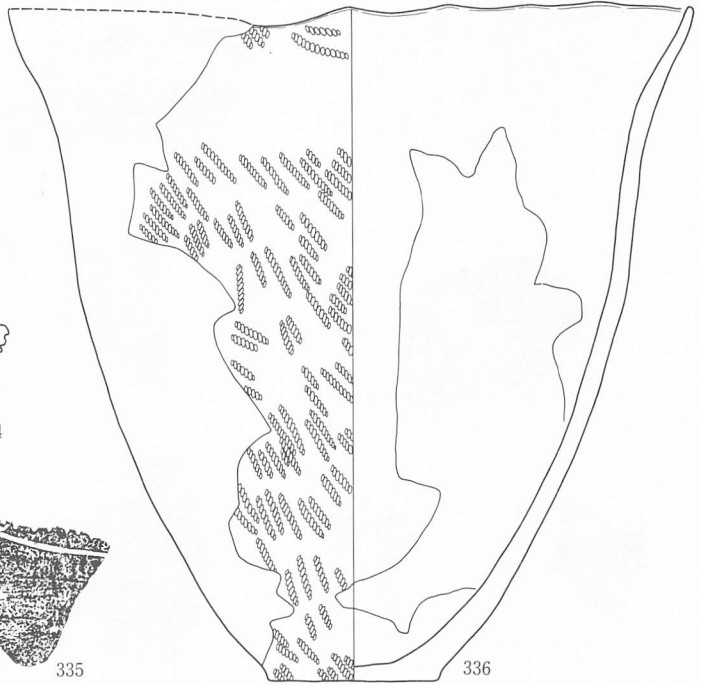
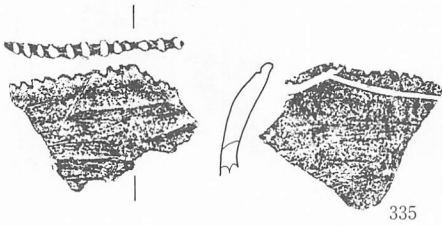
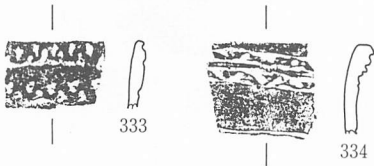
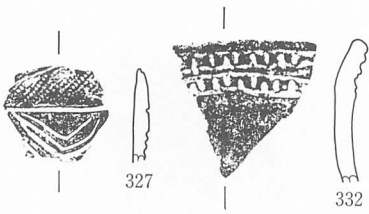
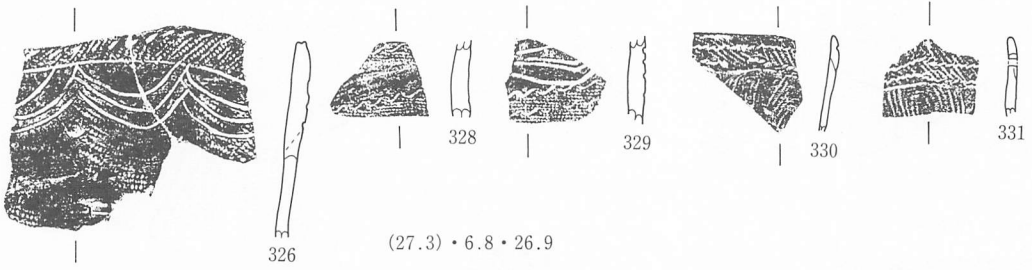
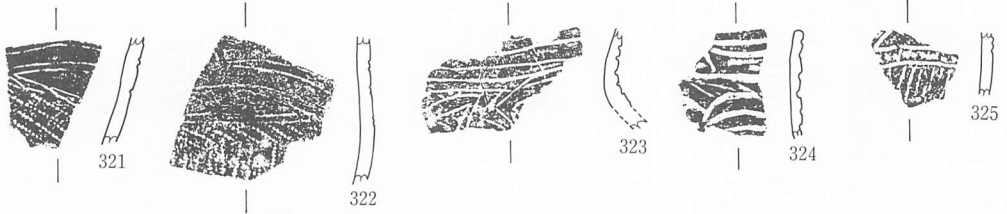
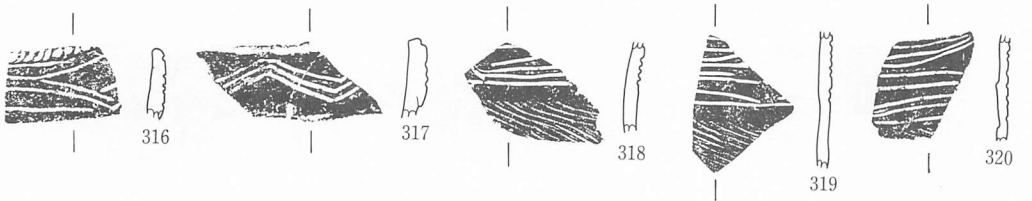


316



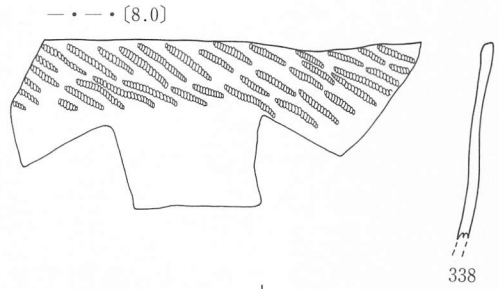
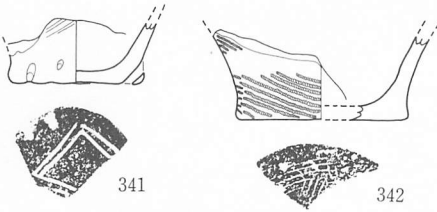
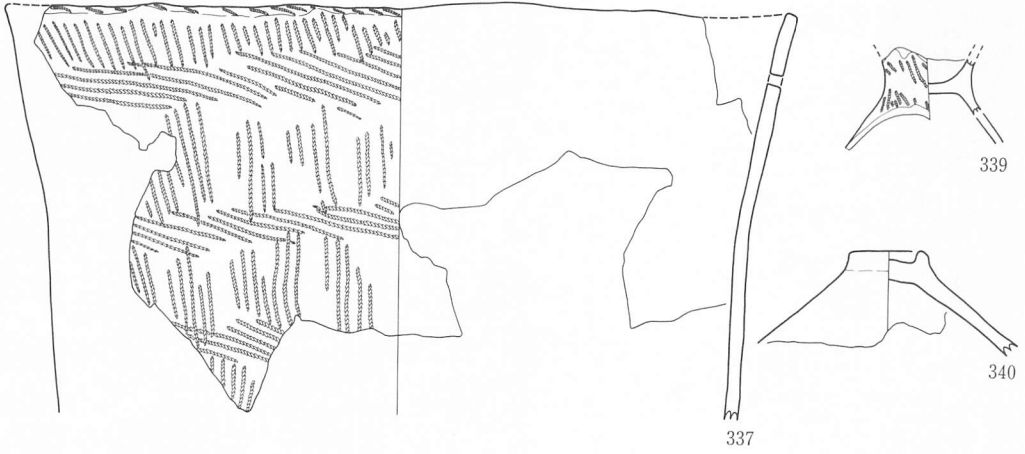
317

第118图 第V・VI群土器

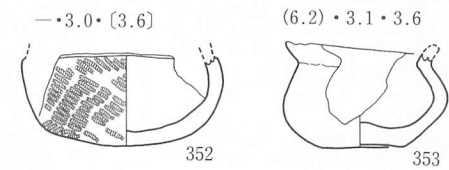
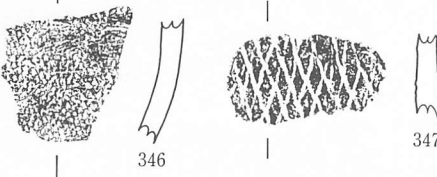
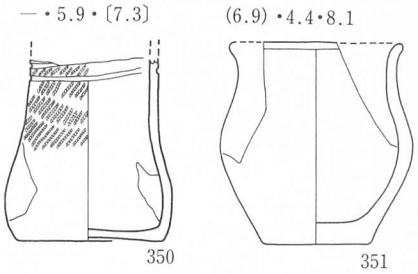
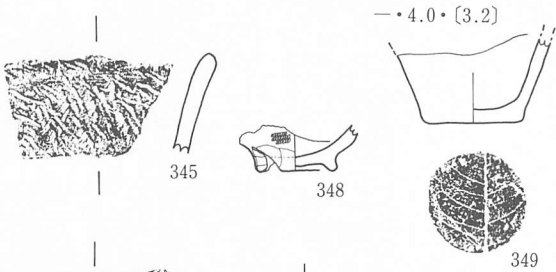
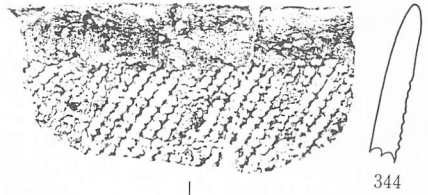
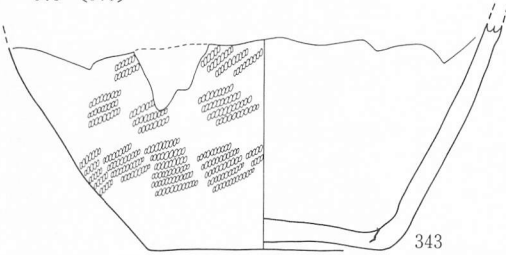


第119图 第VI群土器

(31.6) · — · [16.0]

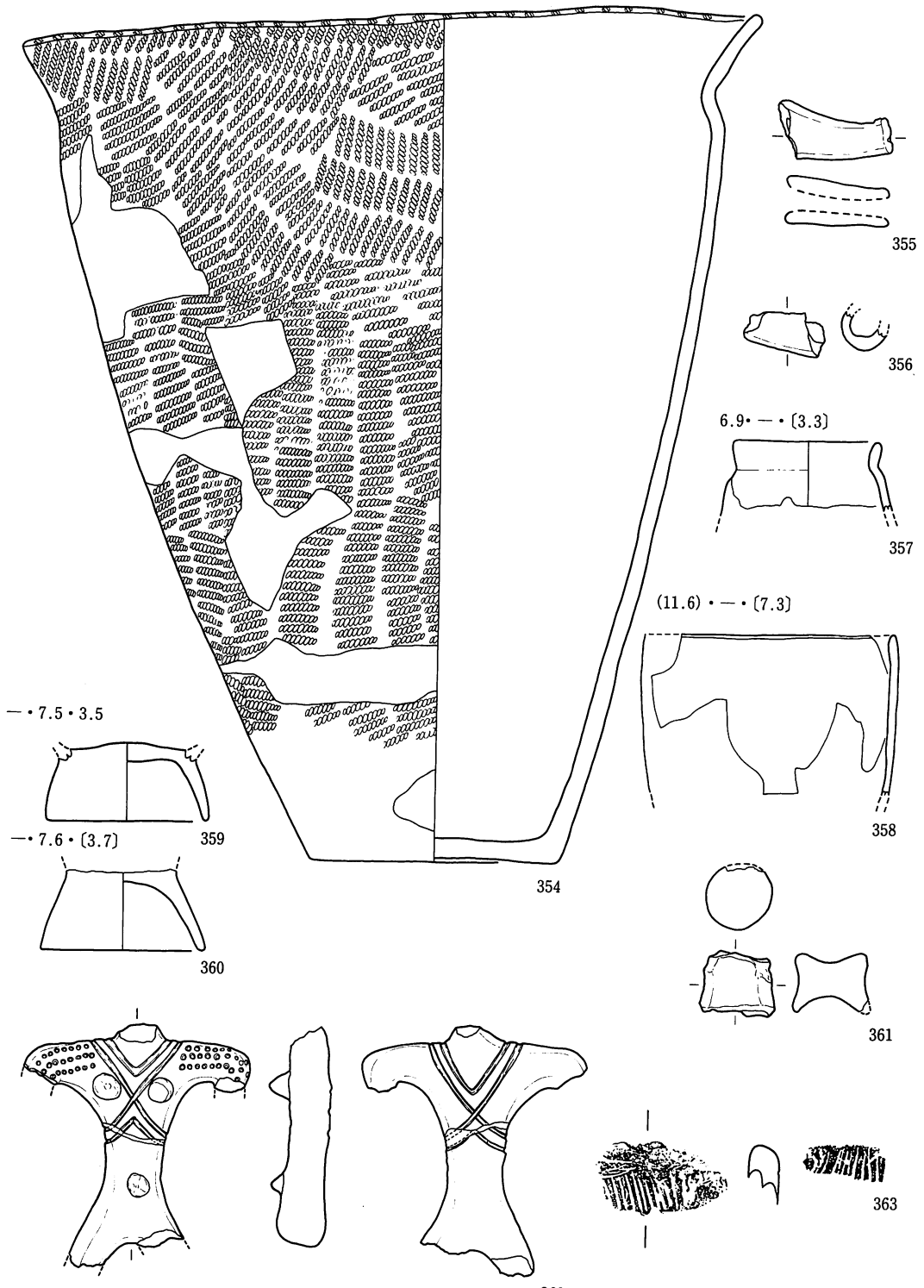


— · 9.5 · [9.0]



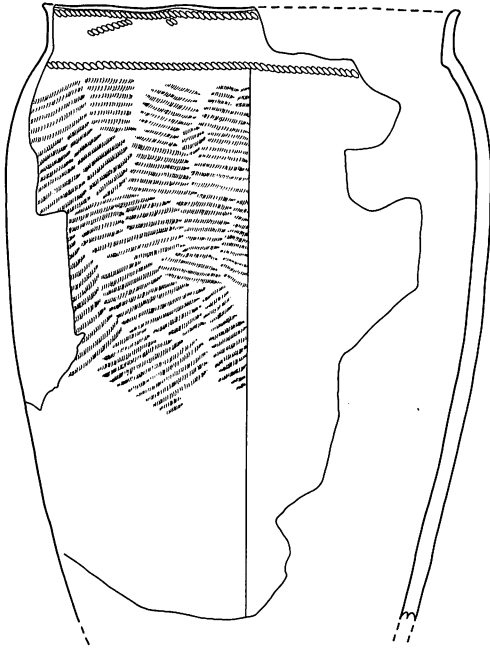
第120图 第VI·VIII群土器

(34.4) · 11.4 · (39.2)



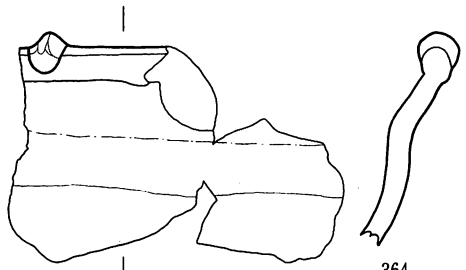
第121图 第Ⅷ群土器

(16.5) · — · [24.4]



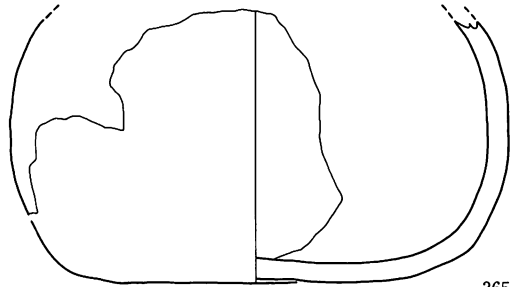
366

(21.6) · — · [9.6]



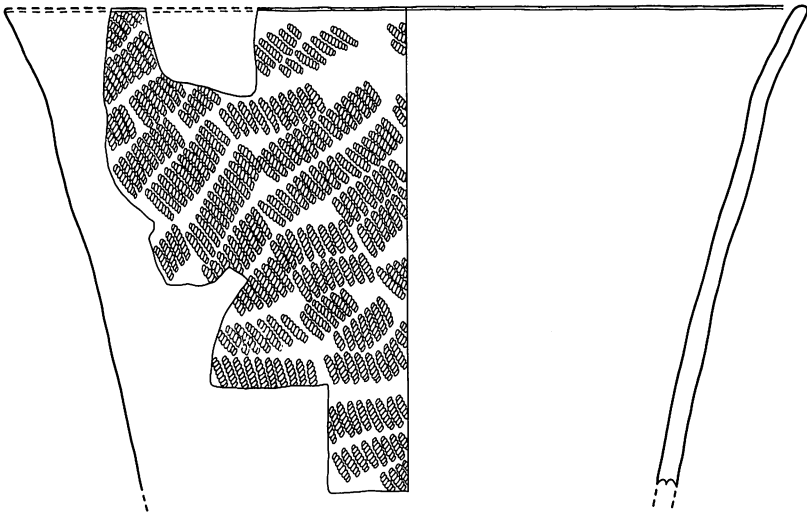
364

— · 14.0 · [10.9]



365

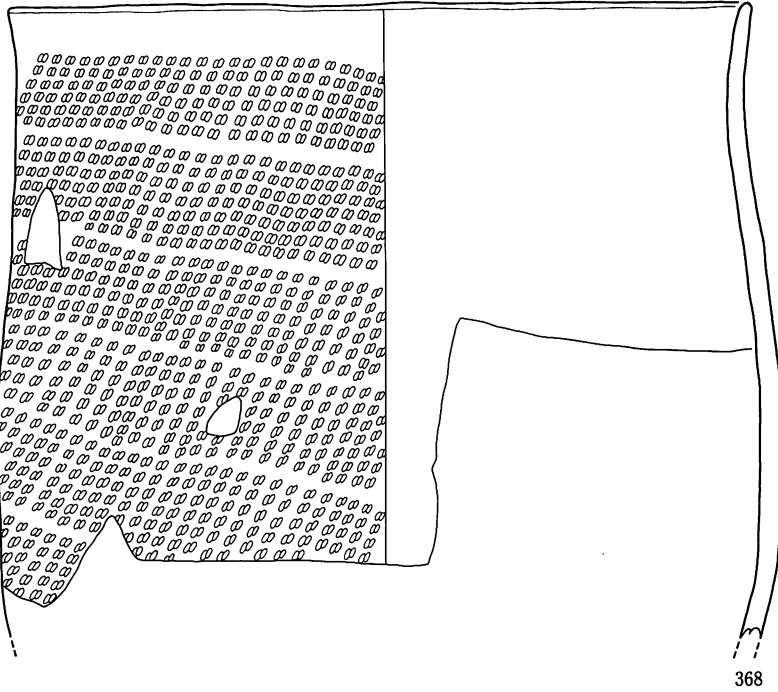
32.2 · — · [19.2]



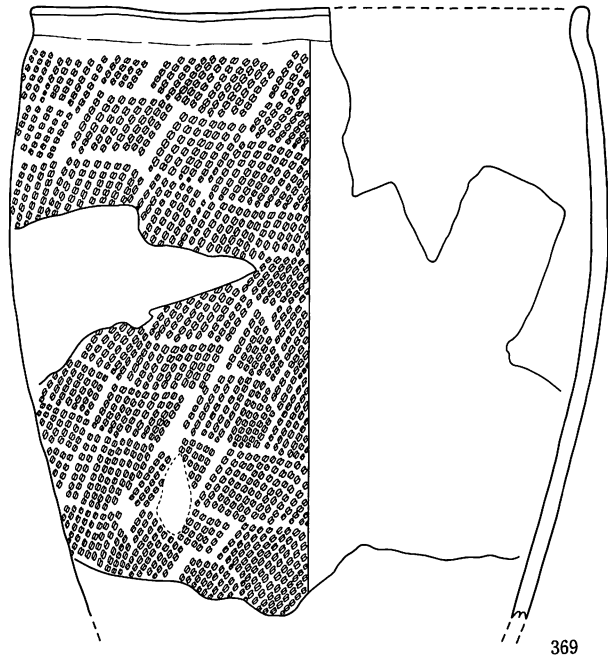
367

第122图 第Ⅷ群土器

29.5 • • (25.0)



(22.2) • • (24.3)



第123图 第Ⅷ群土器

石器

出土した石器は合計 756 点である。その内訳は次の通りである。

石鏃…… 8 石錐…… 2 尖頭器…… 1 石筥…… 5 石匙……16

不定形石器……… 449

スクレーパー……81 抉入石器…… 1 コア…… 1 リタッチ・ド・フレーク…… 49

フレーク……… 317

石斧……24 石錘……… 3 石鍬………10 凹石………15 砥石……… 2 特殊磨石………19

半円状偏平打製石器…… 8 磨石……… 102 敲石……… 7 石皿………42 石棒……… 6

石製品……… 7 原石……… 8 不明………25

本遺跡の剥片石器はスクレーパーを除くと非常に少ない。石鏃のうち有茎鏃は図示した 512、515、518、519 の 4 点、アメリカ式石鏃は 521 だけである。残り 5 点は無茎鏃である。522、523 の 2 点は石錐である。使用痕は見られない。524 は尖頭器で研磨されている。525～527 は石筥である。刃部は両面調整で丁寧である。石匙 16 点のうち横形石匙は 6 点であり、縦形のもは 10 点である。横形石匙の主要刃部はすべて片面調整であるが、縦形石匙は片面調整となるものと両面調整となるものは合い半ばする。図化しなかった 7 点のうち 5 点は一部欠損する。

不定形石器の内訳はフレークが 317 点(70%)、スクレーパー81 点(18%)、リタッチ・ド・フレーク 50 点(11%)である。この数値は他の縄文遺跡と比較し特別多いものではない。537～550 はスクレーパーである。刃部の調整は片面となるものが約三分の二である。538 は上部が欠損しているため不詳であるが、石匙かもしれない。539～541 はエンド・スクレーパーであり、刃は急角度となっている。542 は刃部の角度から言えばエンド・スクレーパーに分類されるが、547 と同様サイド・スクレーパーに分類できるかもしれない。543～550 は一応サイド・スクレーパーに分類しておきたい。しかし、刃部の角度や調整面等から見れば、エンド・スクレーパーの要素を持つものもあり明瞭に分類しかねるものが多い。551 は加工痕は認められないが、所謂刃こぼれが見られるものでリタッチ・ド・フレークである。同種の一例として 1 点だけ図化しておく。

552～559 は磨製石斧である。石斧 24 点のうち完形品は 553 と 556 の 2 点のみである。定角式のものも多く、乳棒状のものは 587 を含めて 4 点である。小型の石斧は 558 と 559 の 2 点である。

礫石錘は 560 と 561 の 2 点のみである。

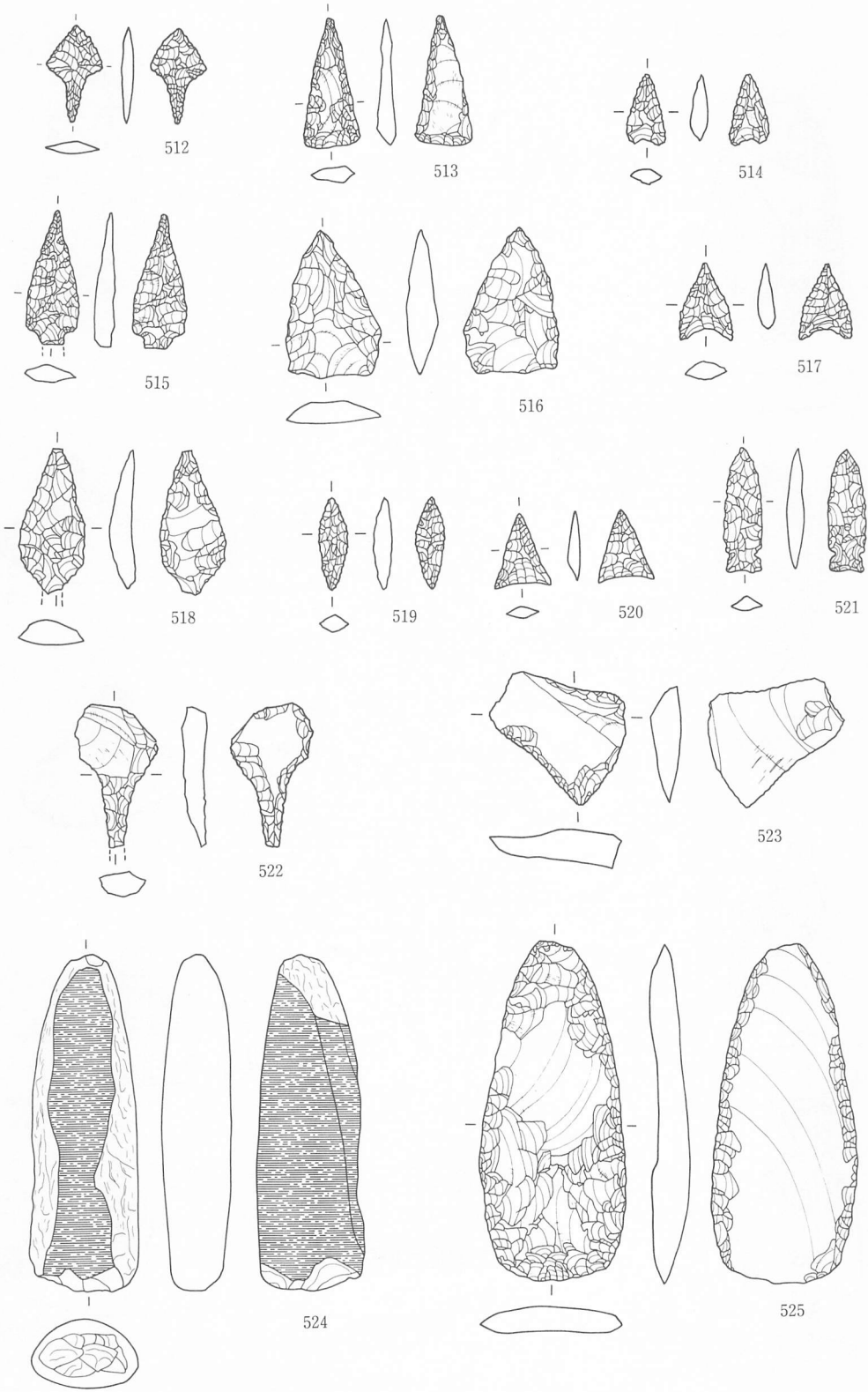
562～583 は「擦り、敲き」用の石器である。これらを一括する理由は次のとおりである。562～567 は従来半円状偏平打製石器と呼ばれているものである。周囲を打ち欠くことによって半円状に整形し、直線部を擦り面として使用する石器である。しかし、568～570、572 等は打

製による整形を伴わず、すでに同様の形態を持っている河原石を使用しているものである。用途は同様と考えられることからこれらを区別する意義は少ない。573～565 は特殊磨石であるが、571～572 と区別し得るのかどうか。576～579 は凹石であるが、少なくとも 577～578 は磨石としても使用されている。580～583 は磨石であり、敲石でもある。すなわち、磨石、敲石、凹石は2つ以上の痕跡を合わせ持つのが相当数にのぼる。また、図化したものは比較的典型的な石器であり、図化しなかったものには分類が不能なものもある。以上のことから磨石、特殊磨石、敲石、半円状偏平打製石器、凹石は「擦り、敲き」の用途に使用された石器とみなし用途別の視点から一括することとする。この「擦り、敲き」用具は 151 点であり、全石器に占める割合は約 20 % である。フレイクと原石を除いた石器(431 点)に対する割合は実に 35 % に達する。この数値は他の縄文の遺跡に比して著しい特徴といえる。同時に石皿 42 点も極端に多い。この石皿は 591 のようなきちんと整形されたものは僅かに 2 点であり、40 点は 589、590 のような偏平な河原石を用いたものである。42 点中 8 点が完形品、34 点が欠損している。この欠損は接合したもの 4 点も含めて大きな破片となっている。これは「方割石」とみなすことが可能かもしれない。584～586 は石鋏(打製石斧)である。このように整形されたものはこの 3 点のみであるが、他に板状のものも加えると 10 点出土している。

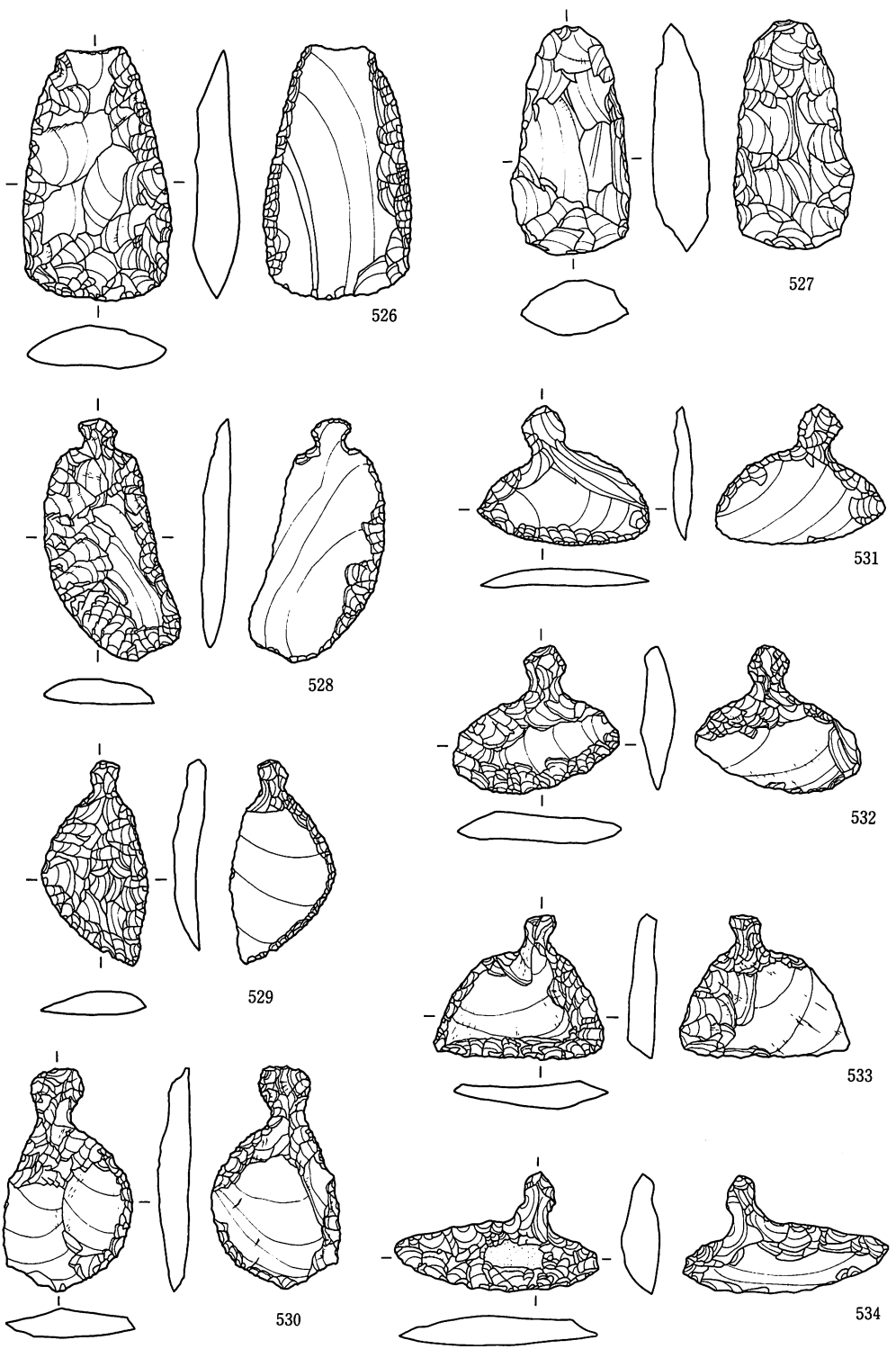
587 は石皿とも有溝砥石とも言える。589 は手持ち砥石である。また、石製品は明瞭な形をしているのは 594 の有孔石製品だけであり、他は破片で器形は不詳である。石棒は全て 592 のような自然節離の六角柱をしたものである。593 はコアである。

取り上げた原石はすべて溶岩である。他にも全く加工も使用痕も認められない石があったが、他から持ち込まれたものかどうか特定できなかったため取り上げなかった。器種不明としたものは加工痕や使用痕を認めたが小破片等のため器種を特定できなかったものである。

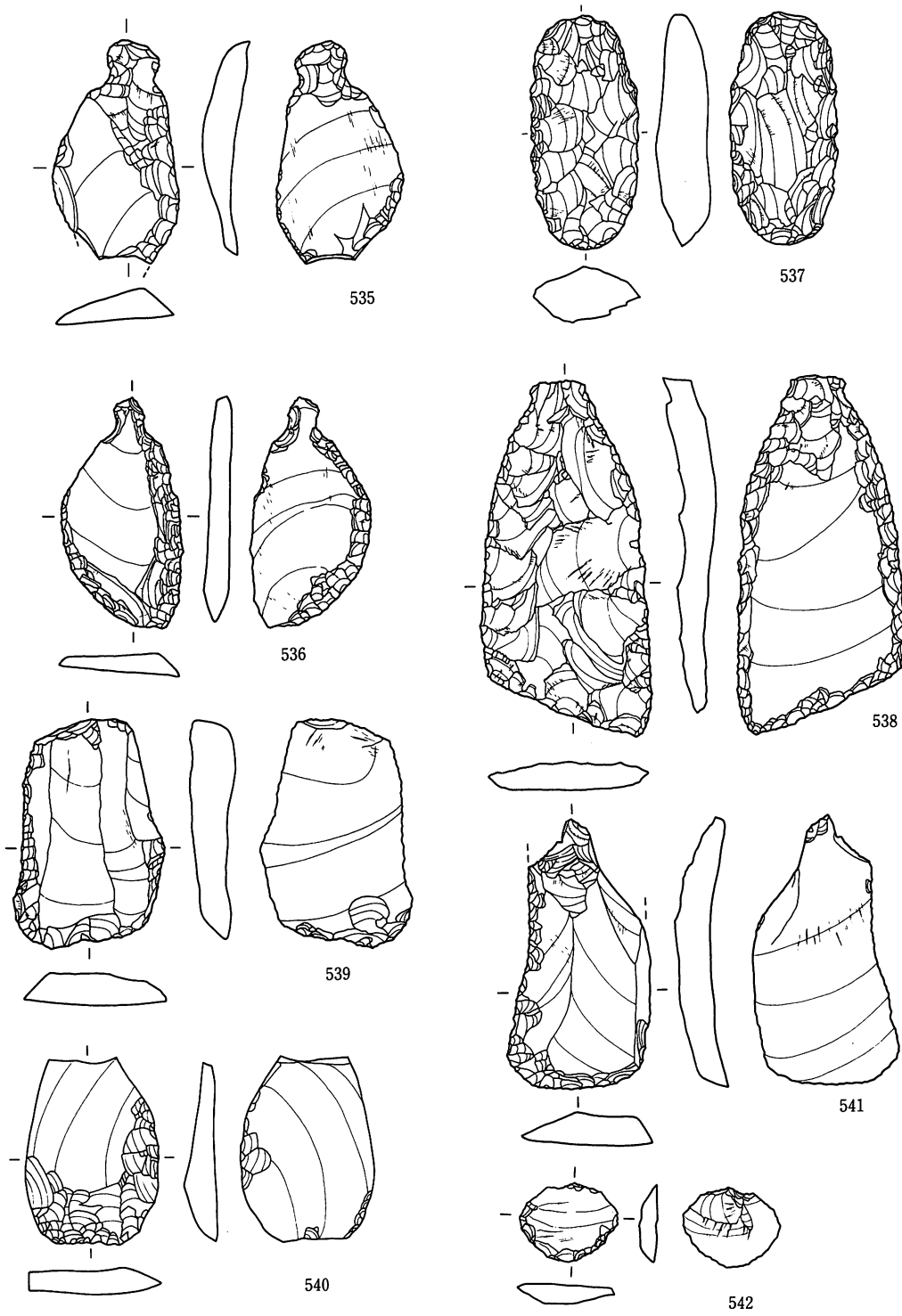
石材別では硬質泥岩(18%)、凝灰質硬砂岩(15%)、硬砂岩(11%)、チャート質粘板岩(9%)、安山岩(8%)、凝灰岩(8%)、流紋岩(5%)等が多い。産地別では北上山地起源のもの 72%、奥羽山地起源のもの 28% となり、遺跡が所在する北上山地のものが圧倒的に多い。また、産地不明のものは黒耀石の 4 点のみであり、ほとんどが地元産の石材で賄われている。



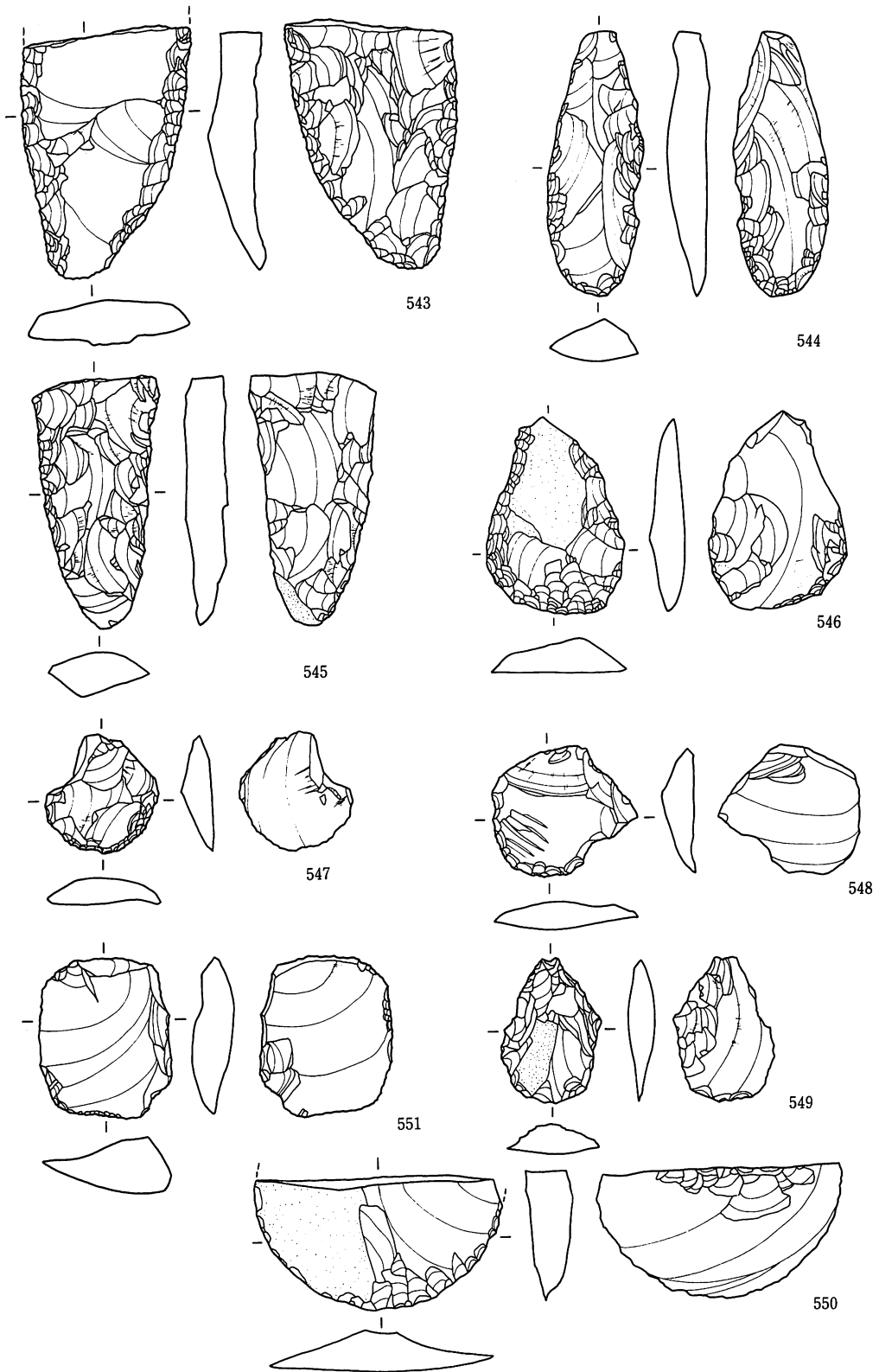
第124圖 石鏃・石錐・尖頭器・石篋



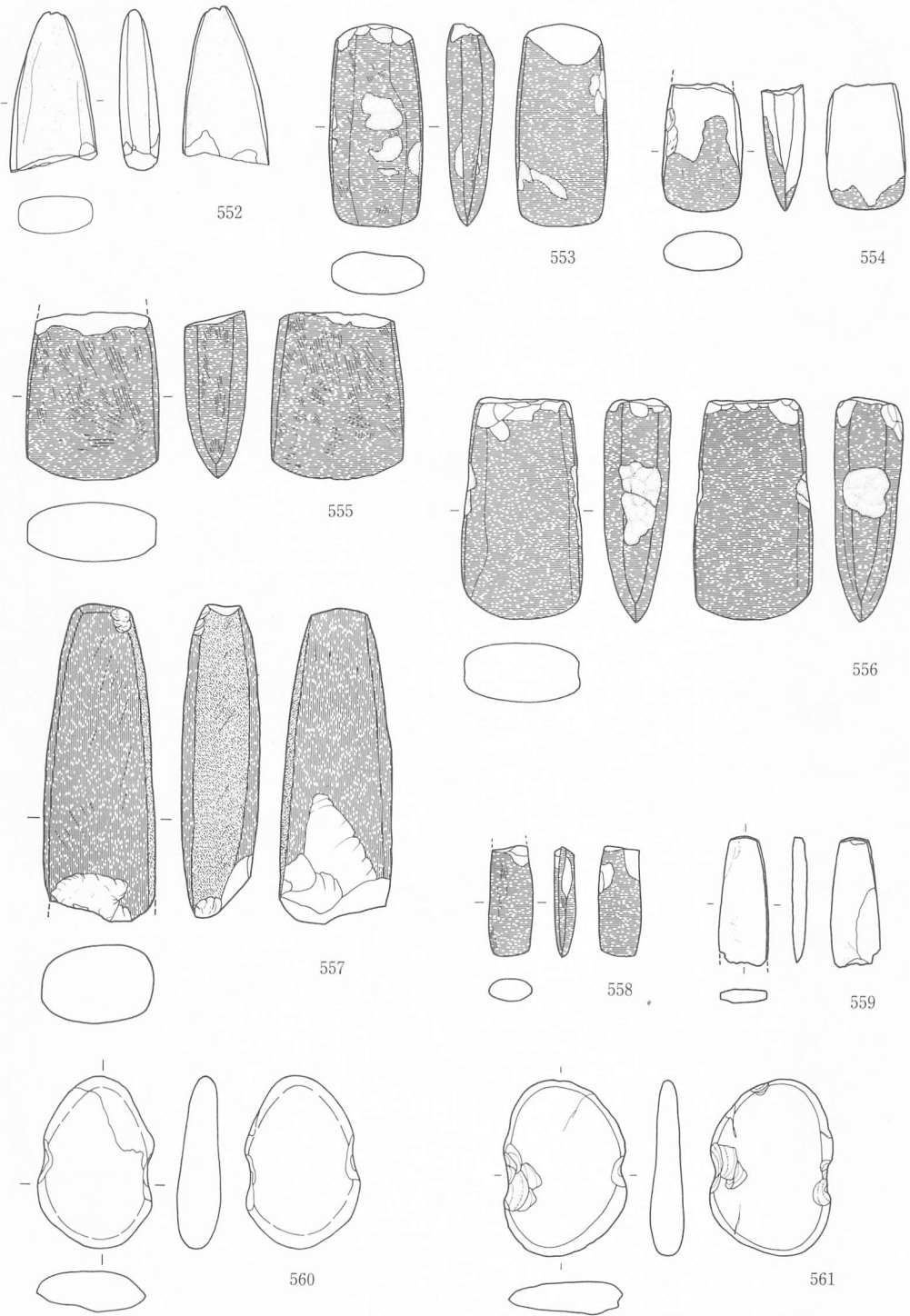
第125图 石篋・石匙



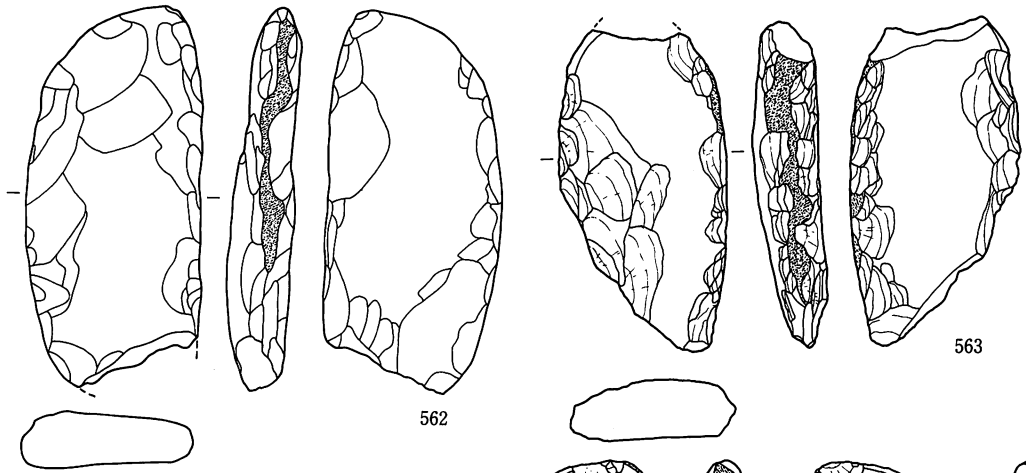
第126図 石匙・スクレーパー



第127図 スクレーパー等

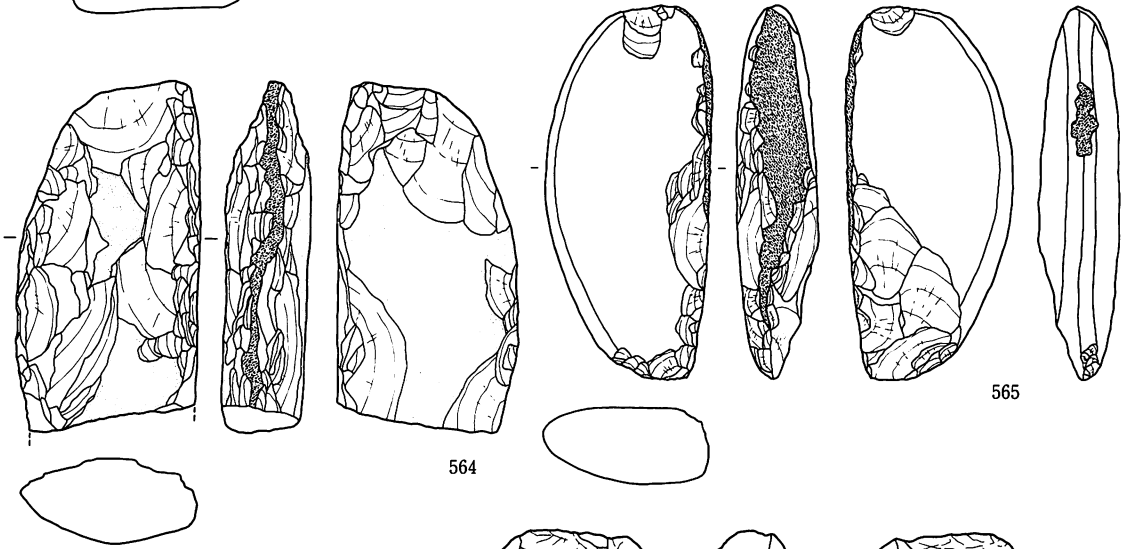


第128図 石斧・石錘



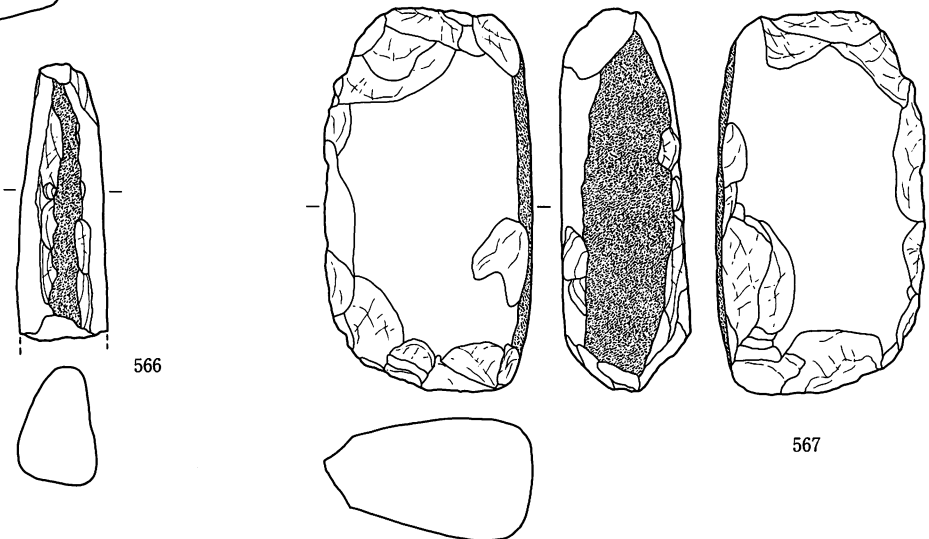
562

563



564

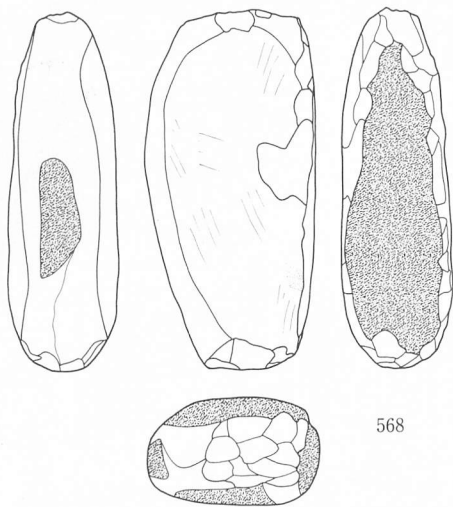
565



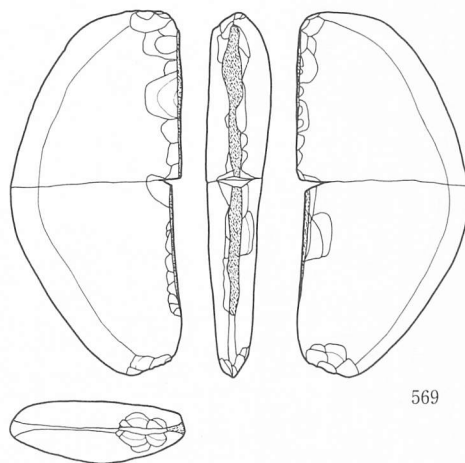
566

567

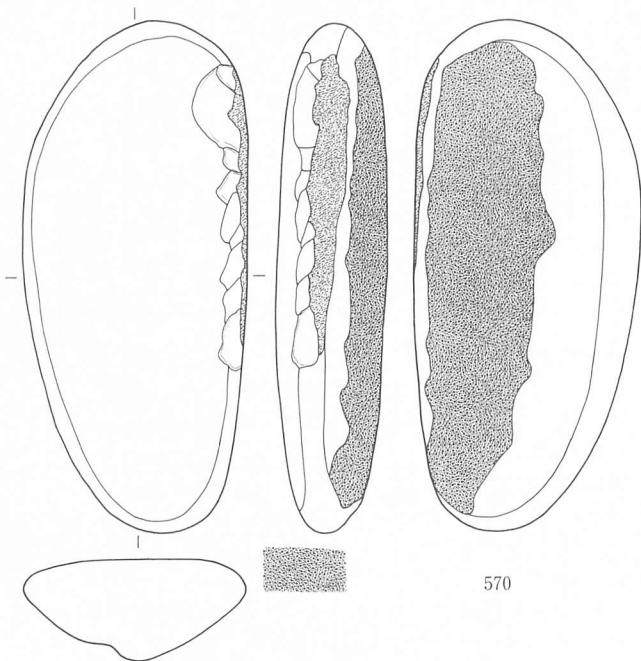
第129图 磨石·敲石·凹石



568

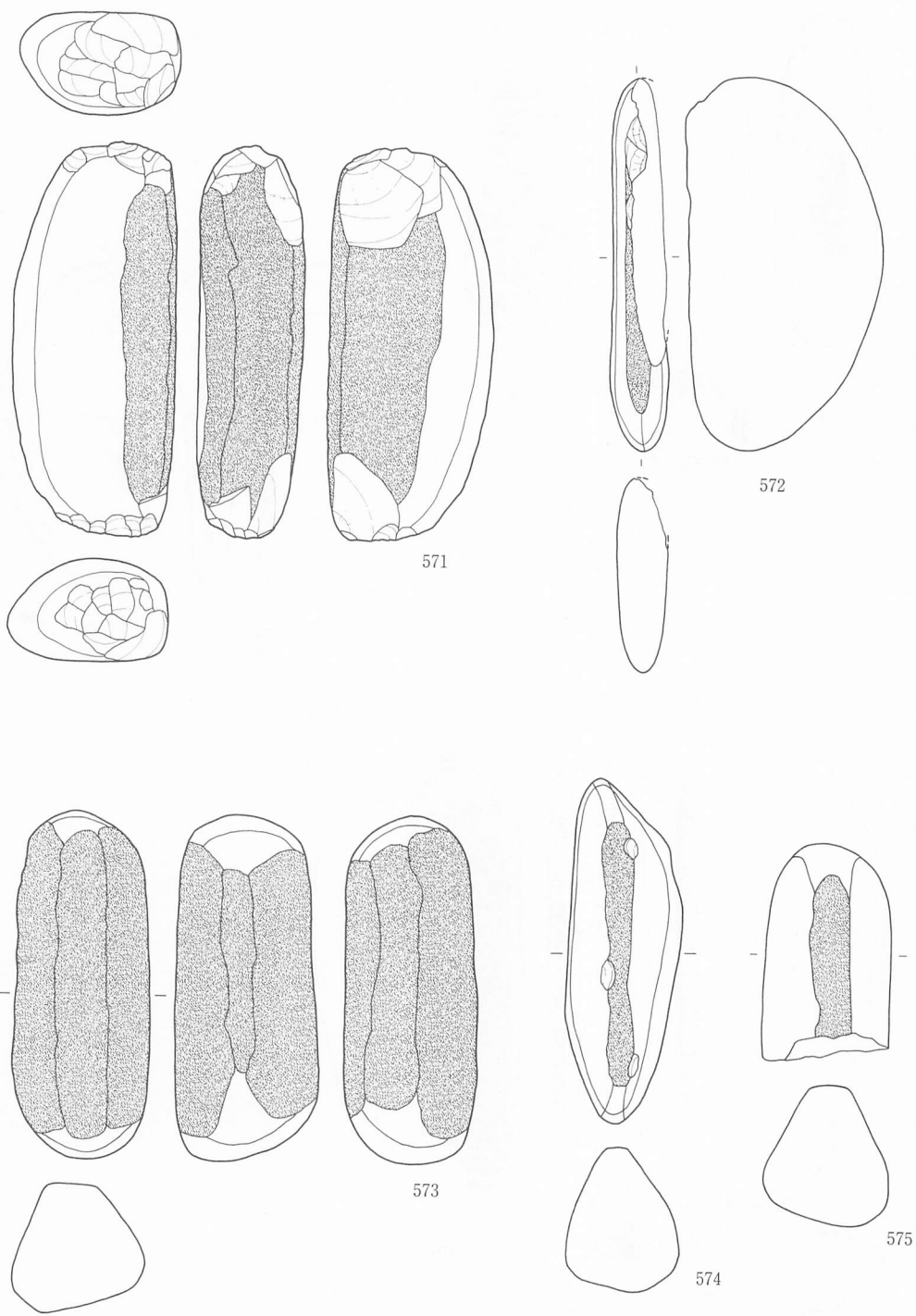


569

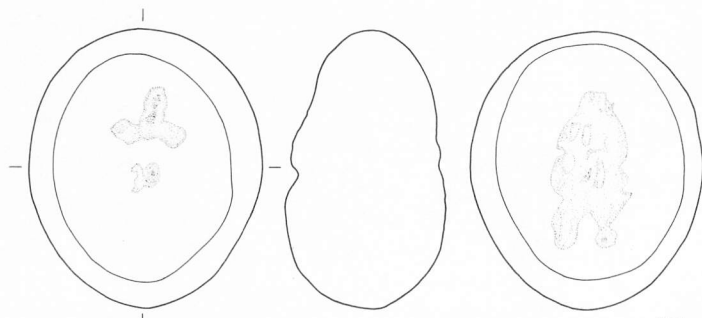


570

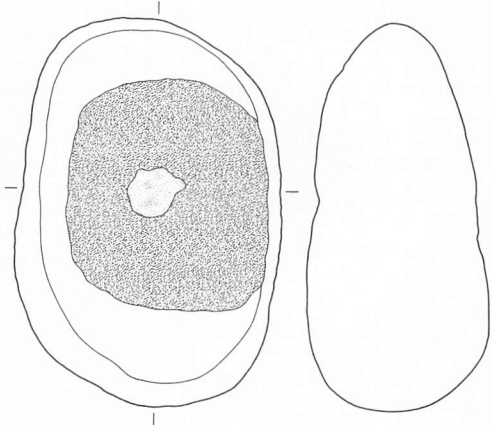
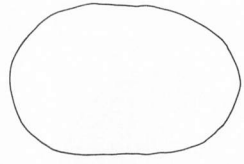
第130図 磨石・敲石・凹石



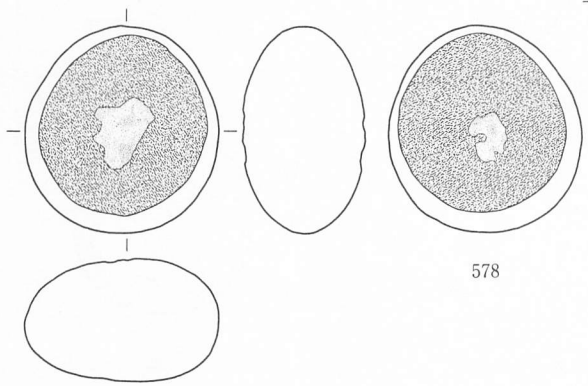
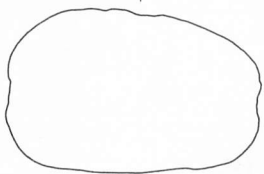
第131图 磨石·敲石·凹石



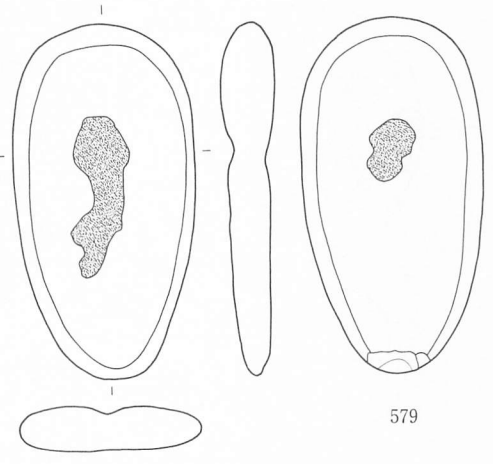
576



577

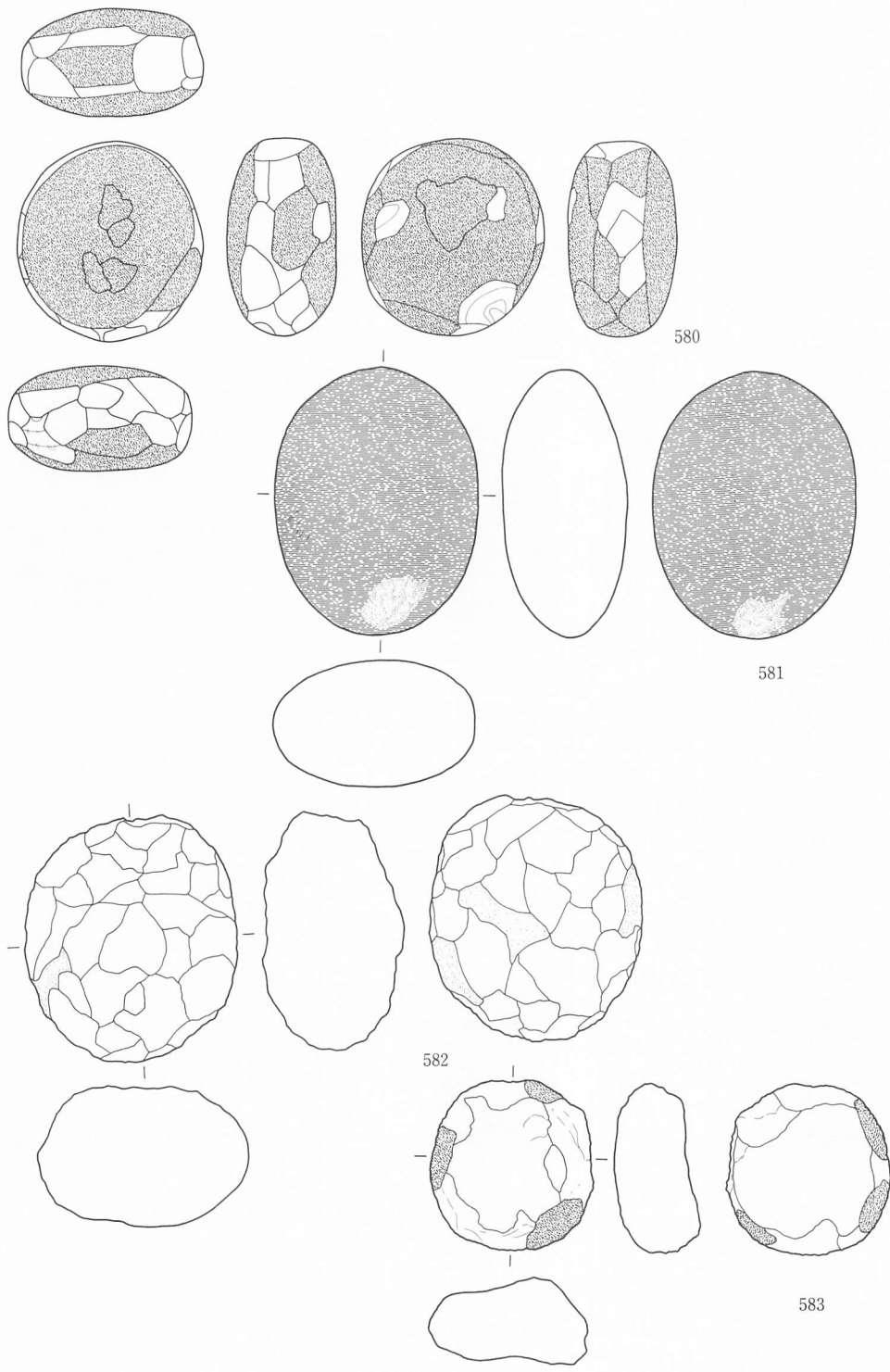


578

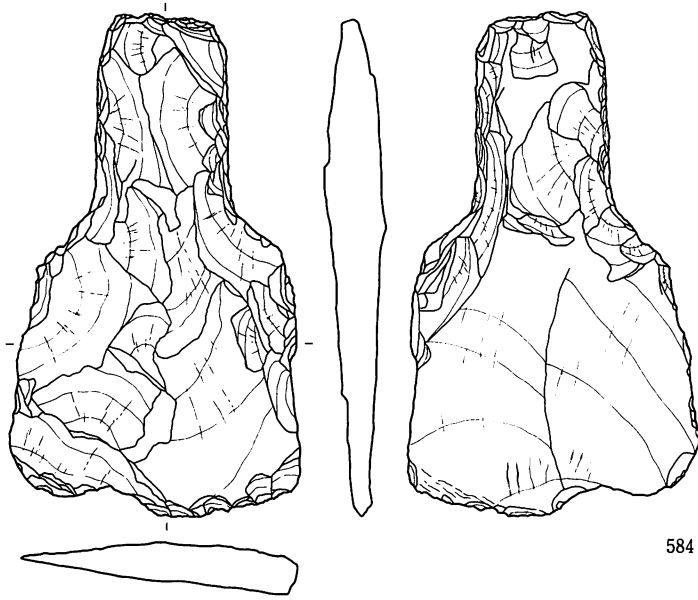


579

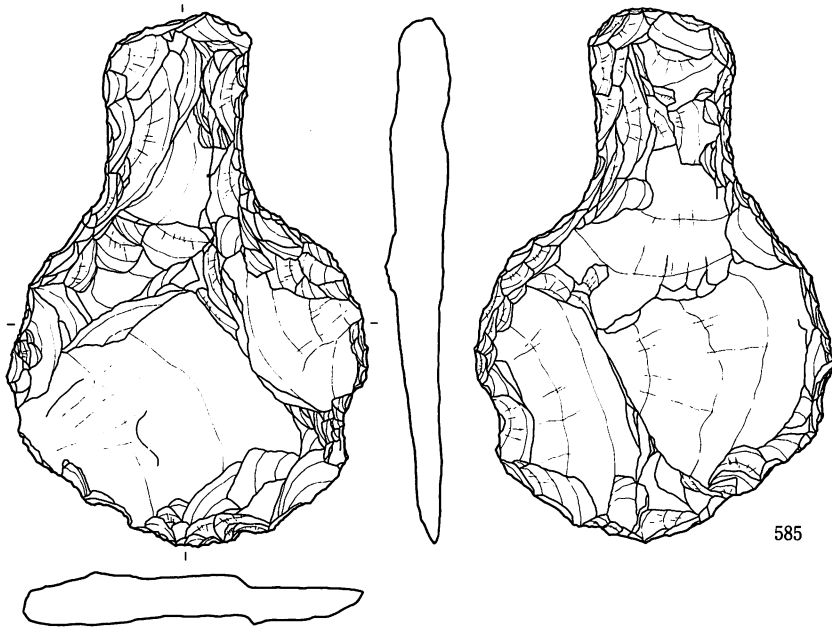
第132図 磨石・敲石・凹石



第133图 磨石・敲石・凹石

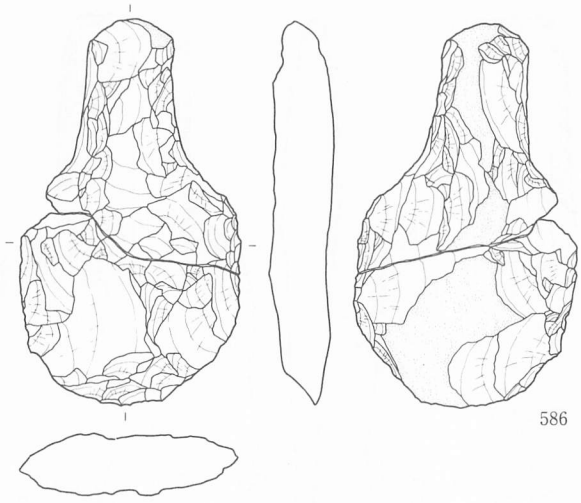


584

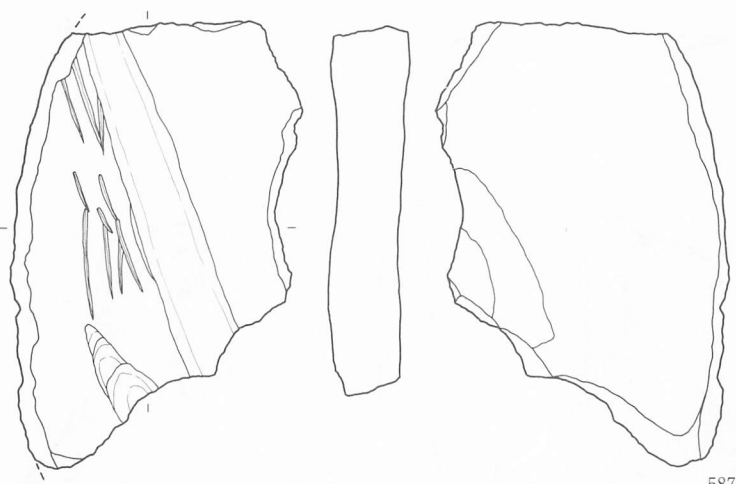


585

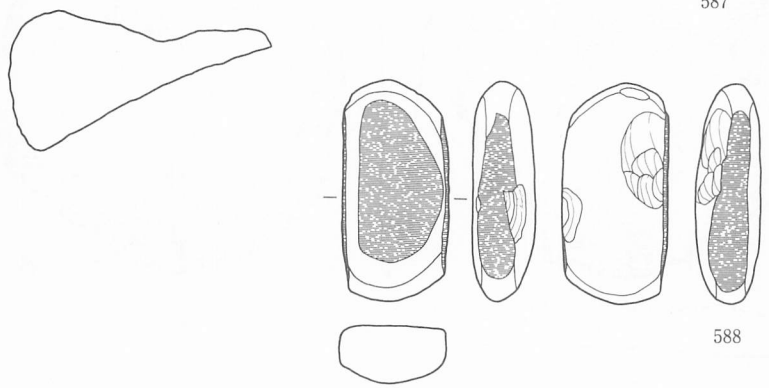
第134図 石鋤



586

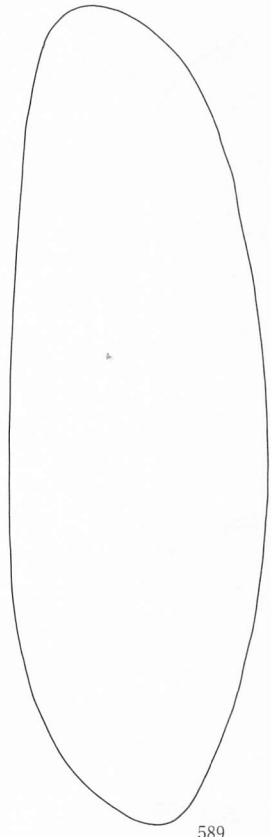
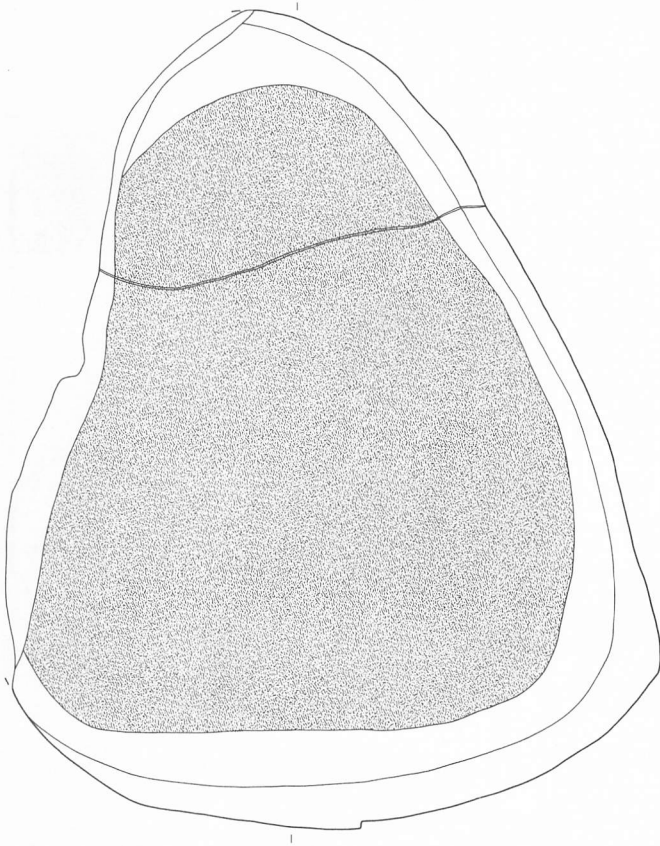


587

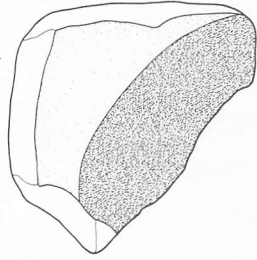
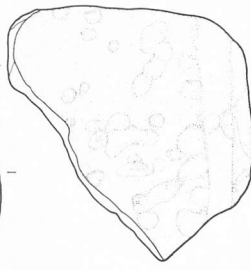
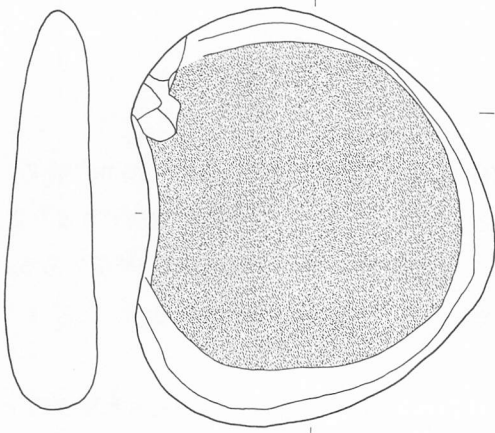


588

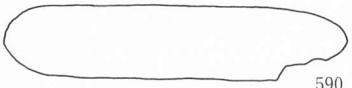
第135图 石锹·石皿·砥石



589

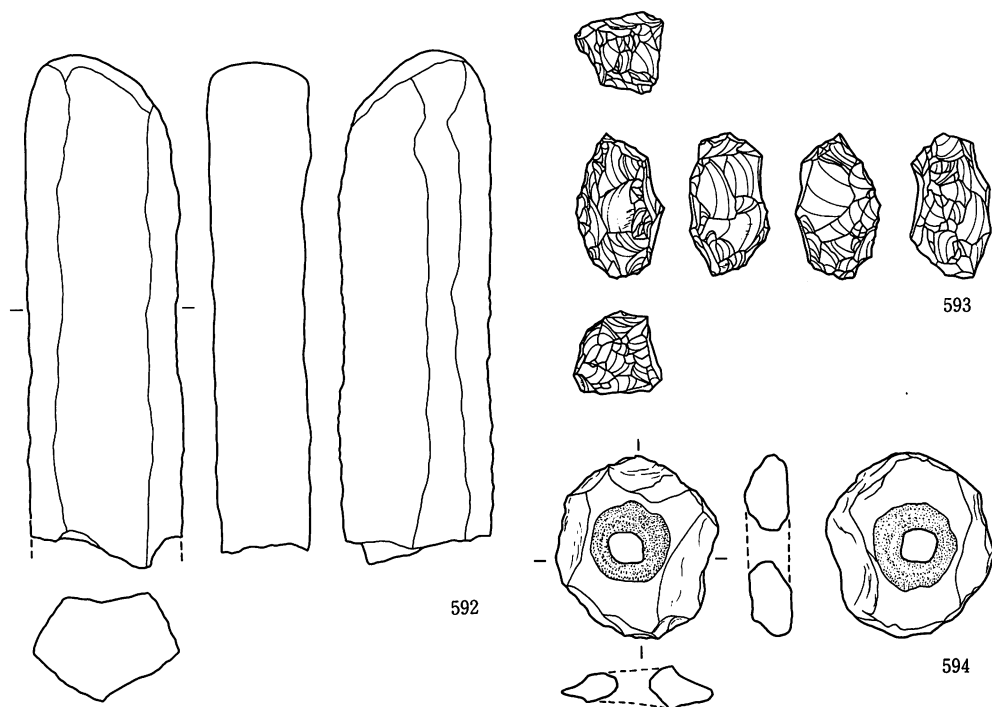


591



590

第136图 石皿



第137図 石製品等

[2] 古代以降

古代の遺構は竪穴住居跡1棟である。遺構外からの出土遺物は平安時代の土師器若干と須恵器の坏が出土したのみである。

(1) 住居跡

XVI H6c 住居跡

遺構（第139～140図、写真図版50）

（位置）A区の西斜面の上位に位置し、南3mで沢に達する。床面の海拔は約283.5mである。

（埋土）地山の黒色土より若干白っぽい黒色土である。太陽の角度により明瞭に識別できるときもあるが、通常は識別が困難である。締まり具合によって3層に細分される。自然堆積である。

（形状・規模）試掘トレンチによって半分以上が消滅しており詳細は不明であるが、3.7×4.2mの長方形である。

（壁）褐色土まで掘り込まれていないため、黒色土で構成される。崩落等は認められず、若干外傾して直線的に立ち上がる。最大壁高は41cmである。

（床）水平で平坦である。特に硬い所はない。柱穴や周溝は認められないが、ほぼ中央に開口部の直径1.05m、深さ30cmの円形の土坑1基がある。埋土は黒色土と黒褐色土からなる自然

堆積であり、本遺構に伴うものと思われる。また、カマド脇にほぼ同規模の土坑があるが、上位は若干オーバー・ハングする。両土坑とも底部は褐色土の礫層を掘り込んでいるため凹凸が見られる。

(カマド) 試掘によって、大部分が破壊されていたため、詳細は不明である。設置場所は斜面上位側の東壁南隅である。30 cm 大の角礫 6 個以上と土師器を使って構築している。カマド本体の幅、奥行きとも約 1 m である。煙道部は削り抜き式で長さ 1.2 m、幅 30 cm である。燃焼部の焼土の厚さは 5 cm で硬い。人為的に完全に破壊された形跡は認められない。

(その他)カマドの脇に袋状の土坑が構築されている。開口部径 1.2 m、深さは 27 cm である。壁際は若干オーバー・ハングする。カマド以外からの遺物はほとんど出土していない。

遺物 (第 141 図、写真図版 50)

出土したのは図示した 370～373 の 4 点と若干の土師器小破片である。坏は所謂ヘラミガキ調整は加えられていないが、特に内面は研磨されたかのごとく平滑であり布状のもので丁寧に調整を加えられたように見える。小鉢は坏ほど丁寧な造りとはなっていない。所謂ロクロ目が明瞭に残り再調整は加えられない。

所属時期

出土遺物から相原編年の第 IX 群期に並行すると思われ、第 VIII-2 期に分類される。

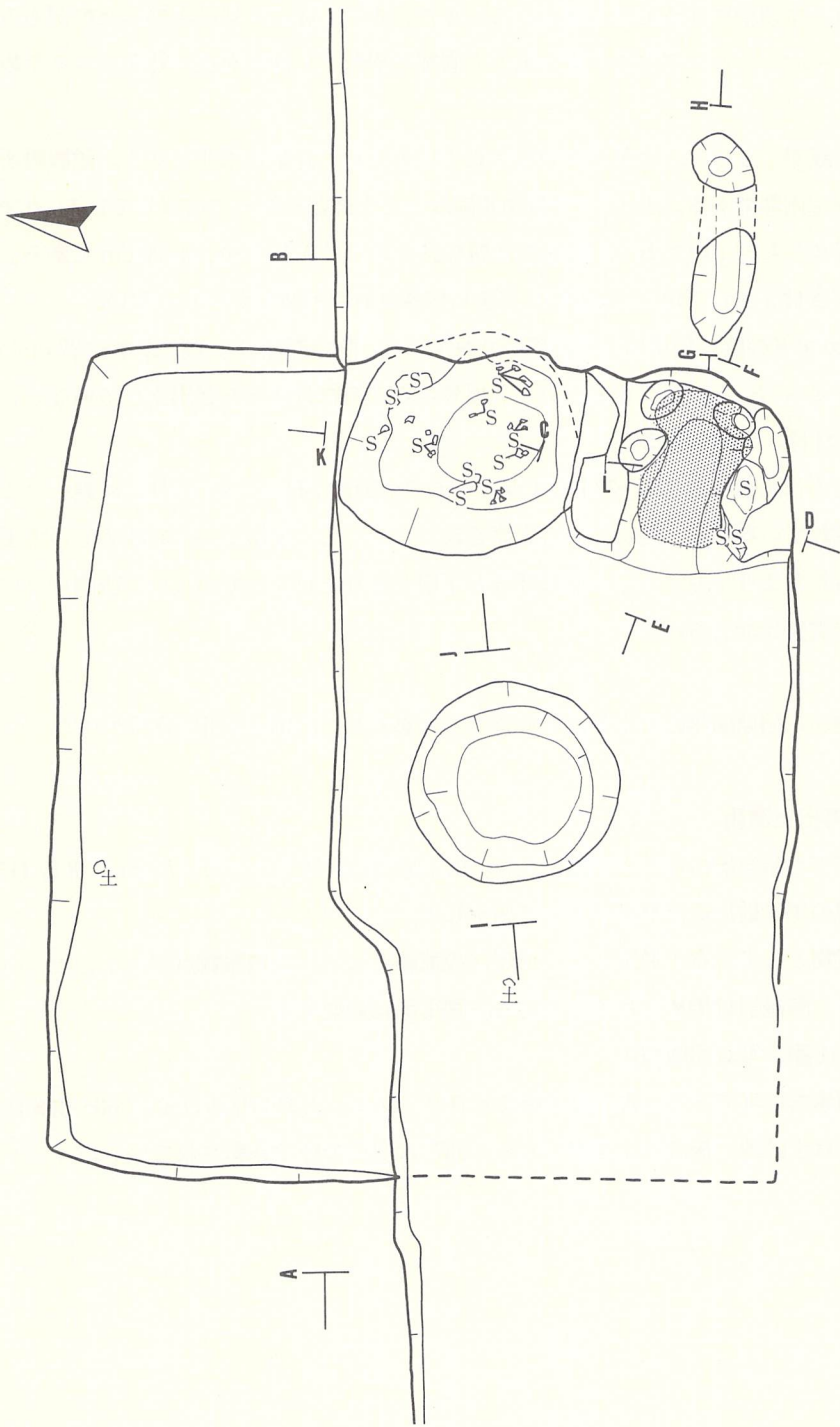
(2) 遺構外出土遺物

土師器若干と須恵器の坏 1 点が出土した。出土地点は分散している。ただし、XIV H5b 付近では土師器の甕の破片数点がまとまって出土した。

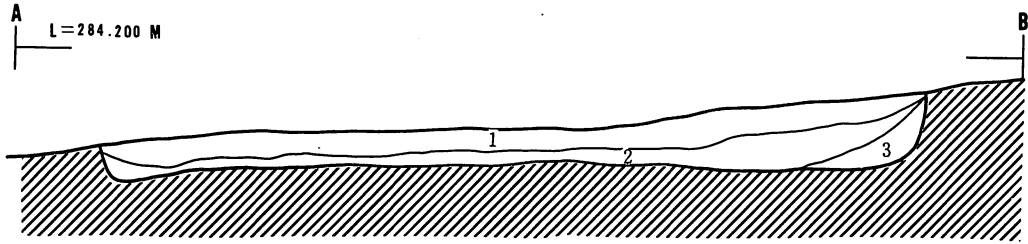
近世の遺物としては寛永通宝 4 点、近現代の遺物としては陶磁器数点が出土した。いずれも表採である。陶磁器は染め付けが主である。図化等は割愛する。

遺物 (第 141 図、写真図版 50)

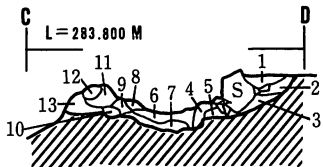
365 は須恵器の坏である。青灰色で焼きは良好である。火襷が見られる。366～368 は坏である。前 2 者は土師器、後者は須恵器である。367 は有段の坏で赤彩されている。



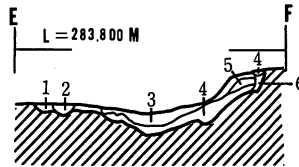
第138图 X VI H 6 c 住居跡



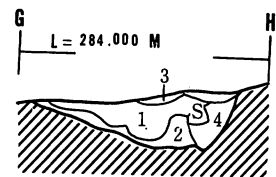
1. 黒色土 (含、木根)
2. 黒色土 (含、黒褐色土)
3. 黒色土



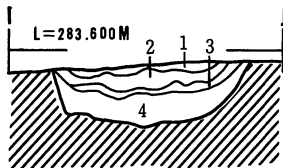
1. 黒褐色土 (含、焼土粒)
2. 黒褐色土 (含、焼土粒)
3. 褐色土 (含、黒褐色土)
4. におい赤褐色土 焼土
5. 赤褐色土 焼土 (硬い)
6. 黒色土 (含、褐色土)
7. 黒色土
8. 暗褐色土 埋土粒混じる
9. 黒色土 (含、焼土粒)
10. 暗褐色土 明褐色灰、におい赤褐色土含む



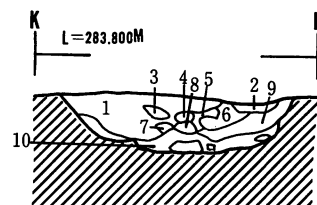
1. 褐色土
2. 黒色土 (黒褐色土混入)
3. 赤褐色土 焼土
4. 黒色土 焼土 (黒褐色土混入)
5. におい赤褐色土 砂質の焼土
6. 暗褐色土 (含、砂)



1. 黒色土 (含、暗褐色土粒)
2. 黒色土 (含、暗赤褐色土、焼土粒)
3. 黒色土 (含、におい黄褐色土、褐色土)
4. 黒色土 (含、におい黄褐色土、褐色土)

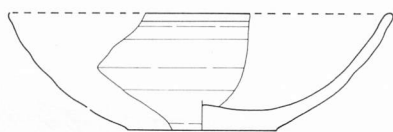


1. 黒色土 (含、炭化材)
2. 黒色土 (含、黒褐色土)
3. 黒褐色土
4. 黒褐色土

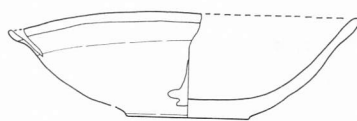


1. 黒色土
2. 黒色土 (含、焼土)
3. 黒色土 (含、焼土)
4. 黒褐色土 焼土
5. 黒色土 (含、焼土)
6. 黒褐色土 焼土
7. 黒色土 (含、黒褐色土)
8. 黒色土 (含、焼土)
9. 暗褐色土 焼土 (含、焼土粒)
10. 暗褐色土 焼土 (含、焼土粒、炭化材)

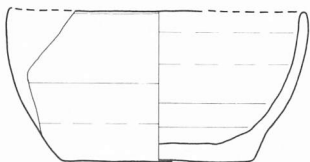
第139図 X VI H 6 c 住居跡



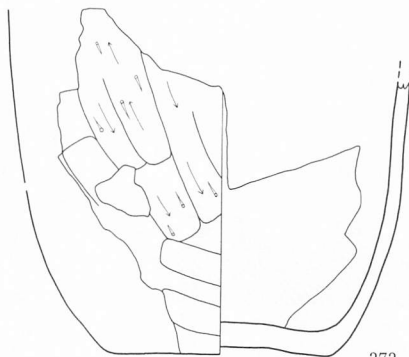
370



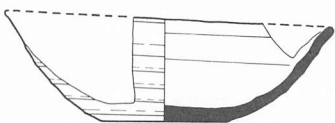
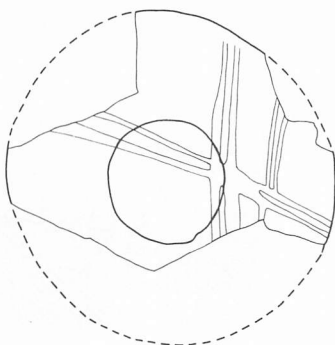
371



372



373



374



375



376



377

第140図 X VI H 6 c 住居跡・遺物等

4 まとめ

5区の事実記載に付いて、项目的にまとめておく。

〔縄文・弥生時代〕

・住居跡について

発見された住居跡は合計6棟である。時期別では縄文前期末葉～中期初頭1、中期1、後期1、晩期1、不明2である。ただし、不明は前期の可能性が高い。弥生時代の住居跡はない。石囲い炉を有する住居は3棟である。焼失住居は1棟である。形状は不明の住居跡は隅丸長方形ないし小判状をなす。他は円形である。規模は中期の1棟だけが4mを越えるが、他は概ね3m前後である。支柱穴はない。建て替えの可能性のあるものは2棟であるが、2棟とも建て替えを確認できなかった。

・炉跡および焼土遺構について

炉跡は合計4基発見された。いずれも石囲い炉であり、住居のプランを確認できなかったものである。地形と検出面から明瞭な掘り込みは有り得無いが、自然地形ではあるが周囲に一定のフラットを有している。

焼土遺構は合計45箇所検出された。ほとんどがXIV区に集中する。焼土遺構が集中する区域は遺物の集中する区域と一致する。したがって、これらの焼土遺構が出土した遺物とほぼ同時期のものと考えることができ、それに従えば、ほとんどの焼土遺構は縄文前期末葉から中期初頭の時期、縄文後期前葉、後期末葉から晩期前葉の3時期に形成されたものと考えられる。中でも前期末葉から中期初頭の時期が多いと思われる。

・土坑について

合計10基検出された。フラスコ型のものは1基で他はピーカー型である。XIV区に集中とも言えるが、遺物がほとんど出土しないXVI区にも検出されており、占地に特徴を見いだすことはできない。規模は開口部の直径1.5mを越えるものは2基、深さ1m以上のものは1基で大部分は小型のものである。遺構内遺物は廃棄された土器等は発見されたが、土坑の使用に伴うと思われる遺物は発見されなかった。遺構との切り合いがあるものは見られるが、2次使用の痕跡を残すものはない。

・土器について

総量はコンテナ16箱である。時期的には大木7a式が多く、続いて後期初頭、後期末葉から晩期初頭となる。早期、前期、中期中葉～後葉、後期中葉、晩期後葉は極めて少なく、晩期中葉はほとんど見られない。弥生土器は少なく、八起島式、常盤式、一本松式、赤穴式並行のものが若干見られる。ここでは大木7a式土器に限って若干ふれておきたい。大木7a式の細分に伴って、一方には大木6式、一方には大木7b式との境界が問題となってくるが、本遺跡から出

土した当該土器では層位的な区分も文様系統を辿れるような良好な資料も得られていない。したがって、ここでは細分は見送ることとし、2つの気づいた点を指摘しておきたい。

①当該土器の器形は深鉢形でありその底部は平底であるが、ほとんどの場合網代痕を持っている。網代痕は3種類見られ、ほかに木葉痕も若干見ら



第141図 3種類の網代痕

れる。ただし、その網代痕がそのまま残存しているものは少なく、大半はナデ調整によって消えかかっているものが多い。再調整は雑なものが多く、僅かながらも網代痕の痕跡を見い出すことは容易である。中には粘土を新たに塗りなおして網代痕を完全に消しているものもある。

② 114, 121, 122, 141, 144 等の所謂三角印刻文を有する土器群は珍しく、「崎山弁天遺跡」第III群第1類に1点見られる程度である。手法としては五領ヶ台式と通じるものがあるが、全く同様の土器は管見の知るところではない。114の山形突起、121の鳥頭を模した突起も同様である。今後の類例を待ちたい。

・石器について

石器として取り上げたものはフレーク・チップ類と原石を除くと、合計431点である。しかし、その中には使用痕も加工痕も認められないもの（例えば天然節理による石棒など）も含まれており、本来はより厳密に分類される必要があると思われる。ただし、ここでそれらを石器に含めたのは、人間の意志によって他から運び込まれてきたものであり、かつそのままの状態で使用された可能性を持つものと言う観点から分類されたものである。

これら431点を剥片石器と礫石器とに分類すると215：216で相半ばする。しかし、剥片石器には所謂「歯こぼれを有する」ものや「細部調整が極めて部分的にみられるもの」と言うリタッチ・ド・フレークまで含んだものであることからみれば、他の縄文遺跡と比較し、礫石器が非常に多いという特徴がみられる。しかも、礫石器中所謂「擦り、敲き」用具は151点にものほり、石器の組成は著しく偏っている。これは、日常の生活を営んだ居住空間として利用された区域ではなく、作業空間であったことを示しているようである。

石材ごとの分類をすると、硬質泥岩(18%)、凝灰質硬砂岩(15%)、硬砂岩(11%)等が多い。産地別では北上山地起源のもの72%、奥羽山地起源のもの28%となり圧倒的に北上山系に原産を求められる石材が多く、残りもほとんどが奥羽山系に求められる。ただし、黒耀石などはたして隼石(盛岡の西方約20km)産のものかどうかは不明である。少なくとも、これまでの整理した段階では遥か遠方から運び込まれたと考えられる石材は見あたらない。

石材で、一つ取り上げておきたいものは花崗岩である。これを石材とする石器はすべて「磨

石]である。大きさは、15×10×4 cm 程度で、片手に持つのにほどよい大きさである。この石器の大きな特徴は、極めて風化が著しく中には原型をとどめたまま取り上げることが困難な石器も含まれていることである。この石器は住居跡の内外で出土しており、出土地点や特殊な使用痕を有するものではないが、注目したいのは同時に出土する他の石器や土器と比べてその風化が余りにも顕著である点である。これは花崗岩でも硬質なものと軟質なものとがあるが、もしも前者ならその使用の形態を再考する必要がある。また、後者なら産地はある程度特定できるかもしれない。

- ・土器の出土量と焼土遺構との関係について

検出された焼土遺構の75.5%はXIVH区に集中する。焼成度では、淡いものが最も多く、良好なものは少ない。このような焼土の分布と第142図の土器の出土状況とを関連させてみると、両者の分布状況はほぼ一致する。したがって、焼土遺構と遺物の出土地点にはかなりの相関関係があると見て良い。

次に、同所から出土した土器は限られた時期に限定されるものではなく、かなりの時期差が認められる。したがって、同所に形成された焼土遺構も同等の時期差をもって形成されたものと考えられる。同時にまた、土器の量が中期初頭と後期前葉が多いことから、当該焼土もまた同様の数量的分布をなすものと考えられる。

〔古代〕

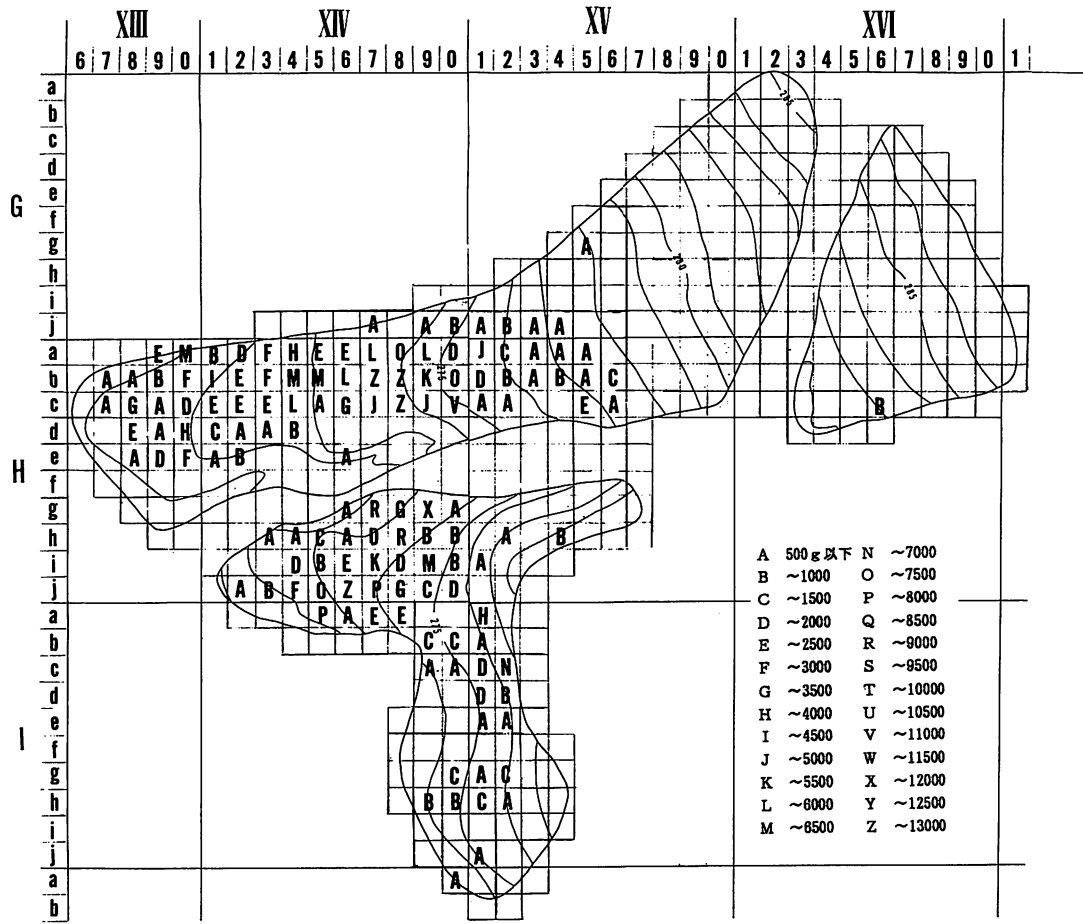
- ・遺構について

古代の遺構としては住居跡1棟が発見された。同地点はなお周囲に2～3棟建てただけの十分な広さがあるが、発見されたのはこの1棟だけである。本遺構は3区、4区で発見された当該遺構と極めて類似点が多い。住居跡が密集していないこと、占地する海拔は280～285 mに納まること、周辺に沢があること、カマドの向きは斜面上方にあること、堀込みが浅く、基盤層までは達していないこと、比定される時期は9世紀後半から10世紀にかけてであること等である。また、堀込みが基盤層までは達しないことから、遺構としては確認できなかったが、XIVH 4bグリッド付近に縄文等の遺物を殆ど出さないエリアがあり、同所からのみ土師器2点を採取できたことから、同所に1棟作られていた可能性は捨てきれない。

- ・遺物について

非常に少なく、石器、金属器は出土していない。土師器の坏はあかやき土器に近い。口縁部は歪んでいる。遺構外からの出土であるが、須恵器の坏も出土した。しかし、当該時期の遺物は絶対量が少なく、その特徴まで言及することは避けることにする。

第142图 5区土器出土量分布图



第8表 5区 土器・土製品 観察表

遺物番号	出土地点	器種	計測値			文様体等	備考	時期	図版番号	写真図版
			口径	底径	高さ					
1	XIVH 5 i 住	深鉢			[18.8]	平行沈線文、綾絡文	炉内から出土	III-1	70	33
2	XIVH 6 i 住	深鉢	18.8		[18.4]	原体側面圧痕、隆帯貼付、綾絡文	隆帯は剥落	III-1	72	〃
3	XIVH 6 i 住	深鉢				原体圧痕、隆帯貼付、橋状把手		III-1	〃	〃
4	XIVH 6 i 住	深鉢				隆起線文、刻み(半截竹管)、羽状縄文		III-1	〃	〃
5	XV I 1 a 住	破片				刻み帯、磨消縄文		IV-1	74	〃
6	XV I 1 a 住	鉢		6.5		上げ底		VIII-1	〃	〃
8	XV I 1 a 住	深鉢				B状突起、刻み、磨消縄文		IV-3	〃	〃
7	XV I 1 a 住	深鉢				磨消縄文、刻み		IV-3	〃	〃
9	XV I 1 a 住	深鉢				刻み帯		IV-3	〃	〃
11	XV I 1 a 住	深鉢				刻み帯、貼瘤		IV-3	〃	〃
10	XV I 1 a 住	深鉢				隆帯、波状沈線文		III-1	〃	〃
12	XV I 1 a 住	深鉢				隆起帯		IV-2	〃	〃
13	XV I 1 a 住	深鉢		9.3		上げ底		VIII-1	〃	〃
14	XV I 1 a 住	壺			[4.1]	無文、化粧土塗布	弥生土器?	VIII-2	〃	〃
15	XIVH 8 c 住	深鉢			[24.0]	単節 (RL)		VIII-1	76	〃
16	XIVH 8 c 住	壺			[6.3]	単節 (RL)、化粧土塗布	赤化している	VIII-2	〃	33
17	XIVH 8 c 住					羊歯状文		V-1	〃	〃
18	XIVH 8 c 住					三叉文		V-1	〃	〃
19	XIVH 8 c 住					羊歯状文		V-1	〃	〃
20	XIVH 8 c 住	深鉢				羊歯状文		V-1	〃	〃
21	XIVH 8 c 住					B型突起、雲形文		V-1	〃	〃
22	XIVH 8 c 住			7.5	[3.9]	刻み帯		V-2	〃	〃
23	XIVH 8 c 住					磨消縄文、瘤	252 と同一か	IV-3	〃	〃
24	XIVH 8 c 住					沈線文、瘤	261 と同一か	IV-3	〃	〃
25	XIVH 8 c 住	坏		5.8		ロクロ不使用		VII-1	〃	33
26	XIVH 8 c 住	深鉢		6.2	[10.2]	無文		VIII-1	〃	〃
27	XIVH 8 c 住	円盤状土製品				深鉢の二次使用		VIII-3	〃	〃
28	XV H 1 a 住					磨消縄文		III-3	77	33
29	XV I 2 c	深鉢			[10.5]	羽状縄文、綾絡文		II-3	79	34
30	XIVH 8 c 坑	深鉢		7.2	[9.7]	沈線文		IV-3	80	〃
31	XIVH 8 c 坑					磨消縄文、刻み、瘤、B型突起		IV-3	〃	〃
32	XIVH 8 c 坑	深鉢			[16.8]	単節 (LR)		VIII-1	〃	〃
33	XIVH 9 c 坑	台付き鉢	(13.0)	6.3	10.6	羊歯状文	上半部欠損	V-1	81	34
34	XIVH9c-2坑					波状沈線文、瘤、綾絡文		II-3	〃	〃
35	XIVH9c-2坑					沈線文(半截竹管)		II-3	〃	〃
36	XIVH 0 c 坑	深鉢	15.3	5.5	14.3	沈線文、単節 (LR)		V-1	82	〃
37	XIVH 0 c 坑	深鉢	17.6	7.3	24.5	無節 (R)	上半部に煤付着	V-1	〃	〃
38	XIVH 0 c 坑	深鉢	37.7		[15.2]	三叉文	上半部に煤付着	V-1	83	34
39	XIVH 0 c 坑	深鉢	(35.8)		[13.4]	三叉文	上半部に煤付着	V-1	〃	〃
40	XIVH 0 c 坑	深鉢				三叉文	上半部に煤付着	V-1	〃	〃
41	XIVH 0 c 坑	深鉢				三叉文		V-1	〃	〃
42	XIVH 0 c 坑	深鉢	(37.0)		[14.2]	単節 (LR)	上半部に煤付着	V-1	84	〃
43	XIVH 0 c 坑	深鉢			[14.8]	単節 (LR)	上半部煤付着	V-1	〃	〃
44	XIVH 0 c 坑	深鉢		8.1	[5.7]	単節 (LR)、横走、網代	底部再調整	VIII-1	〃	〃
45	X I N 9 b	深鉢				貝殻文、波状沈線文		I-3	96	35
46	XIVH 9 c	深鉢				貝殻文、刺突		I-3	〃	〃
47	XIVH 8 i	深鉢				貝殻文、刺突		I-3	〃	〃
48	XIVH 8 i	深鉢				貝殻文、刺突		I-3	〃	〃

遺物番号	出土地点	器種	計測値			文様体等	備考	時期	図版番号	写真版
			口径	底径	高さ					
49	XIVH 5 d	深鉢				貝殻文、刺突		I-3	〃	〃
50	XVI 2 h	深鉢				条痕文(内外)		I-3	〃	〃
51	XIVH 7 j	深鉢				条痕文(内外)		I-3	〃	〃
52	XIVH 7 j	深鉢				条痕文(内外)	補修孔	I-3	〃	〃
53	XIVH 6 j	深鉢				尖底、直前段多条(?)		I-3	〃	〃
54	XIVH 9 c	深鉢				尖底		I-3	〃	〃
55	XIII 8 c	深鉢			[11.0]	直前段多条(反燃り)、尖底、残滓		II-1	〃	〃
56	XIVH 8 j	深鉢			[14.5]	直前段多条(合い燃り)、残滓		II-1	〃	〃
57	A区	深鉢				ルーブ文、繊維		II-1	97	〃
58	XIVH 4 b	深鉢				指頭圧痕、直前段多条(反燃り)		II-1	〃	〃
59	XIII 8 d	深鉢				直前段多条(合い燃り、反燃り)		II-1	〃	〃
60	XVI 1 j	深鉢				沈線文		II-3	〃	35
61	XVI 1 d	深鉢	(30.3)		[28.8]	沈線文、綾絡文		II-3	〃	〃
62	XIVH 7 g	深鉢	(34.0)		[19.5]	沈線文		II-3	〃	〃
63	XIVH 1 b	深鉢				原体圧痕、木目状捺糸文		II-3	〃	〃
64	XIVH 8 c	深鉢	(23.2)		[7.0]	原体圧痕		III-1	98	35
65	XVI 2 c焼	深鉢	12.2	7.3	12.8	綾絡文		III-1	〃	〃
66	XIVH 7 i	深鉢	(30.8)		[22.3]	原体圧痕、隆帯、綾絡文		III-1	〃	〃
67	XVI 2 g	深鉢	(21.6)		[21.7]	原体圧痕、綾絡文		III-1	〃	36
68	XIVH 7 g	深鉢				原体圧痕		III-1	〃	〃
69	XIVH 8 c	深鉢				原体圧痕、刻み		III-1	〃	〃
70	XVI 5 a	深鉢				原体圧痕		III-1	〃	〃
71	XIVH 7 j	深鉢				原体圧痕、微隆帯、刻み、単節(LR)		III-1	〃	〃
72	XVI 1 c	深鉢				原体圧痕		III-1	〃	〃
73	XIVH 5 a	深鉢				無文帯、原体圧痕、単節(LR)		III-1	〃	〃
74	XIVH 7 j	深鉢				原体圧痕、微隆帯、刻み		III-1	99	36
75	XVI 2 b	深鉢				原体圧痕、刻み、綾絡文		III-1	〃	〃
76	XIVH 8 h	深鉢				原体圧痕、隆帯		III-1	〃	〃
77	XVI 5 a	深鉢				原体圧痕、隆帯		III-1	〃	36
78	XIVH 5 c	深鉢				原体圧痕、隆帯		III-1	〃	〃
79	XIVH 9 a	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、原体圧痕		III-1	〃	〃
80	XIVH 7 b	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、原体圧痕		III-1	〃	〃
81	XVI 9 c	深鉢				原体圧痕、隆帯、竹管刺突		III-1	〃	〃
82	XIVG 7 f	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	〃
83	XIVH 7 e	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
84	XIVH 4 b	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み、小波状口縁		III-1	〃	36
85	XIVG 7 j	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
86	XIVH 0 g	深鉢				原体圧痕、ボタン状突起		III-1	〃	〃
87	XIVH 4 i	深鉢				原体圧痕、沈線文		III-1	〃	〃
88	XIVH 9 b	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み	隆帯一部剥落	III-1	〃	〃
89	XIVH 9 b	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
90	XVI 0 g	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み、樺状刺突		III-1	100	〃
91	XIVH 7 a	深鉢				原体圧痕、微隆帯、半截竹管刺突		III-1	〃	〃
92	XIVH 8 b	深鉢				原体圧痕、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
93	XIVH 8 i	深鉢				隆帯、刻み、原体圧痕	内面に隆帯貼付	III-1	〃	〃
94	XIVH 7 i	深鉢				沈線文、綾絡文、羽状縄文		III-1	〃	〃
95	XIVH 4 a	深鉢	(25.6)	10.6	25.7	沈線文、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	37
96	XIVH 7 a	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	〃
97	XIVH 9 i	深鉢				原体圧痕、沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	36

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
98	XIVH 6 j	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	
99	XIVH 8 b	深鉢				沈線文(半截竹管)、隆帯、瘤、刻み		III-1	〃	37
100	XIVH 4 d	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
101	XIV I 0 b	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
102	XIVH 7 a	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	37
103	XIV I 1 d	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	101	〃
104	XIVH 9 g	深鉢				沈線文、隆帯、連続刺突(半截竹管)		III-1	〃	〃
105	XIVH 6 j	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
106	XIVH 4 c 焼	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
107	XIVH 8 a	深鉢				隆帯、綾絡文		III-1	〃	〃
108	XIVH 6 j	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
109	XIV I 8 b	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
110	XIVH 7 g	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、板状刺突		III-1	〃	〃
111	XIVH 8 i	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
112	XIVH 6 b	深鉢				沈線文、綾絡文		III-1	〃	〃
113	XIVH 9 h	深鉢	(23.3)		[17.7]	沈線文、隆帯、刻み、綾絡文、山形突起		III-1	102	〃
114	XIVH 7 h	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
115	XIVH 7 j	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
116	XIVH 7 g	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
117	XIVH 8 h	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
118	XIVH 7 j	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
119	XIVH 6 i 焼	深鉢				沈線文、隆帯		III-1	〃	〃
120	XIVH 9 g	深鉢			[7.7]	沈線文、隆帯、刻み、刺突、三角印刻文	鳥型突起、頂部突孔	III-1	〃	〃
121	XIVH 9 h	深鉢	(16.8)		[8.3]	沈線文、隆帯、刻み、三角印刻文		III-1	〃	〃
122	XIVH 9 g	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
123	XIVH 4 a	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
124	XIVH 6 j	深鉢			[8.2]	沈線文、隆帯、刺突、綾絡文		III-1	103	38
125	X V I 2 e	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
126	XIVH 3 a	深鉢	(22.4)		[7.2]	沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
127	XIVH 3 c	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
128	XIVH 7 j	深鉢				沈線文、羽状縄文		III-1	〃	〃
129	XIVH 7 b	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、棒状刺突		III-1	〃	〃
130	XIVH 7 a	深鉢				沈線文、隆帯		III-1	〃	〃
131	XIVH 7 b	深鉢				沈線文、刻み		III-1	〃	〃
132	XIVH 5 j	深鉢	(23.6)		[23.2]	沈線文(半截竹管)、押し引き、綾絡文		III-1	〃	〃
133	X V I 2 c	深鉢			[11.9]	沈線文、隆帯、刺突、綾絡文		III-1	104	〃
134	XIVH 7 g	深鉢				沈線文、隆帯、刻み	風化が著しい	III-1	〃	〃
135	XIV I 5 a	深鉢	18.0	13.1	31.2	沈線文、刺突(半截竹管)、綾絡文	歪んでいる	III-1	〃	〃
136	XIVH 4 j	深鉢	21.0		[12.1]	沈線文、刻み、隆帯、綾絡文		III-1	〃	〃
137	XIVH 8 h	深鉢	(15.0)	10.0	17.3	沈線文、綾絡文、網代痕	底部拓本	III-1	〃	〃
138	XIVH 8 b	深鉢	(30.4)		[13.2]	隆帯、刻み、三角印刻文、綾絡文		III-1	105	〃
139	X V H 5 i	深鉢				隆帯、刻み、三角印刻文、綾絡文		III-1	〃	〃
140	XIVH 7 b	深鉢			[9.5]	沈線文、三角印刻文		III-1	〃	〃
141	XIVH 7 i	深鉢				沈線文、隆帯、三角印刻文		III-1	〃	〃
142	XIVH 7 i	深鉢				沈線文、三角印刻文		III-1	106	〃
143	XIVH 7 c	深鉢				隆帯、刻み、沈線文		III-1	〃	38
144	XIVH 7 g	深鉢				沈線文、刻み		III-1	〃	39
145	XIVH 8 b	深鉢				隆帯、刻み、三角印刻文、突起		III-1	〃	〃
146	XIVH 7 g	深鉢				刻み、三角印刻文、突起、橋状把手		III-1	〃	39

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
147	XIV I 5 a	深鉢	(19.0)		[7.5]	沈線文、刺突、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	
148	XIV I 5 a	深鉢				沈線、刻み、隆帯、刺突、(半截竹管)		III-1	〃	39
149	XIV H 7 h	深鉢				沈線文、押し引き、(半截竹管)		III-1	〃	〃
150	XIV I 8 a	深鉢				押し引き(半截竹管)、撚糸文、綾絡文		III-1	〃	〃
151	XIV H 7 g	深鉢				沈線文、隆帯、刻み(半截竹管)		III-1	〃	〃
152	XIV H 4 b	深鉢				沈線文、押し引き(半截竹管)		III-1	〃	〃
153	XIV H 9 a	深鉢				沈線文、押し引き(半截竹管)		III-1	〃	〃
154	XIV H 8 c	深鉢				沈線文、押し引き(半截竹管)、隆帯		III-1	〃	〃
155	XIV H 7 g	深鉢	(17.3)		[8.9]	隆帯、刻み、羊角状突起、綾絡文		III-1	〃	〃
156	XIV H 9 h	深鉢	(25.8)		[14.0]	沈線文、隆帯、押し引き、木目状撚糸文		III-1	〃	〃
157	XIV H 6 j	深鉢				隆帯、沈線、棒状刺突		III-1	〃	39
158	XIV H 7 i	深鉢				隆帯、沈線、棒状刺突	隆帯剝落、157と同一	III-1	〃	〃
159	XIV H 6 j	深鉢	21.7	12.8	30.0	沈線文、刺突(竹管)、隆帯、綾絡文	上位に炭化物付着	III-1	〃	〃
160	XIV H 4 b	深鉢				沈線文、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	108	〃
161	XIV H 7 a	深鉢				隆帯、刻み、沈線、棒状刺突		III-1	〃	〃
162	XV I 2 c	深鉢				沈線文、ボタン状瘤、山形突起		III-1	〃	39
163	XIV I 5 a	深鉢				沈線文、刺突、羽状縄文		III-1	〃	〃
164	XIV H 5 j	深鉢				沈線文、刺突、微隆帯、綾絡文		III-1	〃	〃
165	XIV I 6 b	深鉢				刺突(半截竹管)		III-1	〃	〃
166	出土地不明	深鉢				沈線文、刻み、隆帯		III-1	〃	39
167	XIV I 0 b	深鉢				沈線文、刻み		III-1	〃	〃
168	XIV G 7 j	深鉢				沈線文、刻み、綾絡文、山形突起		III-1	〃	〃
169	XIV H 9 i	深鉢				沈線文、刺突(半截竹管)、隆帯、刻み		III-1	〃	〃
170	XIV H 1 a	深鉢				沈線文		III-1	〃	〃
171	XIV H 7 b	深鉢				沈線文、瘤、板状刺突		III-1	〃	〃
172	XIV H 7 b	深鉢				刻み、隆帯、沈線、刺突(半截竹管)		III-1	〃	〃
173	XIV H 7 a	深鉢				隆帯、刻み、撚糸文	隆帯剝落	III-1	〃	〃
174	XIV H 4 b	深鉢				篋状刺突、綾絡文		III-1	〃	〃
175	XIV H 9 h	深鉢				隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	39
176	XIV H 9 h	深鉢				隆帯、刻み、(竹管)	炭化物付着	III-1	〃	〃
177	XIV H 8 h	深鉢			[5.3]	交互刺突文		III-1	112	39
178	XIV H 7 g	深鉢				交互刺突文、沈線文		III-1	〃	40
179	XIV H 7 b	深鉢				隆帯、刺突(竹管)、山形口縁		III-1	〃	〃
180	XIV H 7 i	深鉢				柳齒状沈線文、棒状刺突、隆起帯		III-1	〃	〃
181	XV I 2 c	深鉢				隆帯、原体圧痕、綾絡文		III-1	〃	〃
182	XIV H 9 g	深鉢				隆帯、刻み、刺突		III-1	〃	〃
183	XV H 7 j	深鉢				隆帯、原体圧痕、無節(L)、綾絡文		III-1	〃	〃
184	XV H 5 h	深鉢				沈線文、粘土紐		III-1	〃	〃
185	XIV I 9 h	深鉢				沈線文、隆帯、刻み		III-1	〃	40
186	XIV H 9 a	深鉢				沈線文(半截竹管)、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	〃	〃
187	XIV H 9 g	舟形土器	[18.8]			沈線文、隆帯、刻み、綾絡文		III-1	105	〃
188	XIV G 7 j	浅鉢				微隆帯、原体圧痕		III-2	109	〃
189	XIV H 8 a	浅鉢				微隆帯、原体圧痕	188と同一	III-2	〃	〃
190	XIV H 8 a	浅鉢				微隆帯、原体圧痕	188と同一	III-2	〃	〃
191	XIV H 0 h	深鉢				隆沈線、磨消縄文		III-2	〃	〃
192	XIV I 5 a	深鉢				隆沈線、磨消縄文	化粧土塗布	III-2	〃	〃
193	XIV H 9 a	深鉢				微隆帯、充填縄文		III-3	〃	〃
194	XIV H 9 a	深鉢				微隆帯、充填刺突		III-3	〃	〃
195	XIV G 7 j	深鉢				微隆帯、充填刺突、充填縄文		III-3	〃	40

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
196	XIVH 9 h	深鉢				沈線文、磨消縄文		III-3	〃	〃
197	XIVH 9 i	深鉢		(9.0)	[19.7]	沈線文、磨消縄文		III-3	〃	〃
198	XIVH 8 h	深鉢				沈線文、磨消縄文		III-3	〃	〃
199	XIVH 8 a	深鉢			[19.0]	沈線文、磨消縄文		III-3	〃	〃
200	XIVH 0 d	深鉢				沈線文、磨消縄文		III-3	〃	40
201	XVH 1 a	深鉢				沈線文、磨消縄文、刺突		III-3	〃	〃
202	XIVH 9 i	深鉢	17.9		[18.4]	磨消縄文、鐮状突起		III-3	110	〃
203	XIVH 0 a	深鉢			[18.5]	磨消縄文		III-3	〃	〃
204	XIIIH 0 b	深鉢				磨消縄文		III-3	〃	
205	XIVH 0 a	深鉢				磨消縄文		III-3	〃	40
206	A区	深鉢				磨消縄文		III-3	〃	〃
207	XIVH 1 d	深鉢				微隆帯、棒状刺突		IV-1	〃	〃
208	XVH 1 a	深鉢				微隆帯、棒状刺突		IV-1	〃	〃
209	XIV I 0 g	深鉢				隆帯、竹管刺突、二股突起		IV-1	〃	〃
210	XIVH 0 a	深鉢				鐮状突起(内外)		IV-1	〃	
211	XIVG 0 j	深鉢				沈線文、山形口縁		IV-1	〃	41
212	XIVH 4 b	深鉢				無文体、隆起線(内外)、竹管刺突		IV-1	〃	〃
213	XIVH 8 b	深鉢				沈線、棒状刺突、隆起線文		IV-1	〃	〃
214	XIVH 4 b	深鉢				沈線文、竹管刺突		IV-1	〃	〃
215	XIVH 8 a	深鉢				沈線文、棒状刺突		IV-1	〃	〃
216	XIIIH 8 c	深鉢	(31.5)		[13.9]	沈線文、山形口縁		IV-1	110	〃
217	XIVH 6 b	深鉢				沈線文、隆起帯		IV-1	〃	〃
218	XIVH 7 b	深鉢			[6.8]	沈線文、磨消縄文、竹管刺突		IV-1	111	41
219	XIIIH 0 a	深鉢				沈線文、磨消縄文	炭化物付着	IV-1	〃	〃
220	XIIIH 6 d	深鉢				沈線文、磨消縄文		IV-1	〃	〃
221	XIVH 2 c	深鉢				沈線文、磨消縄文		IV-1	〃	〃
222	XIVH 6 d	深鉢				沈線文、磨消縄文	炭化物付着	IV-1	〃	〃
223	XIVH 9 h	深鉢				沈線文、磨消縄文		IV-1	〃	
224	XIVH 2 h	深鉢				磨消縄文		IV-1	〃	41
225	XVH 1 b	深鉢				磨消縄文、棒状刺突		IV-1	〃	〃
226	X I N 7 a	深鉢				磨消縄文、棒状刺突		IV-1	〃	〃
227	XIVH 8 c	深鉢				沈線文		IV-1	〃	41
228	XIIIH 0 a	深鉢				磨消縄文	内面ミガキ	IV-1	〃	〃
229	XIIIH 0 b	深鉢				沈線文、磨消縄文、竹管刺突	炭化物付着	IV-1	〃	〃
230	XIVH 6 h	深鉢				沈線文		IV-1	113	〃
231	XIVH 8 c	深鉢				沈線文		IV-1	〃	
232	XIIIH 8 c	深鉢				沈線文		IV-1	〃	41
233	A区	深鉢				沈線文		IV-1	〃	〃
234	A区	深鉢				沈線文	233と同一個体	IV-1	〃	41
235	XIVH 5 b	深鉢			[8.1]	沈線文、刺突、単節(RL)		IV-2	〃	〃
236	XIV I 0 b	壺	6.3		[7.3]	沈線文、充填縄文		IV-2	〃	〃
237	XIVH 0 j	深鉢				沈線文、磨消縄文、B型突起		IV-2	〃	〃
238	C区	深鉢				沈線文、磨消縄文		IV-2	〃	〃
239	XIIIH 6 d	深鉢		10.2	[20.0]	沈線文		IV-2	〃	41
240	XIVH 9 g	深鉢				B型突起、単節(LR)	炭化物付着	IV-2	〃	〃
241	XIVG 1 f	深鉢				磨消縄文		IV-2	〃	〃
242	XIVH 0 j	深鉢	28.8		[11.5]	磨消縄文、二股突起		IV-2	114	〃
243	XIVH 8 b	深鉢				刻み、山形突起		IV-2	〃	〃
244	XIVH 8 b	深鉢				刻み、山形突起		IV-2	〃	〃

遺物 番号	出土地点	器 種	計 測 値			文 様 体 等	備 考	時期	図版 番号	写真 図版
			口径	底径	高さ					
245	XIVH 4 b	深鉢				刻み、瘤	補修孔	IV-2	〃	42
246	XIVH 8 b	深鉢				磨消縄文、刻み、二股突起		IV-3	〃	41
247	XIVH 9 b	深鉢	22.5		14.5	磨消縄文、瘤、刻み		IV-3	〃	42
248	XIVH 8 b	深鉢				磨消縄文、瘤、刻み		IV-3	〃	〃
249	XIVH 8 b	深鉢				磨消縄文、刻み、瘤、B型突起		IV-3	〃	〃
250	XIVH 8 b	深鉢				磨消縄文、刻み、瘤、二股突起		IV-3	〃	〃
251	XIVH 0 a	深鉢				磨消縄文、刻み、鱗状突起		IV-3	〃	41
252	A区	深鉢				磨消縄文、瘤	23 と同一か	IV-3	〃	42
253	XIVH 9 a	深鉢				磨消縄文、刻み、瘤		IV-3	〃	〃
254	XVH 4 a	深鉢				沈線文、刻み	炭化物付着	IV-3	〃	〃
255	XIVH 7 c	深鉢				沈線、三角刺突、B型突起	炭化物付着	IV-3	115	〃
256	XIVH 6 c	高台部				磨消縄文、透かし		IV-3		〃
257	XIVH 0 a	深鉢				磨消縄文、刻み、沈線文、山形突起		IV-3	115	〃
258	XIVH 0 b	深鉢				磨消縄文、刻み		IV-3	〃	〃
259	XIIIH 0 a	鐸形土製品			[4.3]	無文	突孔	IV	〃	〃
260	XVI 2 c	注口土器			[5.7]	無文		IV	〃	〃
261	XIVH 9 c	袖珍土器				沈線文、釣り手	24 と同一か	IV	〃	〃
262	XIVH 5 b	破片				玉抱き三叉文		V-1	〃	42
263	XIVH 7 i	鉢				玉抱き三叉文、瘤、単節 (LR)		V-1	〃	〃
264	XIVH 0 c	破片				玉抱き三叉文		V-1	〃	〃
265	XIVH 0 c	深鉢				玉抱き三叉文、単節 (LR)		V-1	〃	42
266	XIVH 8 a	深鉢				三叉文、単節 (LR)		V-1	〃	〃
267	XIVH 5 a	深鉢				玉抱き三叉文、単節 (LR)	炭化材付着	V-1	〃	〃
268	XIVH 8 c	鉢				三叉文、瘤、単節 (LR)		V-1	115	〃
269	A区	深鉢				三叉文、炭化物付着		V-1	〃	〃
270	XIVH 7 b	深鉢				三叉文		V-1	〃	〃
271	XIVH 8 h	鉢				三叉文、瘤		V-1	〃	42
272	XIVH 8 h	深鉢				三叉文		V-1	〃	〃
273	XIVH 7 b	深鉢				羊歯状文、単節 (LR)		V-1	116	〃
274	XVH 3 b	深鉢				羊歯状文		V-1	〃	〃
275	XIVH 7 g	深鉢				羊歯状文、単節 (RL)	炭化物付着	V-1	〃	〃
276	XIVH 9 c	深鉢				羊歯状文		V-1	〃	〃
277	XIVH 8 g	深鉢			[5.8]	羊歯状文		V-1	〃	〃
278	XIVH 0 a	深鉢				羊歯状文、齒列状文、単節 (LR)	炭化物付着	V-1	〃	〃
279	XIVH 0 c	鉢				羊歯状文、単節 (LR)	内外黒色処理	V-1	〃	〃
280	XIVH 9 g	深鉢				入組文		V-2	〃	43
281	XIVH 7 c	鉢				入組文 (大胎骨文)		V-2	〃	〃
282	XIVH 7 b	鉢				入組文 (大胎骨文)		V-2	〃	43
283	XIVH 8 i	鉢				入組文		V-2	〃	〃
284	C区	鉢				齒列状文		V-2	〃	〃
285	出土地不明	鉢				齒列状文		V-2	〃	〃
286	XIVH 7 b	鉢				齒列状文、単節 (LR)		V-2	〃	〃
287	XIVH 8 c	深鉢				齒列状文、単節 (LR)		V-2	〃	〃
288	XIVH 8 a	深鉢				齒列状文		V-2	〃	〃
289	XIVH 9 g	深鉢				齒列状文		V-2	〃	43
290	XIVH 9 g	深鉢				齒列状文、単節 (LR)		V-2	〃	〃
291	XIVH 5 h	深鉢	(17.3)		[12.9]	齒列状文、単節 (LR)		V-2	117	〃
292	XIVH 9 i	鉢				沈線文、B型突起	風化が著しい	V-2	〃	〃
293	XVI 1 a	鉢				沈線文、刻み、B型突起	炭化物付着	V-2	〃	〃

遺物番号	出土地点	器種	計測値			文様体等	備考	時期	図版番号	写真図版
			口径	底径	高さ					
294	XIVH 7 i	鉢				沈線文、瘤	炭化物付着	V-2	〃	〃
295	XIVH 9 g	鉢				沈線文、二段突起		V-2	〃	〃
296	XIVH 9 h	深鉢				磨消縄文、刻み		V-2	〃	〃
297	A区	深鉢	(27.8)		[19.5]	刻み、沈線、単節(LR)		V-2	〃	〃
298	XIVH 9 g	深鉢	(34.6)		[19.2]	指頭圧痕、無文体、単節(LR)		V-2	〃	〃
299	XIVH 0 i	皿	9.1	5.0	2.8	沈線文	一部欠損	V-2	118	43
300	XIV 1 8 b	突起				鳥形突起、磨消縄文、単節(LR)		V	〃	〃
301	XIVH 0 c	壺	(7.0)		[6.6]	平行沈線	化粧土塗布	VI-2	〃	〃
302	XIVH 8 h	甕				変形工字文	炭化物付着	VI-2	〃	〃
303	XIVH 7 g	甕				沈線文	化粧土塗布	VI-2	〃	〃
304	XIVH 9 i	甕				変形工字文、沈線文、瘤	化粧土塗布	VI-2	〃	43
305	XIVH 9 g	浅鉢	(18.4)	(6.0)	6.1	平行沈線	化粧土塗布	VI-2	〃	〃
306	XIVH 9 g	高坏	(15.5)	6.0	9.5	平行沈線	赤彩	VI-2	〃	43
307	XIVH 9 i	浅鉢	(16.6)	(7.0)	6.7	変形π字文	化粧土塗布	VI-2	〃	〃
308	XIVH 7 j	甕				沈線文、瘤	炭化物付着	VI-2	〃	〃
309	XIVH 5 j	高坏				磨消縄文、棒状刺突	朱塗り	VI-2	〃	〃
310	XIVH 8 j	甕				沈線文		VI-2	〃	〃
311	XIVH 8 j	甕				π字文(?)		VI-2	〃	〃
312	XIVH 6 b	甕				沈線文	炭化物付着	VI-3	〃	〃
313	XIVH 4 j	甕				沈線文、捺糸文		VI-3	〃	43
314	XIVH 4 i	甕				沈線文、捺糸文、棒状刺突		VI-3	〃	〃
315	XIVH 3 b	甕				沈線文、捺糸文		VI-3	〃	〃
316	XIVH 4 j	甕				沈線文、刻み	炭化物付着	VI-3	119	〃
317	XIVG 9 j	甕				沈線文		VI-3	〃	〃
318	XIVH 6 g	甕				沈線文、捺糸文	炭化物付着	VI-3	〃	43
319	XIVH区	甕				沈線文、捺糸文	318と同じ	VI-3	〃	〃
320	XIVH 7 g	甕				沈線文、捺糸文	318と同じ	VI-3	〃	〃
321	XIVH 8 c	甕				沈線文、捺糸文	炭化物付着	VI-3	〃	〃
322	XIVH 8 c	甕				沈線文、捺糸文	炭化物付着	VI-3	〃	〃
323	XIVH 7 c	壺				沈線文		VI-3	〃	44
324	XIVH 8 c	甕				沈線文		VI-3	〃	〃
325	XIVH 4 j	甕				沈線文、捺糸文、棒状刺突		VI-3	〃	44
326	XIVH 7 c	甕				連弧文、捺糸文、棒状刺突		VI-3	〃	〃
327	XIVH 7 c	甕				連弧文、捺糸文、棒状刺突	326と同じ	VI-3	〃	〃
328	XIVH 9 b	甕				捺糸文、綾絡文		VI-3	〃	〃
329	XIVH 9 b	甕				沈線文、捺糸文、綾絡文		VI-3	〃	44
330	XIVH 9 b	甕				捺糸文、原体圧痕		VI-3	〃	〃
331	XIVH 8 a	甕				捺糸文、原体圧痕	突孔	VI-3	〃	44
332	XIVH 8 h	甕				棒状工具による交互刺突		VI-3	〃	〃
333	XIVH 6 b	甕				棒状工具により交互刺突		VI-3	〃	〃
334	XIVH 7 g	甕				棒状工具により交互刺突		VI-3	〃	〃
335	XIVH 7 c	甕				沈線文(内面)、刻み		VI-3	〃	〃
336	XIVH 9 g	甕	27.3	6.8	26.9	捺糸文	炭化物付着	VI-3	〃	〃
337	XIVH 7 g	甕	(31.6)		[16.0]	捺糸文	炭化物付着、補修孔	VI-3	120	〃
338	C区	甕			(8.0)	捺糸文		VI	〃	〃
339	XIVH 6 c	蓋				捺糸文		VI	〃	〃
340	出土地不明	蓋	3.2			無文		VI	〃	44
341	XIVH 5 a	甕		(5.5)		沈線文(底部)、捺糸文、突孔		VI	〃	〃
342	XIVH 8 g	甕		(6.8)		捺糸文	底部にも施文	VI	〃	〃

遺物番号	出土地点	器種	計測値			文様体等	備考	時期	図版番号	写真図版
			口径	底径	高さ					
343	XIVH 8 e	深鉢		9.5	[9.0]	単節 (LR)、輪積み痕、上げ底	内部に炭化物付着	VIII	//	
344	XIVH 7 c	深鉢				複節		VIII	//	
345	XIVH 2 a	破片				無節		VIII	//	
346	XIIIH 0 b	深鉢				原体不明		VII	//	
347	XIVG 7 j	深鉢				網目状擦糸文		VIII	//	
348	XVI 1 c	袖珍土器				高台つき		VIII	//	
349	XIVH 8 b	袖珍土器		4.0	[3.2]	無文、底部木葉痕		VIII	//	
350	XIVH 8 i	壺		5.9	[7.3]	沈線、単節 (LR)		VIII	//	44
351	XIVH 4 a	壺	(6.9)	4.4	8.1	無文		VII	//	//
352	XIVH 9 g	壺		3.0	[3.6]	単節 (RL)		VIII		
353	XIVH 9 c	壺	(6.2)	3.1	3.6	無文		VIII	123	44
354	XIVH 4 c	深鉢	34.4	11.4	39.2	単節 (LR)		VIII	//	
355	XIVH 9 i	注口土器				無文		VIII		
356	XIVH 7 c	注口土器				無文		VIII	123	
357	XIVH 4 g	鉢	6.9		[3.3]	無文		VIII		
358	XIVH 6 j	鉢	(11.6)		[7.3]	無文		VIII	123	
359	XIVH 8 a	高台部		(7.5)	[3.5]	無文		VIII	//	
360	XIVH 8 b	高台部		7.6	[3.7]	無文		VIII		
361	XIVH 1 a	糸巻状土製品	(3.5)		(2.7)	無文		VIII		44
362	XIVG 2 j	土偶	(11.0)	10.3	2.0	沈線、竹管刺突		VIII	123	//
363	XIVH 9 g	土偶				沈線文		VIII		
364	XVI 1 c	広口壺	(21.6)		[9.6]	無文、山形突起		VIII	123	
365	XIVH 0 c	広口壺		14.0	[10.9]	無文	364 と同一個体	VIII	//	44
366	XIVG 1 j	深鉢	(16.5)		[24.4]	原体圧痕、無節 (L)		VIII	122	
367	XIVH 1 b	深鉢	32.2		[19.2]	単節 (RL)		VIII	//	44
368	XIVH 9 h	深鉢	29.5		[25.0]	複節 (LR)	炭化物付着	VIII	121	//
369	XIIIH 9 e	深鉢	(22.5)		[24.3]	複節 ((LR)		VII	//	//
370	XIVH 6 c 住	坏	(12.5)	5.8	4.6	回転糸切り・無調整	カマド内出土	VII-2	124	50
371	XIVH 6 c 住	坏	(14.0)	4.8	4.6	回転糸切り・無調整	カマド内出土	VII-2	//	//
372	XIVH 6 c 住	小鉢	(11.9)	7.6	6.1	回転糸切り・無調整	土坑内出土	VII-2	//	//
373	XIVH 6 c 住	甕		8.8	[11.0]	ヘラケズリ	カマド内出土	VII-2	//	//
374	XIIIH 0 b	坏	(13.2)	4.8	4.3	回転糸切り・無調整	須恵器、火罨	VII-2	//	//
375	XIVG 9 j	坏		(5.0)	[3.3]	回転糸切り・無調整		VII-2	//	//
376	XIVH 4 b	坏				有段、赤彩		VII-1	//	//
377	XIVH 5 b	坏				回転ヘラ切り・無調整	須恵器	VII-2	//	//

第9表 5区 石器・石製品一覧表

登録番号	出土地点	器種	計測値				欠損状況		石	材	備考	図版番号	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部					
501	XIVH 6 i 住	石鏃	[2.8]	1.5	0.4	1.3		○	チャート質粘板岩		71	33	
502	XIVH 6 i 住	スクレーパー	[4.0]	2.3	0.6	6.3		○	硬質泥岩		71	33	
503	XIVH 6 i 住	スクレーパー	[4.9]	5.0	1.2	33.5		○	凝灰岩		71	33	
504	XIVH 6 i 住	石皿	37.2	25.0	4.8			○	流紋岩質極細粒凝灰岩		71	33	
505	XVI 1 a 住	スクレーパー	3.9	3.0	1.2	13.7	○		硬砂岩		74	74	
506	XVI 1 a 住	スクレーパー	2.6	3.0	0.6	5.5		○	硬砂岩		74	74	
507	XVI 1 a 住	スクレーパー	[1.3]	3.5	0.8	2.8		○	珩質泥岩		74	74	
508	XIVH 8 c 住	スクレーパー	3.3	5.5	1.2	13.7		○	硬質泥岩		75	33	
509	XVI 2 c 坑	磨石	[13.0]	8.0	2.7	515.0		○	硬質泥岩		79	34	
510	XIVH 9 c 坑	石匙	2.8	5.3	0.5	6.8		○	硬質泥岩		80	80	
511	XIVH 0 c 坑	石斧	13.4	6.2	3.1	405.0	○		流紋岩		84	84	
512	XIVH 2 a	石鏃	2.9	1.7	0.4			○	硬質泥岩		124	45	
513	XIIIH 0 d	石鏃	3.9	1.7	6.0	2.8	○		硬砂岩		71	33	
514	出土地不明	石鏃	2.2	1.2	0.6	0.9			粘板岩		71	33	
515	XIVH 8 c	石鏃	4.0	1.6	0.5	2.6		○	安山岩		71	33	
516	XIVH 4 i	石鏃	4.4	2.9	0.9	9.3			流紋岩質極細粒凝灰岩		71	33	
517	XIVH 8 j	石鏃	2.4	1.6	0.6	1.3			凝灰岩		71	33	
518	XVI 2 i	石鏃	[4.4]	2.0	0.7	5.4			粘板岩		71	33	
519	XIVH 7 c	石鏃	2.8	0.9	0.5	1.1			粘板岩		71	33	
520	XIVH 4 j	石鏃	2.3	1.7	0.3	0.6	○		凝灰岩		71	33	
521	XIVH 8 g	石鏃	3.8	1.1	0.4	2.5	○		凝灰岩質チャート		71	33	
522	XIVH 8 i	石鏃	[4.3]	2.5	0.8	6.5		○	粘板岩		71	33	
523	XIVH 1 b	石鏃	4.0	3.4	1.1	13.8	○		凝灰岩		71	33	
524	XIVH 3 c	尖頭器	10.2	3.4	2.1	115.0	○		細粒凝灰岩		71	33	
525	XIVH 4 h	石篋	10.2	4.4	1.2	53.6	○		粘板岩		71	33	
526	XIVH 8 h	石篋	7.5	4.4	1.3	49.2	○		凝灰岩		125	125	
527	XIVH 9 j	石篋	6.7	3.5	1.7	39.5	○		凝灰岩質チャート		71	33	
528	XIIIH 9 d	石匙	7.2	4.0	0.7	14.4	○		凝灰質硬砂岩		71	33	
529	XIIIH 8 d	石匙	6.1	3.1	0.7	12.1	○		硬砂岩		71	33	
530	XVI 1 h	石匙	[6.5]	3.8	0.9	23.0		○	流紋岩		71	46	
531	XVI 1 d	石匙	4.0	5.1	6.0	4.9	○		珩質泥岩		71	33	
532	XIVH 9 b	石匙	4.4	5.0	0.8	14.6	○		硬質泥岩		71	33	
533	XIIIH 0 e	石匙	4.3	5.0	0.7	14.5	○		硬質泥岩		71	33	
534	XIVH 3 c	石匙	4.0	6.0	1.0	13.2	○		凝灰質千枚岩		71	33	
535	XVI 2 c	石匙	[6.6]	3.7	0.9	23.6			珩質泥岩		126	126	
536	XIIIH 0 d	石匙	6.9	3.6	0.5	16.6	○		硬砂岩		71	33	
537	XIVH 8 j	スクレーパー	6.9	3.2	1.7	37.6	○		黒耀石		71	33	
538	XIVH 4 b	石匙	10.5	4.9	1.1	65.0	○		硬砂岩		71	33	
539	XIVH 9 h	スクレーパー	6.8	4.6	1.4	47.6	○		凝灰質硬砂岩		71	33	
540	XIVH 4 d	石篋	5.5	4.0	0.9	23.3		○	硬質泥岩		71	33	
541	XIVH 4 b	スクレーパー	[8.1]	4.3	1.2	42.3			硬質泥岩		71	47	
542	XIV I 0 h	スクレーパー	2.4	2.9	0.6	4.5			硬質泥岩		71	33	
543	XIVH 4 b	スクレーパー	[7.7]	5.3	1.7	65.0		○	凝灰岩		127	127	
544	C区	スクレーパー	8.1	2.9	1.4	31.3			硬質泥岩		71	33	
545	XIVH 8 i	スクレーパー	7.7	3.9	1.4	40.8			硬質泥岩		71	33	
546	XIIIH 0 d	石篋	6.0	4.2	1.0	28.3	○		硬質泥岩		71	33	

登録番号	出土地点	器種	計測値				欠損状況		石材	備考	図版番号	写真図版
			長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部				
547	XIVH 6 h	スクレーパー	3.7	3.5	1.0	10.8	○		凝灰岩		127	47
548	XIVH 6 i	スクレーパー	3.8	4.5	0.9	16.7	○		凝灰岩		〃	〃
549	XIVH 6 j	スクレーパー	4.4	3.1	1.0	11.0	○		流紋岩質極細粒凝灰岩		〃	〃
550	XIVH 9 g	スクレーパー	[4.1]	7.6	1.5	34.5	○		チャート質粘板岩		〃	〃
551	XIVH 8 b	スクレーパー	4.9	4.0	1.3	32.9	○		凝灰岩		〃	〃
552	XIIIH 0 e	石斧	[7.0]	3.8	1.7	60.5		○	凝灰岩		128	〃
553	XVH 2 a	石斧	8.9	4.1	1.9	118.0		○	細粒凝灰岩		〃	48
554	C区	石斧	[5.5]	3.5	1.8	47.3			硬砂岩		〃	〃
555	XIIIH 7 f	石斧	[7.3]	5.9	2.8	205.0		○	凝灰質千枚岩		〃	〃
556	XIIIH 0 a	石斧	[9.7]	5.2	2.6	245.0		○	緑色凝灰岩		〃	〃
557	XVI 2 c	石斧	[14.0]	4.9	3.5	408.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	49
558	XIVH 8 b	石斧	[4.8]	1.9	1.0	16.1		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
559	XIVH 8 g	石斧	5.7	2.2	0.6	12.8		○	チャート質粘板岩		〃	〃
560	XIIIH 0 d	石錘	7.6	5.0	1.8	90.0		○	凝灰質千枚岩		〃	〃
561	XIVH 8 b	石錘	7.8	5.4	1.4	79.0		○	チャート質粘板岩		〃	〃
562	XIV区	半円状扁平打製石器	[14.0]	7.0	2.5	335.0		○	輝石安山岩溶岩		129	〃
563	XIVH 8 a	半円状扁平打製石器	[12.3]	6.7	2.6	280.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
564	XIVH 3 a	半円状扁平打製石器	[13.0]	7.3	3.3	445.0		○	安山岩		〃	〃
565	XIVH 4 b	半円状扁平打製石器	14.8	6.5	3.2	420.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
566	XIVH 7 i	特殊磨石	11.1	3.7	4.9	582.0		○	安山岩		〃	〃
567	XVI 3 g	半円状扁平打製石器	15.2	8.3	4.7	960.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
568	XVI 2 h	磨石	14.3	6.8	4.4	660.0		○	安山岩		130	〃
569	XIVH 7 i	磨石	14.5	6.4	2.4	295.0		○	流紋岩質極細粒凝灰岩		〃	〃
570	XIVH 7 j	磨石	20.4	8.9	4.4	1125.0		○	流紋岩質凝灰岩		〃	〃
571	XIVH 1 d-2焼	特殊磨石	16.8	7.0	4.5	848.0		○	凝灰質硬砂岩		131	〃
572	XIVH 8 h	磨石	16.0	8.3	2.3	368.0		○	硬砂岩		〃	〃
573	XIVH 4 b	特殊磨石	14.9	5.8	6.0	805.0		○	粘板岩		〃	〃
574	XIIIH 0 c	特殊磨石	14.8	4.9	6.2	665.0		○	安山岩		〃	〃
575	XVI 1 j	特殊磨石	[9.4]	5.5	6.2	490.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
576	XIIIH 0 b	凹石	11.5	8.8	5.4	788.0		○	硬質泥岩		132	〃
577	XIVH 9 g	凹石	15.5	10.3	6.6	1735.0		○	硬質泥岩		〃	〃
578	XIVH 6 i	凹石	8.2	7.8	4.9	434.0		○	粘板岩		〃	〃
579	XIIIH 0 c	凹石	14.0	7.1	1.6	320.0		○	粘板岩		〃	〃
580	XIVH 1 b	磨石	8.6	8.0	4.8	480.0		○	チャート		133	〃
581	XIIIH 0 b	磨石	11.0	9.3	6.5	782.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
582	XIVH 9 h	敲石	10.3	9.2	6.0	800.0		○	硬質泥岩		〃	〃
583	XIVG 2 b	敲石	7.3	6.9	3.2	300.0		○	凝灰質硬砂岩		〃	〃
584	XIV I 9 a	石鍬	20.0	11.6	2.3	465.0		○	花崗閃緑岩		134	〃
585	XIV I 0 b	石鍬	20.9	13.6	2.3	610.0		○	安山岩		〃	〃
586	XIVH 8 i	石鍬	16.3	8.8	2.4	388.0		○	凝灰質硬砂岩		135	〃
587	出土地不明	石皿・砥石	[17.5]	[11.7]	6.5	800.0		○	安山岩		〃	〃
588	XIVH 7 b	砥石	5.8	4.2	2.3	140.0		○	流紋岩		〃	〃
589	XIVH 9 i	石皿	25.8	32.2	10.3			○	蛇紋岩		136	〃
590	XIVH 3 a	石皿	14.2	16.5	3.5	1195.0		○	流紋岩		〃	〃
591	XIVH 1 d	石皿	[10.0]	[9.5]	3.6	295.0		○	硬質泥岩		〃	〃
592	XIVH 6 i	石棒	[20.4]	6.3	4.2	732.0		○	凝灰岩質チャート		137	〃
593	XIIIH 0 e	コア	3.8	2.3	2.2	19.5		○	凝灰質千枚岩		〃	〃
594	XIVH 7 g	有孔石製品	4.8	4.1	1.2	28.7		○	硬質泥岩		〃	〃

VII まとめ

1 上八木田遺跡の意義

上八木田遺跡は北上山地の丘陵地帯の一角に広がる遺跡である。僅かな谷底平野が広がるとは言え、基本的には山間に占地する。海拔 260～275 m である。

坂上田村麿が志波城を築いた 9 世紀初頭には、エミシと呼ばれた人々はこの北上山地を活動の場としていた事が知られている。それは「塩の道」であり、「昆布の道」として沿岸と内陸を結ぶ交易ルートがあり、「爾佐体」もまたこの北上山地の北半に擬定地を求められている。北上山地南半は胆沢城こそ北上川流域の平地に占地し、北上市の極楽寺は北上川の河岸に臨むものの東和町成島には大毘沙門天が祭られ、古来より開かれていた遠野盆地へと広がる。北上山地は「人跡未踏の地」どころか、岩手の歴史を考える上では極めて重要な地域である。

しかし、これまで盛岡市及びその周辺での発掘調査はほとんどが盛岡盆地と呼ばれる北上川流域及びその周辺に集中しており、北上山地の調査はなされてこなかった。したがって、同地域の歴史的な解明はなされておらず、空白地帯となってきた所である。

今回の発掘調査は約 7 万平方メートルを念頭に置いて試掘調査が行われ、その結果、本調査は約 4 万 2 千 5 百平方メートルを行う事となっている。これは広大な面的調査を意味し、山間に点在する遺跡を包括的に調査する事になり、それ自体貴重な資料を提供するものである。

上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡はこの八木田遺跡群の南半にあたる合計約 1 万 4 千平方メートルを占める。この 3 遺跡は地理的にみて、八木田遺跡群の中心とみられるⅠ遺跡の周辺に位置する。したがって、各々の遺跡の性格はⅠ遺跡との関連を考慮しつつ捉えていく事が重要な視点と思われる。

2 縄文・弥生時代

縄文時代の遺構のうち住居跡については、3 区で後期の住居跡 1 棟、4 区では発見されず、5 区は前期末葉～中期初頭 1 棟、中期 1 棟、後期 1 棟、晩期 1 棟、不明 2 棟検出した。不明の 2 棟は前期の可能性が強い。この結果は、時期別の遺物出土量とも一致する。3 区では後期の土器と弥生土器が卓越し、4 区ではほとんど遺物を採集できず、5 区では中期初頭の土器が卓越する。

時期毎にみると以下のようなになる。

早期の土器は 5 区で若干の貝殻文土器と内外条痕文土器が出土した。しかし、他では全く見られなかった。物見台式と早稲田 3 類併行であるから、早期末葉のものである。

前期は初頭と末葉に別れる。初頭の土器は少なく、僅かに 5 区で尖底土器と繊維土器が出土した。末葉の土器は円筒下層式 d と大木式 6 式であるが、量的に少ないだけでなく、大木 7 a 式のはしりともとれるものである。

中期は初頭の大木 7 a 式が卓越する。器形は深鉢形で、浅鉢は見られない。口縁部文様体は幾

つかに細分される。しかし、体部は閉端の原体を使用し、綾絡文が垂下するものである。底部は網代痕を持つものが多い。口縁部文様体は沈線文系統のものと、隆帯を貼付する系統のものとに大別される。沈線文系統のものは波状沈線文が横位に展開するものと、単沈線の集合体を構成するもの、押し引き沈線や連続刺突が展開されるものとに大別される。隆帯を貼付するほとんどのものは区画帯として横位ないし縦位に貼付するが、幾つかは文様そのものとして円形や曲線を描く。隆帯には刻みや、原体が押圧ないし回転施文される。刻みや原体圧痕がない所謂粘土紐のみのものはない。

円筒上層式のものほとんど見られない。また、5区の113、120、121、140等はめずらしく、手法的には関東地方の五領ヶ台式に通じるものがある。

中期中葉の土器は少なく、末葉になって若干数を増す。大木9～10式のものである。

後期は中期初頭に次ぐ出土量ではあるが、量的には6割程度に減る。後期の特徴は量よりもむしろ前葉から末葉まで（中葉が少なくはなるが）見られる事にある。しかし、器種は深鉢が圧倒的で、他には注口土器や袖珍土器が若干見られる程度である。後期としては器種組成が幾分片寄っているようである。

晩期は前葉の土器が中心で若干大洞C1～C2式のものが見られる。三叉文から羊歯状文、歯列状文が主である。しかし、ここでも器種組成は深鉢が圧倒的で片寄りがみられる。

弥生土器は中期の八起島式、後期の常盤式、一本松式及び赤穴が見られる。しかし、住居跡は発見されなかった。

次に石器であるが、3区、4区は極めて少ない。それに対して、5区は非常に多い。量的に最も多いものは磨石類と石皿である。石鏃や石錘、石錐等の剝片石器は非常に少ない。

磨石類としたものには従来、磨石、半円状偏平打製石器、特殊磨石、凹石、敲石と呼ばれているものが含まれる。これらは単独の使用痕を持つものは少なく、2つ以上の使用痕を持つものが多い。すり面（使用面）に着目すれば、光沢を帯びるほど滑らかになっているものと、ざらざらしているものとに分類される。前者は磨石の一部、凹石や敲石の一部に見られる。後者は磨石の一部、半円状偏平打製石器、特殊磨石に見られるものである。5区出土の磨石類は後者に属するものが卓越する。擦り面が長楕円ないし細長くなるものには2種類見られる。一つは半円状偏平打製石器等に多くみられるのであるが、意図的に擦り面を作り出しているものの幅は極めて細く1センチ未満になるものである。もう一つは特殊磨石のように使用面を選んでいないが意図的に作り出していないものは1センチを越えるものが多々見られる。その点から見れば使用面の痕跡は同様にざらざらしているとは言っても異なる用法をしているのかも知れない。しかし、出土した磨石類の石器は全てがそのように分類できるわけではなく、これらについてはなお検討が必要である。

住居跡以外の遺構では土坑、陥し穴が検出された。土坑、陥し穴とも少ない。土坑は断面形がフラスコ状となるものは各区で1基検出された。ピーカー状となるものは3区では7基、4区3基、5区9基である。ピーカー状の土坑は開口部径が1 m余りとなる中規模のものと、その半分程度ないしそれ以下のものとは別れるようである。用途が異なるものかも知れない。

陥し穴は3区では完全な形のものはない。4区、5区では3基ずつ検出した。いずれも溝状タイプのもので、円筒状のものはない。4区のものとは比較的大型でしっかりしている。5区のものとは幅も狭く小型である。

焼土遺構は5区で45箇所も検出された。焼土遺構は数え方によっては変化するため、この数は実際の数より少ないと思われる。また、3区、4区では近現代の焼土遺構と区別が出来なかったものは削除してある。したがって、3区、4区の当該遺構は相当増えるかも知れない。ちなみに3区、4区の当該遺構は共に沢の近くに集中し、土器もある程度出土する。しかし、5区との違いは石器の量が極端に異なる事である。なお、焼土遺構そのものの性格について考察できる新たな資料は得られなかった。しかし、その存在がキャンプ・サイトの性格を帯びるものであれば、必ず近くにその居住地帯があることが想定される。現段階ではそれは1区と考えられ、次年度の調査を待つこととしたい。

最後に、盛岡という地理的位置に起因することについて若干触れておきたい。縄文時代を土器をメルク・マークとして考えるとき、この盛岡は東北南半の影響を強く受けた時代と、北半の影響を強く受けた時代とがある。しかしながら、それはあくまで影響の範囲であって、どちらかの文化に呑み込まれるものではなかったようである。大木7a式に比定した一群も宮城県や福島県の所謂大木式土器文化圏の大木7a式とは異なっている。文様の手法は同じようでも土器の形は円筒土器の形を色濃く残しているものが多い。これは単に土器の概観にだけ見られることではなく、石器にしても、遺構の形態にしても同様のことが言える。典型的な円筒土器は極めて少ないにもかかわらず、円筒土器文化圏に特有の石器といわれる半円状偏平打製石器は相当数の出土を見、中期末葉の土器が出土したその付近に石囲い炉があるにもかかわらず、複式炉は1基も発見されなかった、等々である。

3 古代

古代に属する遺構は住居跡と焼土遺構が検出された。

住居跡は3区1棟、4区4棟、5区1棟である。全て平安時代のものである。4区の4棟は遺存状況が悪く詳細な点が不明なものが多いが、遺物からみれば時期差があり、同時存在ではない。したがって、3～5区で見える限り、平安時代には1棟ないし2棟の家が山間に点在していた事が判明した。住居跡の軸線は不揃いである。規模は1辺が3～4 m程度であり、大型の住居は

ない。支柱穴を持つものは1棟だけであり、6本柱である。柱材は割り材を使用している。掘り込みは浅く、基盤の褐色土まで達する事は無い。カマドの向きは東向き、南向き、南西向きと一様ではないが、すべて斜面の上位側の壁に設置されている。また、隅により中央に設置される事はない。煙道部は掘り込み式、くり貫き式の両方が見られる。また、煙道部が無く壁際からすぐに立ち上がるものも見られる。

出土遺物は比較的豊富である。土師器の甕、坏が主で須恵器は各遺構とも1、2点の出土である。土師器の甕は口縁部から体上半にかけてロクロ整形するものが多い。坏は内面黒色処理したものが多いが、底部の切り離しが回転糸切り無調整のものも相当数見られ、相半ばする。有段の坏は遺構外から1点出土したのみである。また、球胴甕や底部がすぼまるタイプの甕などは出土していない。

鉄製品は3区で刀子1点、4区のXVI K1d住居跡からは太刀、紡錘車、鉄斧、穂摘み具が出土した。太刀は切っ先側が欠損しているが、茎・棗鏢等は明瞭に残っている。紡錘車、鉄斧、も遺存状態は良好で、穂摘み具には止め釘も遺存している。これらは焼失住居の焼土層より下位から一括出土したものであり、住居跡に確実に共伴するものである。

太刀は鑑定の結果9世紀前半のものであり、出土した土師器の編年とも一致する。したがって、志波城が築かれた前後、ないしそれよりさほど遠くない時期の八木田には民家が点在していたのであり、所謂散村形態だったと考えられる。また、太刀の出土した住居跡は他と比較し確かに支柱穴が検出されるなど他とは異なる点も見られる。しかしながら、太刀以外の金属器はすべて日常の生活用具であり、武具甲冑のたぐいはない。住居跡の規模もそれほど大きくとか占地の特殊性とかが窺われるものではないこと等からマクロ的に見ると一般民家の範ちゅうに属するものであろう。

次に後北C式及び北海道系の土器についてであるが、得られた資料が極めて少なく、しかも遺構に伴わない状況で出土したものであることから、今後の資料の増加に期待せざるを得ない。ここでは当該土器の出土したことだけを指摘するにとどめたい。

参考文献

- 岩手県(1951)：『岩手県史 1』 杜陵印刷
- 二本柳正一 他(1957)：「青森県上北郡早稲田貝塚」
『考古学雑誌』43-2 所収 日本考古学協会
- 後藤勝彦(1962)：「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について」
『考古学雑誌』48-1 所収 日本考古学協会
- 興野義一(1967～1970)：「大木式土器の理解のために」
『考古学ジャーナル』所収 ニューサイエンス社
- 草間俊一(1974)：『崎山弁天遺跡』 大槌町教育委員会
- 山内清男(1979)：『日本先史の土器の縄紋』 先史考古学会
- 渡辺一雄・大竹憲治(1981)：『三貫地遺跡』 三貫地遺跡発掘調査団
- 相原康二(1981)：『岩手県文化財調査報告書第 60 集』 岩手県教育委員会
- 丹羽 茂(1981)：「大木式土器」『縄文文化の研究 4』所収 雄山閣
- 相原康二(1982)：『岩手県文化財調査報告書第 70 集』 岩手県教育委員会
- 岩手県立博物館(1982)：『岩手の土器』
- 佐原真編(1983)：『弥生土器 II』 ニューサイエンス社
- 高橋義介(1984)：「岩手県における奈良・平安時代出土の鉄製品について」
『紀要IV』所収 岩手埋文
- 小田野哲憲(1987)：「岩手の弥生土器編年試論」
『岩手県立博物館研究報告書第 5 号』所収 岩手県立博物館
- 芹沢長介・坪井清足監修(1981)：『縄文土器大成』 講談社
- 岩手埋文(1989)：『駒焼場遺跡発掘調査報告書』
- 岩手埋文(1989)：『和光 6 区遺跡発掘調査報告書』

写真図版

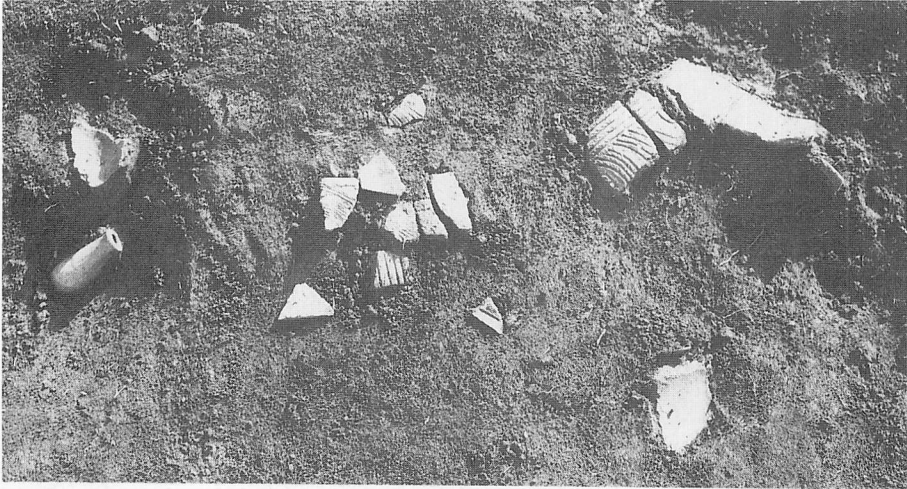


(北西上空から)

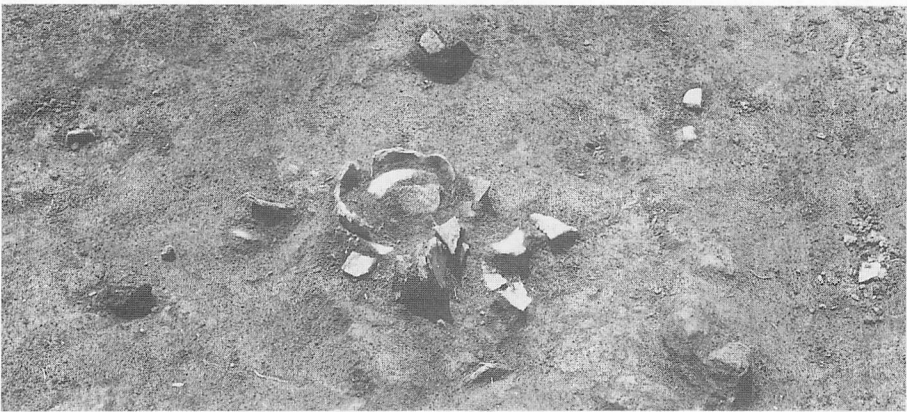
写真図版1 上八木田遺跡群



三区調査前の現況



遺物出土状況

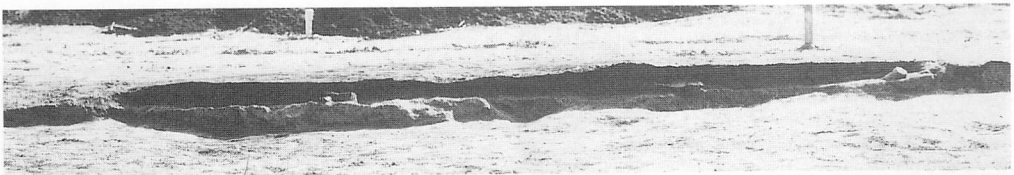


土器埋設遺構

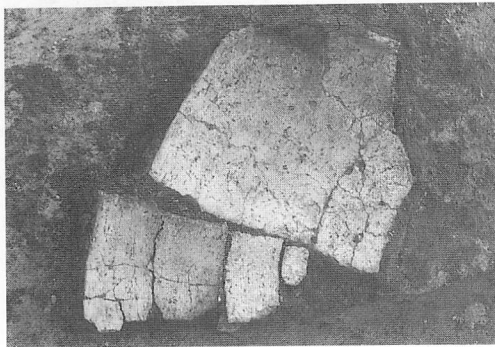
写真図版 2 3区現況、遺物出土状況等



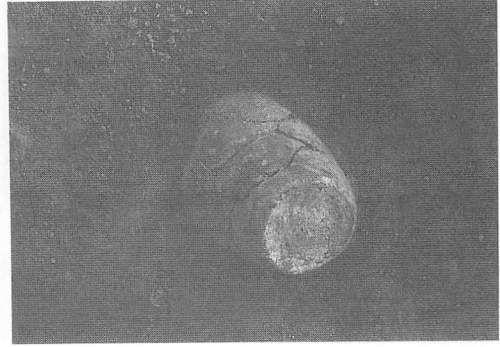
(完掘)



(埋土)

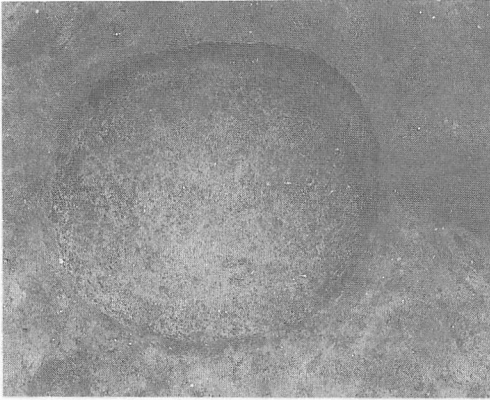


(土器 1)



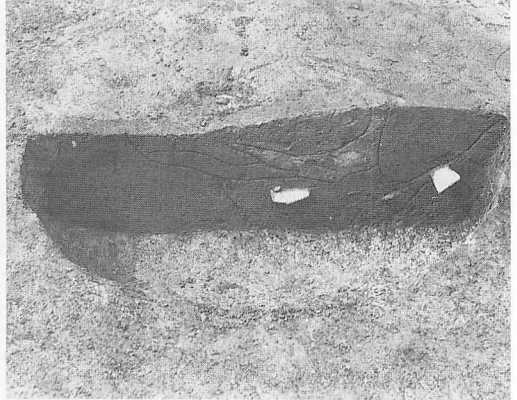
(土器 2)

写真図版 3 X I N 6 f 住居跡

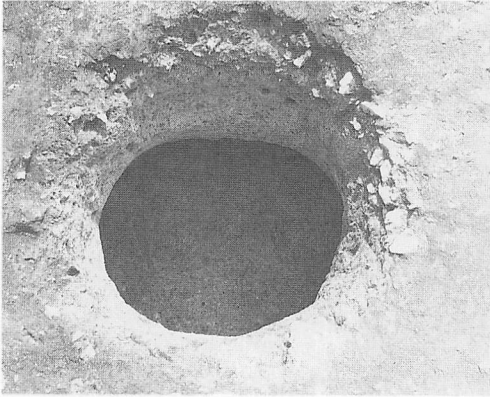


(完堀)

X I N 8 f 土坑

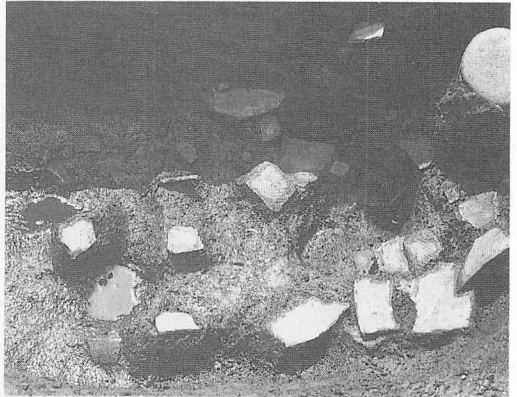


(断面)

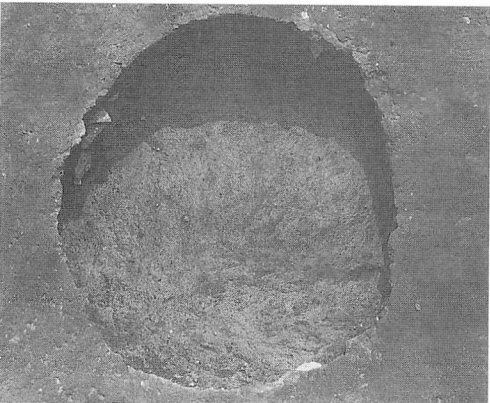


(完堀)

X I N 9 j 土坑

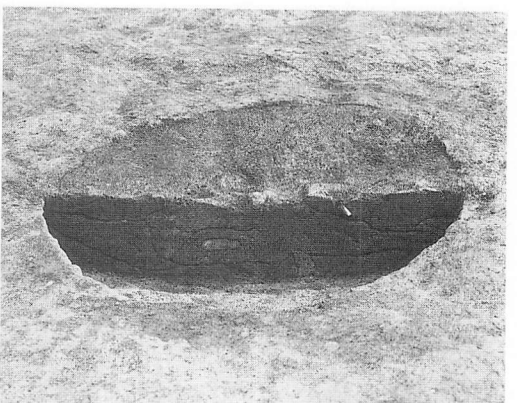


(X I N 8 f 土坑遺物出土状況)



(完堀)

X I N 9 h 土坑

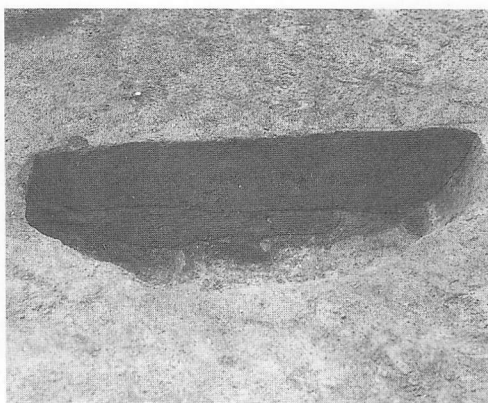


(断面)

写真図版 4 X I N 8 f 土坑、X I N 9 j 土坑、X I N 9 h 土坑

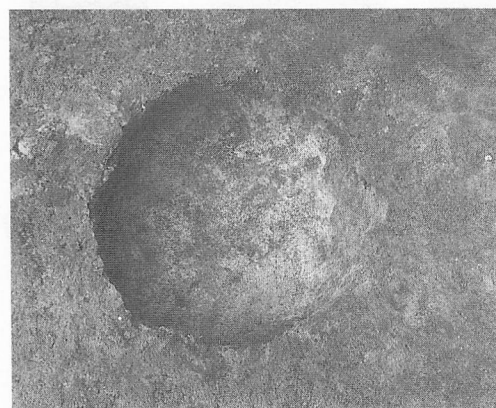


(完掘)

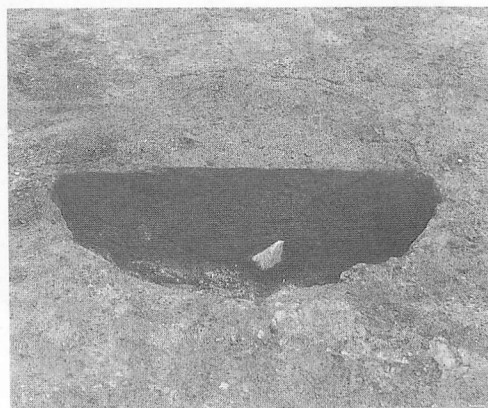


(埋土断面)

X I N 0 C 土坑



(完掘)

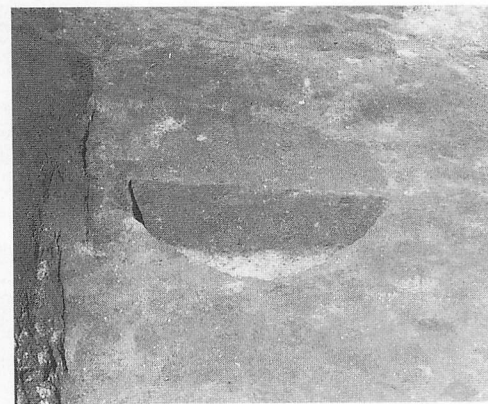


(埋土断面)

X I N 9 b 土坑



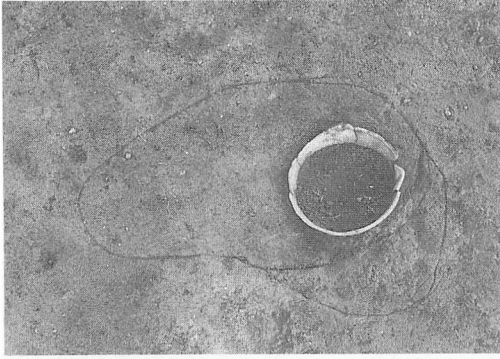
(完掘)



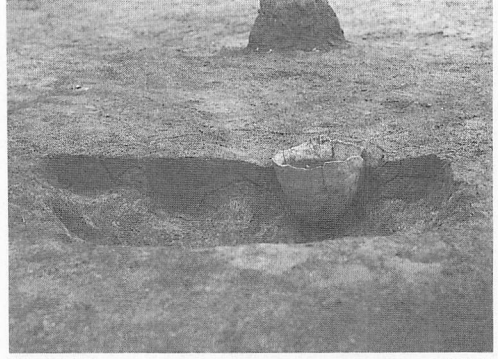
(埋土断面)

X I M 4 j 土坑

写真图版 5 X I N 0 C 土坑、X I N 9 b 土坑、X I M 4 j 土坑

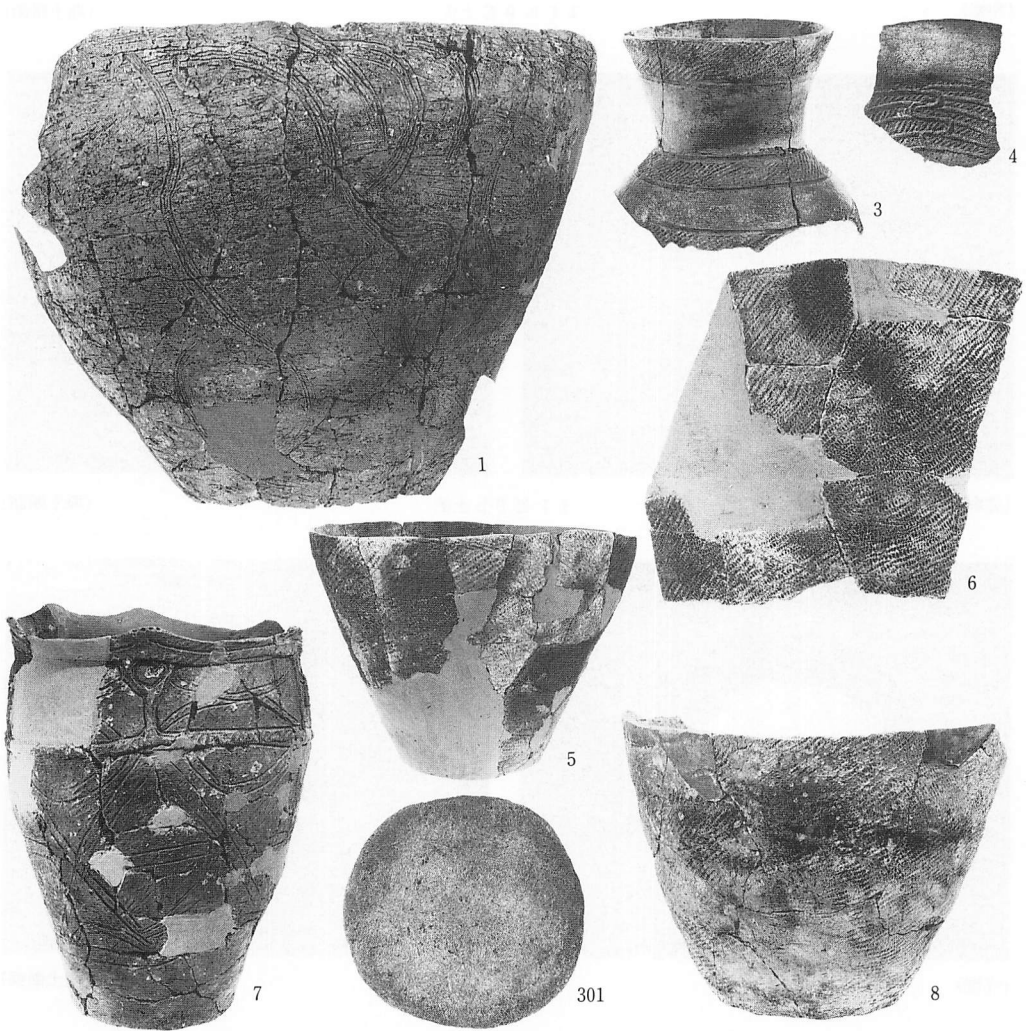


(完堀)

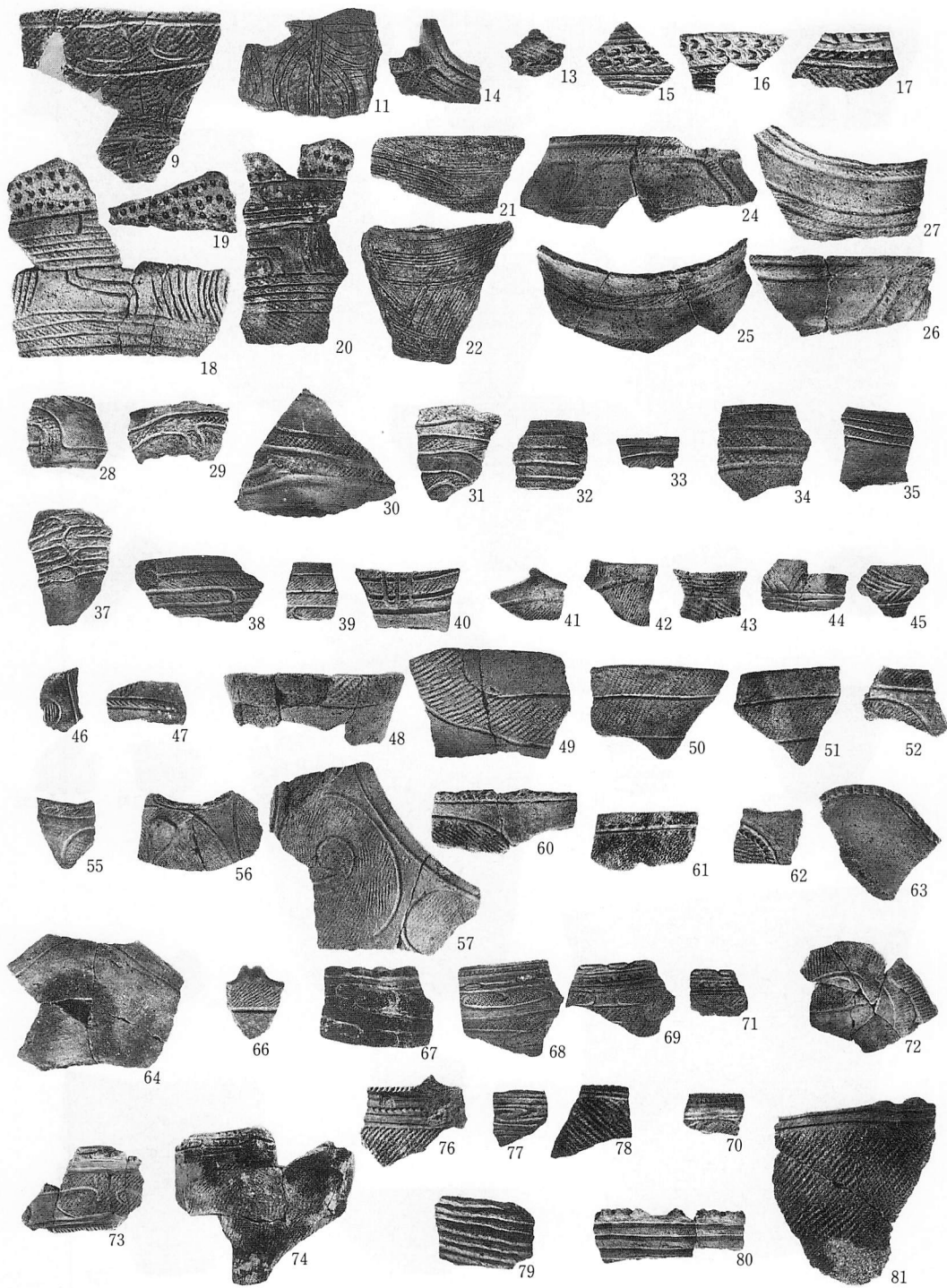


(断面)

X I N 9 b 土器埋設遺構



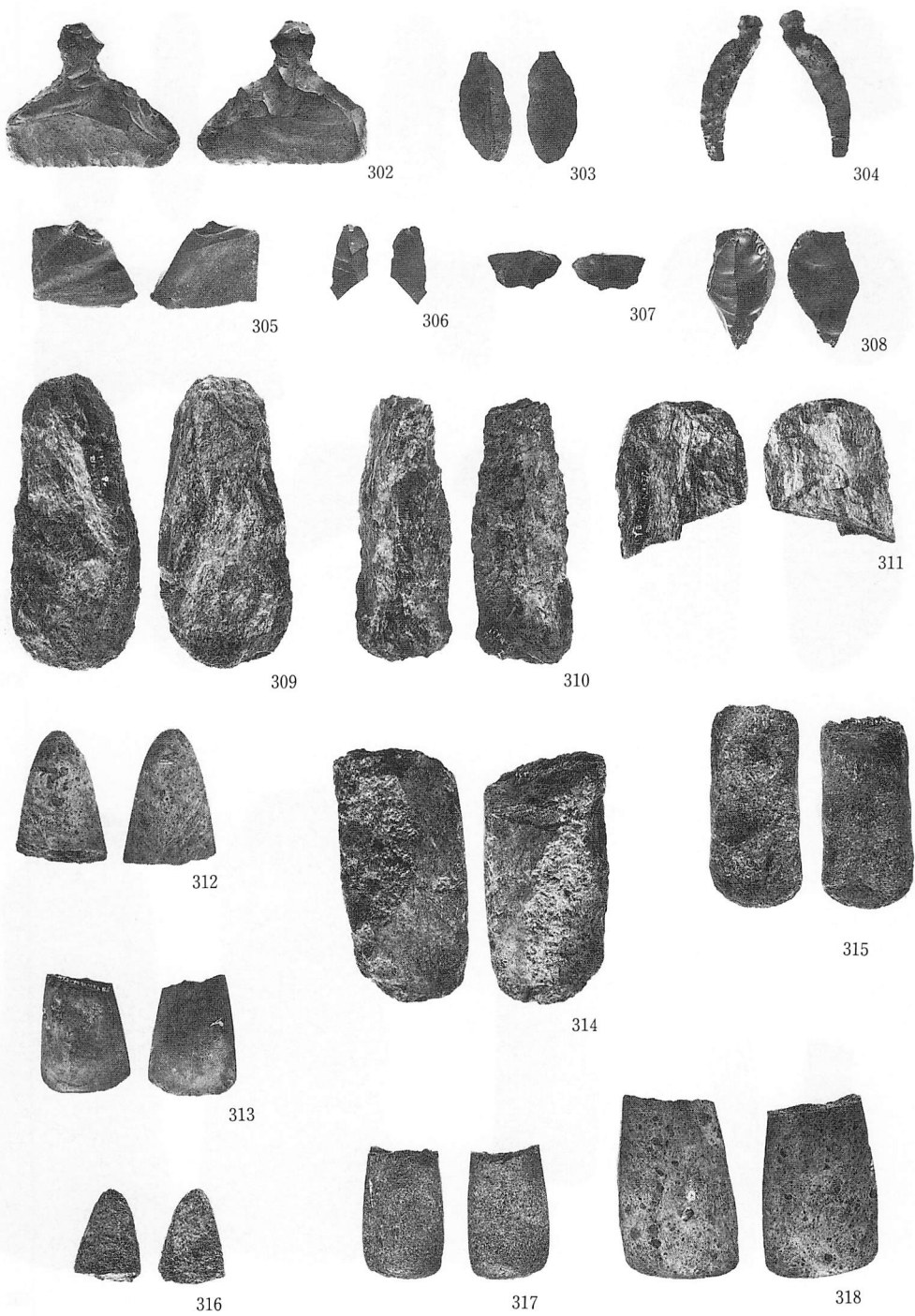
写真図版 6 土器埋設遺構、遺構内出土遺物



写真図版7 遺構外出土遺物（縄文）



写真図版 8 遺構外出土遺物（縄文・弥生）



写真図版 9 遺構外出土遺物 (石器)



写真図版10 遺構外出土遺物 (石器・羽口)

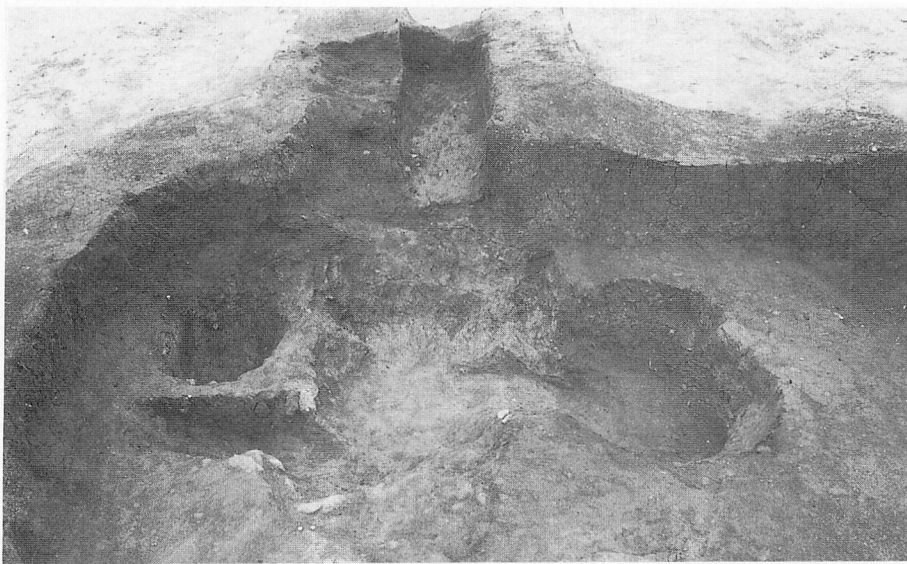


(完掘)



(埋土断面)

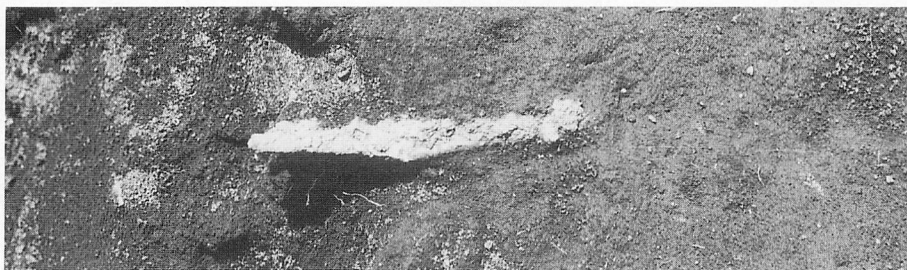
写真図版12 X I N 7 d 住居跡 (カマド)



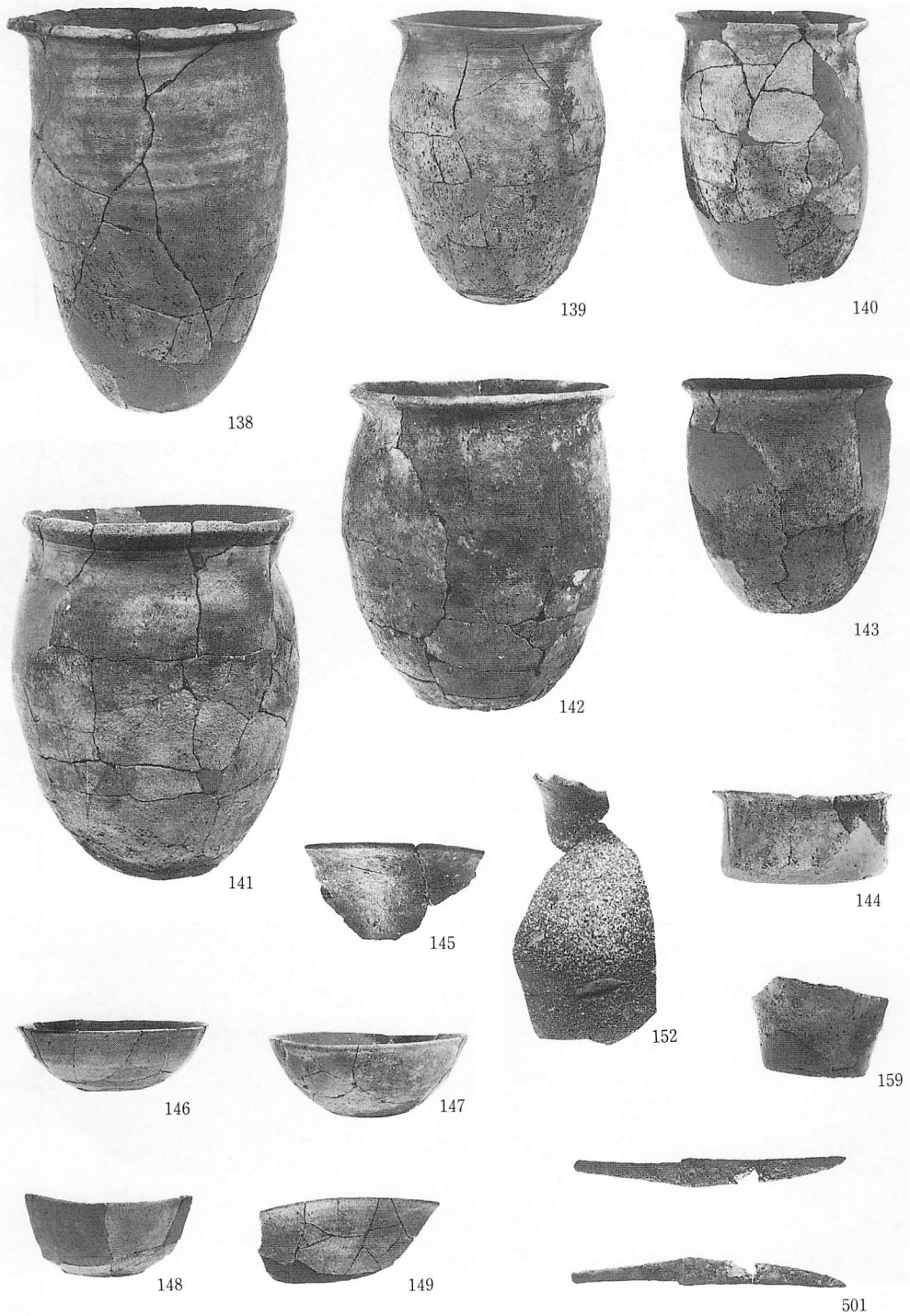
カマド完掘



カマド埋土断面



刀子出土状況

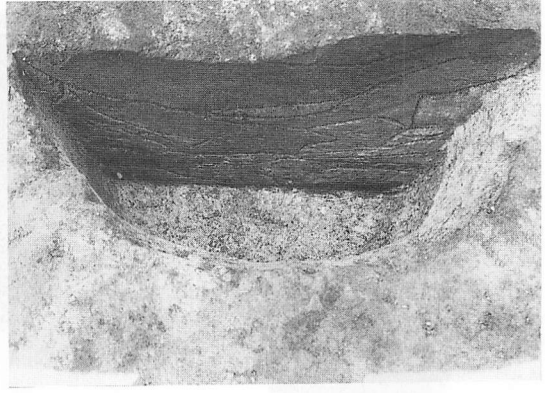


写真図版13 X I N 7 d 住居跡出土遺物

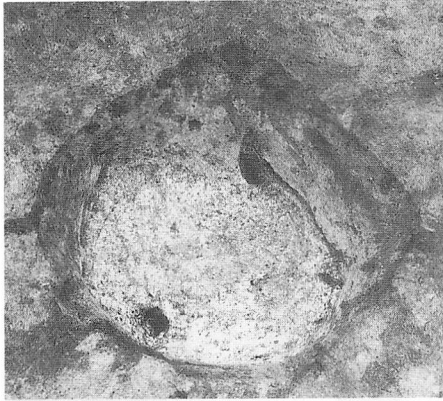


(完掘)

X V L 5 c 土坑

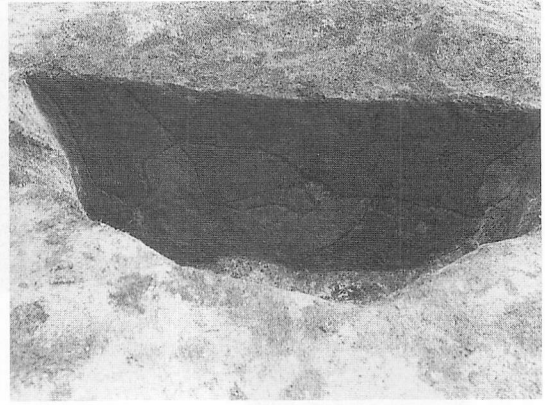


(断面)

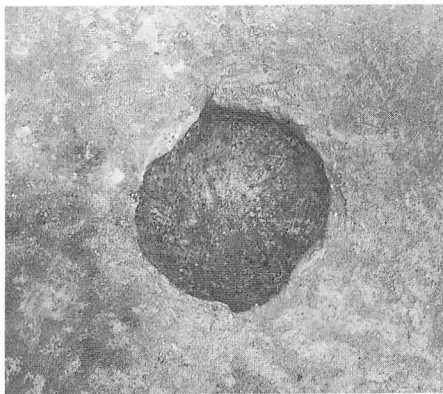


(完掘)

X V K 7 i 土坑

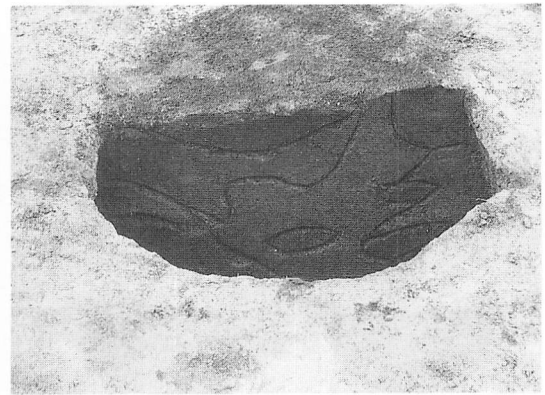


(断面)



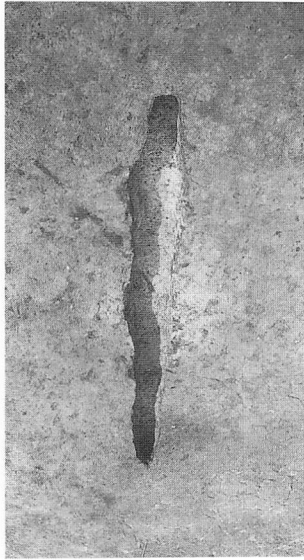
(完掘)

X V K 8 l 土坑

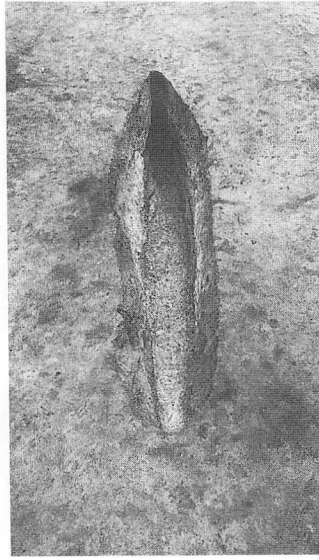


(断面)

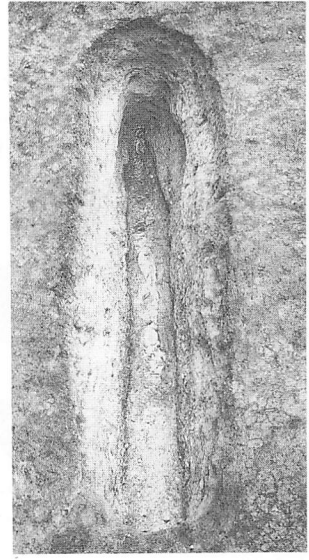
写真図版14 X V L 5 c 土坑、X V K 7 i 土坑
X V K 8 l 土坑



(完掘)



(完掘)



(完掘)

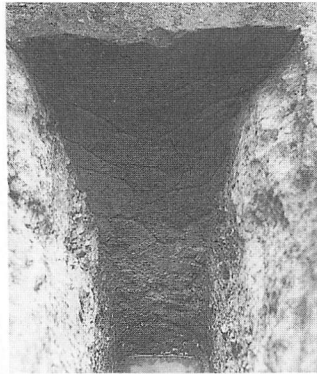
(断面)

(断面)

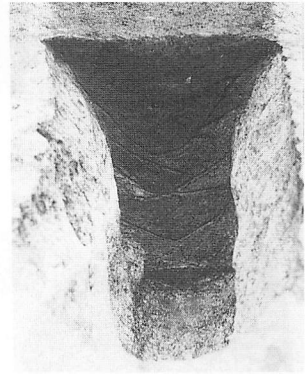
(断面)



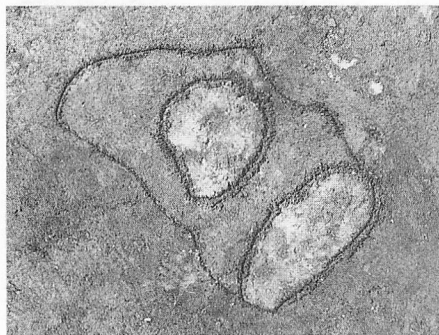
XVK 5 h 陥し穴



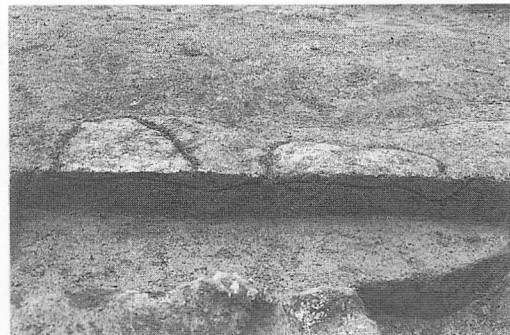
XVK 7 e 陥し穴



XVK 1 c 陥し穴



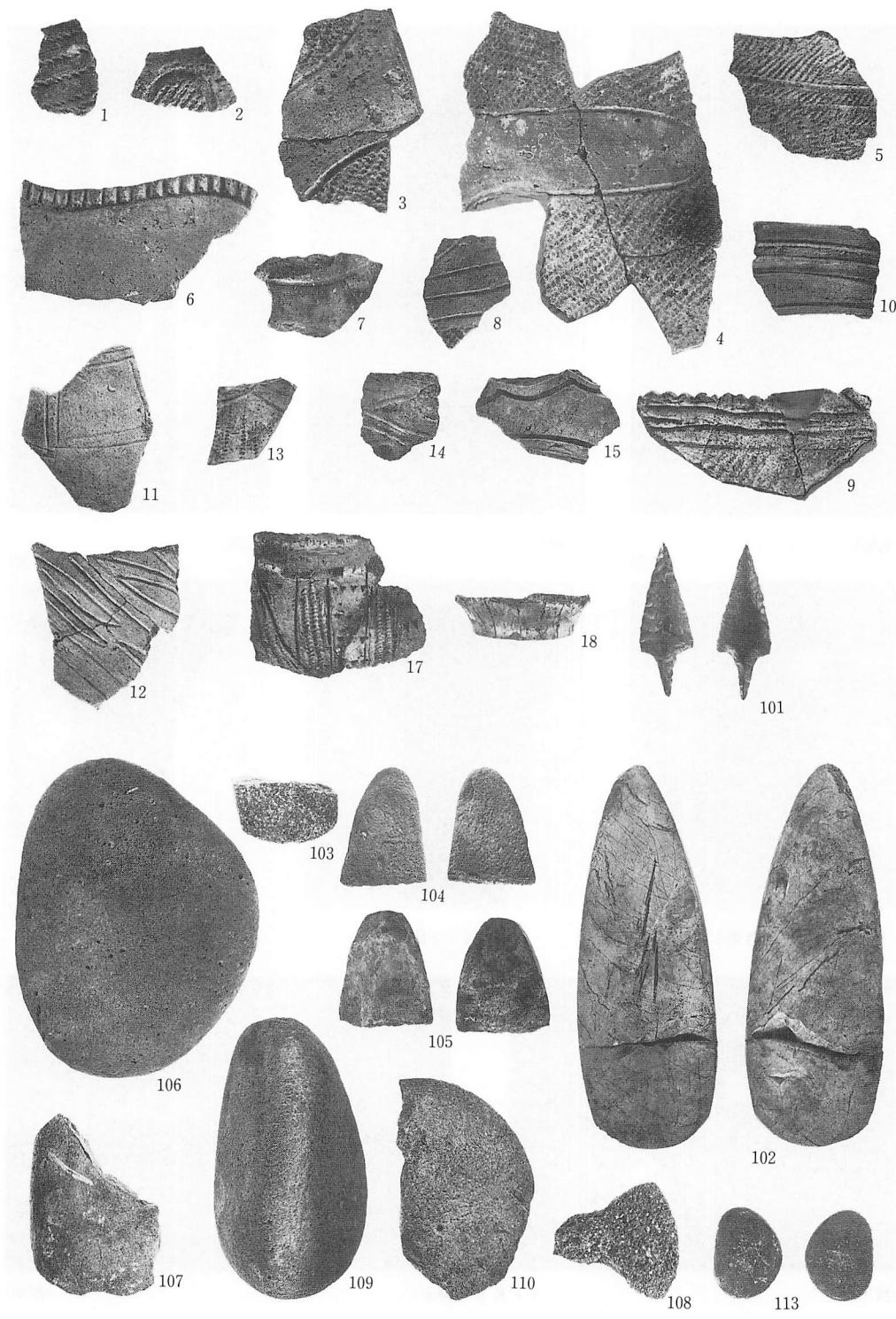
(検出)



XVK 6 d 焼土

(断面)

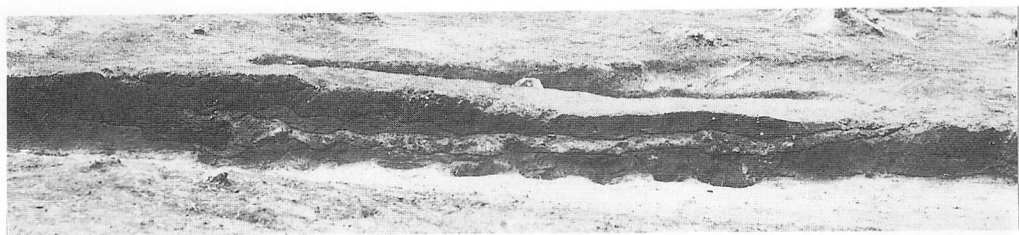
写真図版15 XVK 5 h 陥し穴、XVK 7 e 陥し穴
XVK 1 c 陥し穴、XVK 6 d 焼土



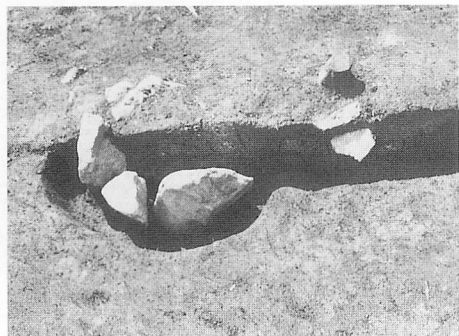
写真図版16 遺構外出土遺物
 (縄文・弥生等・石器)



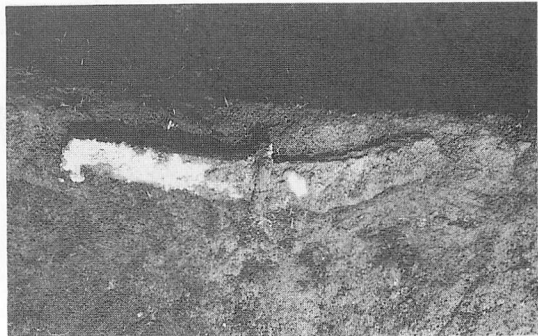
(完掘)



(断面)



煙出し部

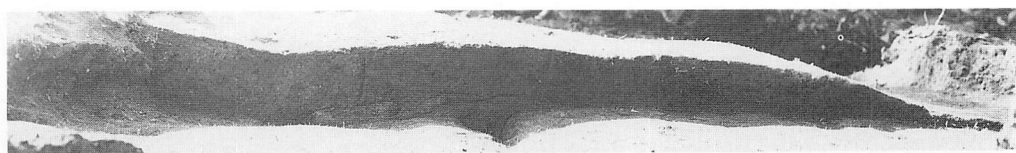


(断面) 太刀出土状況

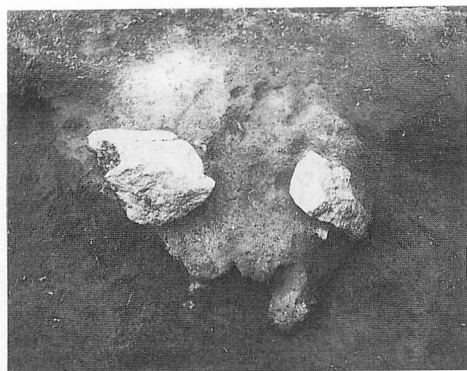
写真図版17 X VI K 1 d 住居跡



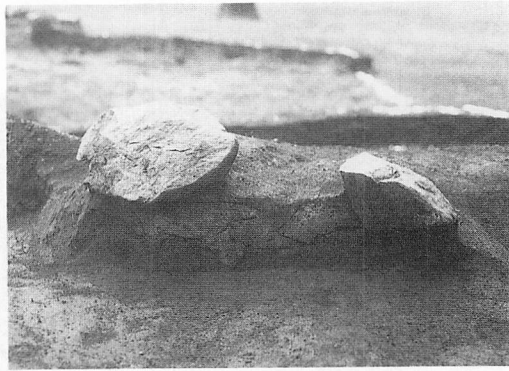
(完掘)



(断面)



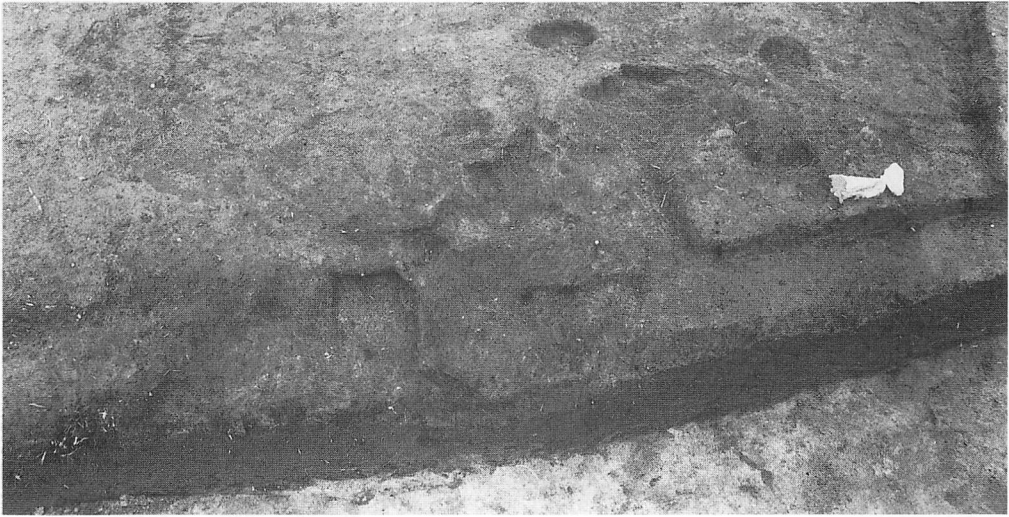
(検出)



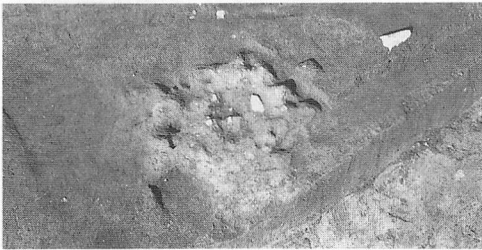
(断面)

カマド

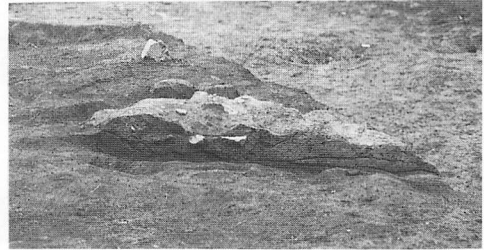
写真図版18 X VI K 2 c 住居跡



(完堀)

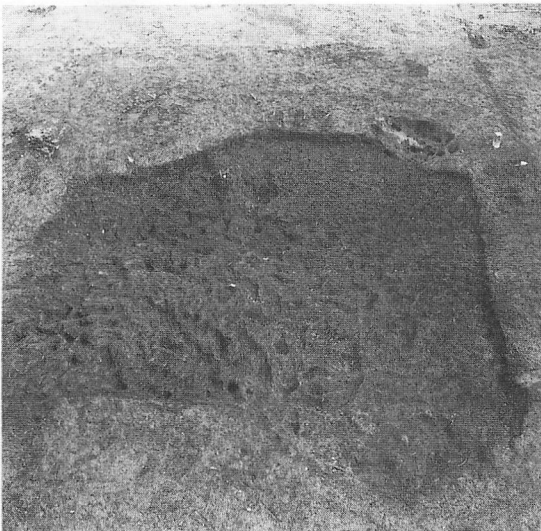


(カマド検出)



(カマド断面)

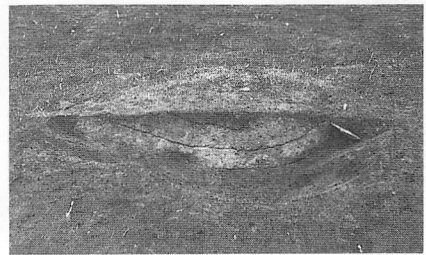
XVI K 3 e 住居跡



(完堀)



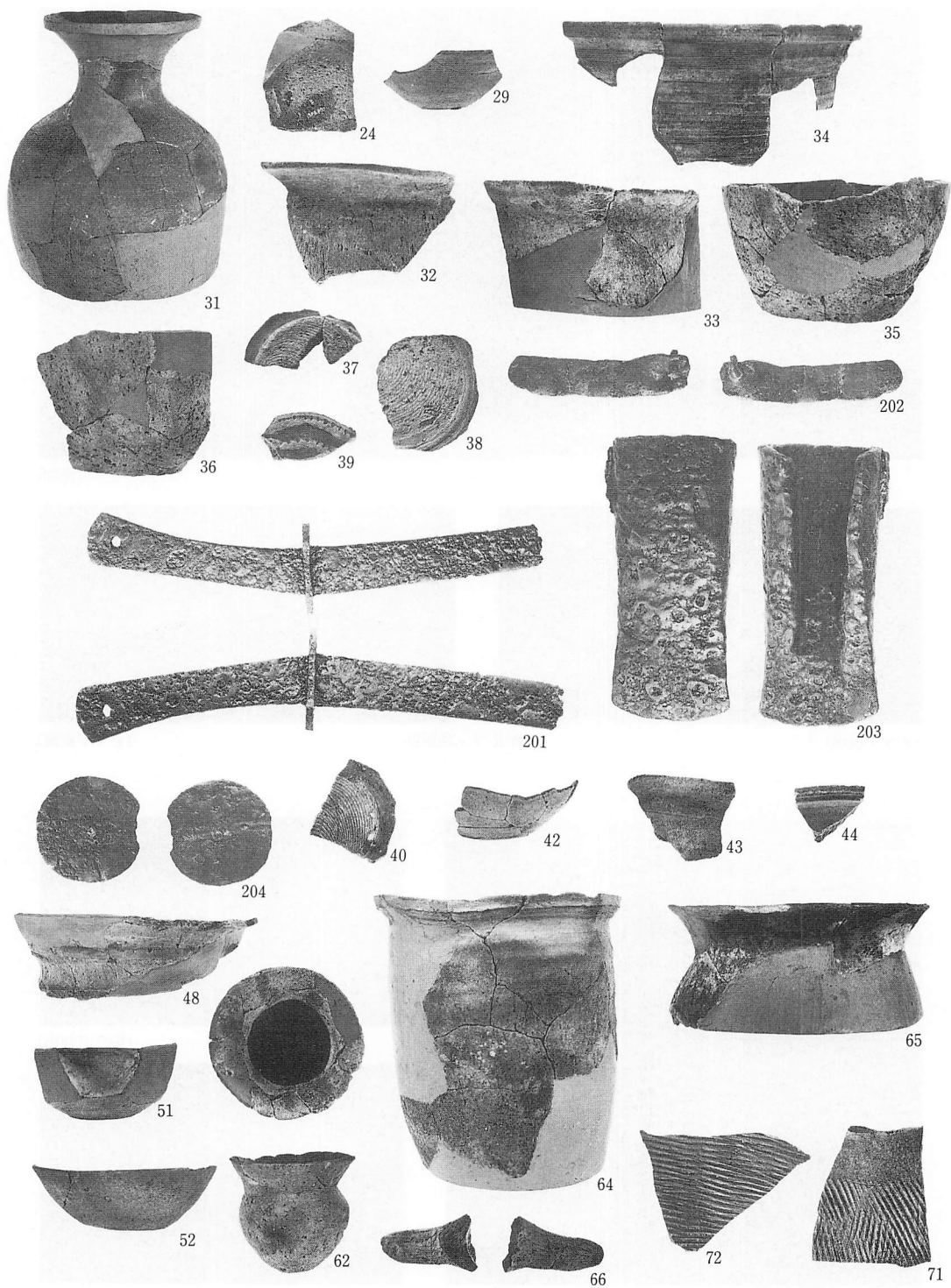
(掘り方検出)



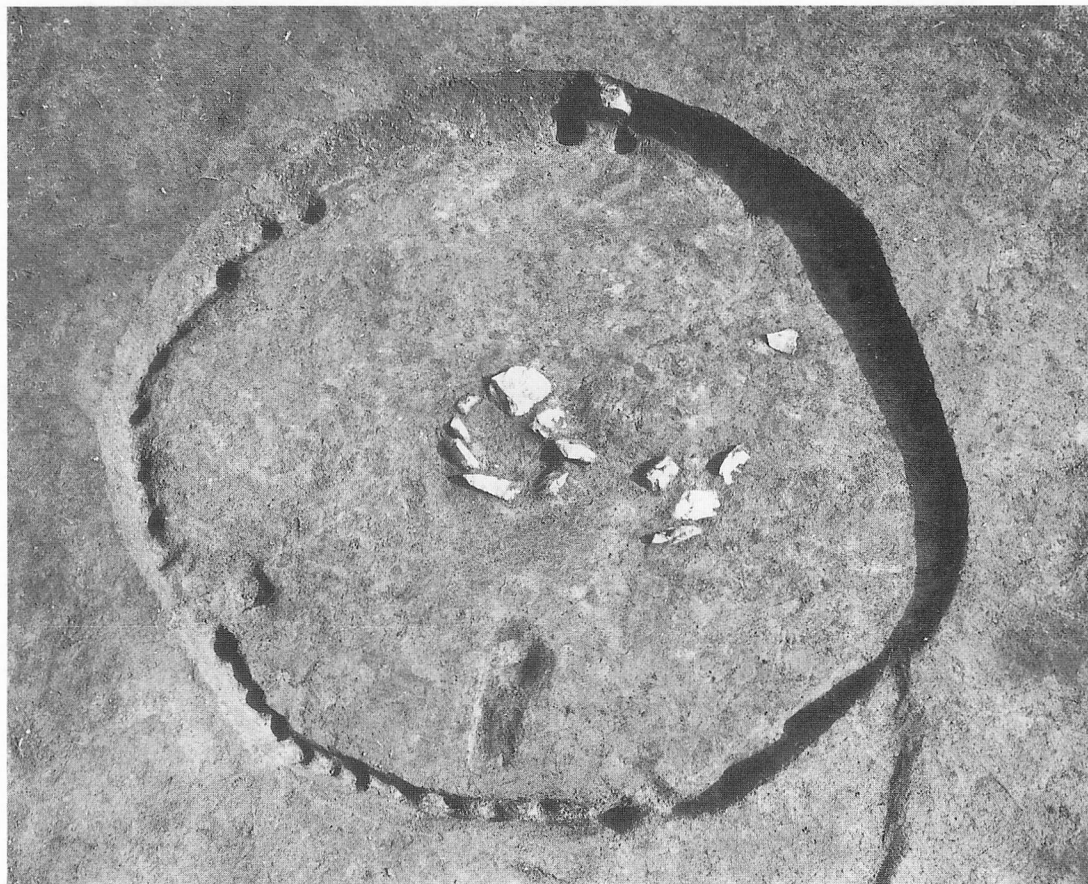
(カマド断面)

XV K 5 f 住居跡

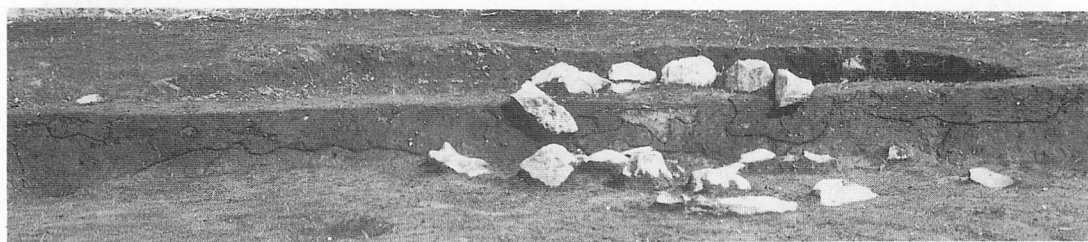
写真図版19 XVI K 3 e 住居跡、XV K 5 f 住居跡



写真図版20 遺構内出土遺物（土師器・須恵器・金属器）



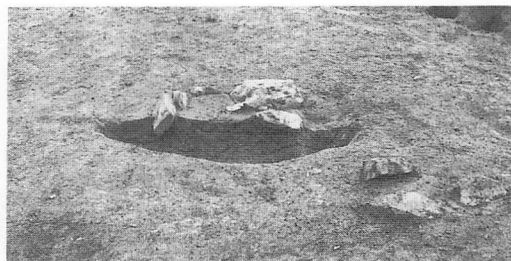
(完掘)



(断面)



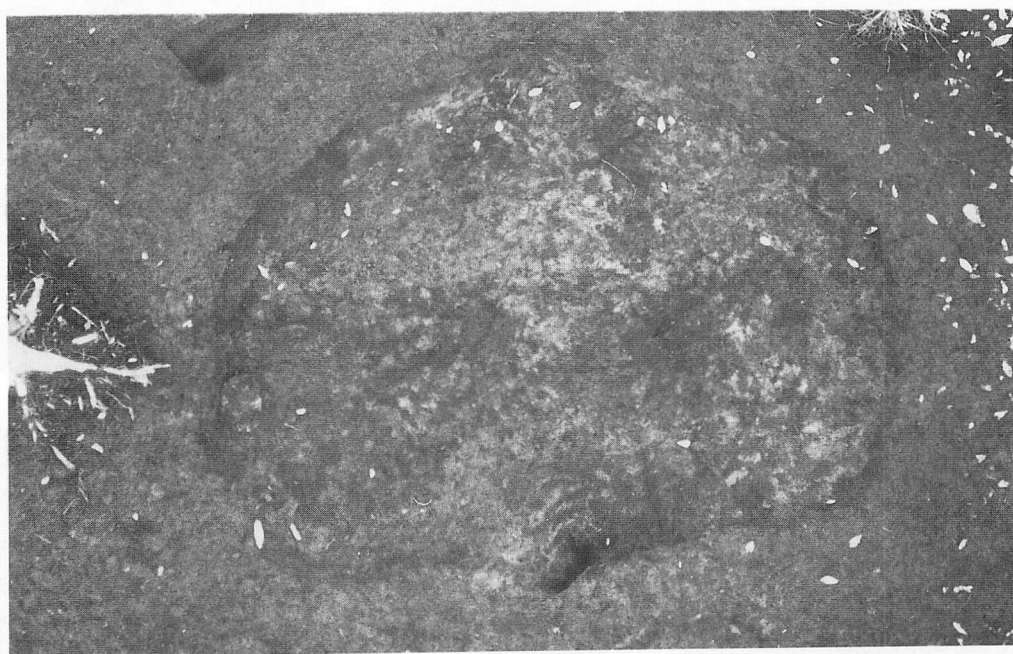
(炉平面)



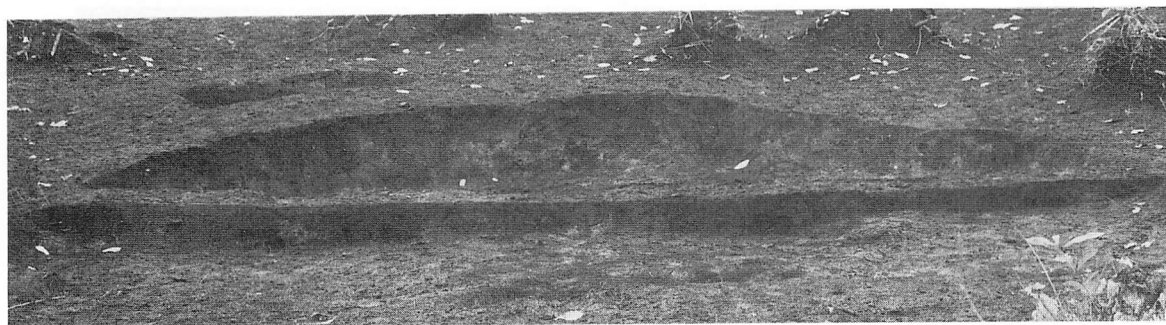
(断面)



(検出)

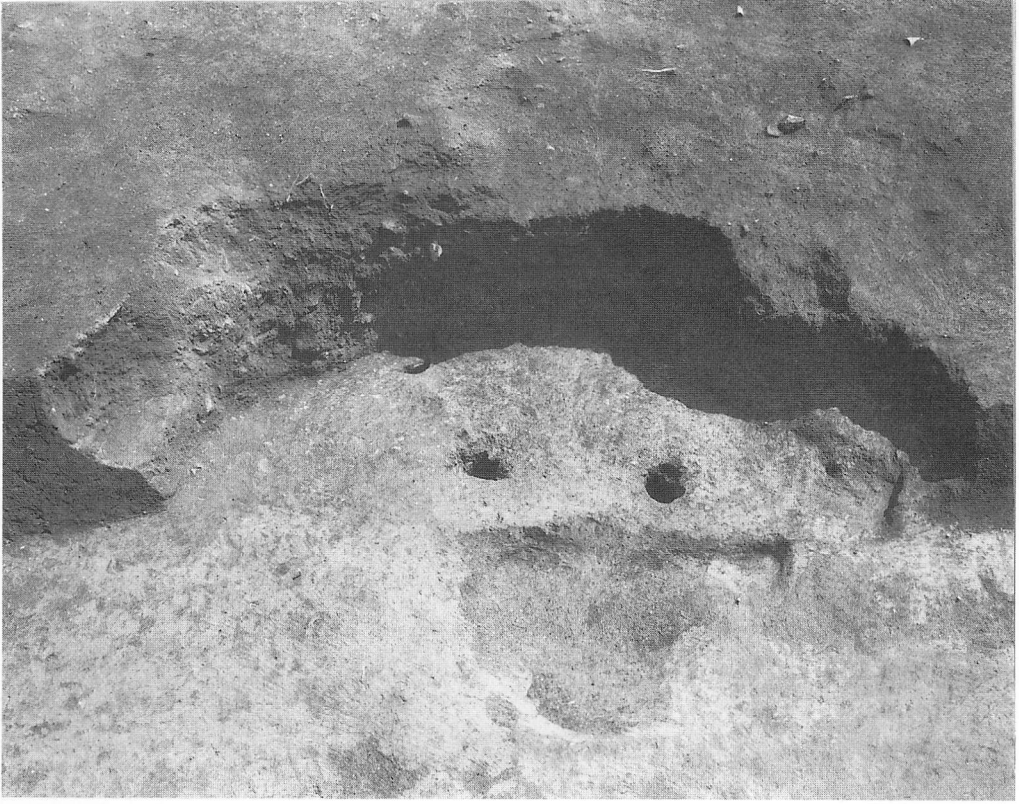


(完掘)

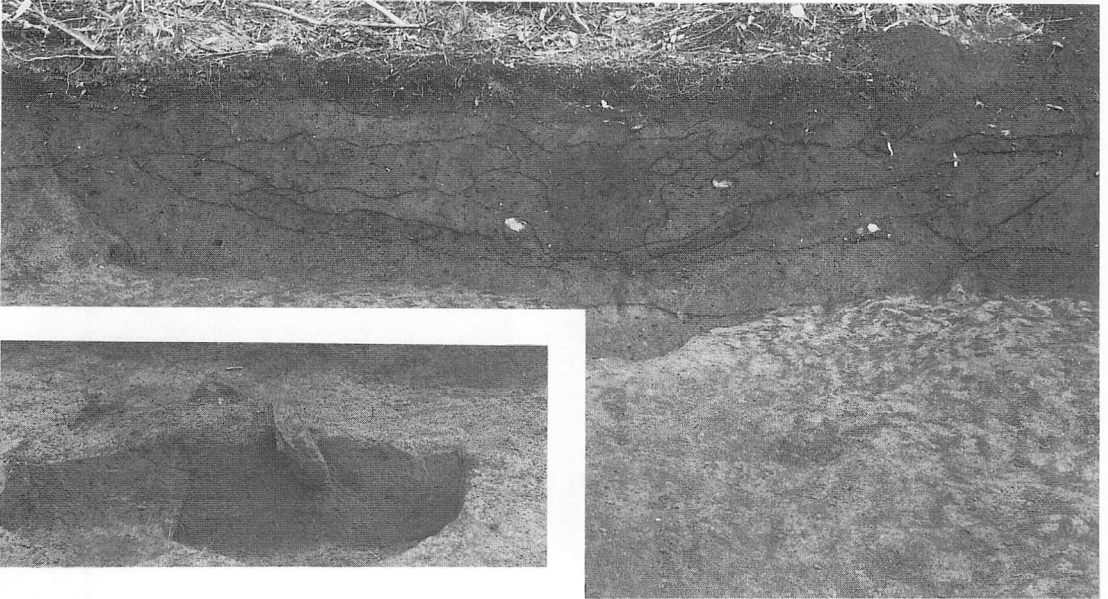


(断面)

写真図版22 X IV H 6 i 住居跡

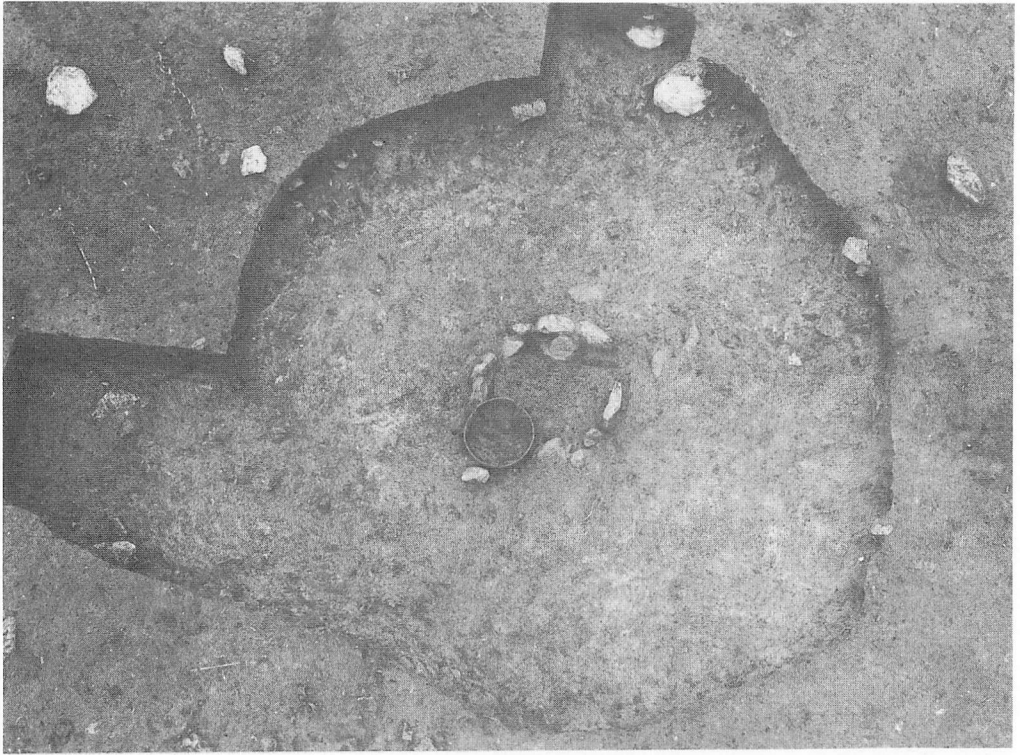


(完掘)

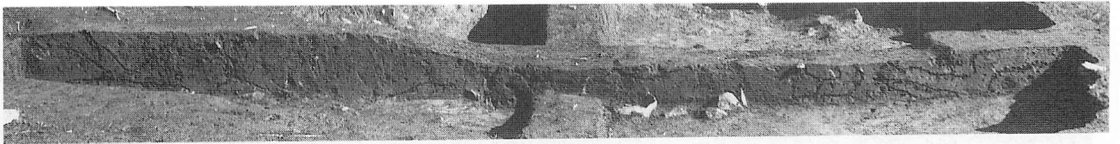


(炉跡断面)

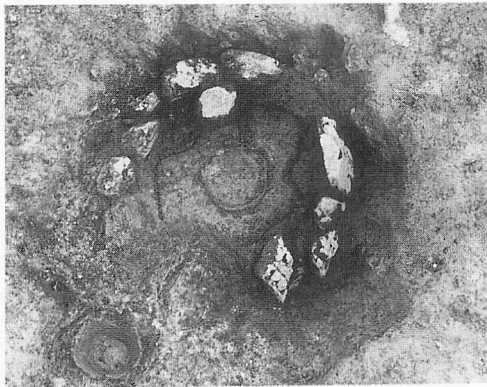
(断面)



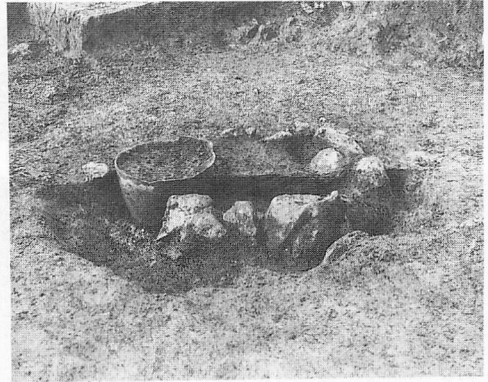
(完掘)



(断面)



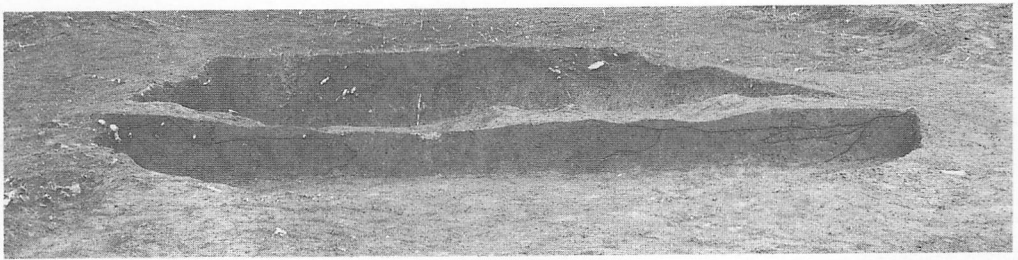
(炉跡平面)



(炉跡断面)



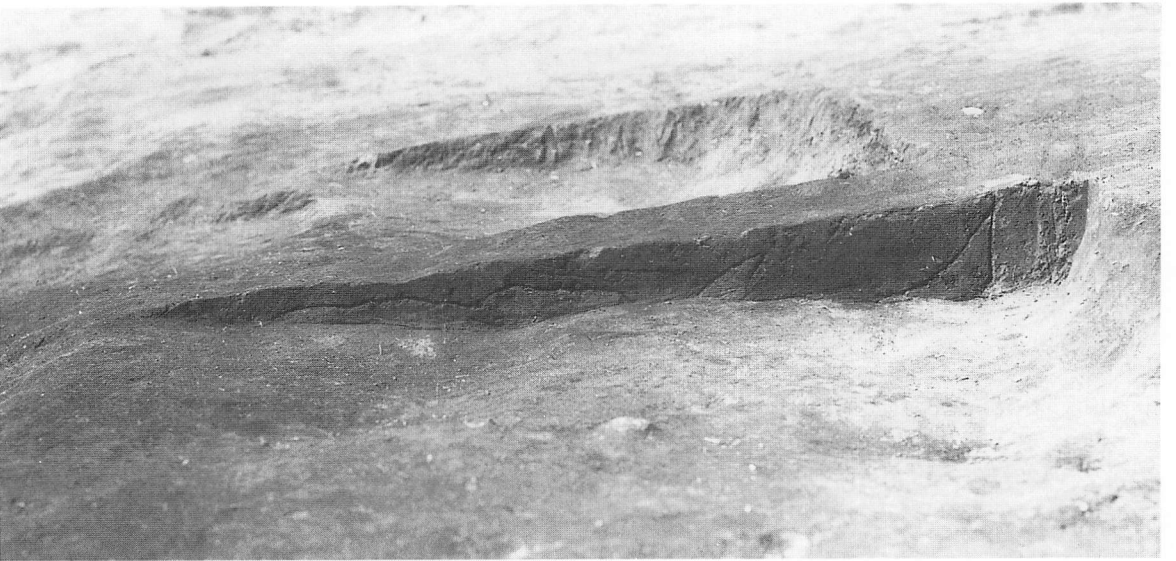
(完掘)



(断面)

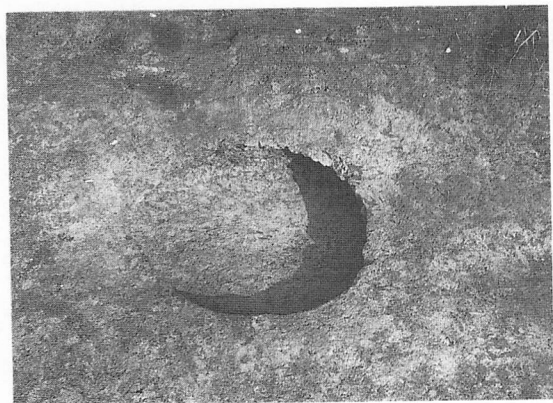


(完掘)

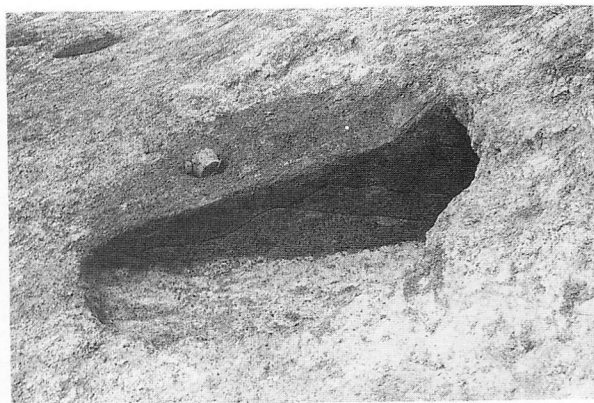


(断面)

写真図版26 X V H 0 b 住居跡



(完掘)

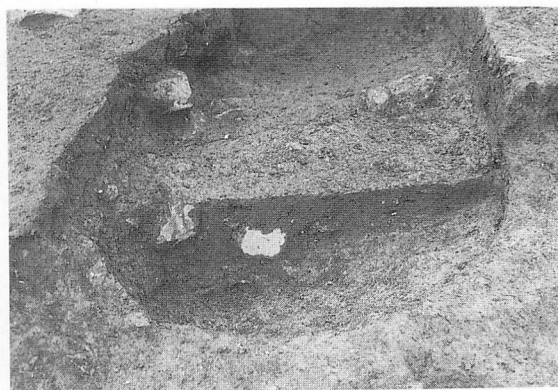


(断面)

XVI 2 c 土坑

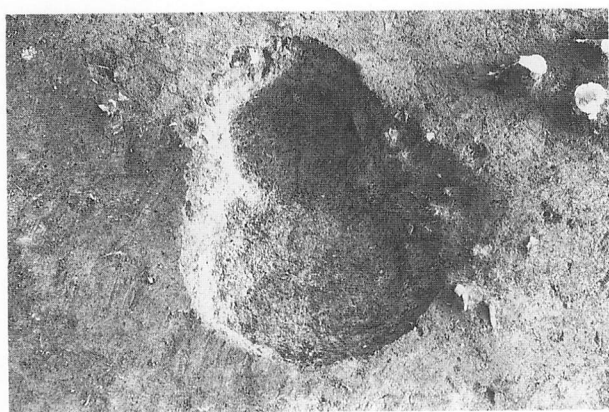


(完掘)



(断面)

XIV H 8 c 土坑



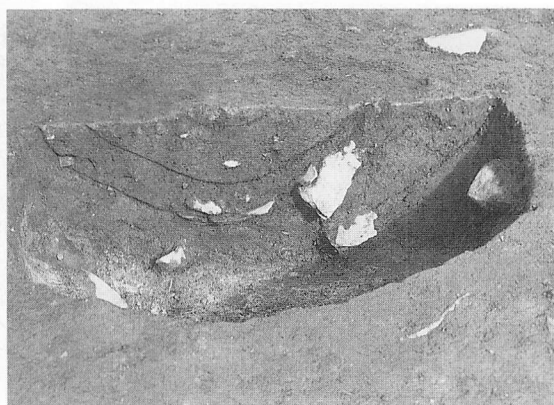
(完掘)

XVI H 9 c 土坑 XIV H 9 c-2 土坑

写真図版27 XVI 2 c 土坑、XIV H 8 c 土坑
XIV H 9 c 土坑、XIV H 9 c-2 土坑



(完掘)



(断面)

XIV H 0 c 土坑



(完掘)

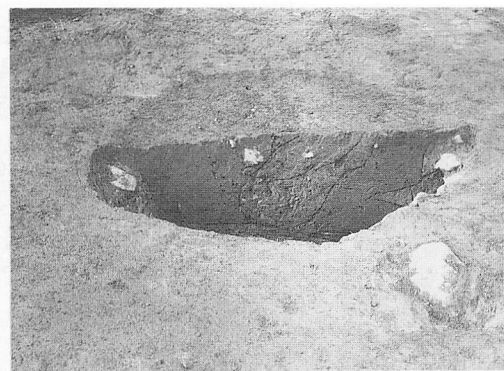


(断面)

XV H 2 a 土坑



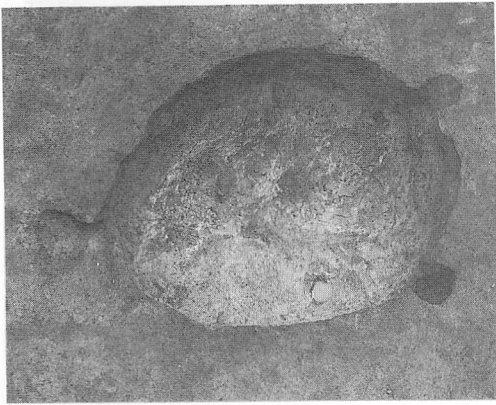
(完掘)



(断面)

XV G 3 i 土坑

写真図版28 XIV H 0 c 土坑、XV H 2 a 土坑
XV G 3 i 土坑



(完掘)

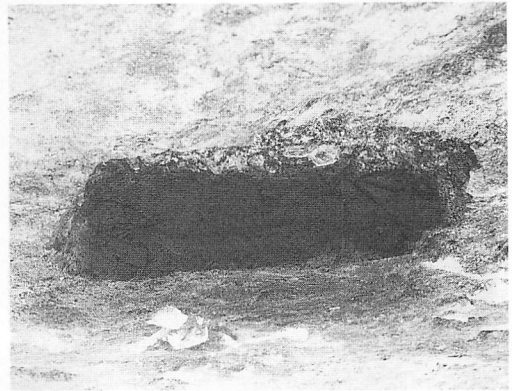


(断面)

X V H 6 a 土坑

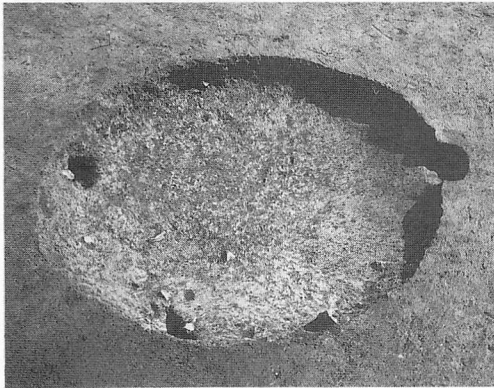


(完掘)

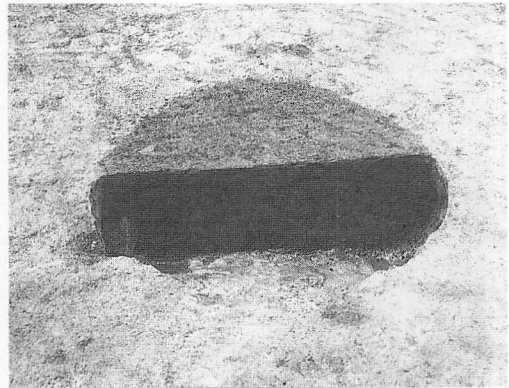


(断面)

X V I G 5 h 土坑



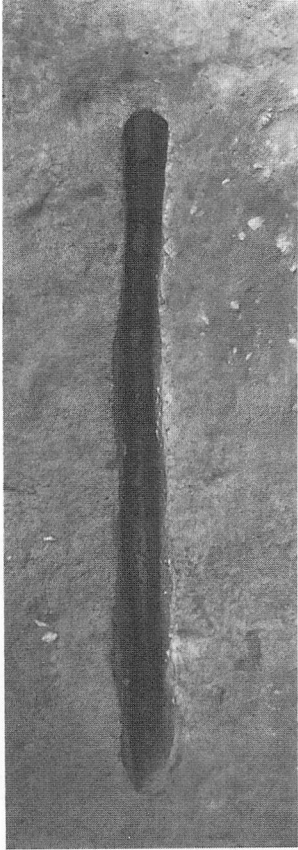
(完掘)



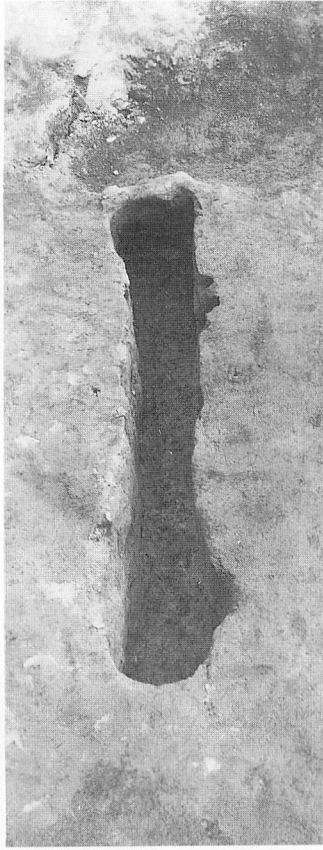
(断面)

X V I G 6 h 土坑

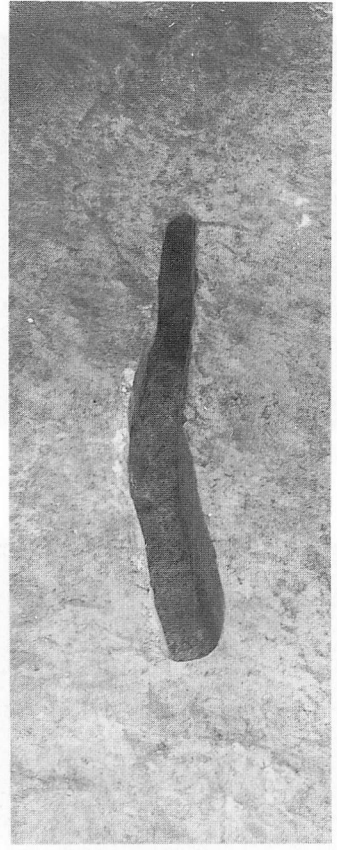
写真図版29 X V H 6 a 土坑、X V I G 5 h 土坑
X V I G 6 h 土坑



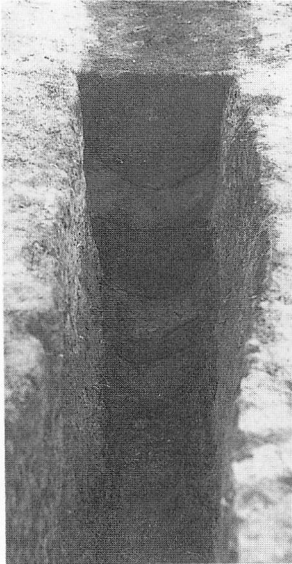
(完掘)



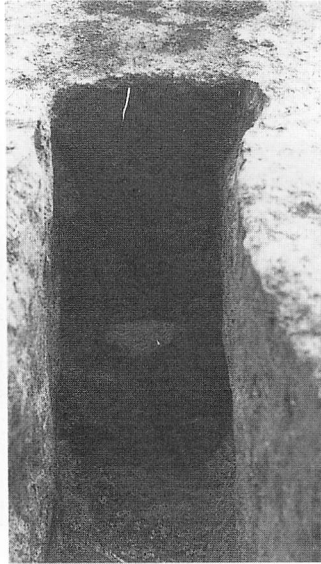
(完掘)



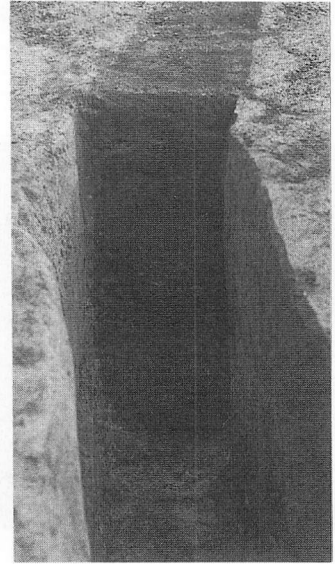
(完掘)



(断面)XVI G 3 c 陥し穴



(断面)XVI G 2 c 陥し穴



(断面)XVI G 9 d 陥し穴

写真図版30 XVI G 3 c 陥し穴、XVI G 2 c 陥し穴
XVI G 9 d 陥し穴

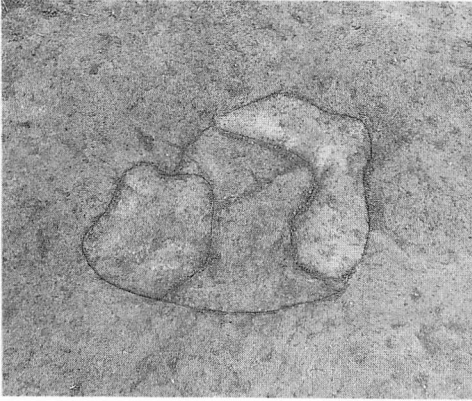


(完掘)

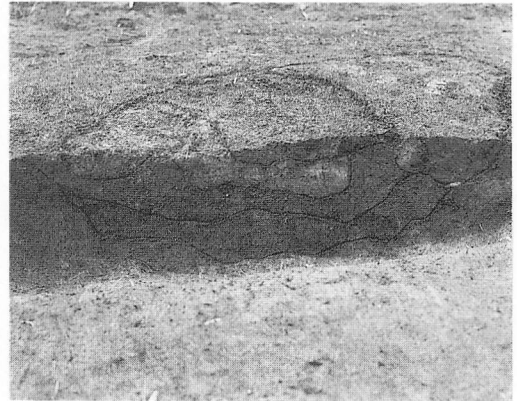


(断面)

XIV H 8 a 焼土



(完掘)

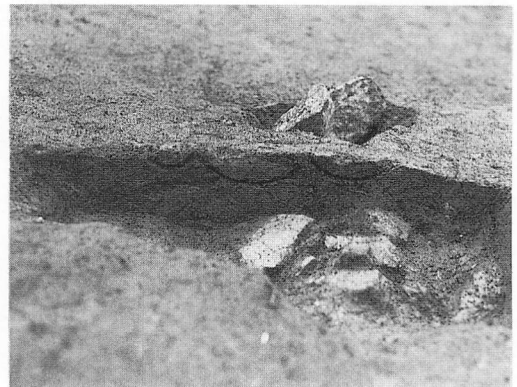


(断面)

XIV H 6 i 焼土



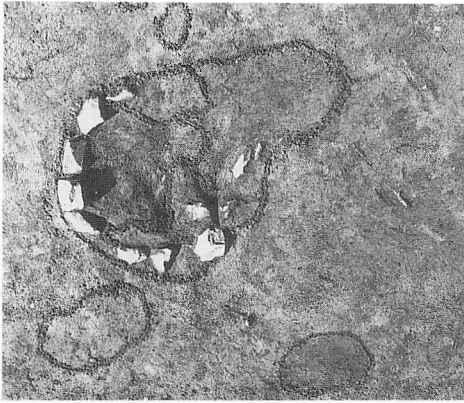
(完掘)



(断面)

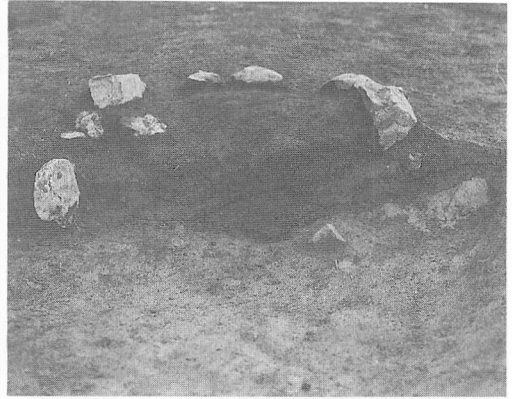
XV H 6 b 焼土

写真図版31 XIV H 8 a 焼土、XIV H 6 i 焼土
XV H 6 b 焼土



(完掘)

XIV H 0 e 炉跡

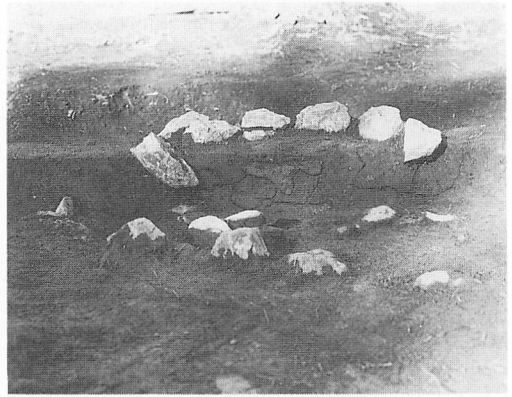


(断面)

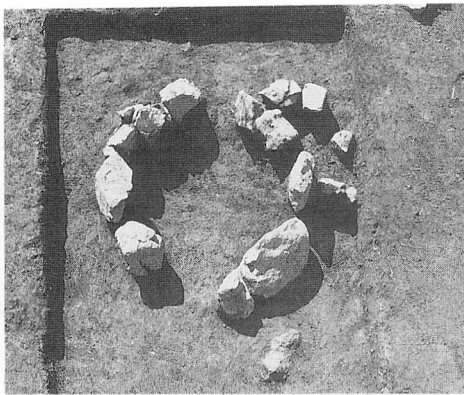


(完掘)

XIV H 5 i 炉跡

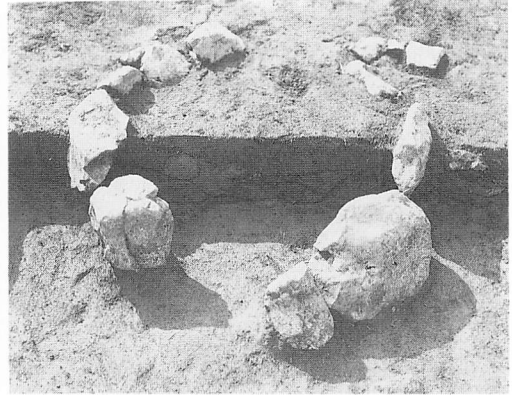


(断面)



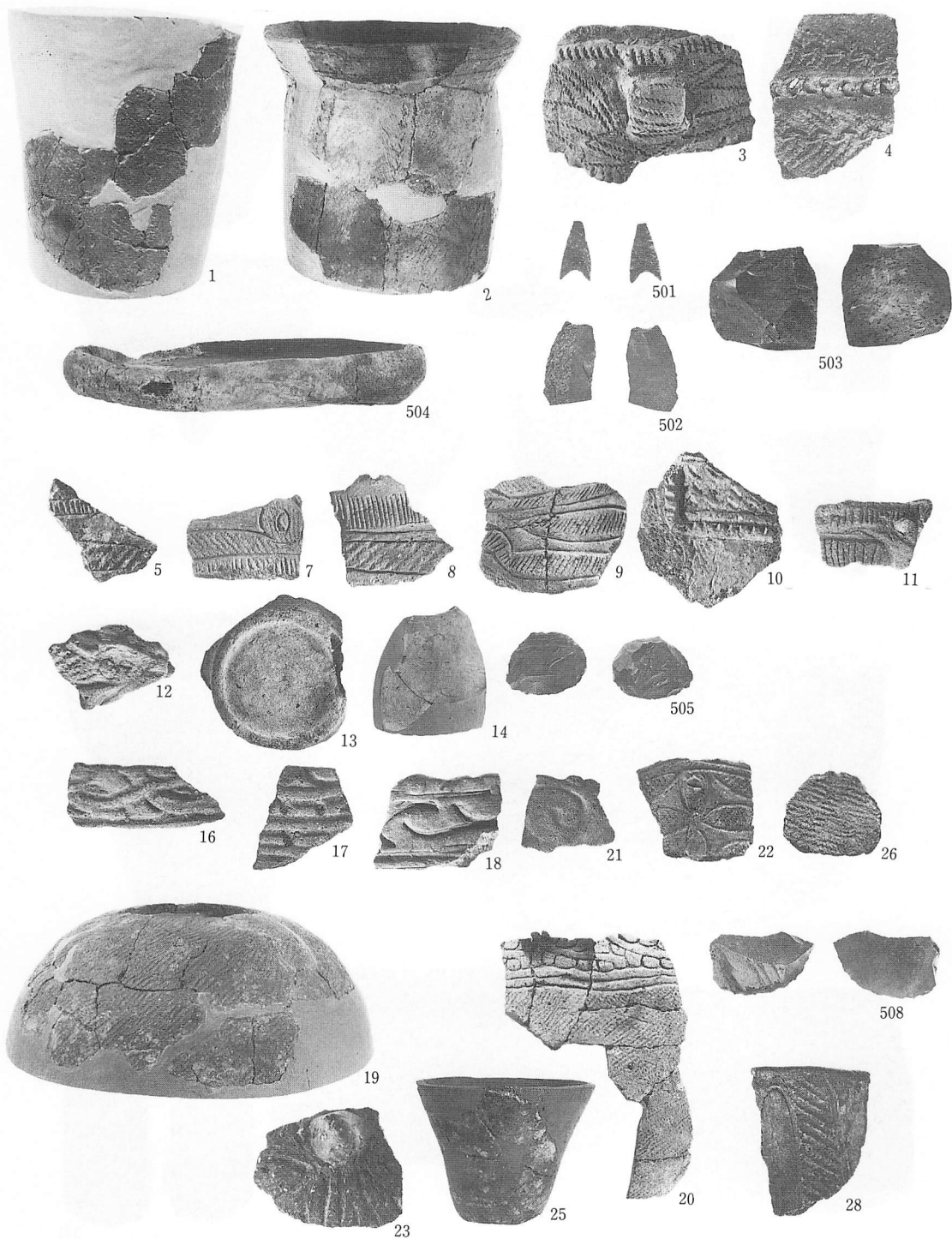
(完掘)

XIV H 8 j 炉跡

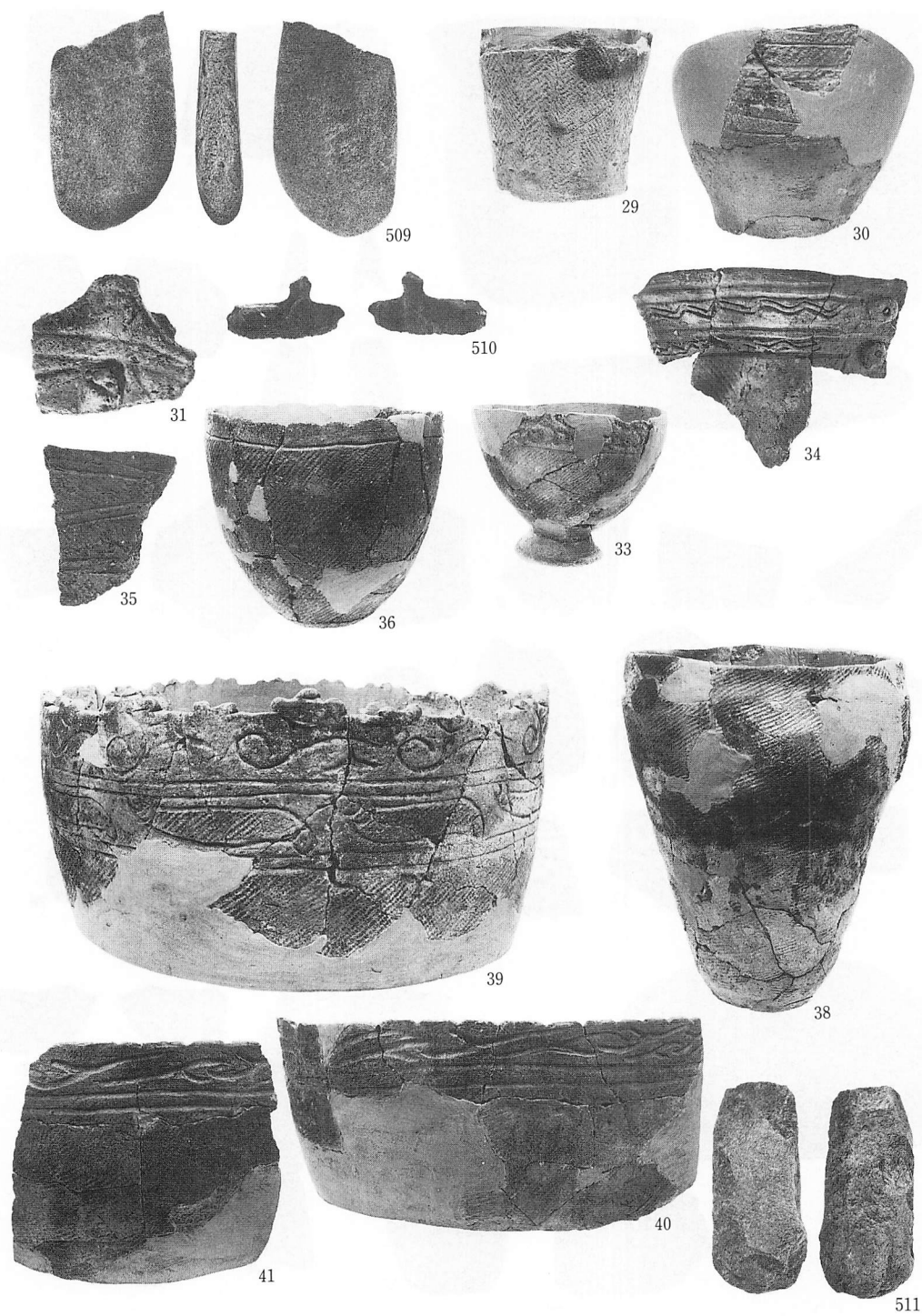


(断面)

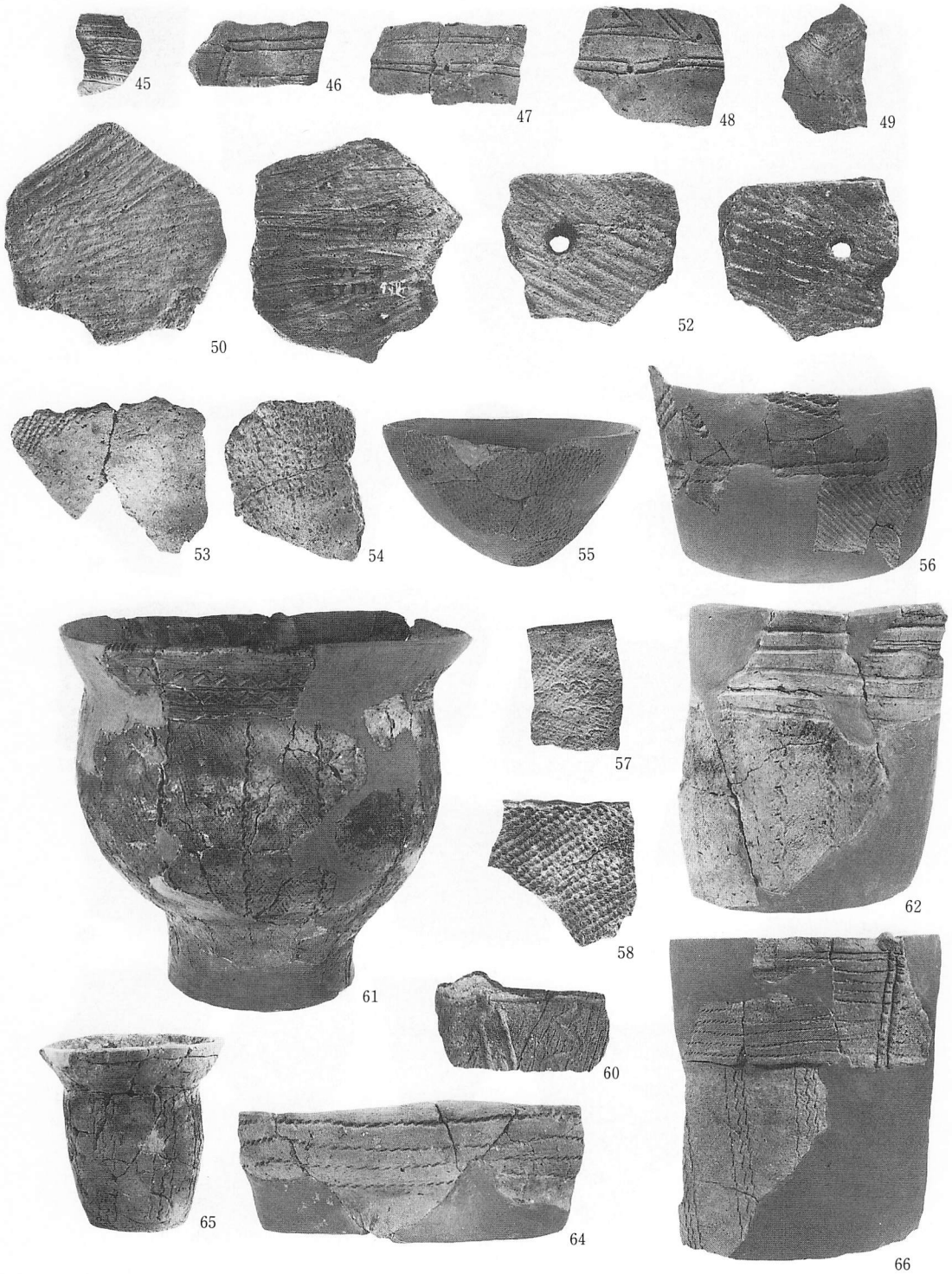
写真図版32 XIV H 0 e 炉跡、XIV H 5 i 炉跡
XIV H 8 j 炉跡



写真図版33 遺構内出土遺物（縄文・石器）



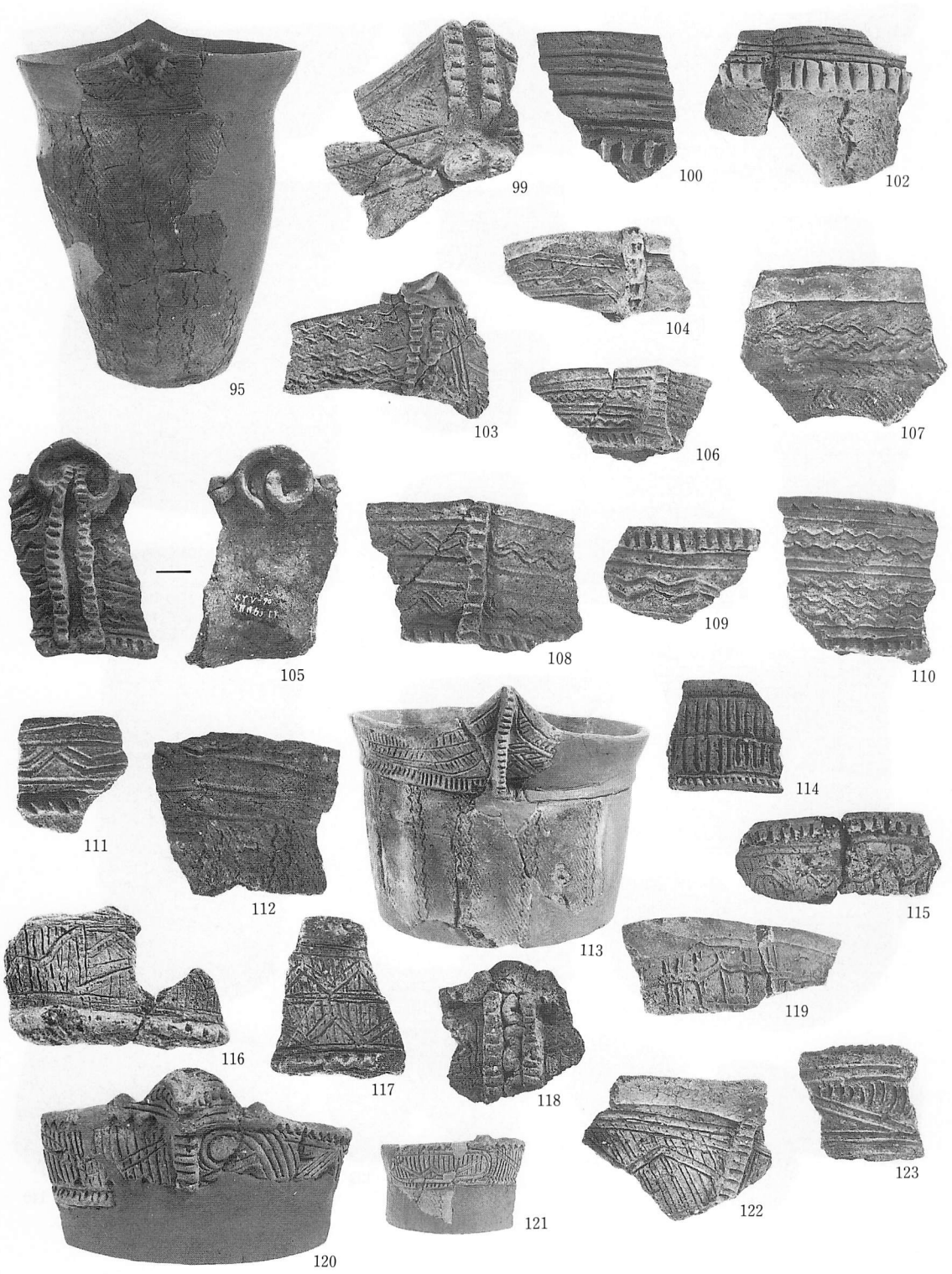
写真図版34 遺構内出土遺物（縄文・石器）



写真図版35 遺構外出土遺物（縄文）



写真図版36 遺構外出土遺物（縄文）



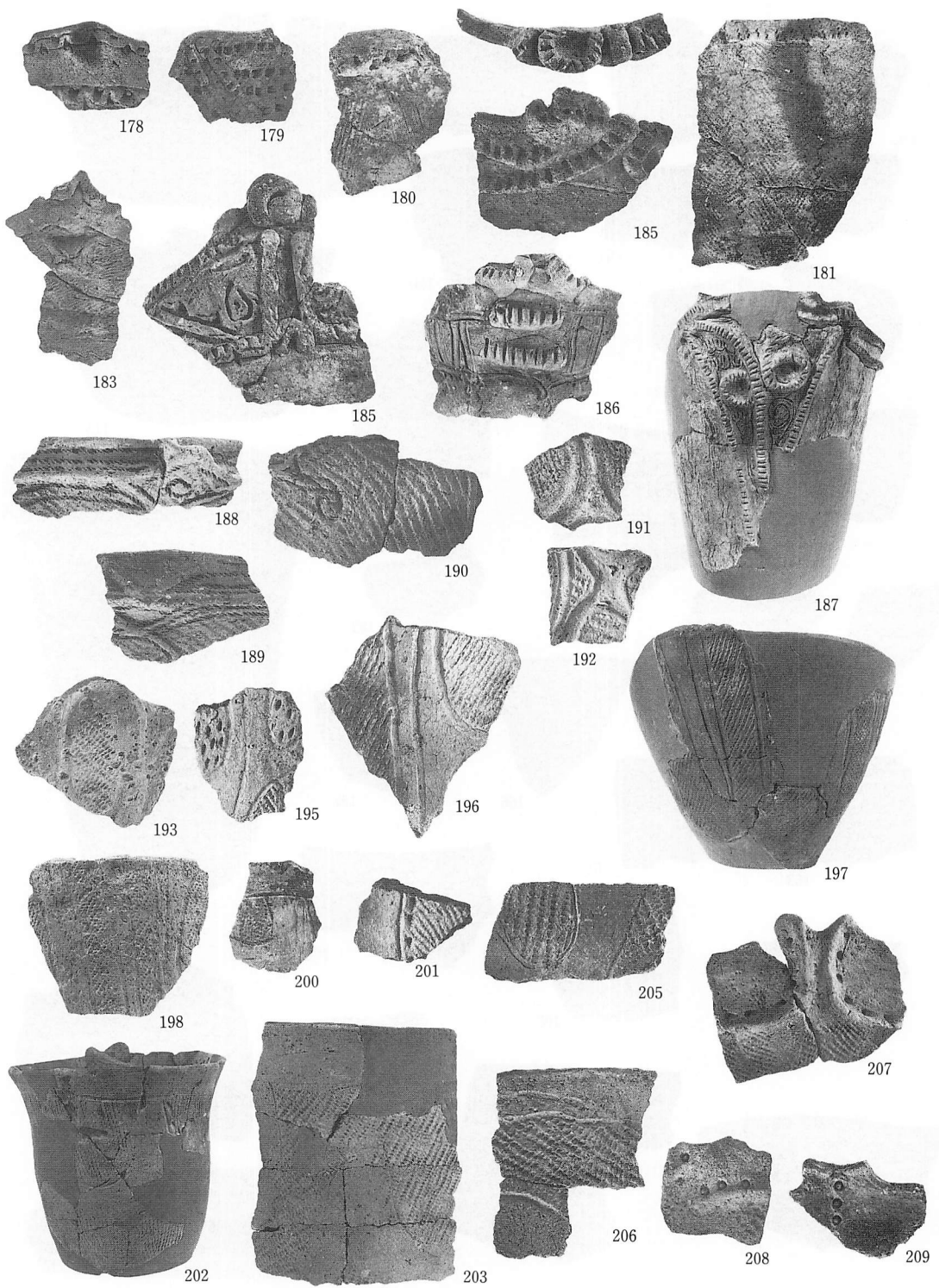
写真図版37 遺構外出土遺物（縄文）



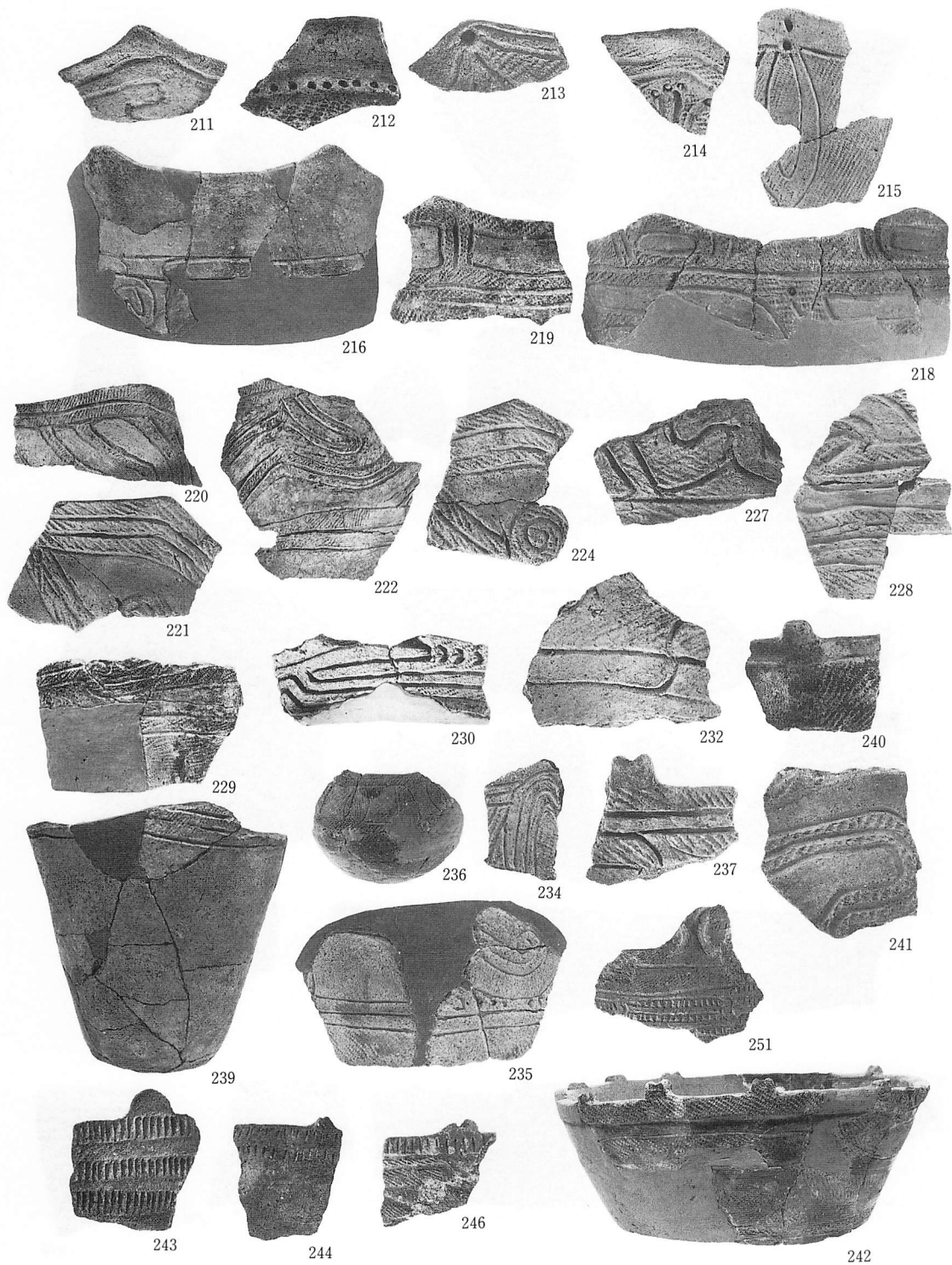
写真図版38 遺構外出土遺物（縄文）



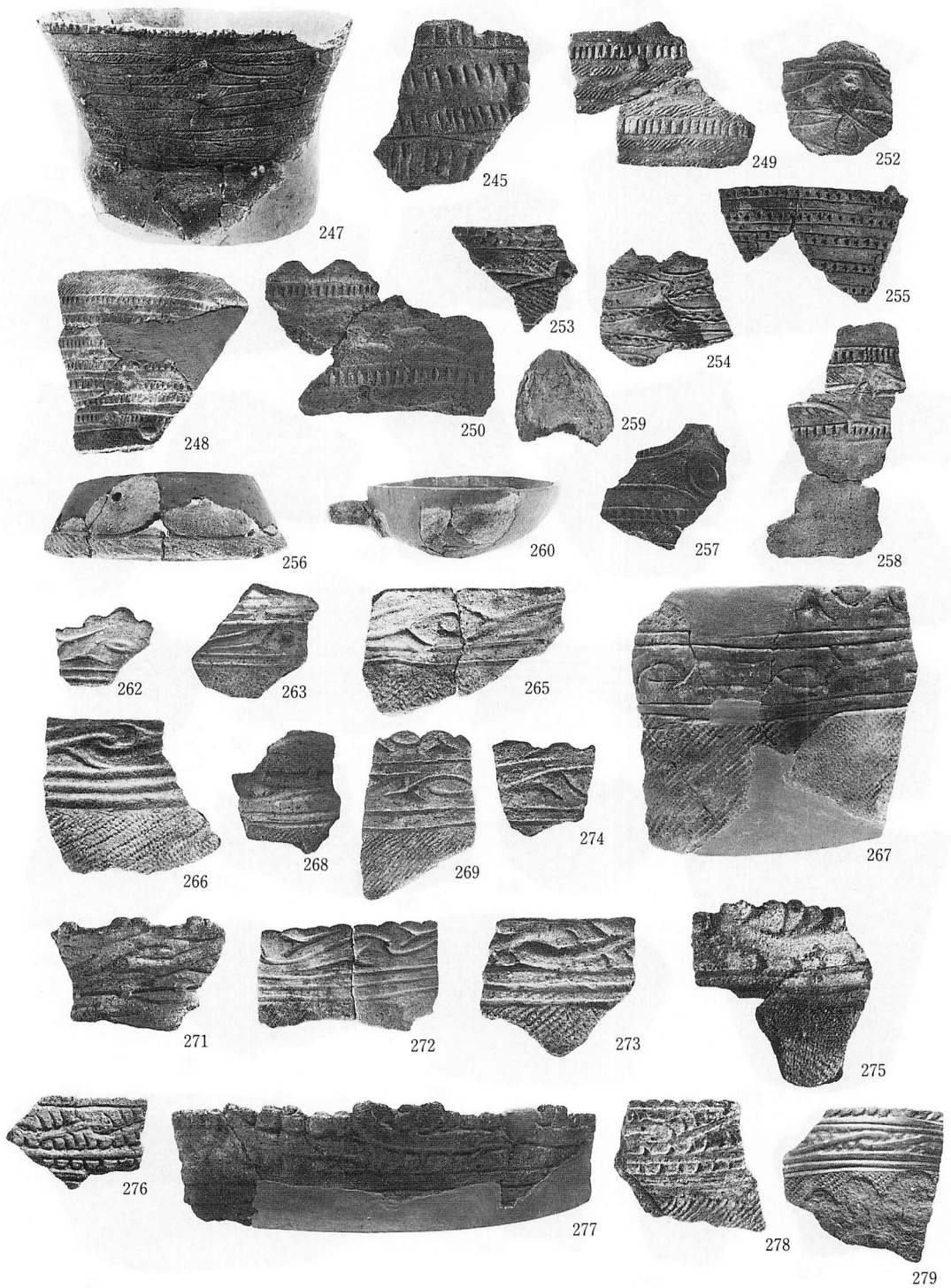
写真図版39 遺構外出土遺物（縄文）



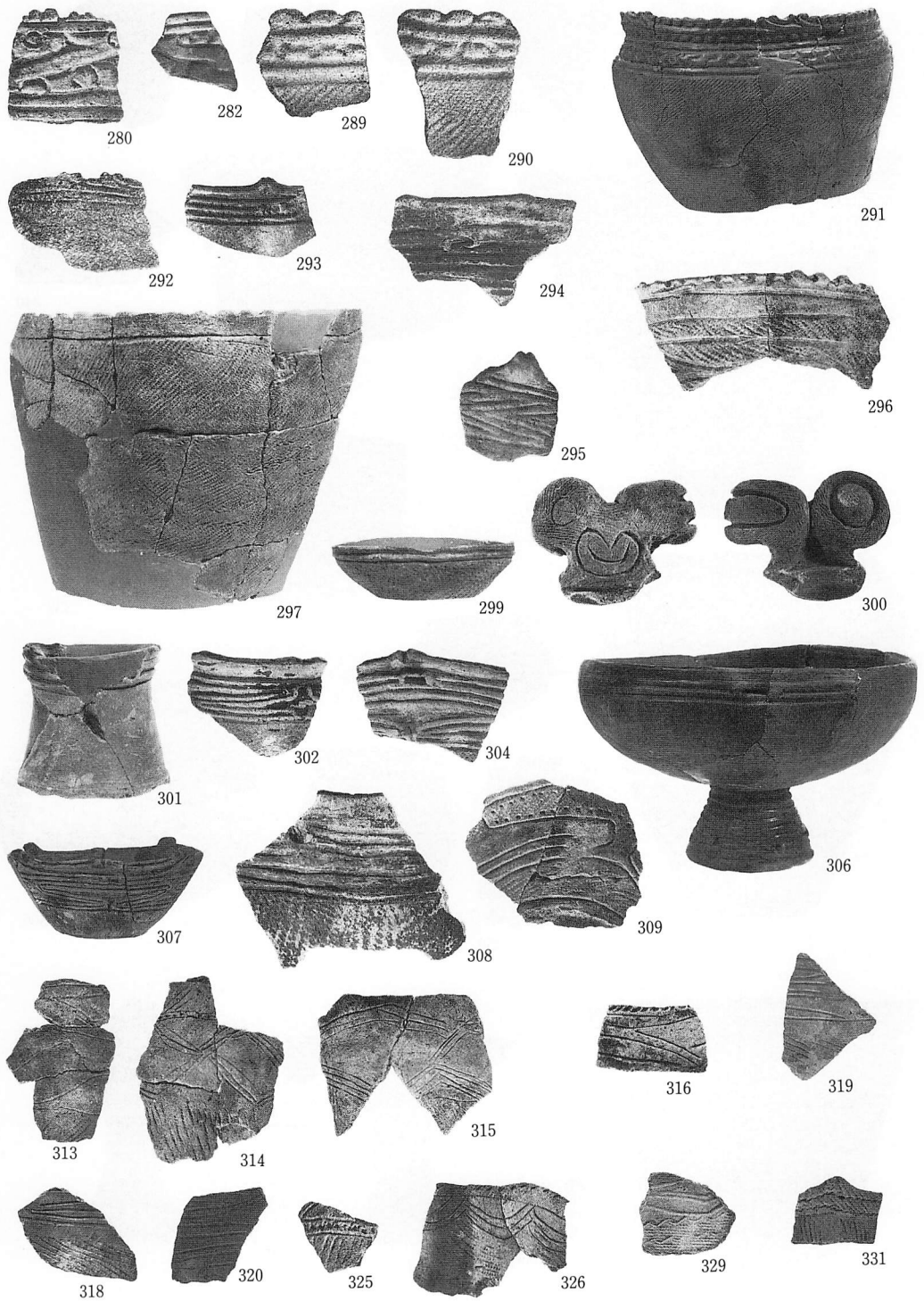
写真図版40 遺構外出土遺物（縄文）



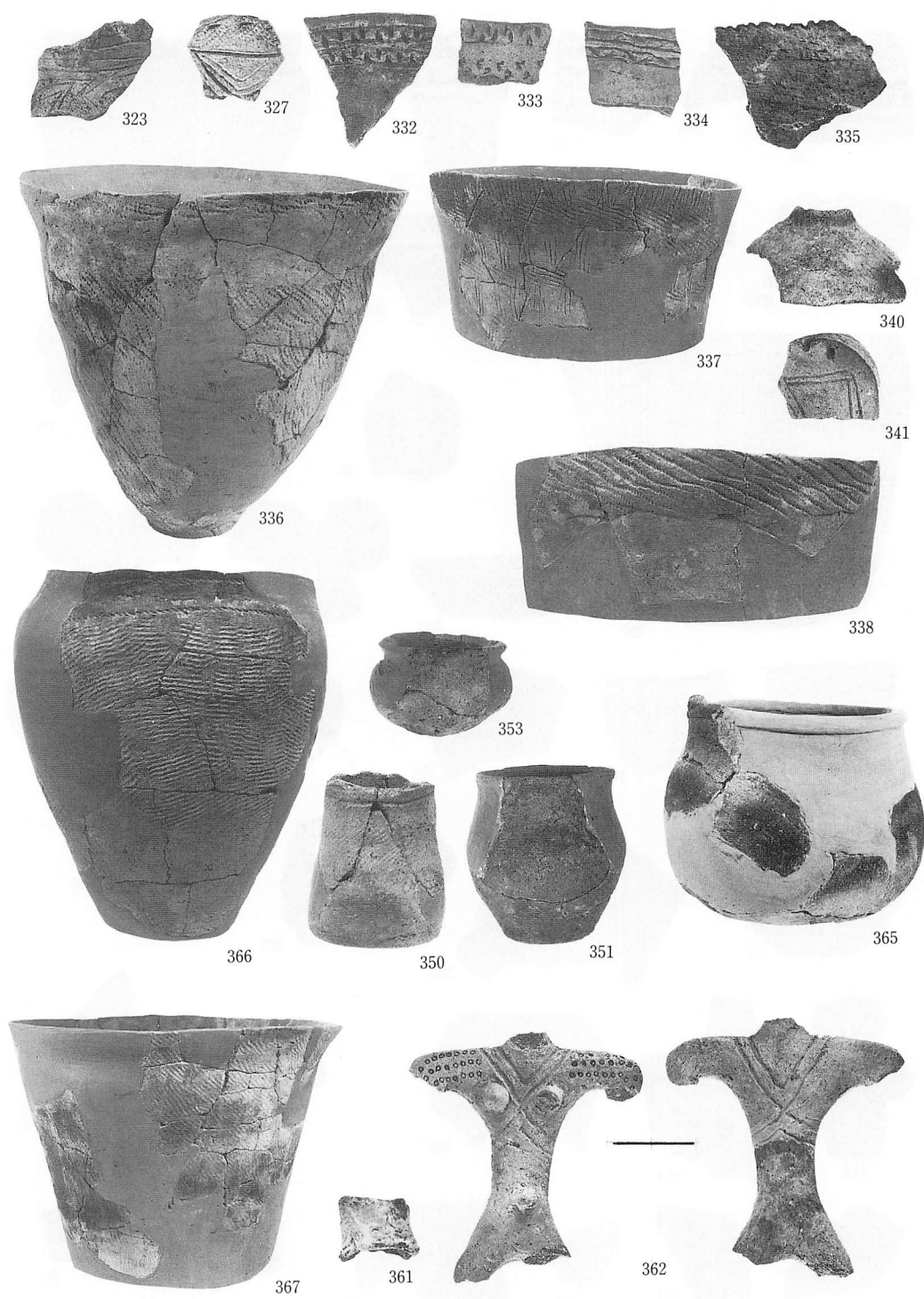
写真図版41 遺構外出土遺物（繩文）



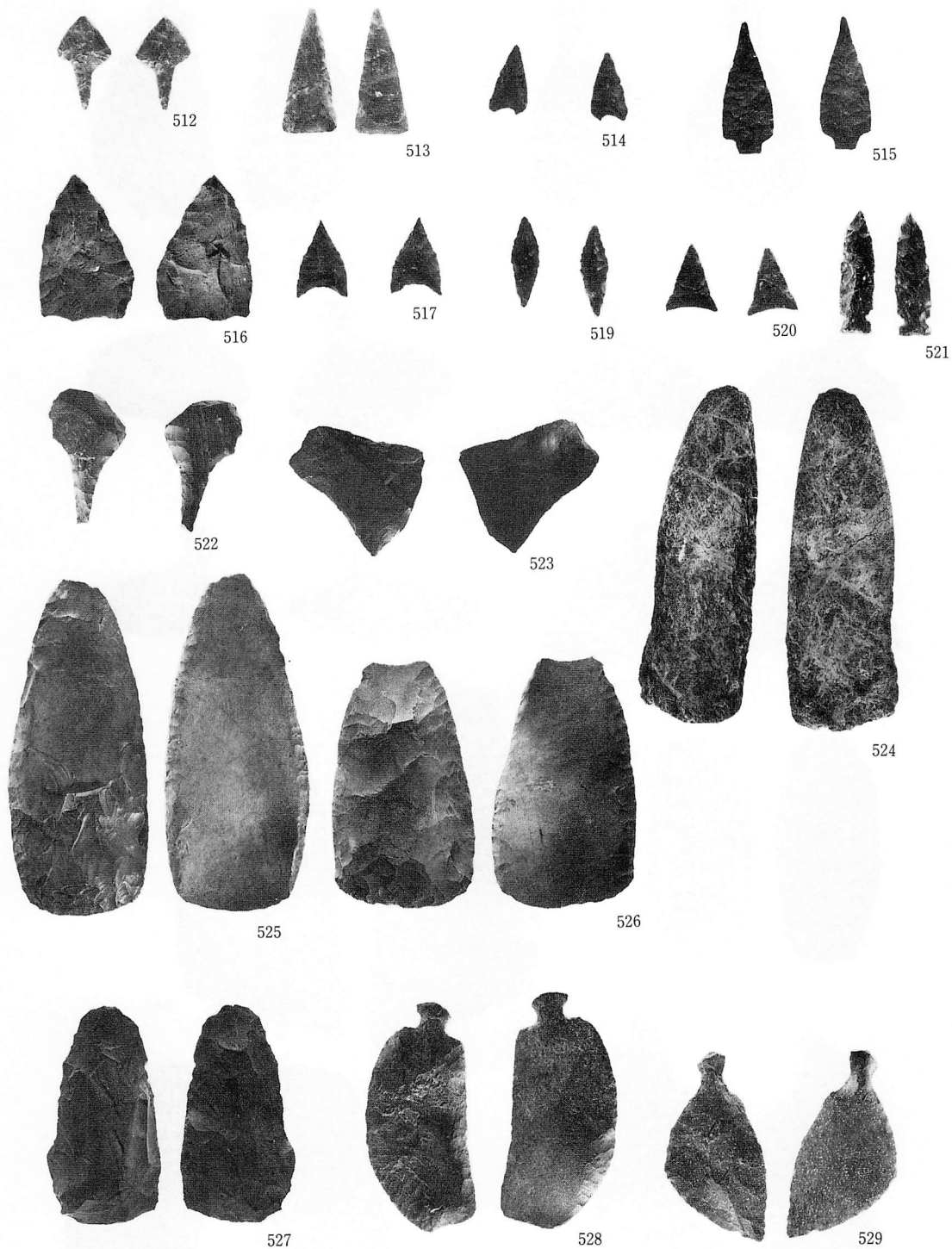
写真図版42 遺構外出土遺物（縄文）



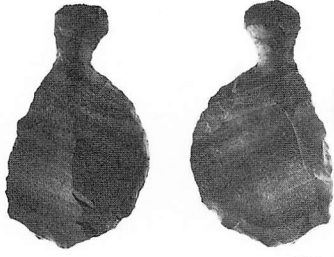
写真図版43 遺構外出土遺物（縄文・弥生）



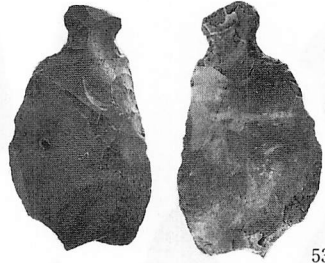
写真図版44 遺構外出土遺物（弥生・その他）



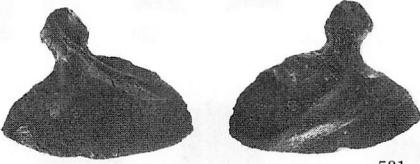
写真図版45 遺構外出土遺物（石器）



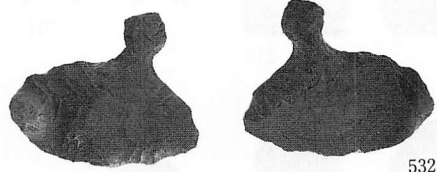
530



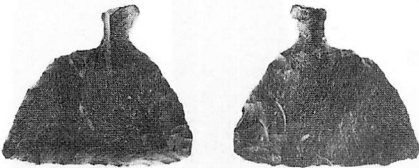
535



531



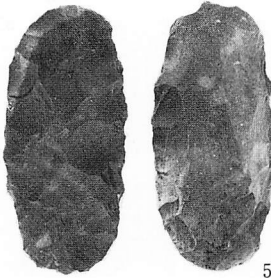
532



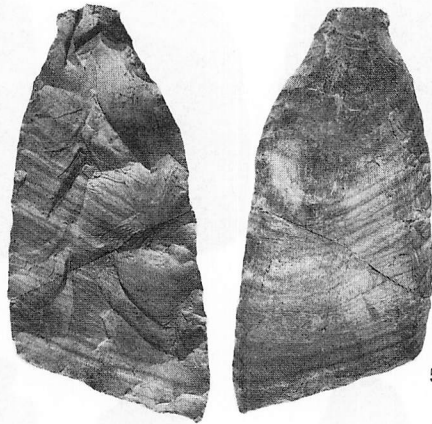
533



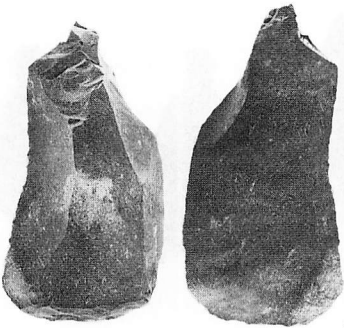
534



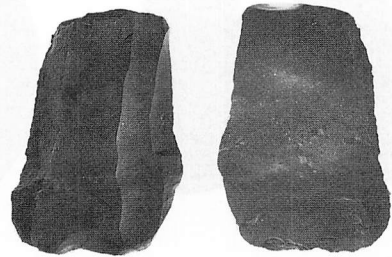
537



539

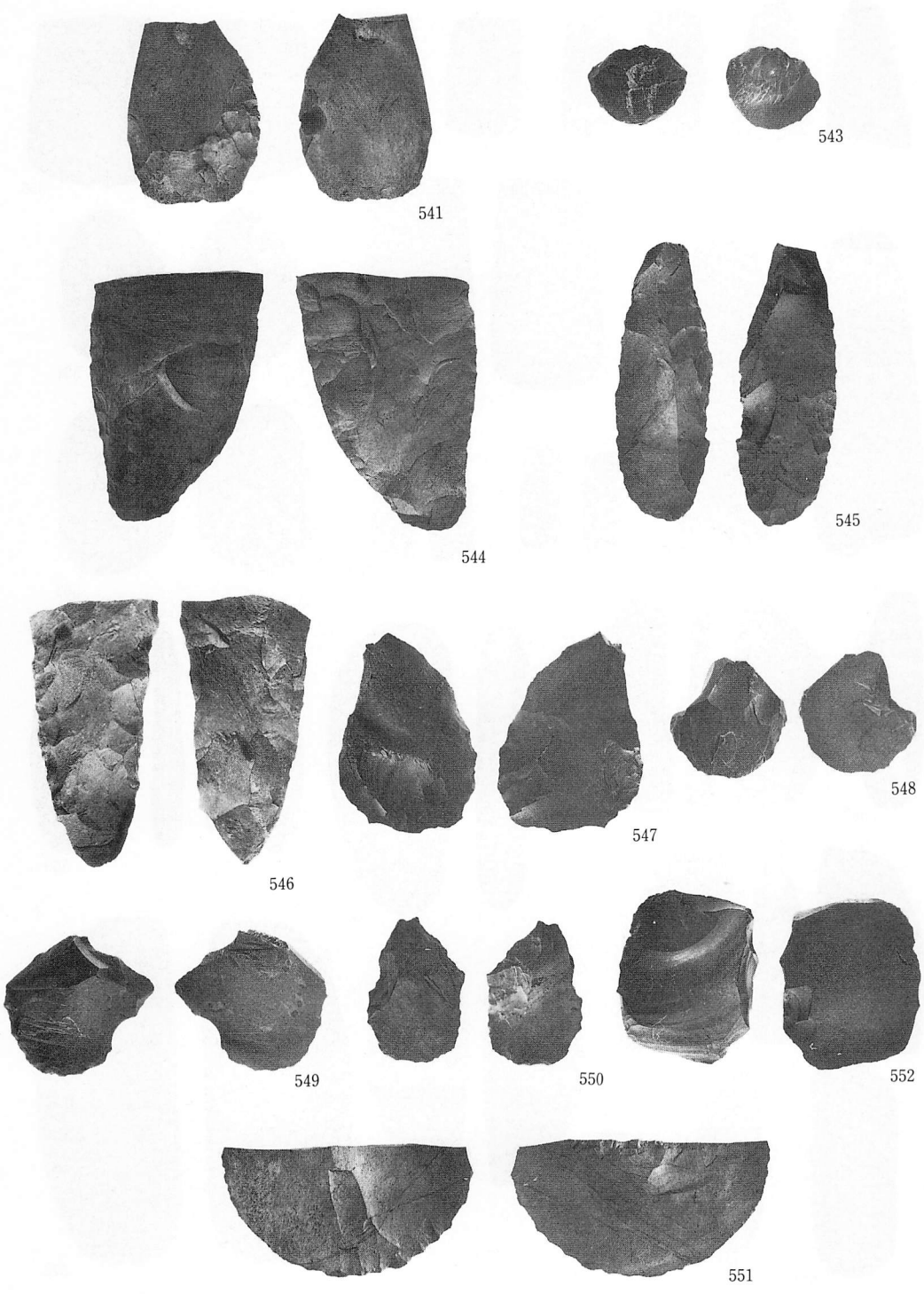


542

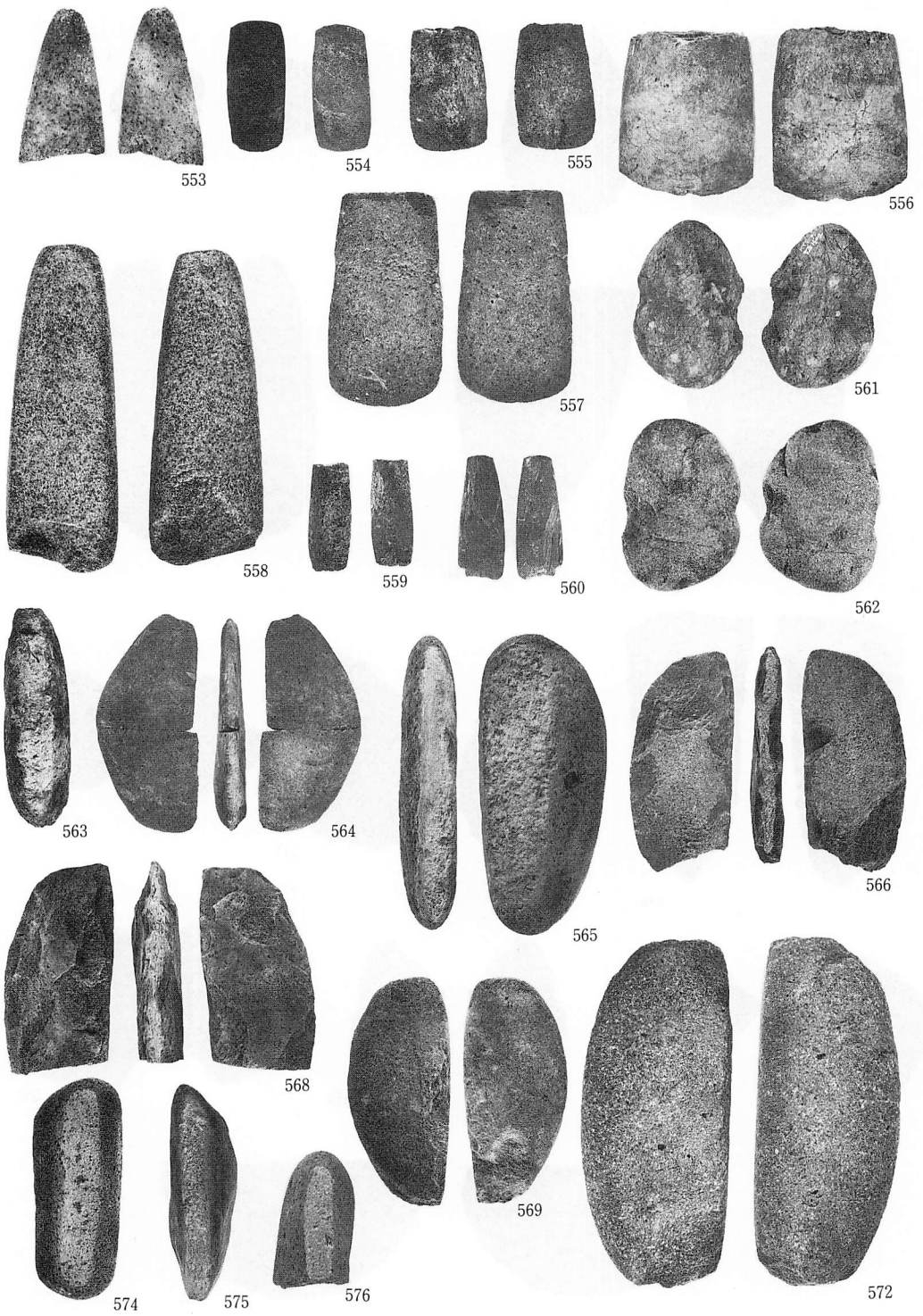


540

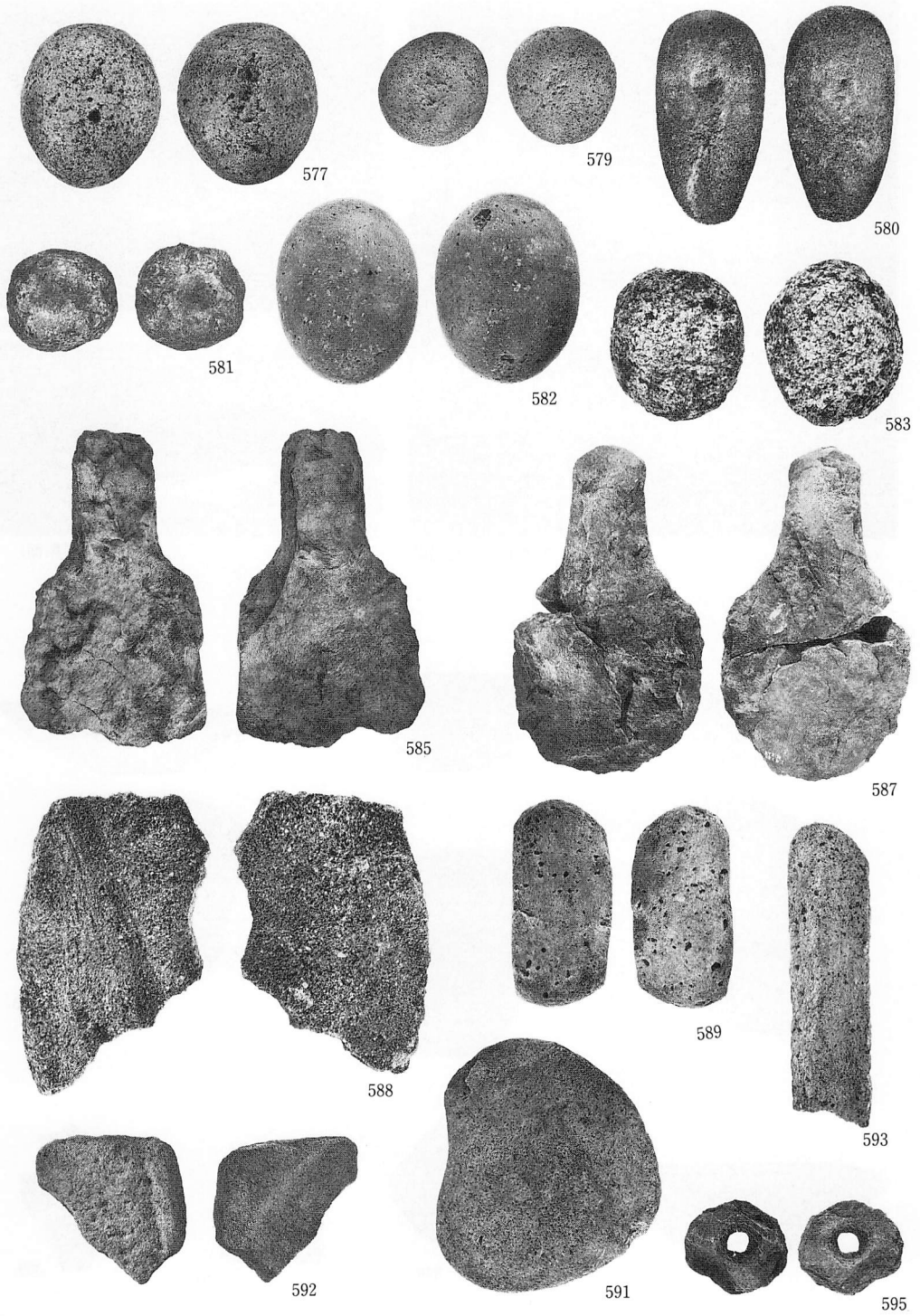
写真図版46 遺構外出土遺物 (石器)



写真図版47 遺構外出土遺物（石器）



写真図版48 遺構外出土遺物（石器）

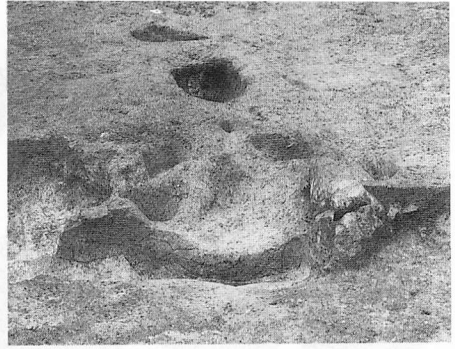


写真図版49 遺構外出土遺物 (石器・石製品)

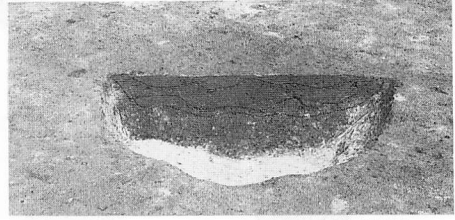


(完掘)

XVI H 6 c 住居跡



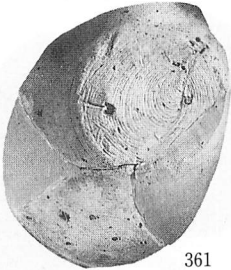
(カマド跡完掘)



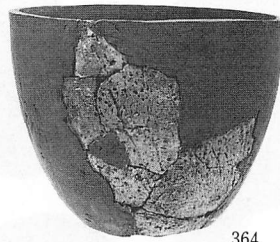
(土坑断面)



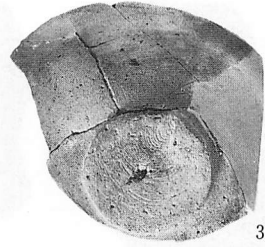
362



361



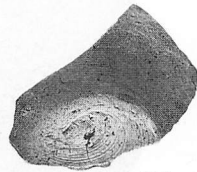
364



363



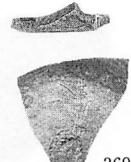
365



366



367



369

写真図版50 XVI H 6 c 住居跡・遺物等

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

	理 事 兼 所 副 所 長	小笠原 喜 一 高 橋 敬 明	
[管 理 課]			
	管理課長(兼)	高 橋 敬 明	嘱 託
	課 長 補 佐	森 岡 陽 一	吉 田 一 男
	主 事	佐 藤 理	根 橋 文 一 佐 藤 春 男
[調 査 課]			
	調 査 課 長	村 上 康 昭	文 化 財 員
	課 長 補 佐	佐々木 嘉直	門 調 査 員
	〃	鈴 木 恵 治	〃
	主 任 文 化 財	小 田 野 哲 憲	〃
	專 門 調 査 員	三 浦 謙 一	〃
	〃	工 藤 利 幸	〃
	〃	高 橋 與 右 衛 門	〃
	〃	平 井 進	〃
	〃	中 川 重 紀	〃
	〃	藤 村 敏 男	〃
	〃	高 橋 義 介	〃
	文 化 財	高 斎 藤 實	〃
	專 門 調 査 員	佐 瀨 隆	〃
	〃	千 葉 孝 雄	〃
	〃	斎 藤 博 司	〃
	〃	東 海 林 隆 幹	〃
	〃	佐々木 弘 均	〃
	〃	川 村 均 行	〃
	〃	鈴 木 貞 格	〃
	〃	伊 東 藤 修	〃
	〃	遠 齋 藤 邦 雄	〃
	〃	神 敏 明	〃
[資 料 課]			
	資 料 課 長	村 松 義 夫	
	主 任 文 化 財	田 鎖 寿 夫	
	專 門 調 査 員		
			運 轉 技 術 士 員
			吉 田 一 男 根 橋 文 一 佐 藤 春 男
			佐々木 信 一 小 原 眞 一 村 上 修 酒 井 宗 孝 松 本 建 速 笹 平 克 子 花 坂 政 博 佐々木 務 金 子 昭 彦 濱 田 精 宏 鎌 田 勝 則 阿 部 藤 邦 彦 星 雅 之 引屋敷 学 鈴 木 知 己 藤 村 隆 悟 千 葉 博 由 熊 谷 信 一 郎 新 倉 博 英 山 口 博 聡 川 村 聡 子 八重座 のり子
			期 專 門 限 調 査 付 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 177 集

上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成 4 年 3 月 25 日

発行 平成 4 年 3 月 31 日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡 11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 山口北州印刷株式会社

〒020-01 盛岡市青山四丁目 10-5

TEL (0196) 41-0585

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1992